

博士学位論文

数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析

名古屋大学大学院国際言語文化研究科  
日本語文化専攻  
金 奈淑

平成 28 年 2 月

## 目次

<b>第1章 序論</b> .....	<b>1</b>
1.1 本研究の目的.....	1
1.2 本研究で使⽤したコーパスおよびツール .....	2
1.3 本研究の構成.....	3
<b>第2章 本研究で考察する数量表現の位置付け</b> .....	<b>4</b>
2.1 本章の目的.....	4
2.2 先行研究.....	4
2.2.1 益岡・田窪 (1992) .....	4
2.2.1.1 益岡・田窪 (1992) .....	4
2.2.1.2 検討.....	5
2.2.2 仁田 (2002) .....	6
2.2.2.1 仁田 (2002) .....	6
2.2.2.2 検討.....	7
2.2.3 日本語記述文法研究会 (編) (2009) .....	8
2.2.3.1 日本語記述文法研究会 (編) (2009) .....	8
2.2.3.2 検討.....	9
2.2.4 加藤 (2003、2006a、2013) .....	10
2.2.4.1 加藤 (2003、2006a、2013) .....	10
2.2.4.2 検討.....	13
2.2.5 先行研究のまとめ.....	14
2.3 特定数量詞と不特定数量詞 .....	15
2.3.1 「なぜ日本語には量化表現がたくさんあるのか」について .....	15
2.3.2 助数詞の機能：範疇化.....	17
2.3.3 助数詞の機能：個別化 .....	19
2.3.4 「個体／連続体」と「可算／不可算」、「有界／非有界」 .....	21
2.3.5 特定数量詞と不特定数量詞の違い .....	22
2.4 第2章のまとめ：考察対象とする語の位置付け .....	24
<b>第3章 理論的背景</b> .....	<b>25</b>
3.1 本章の目的.....	25
3.2 カテゴリー化.....	25
3.3 多義語分析の課題.....	27
3.4 比喩の定義とスキーマ.....	28
3.5 概念に基盤を与えるイメージスキーマ .....	30
3.6 第3章のまとめ.....	35

<b>第4章 考察対象とする語の分類基準について</b> .....	<b>36</b>
4.1 本章の目的.....	36
4.2 下位分類.....	36
4.2.1 範疇化と個別化の度合い .....	38
4.2.2 動きの量と出来事の量.....	43
4.2.3 人間と非人間.....	46
4.2.4 プラス評価とマイナス評価 .....	46
4.2.5 種類を表すか.....	49
4.2.6 文体差.....	50
4.3 第4章のまとめ.....	52
<b>第5章 モノ名詞の数量を表す「たくさん、多数、大量、多量」の意味分析</b> .....	<b>54</b>
5.1 はじめに.....	54
5.2 先行研究とその検討.....	55
5.3 「たくさん」と「大量」の意味分析 .....	57
5.3.1 「たくさん」の意味分析 .....	57
5.3.1.1 別義①.....	57
5.3.1.2 別義②.....	59
5.3.1.3 別義③.....	59
5.3.1.4 別義④.....	60
5.3.1.5 別義間の関連性.....	62
5.3.2 「大量」の意味分析.....	62
5.3.3 「たくさん」と「大量」の類似点と相違点 .....	65
5.4 「大量」と「多量」の意味分析 .....	67
5.4.1 「多量」の意味分析.....	67
5.4.2 「大量」と「多量」の共通点と相違点 .....	70
5.5 「大量」と「多数」の意味分析 .....	75
5.5.1 「多数」の意味分析.....	75
5.5.2 「多数」と「大量」の類似点と相違点 .....	77
5.6 「多数」と「多量」の類似点と相違点 .....	79
5.7 第5章のまとめ.....	81
<b>第6章 出来事、動きの量を表す「たくさん、数多く、多く、多数」の意味分析</b> .....	<b>83</b>
6.1 はじめに.....	83
6.2 「多く」と「数多く」の意味分析 .....	84
6.2.1 先行研究とその検討 .....	84
6.2.2 「数多く」の意味分析 .....	85
6.2.3 「多く」の意味分析 .....	86

6.2.3.1	別義①	86
6.2.3.2	別義②	88
6.2.3.3	別義③	89
6.2.3.4	別義④	90
6.2.3.5	別義間の関連性	92
6.3	「多数」と「数多く」の類似点と相違点	93
6.3.1	類似点	94
6.3.2	相違点	94
6.3.2.1	連用修飾用法	94
6.3.2.2	連体修飾用法	99
6.3.3	まとめ	100
6.4	出来事と動きの量を表す「数多く、たくさん、多く」	101
6.5	第6章のまとめ	104
<b>第7章</b>	<b>人間を表す数量表現の類義語分析</b>	<b>106</b>
7.1	はじめに	106
7.2	類似点	106
7.3	「大量」と「大勢、たくさん、数多く、多数」の相違点	108
7.4	「大勢、たくさん、数多く、多数」の相違点	112
7.4.1	文体差について	112
7.4.2	存在物としての人間の際立ち	114
7.4.3	出来事の意味の際立ち	117
7.4.4	個々の際立ちの違い	120
7.5	第7章のまとめ	122
<b>第8章</b>	<b>「たっぷり、どっさり、いっぱい」の意味分析</b>	<b>124</b>
8.1	はじめに	124
8.2	「たっぷり」と「どっさり」の意味分析	126
8.2.1	本節の目的	126
8.2.2	先行研究とその検討	126
8.2.3	「たっぷり」と「どっさり」の意味分析	131
8.2.3.1	「たっぷり」の意味分析	131
8.2.3.1.1	別義①	131
8.2.3.1.2	別義②	136
8.2.3.1.3	別義③	138
8.2.3.1.4	別義④	140
8.2.3.1.5	別義間の関連性	142
8.2.3.2	「どっさり」の意味分析	144

8.2.3.2.1	オノマトペの「どっさり」	144
8.2.3.2.2	別義①	145
8.2.3.2.3	別義②	151
8.2.3.2.4	別義間の関連性	152
8.2.4	「たっぷり」と「どっさり」の類似点と相違点	152
8.2.4.1	類似点	152
8.2.4.2	相違点	153
8.2.4.2.1	重さが際立つ「どっさり」、中身が際立つ「たっぷり」	153
8.2.4.2.2	評価性と基準の違い	156
8.2.4.2.3	語彙化の程度の違い	158
8.2.5	まとめ	160
8.3	「いっぱい」と「たっぷり」の意味分析	161
8.3.1	本節の目的	161
8.3.2	先行研究とその検討	162
8.3.3	「いっぱい」の意味分析	163
8.3.3.1	別義①	163
8.3.3.2	別義②	164
8.3.3.3	別義③	165
8.3.3.4	別義④	165
8.3.3.5	別義間の関連性	165
8.3.4	「いっぱい」と「たっぷり」の類似点と相違点	166
8.3.4.1	基準と評価性の違い	167
8.3.4.2	連体修飾用法における違い	168
8.3.4.3	「A いっぱいの B」の3つの意味と「A たっぷりの B」	168
8.3.4.4	構文の意味を動機付けるイメージスキーマ	170
8.3.5	まとめ	171
8.4	第8章のまとめ	171
<b>第9章</b>	<b>「多く」と「たくさん」の意味分析</b>	<b>173</b>
9.1	はじめに	173
9.2	先行研究とその検討	174
9.2.1	市川 (2010)	174
9.2.2	加賀 (1997)	176
9.2.3	久島 (2010)	177
9.3	「多く」と「たくさん」	178
9.3.1	「多く」の意味	178
9.3.2	「たくさん」の意味	179

9.4 「多く」と「たくさん」の類似点と相違点 .....	179
9.4.1 連用修飾用法における類似点と相違点 .....	180
9.4.2 連体修飾用法における類似点と相違点 .....	183
9.4.2.1 「多くの」の3つの意味と「たくさん」について .....	183
9.4.2.2 「多くの」と「たくさん」の相違点 .....	185
9.4.2.3 「たくさん」の大人も好きです」が不自然である理由について .....	187
9.5 第9章のまとめ.....	188
<b>第10章 本研究のまとめと課題 .....</b>	<b>191</b>
<b>引用文献 .....</b>	<b>197</b>
<b>謝辞 .....</b>	<b>203</b>

## 表記法について

1. 例文中の分析対象語は太字で示し、下線を施した。
2. 例文の文頭、または例文中の分析対象語句の前に付される「\*」は、その文が非文であることを示す。「?」は、その文が容認度の低い文であることを表し、「??」は、「?」よりもさらに容認度が低いことを表す。
3. 本研究の分析対象語の意味は<>で括って示した。
4. 引用における破線は、引用者が注目したいところに施したものである。
5. 例文と図表の番号は、各章ごとの通し番号である。
6. 注釈の番号は全章の通し番号である。

本研究の第 5 章から第 9 章は、以下の論文に基づき、その後の研究によって明らかにしたことを加味して加筆・修正したものである。

2010 年 6 月 「『一杯』から『いっぱい』へ—容器のイメージ・スキーマによる意味拡張—」

『日本認知言語学会論文集』10 pp. 324-334

2011 年 6 月 「量の多さを表す副詞的成分の意味分析—『よく』と『たくさん』—」

『日本認知言語学会論文集』11 pp. 417-427

2012 年 6 月 「類義語『いっぱい』と『たっぷり』の意味分析」

『日本認知言語学会論文集』12 pp. 311-323

2012 年 7 月 「量の多さを表す副詞的成分の意味分析—『たくさん』と『たっぷり』—」

名古屋大学オープンキャンパス・ポスター発表

2014 年 11 月 「人間を数える数量表現の類義語分析」

『言語文化学会論集』43 pp. 53-71



# 第1章 序論

## 1.1 本研究の目的

ものや人の数量が多いことを表したいとき、私たちはどのように表現するのであろうか。

『講談社 類語辞典』で、「多い(多数・多量)」のカテゴリーを見ると(pp. 1427-1431)、「動詞の類」から「形容詞の類」、「形容動詞の類」、「副詞の類」、「名詞の類」にわたって171語が挙がっている(「たくさん、大勢、多く」など、複数の類に重複して分類されている語も含む)。「形容動詞の類」<sup>1</sup>に分類されている語だけでも77語ある。それぞれの意味記述を見ると、意味記述がよく似ている語が見受けられる。

たとえば「形容動詞の類」において、「多く」は「数量が多い様子」、「多数」は「数の多い様子」、たくさんは「数・量などが多い様子」とそれぞれ記述されており、「数が多い」が共通している。それでは「数多い(く)」とどのように異なるのであろうか。他の国語辞典類でも事情は同様である<sup>2</sup>。このように意味の似た語を、いったい私たちはどのように使い分けているのであろうか。織田(1982)は「A dog, The dog, Dogs」を含む文を説明する中で、次のように述べている。

しかしこれらの表現は、入れかえ可能な表現ではない。どれでもよいというのであれば、どれかが残り他は亡びるとというのが言語の世界の習わしである。同じことをいうのに3通りもの表現を許すほど、言語の世界は経済的に甘くはない。3通りの表現があるということは、それぞれに、その表現でなければ言いあらわすことのできない独自の領域があるということである。(織田 1982:271)

以上のように、本研究の目的は(数量が大であることを表す)数量表現の独自の意味を明らかにすることである。

さて、数量表現に限らず、「言葉には、環境に働きかけ、環境と共振しながら世界を解釈していく主体の感性的な要因や身体性にかかわる要因(五感、運動感覚、視点の投影、イメージの形成等)がさまざまな形で反映されている」(山梨 2000:2)と考えることができる。これは認知言語学の言語観である。認知言語学は、一般的な認知能力を重視することに加えて、私たちの身体を通してのさまざまな「経験」が、言語の習得・使用の重要な基盤を成していると考える。このような考え方を「経験基盤主義」(experientialism)と言う場合がある(靱山 2014:1)。

本研究は、実例をもとに、現代日本語において数量が大であることを表す語の中から使

<sup>1</sup> 『講談社 類語辞典』は、「形式よりも意味を重視するという大方針」をとっており、「形容動詞の類」には、「野生の・満ち足りた」など、名詞の前に来たときの形が「な」にならないものも含まれる。これは「形にとらわれず働きを重視した結果である」と記述している(p.5)。

<sup>2</sup> 『大辞林』(第三版)は、「たくさん」の第1義を「数量の多い・こと(さま)」と記述している。一方、「多く」の第1義は「たくさん」と記述されている。

用頻度の高い語を中心とした数量表現の、個々の語の意味と類義語との意味の違いを、経験基盤主義に基づく認知言語学のアプローチを用いて明らかにすることを旨とする。私たちが量を捉えるダイナミックな認知のしくみの一端を明らかにしたい。

本研究で考察対象とする語は以下の 10 語である。

本研究の考察対象：「たくさん」「いっぱい」「たっぷり」「どっさり」「大勢」「多数」  
「多量」「大量」「数多く」「多く」の 10 語

本研究で考察対象とする語は、すべて「数量が大であること」（以後「数量大」と表記）を表す数量表現であるが、類義語との意味の違いが問題になるにもかかわらず、先行研究において個々の語の意味や類義語との違いが明らかにされているとは言いにくい。本研究で考察対象とする語が体系的に分析されてこなかった理由の 1 つは、冒頭で述べたように、本研究で考察対象とする語が、辞書類を含む先行研究において「副詞」「名詞」「形容（動）詞」など複数の品詞にまたがっているためであると考えられる。

そこで、第 2 章では本研究の考察対象である語が現代日本語においてどのように位置付けられているか 4 つの先行研究を整理・検討し、本研究で考察対象とする語の位置付けを行う。

## 1.2 本研究で使ったコーパスおよびツール

本研究が主に利用したコーパスおよびツールは、以下の『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』、『NLB (NINJAL-LWP for BCCWJ)』、『NLT (NINJAL-LWP for TWC)』である。以下、国立国語研究所の説明 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>) をそのまま引用する。

### \*現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

国立国語研究所（以下、国語研）が現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築した 1 億 430 万語からなるコーパスです。書籍、雑誌、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律など、多様なジャンルから無作為にサンプルを抽出した均衡コーパスです。

([http://www.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/))

### \*NLB (NINJAL-LWP for BCCWJ)

上記の BCCWJ を検索するために、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムです。国語研の共同研究プロジェクト「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成」（リーダー：プラシャント・パルデシ）、「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」（リーダー：影山太郎）、「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」（リ

ーダー：プラシヤント・パルデシ) による研究成果の一部です。

(<http://nlb.ninjal.ac.jp>)

**\*NLT (NINJAL-LWP for TWC)**

筑波大学が構築した約 11 億語の筑波ウェブコーパスを検索するためのオンラインシステムです。検索システムには、NLB と同じ NINJAL-LWP を使用しています。書き言葉の BCCWJ とウェブテキストの TWC を比較しながら、日本語の語彙の振る舞いを調査することができます。

(<http://corpus.tsukuba.ac.jp>)

上記以外に、『日経テレコン 21 記事データベース』、『青空文庫』および『朝日新聞デジタル』、その他インターネットから収集している。

本研究で使用するコーパスおよびツールの略称の表記は以下の通りである。

\*BCCWJ：『現代日本語書き言葉均衡コーパス 少納言』からの例文

\*NLB：NLB (NINJAL-LWP for BCCWJ) からの例文

\*NLT：NLT (NINJAL-LWP for TWC) からの例文

\*日経：『日経テレコン 21 記事データベース』(<http://telecom21.nikkei.co.jp/>) からの例文

\*朝日：『朝日新聞デジタル』(<http://www.asahi.com/>) からの例文

\*青空：『青空文庫』(<http://www.aozora.gr.jp/>) からの例文

その他、インターネットからの例文には引用先の URL を示す。

### 1.3 本研究の構成

第 1 章では、研究の目的と本研究で使用するコーパスおよびツールについて述べた。以下、本研究の構成は次の通りである。

第 2 章では、先行研究において本研究で考察対象とする語がどのように位置付けられてきたかについてまとめる。さらに、類別詞との機能の共通性について記述し、本研究で考察対象とする語の位置付けを行う。

第 3 章では、本研究が依拠する理論的基盤である認知言語学の基本概念について、助数詞の研究を紹介するかたちで概観する。

第 4 章では、本研究で考察する語のより詳細な分析を行う前提として、下位分類を提示する。

第 5 章から第 9 章にかけては、第 4 章で提示した下位分類に基づき、各語の個別の意味分析と類義語分析を行う。

第 10 章では、本研究のまとめを行い、今後の課題について述べる。

## 第2章 本研究で考察する数量表現の位置付け

### 2.1 本章の目的

本章は、本研究で考察対象とする数量表現の位置付けを行うことを目的とする。本章の構成について述べる。

まず、2.2では上の目的のために、本研究で考察対象とする語が先行研究においてどのように記述されてきたかを概観する。2.3では、本研究で考察対象とする10語の位置付けのための準備として、数量詞（数詞+助数詞）と本研究の考察対象である数量表現の共通性について述べ、数量詞の意味機能について概観する。最後に2.4では、まとめとして考察対象とする語の位置付けを行う。

### 2.2 先行研究

#### 2.2.1 益岡・田窪（1992）

##### 2.2.1.1 益岡・田窪（1992）

益岡・田窪（1992）においては、本研究で対象とする語は主に「名詞」と「副詞」の章において記述されている。

まず、「名詞」の章を見ると、益岡・田窪（1992：34）は、名詞のうちで数量を表す名詞を「数量名詞」と呼ぶ、と定義し、数量名詞を形、意味、用法の3点からそれぞれ以下のように分類している。まず、形の上から①名詞単独で数量を表すもの（「大勢、多く、多数、いくらか、大部分、半分、全部」等）と、②「数の名詞+助数辞」（「3本」、「5頭」、「7枚」）や③「指示詞+『ほど』、『くらい』」等のように、接尾辞や接尾辞的な語と組み合わせて初めて数量名詞になるもの」とがある、と述べている（下線、強調は本研究で考察対象とする語）。

次に、意味の上から、①数量の多少を表すもの（「大勢、多く、多数、少数」等）②具体的な数量を表すもの（「数の名詞+助数辞」や「指示詞+「ほど」、「くらい」」）③集合の部分や全体を表すもの（「半分、3分の1、一部、いくらか、全部、全員」等）に分類している。

さらに、数量名詞の用法は主として、①述語の補足語の働きをするもの（例（1））、②名詞の修飾語の働きをするもの（例（2））、③名詞に後続して数量を明示する働きをするもの（例（3））がある、としている。また、④述語の修飾語として用いることもできる（この場合、数量名詞は原則として、ガ格またはヲ格の名詞の数量を表現する）（例（4））、としてそれぞれ以下の例をあげている（p.98 下線と例文の後ろの括弧（用法①～④）は引用者）。

- (1) 全員が賛成するとは限らない。（用法①）
- (2) 高津さんが飼っていた5頭の牛が次々に病気にかかった。（用法②）
- (3) 60円切手7枚を同封して、事務所に申し込むこと。（用法③）

(4) 太郎は切手を 500枚 集めた。(用法④)

(益岡・田窪 1992:98)

次に、「副詞」の章を見ると、益岡・田窪 (1992:41) は、「副詞とは、述語の修飾語として働くのを原則とする語をいう」と定義し、主な種類として、「様態の副詞」、「程度の副詞」、「量の副詞」、「テンス・アスペクトの副詞」等があると述べている。この中で、「量の副詞」は「動きに関係するものや人の量を表す」とし、「たくさん、いっぱい、たっぷり、どっさり」等があると述べている (p.43)。ただし、「状態の表現の中でも、存在を表す表現については、量の副詞を用いることができる」(p.44) とし、例として「店には、人が いっぱい いる」をあげている。また、「たくさん、いっぱい、相当、かなり、少し、ちょっと、少々、多少、じゅうぶん」等は、接続助詞「の」を介して名詞を修飾することができる、と記述している (p.44)。この記述と上の「数量(を表す)名詞」の用法を比べると、「(数量)名詞」は用法①～④で用いられるが、「(量の)副詞」は、「の」を介しての連体修飾用法(用法②)と連用修飾用法(用法④)の2つの用法のみ可能であることが分かる。本研究の考察対象である「大量、多量、数多く」についての記述はない。

### 2.2.1.2 検討

加藤 (2003:418) は、上の益岡・田窪 (1992) の記述で「多く」が「数量名詞」に、「たくさん」が副詞に分類されていることについて、「『多く』は確かに普通は遊離数量詞としては用いないが全くないわけではなく、両者の区分が不明確である」と述べている。

この点について考えると、益岡・田窪 (1992) の記述に従えば、「数量名詞」か「量の副詞」かの区別は、量の副詞は用法①③ではなく、主に用法②④が可能であることによると整理できる。確かに、「多く」は①で問題なく用いることができる。この点においては「数量名詞」の条件を満たす。しかし、例(3)において「7枚」を「多く」に置き換えることは難しいことから「多く」を「数量名詞」に分類した場合問題となる。

さらに、「たくさん、いっぱい」は「の」を介して名詞を修飾することができるとしているが、「いっばいの」は、「(量)ではなく、「満ちている」)状態を表す場合においては「いっばいの (例「いっばいのドーム)」)という形式で名詞を修飾することができるが、量を表す場合は基本的に難しい(例「\*いっばいの本がある」)<sup>3</sup>。同書が量の副詞としている「たっぷり」「どっさり」も同様に難しい(例「\*たっぷりの本がある」「\*どっさりの本がある」)。この点において、「いっぱい」「たっぷり」「どっさり」は「たくさん」とは振舞いが異なる。つまり、「用法②④が可能であること」が「量の副詞」である条件ならば、この条件を満たす語は「たくさん」のみである。

逆に、この条件から、「たくさん」以外を「数量名詞」と仮定すると、本研究で考察対象とする語は、「多数」以外は用法③で用いられにくい(例「\*60円切手多く/たっぷり/ど

<sup>3</sup> 岸本 (2005:124) は、「いっぱい」は、「たくさん」とは異なり、名詞句を直接修飾する用法がない、とし「ジョンは\*いっぱいのリンゴを食べた」をあげている(下線は引用者による)。

っさり／いっぱい／大量／多量／数多くを同封して))。つまり「数量名詞」の条件を満たさない。

また、先述のように、「いっぱい、たっぷり、どっさり」は名詞修飾の用法②が難しいが、「大量、多量、大勢、数多く」は②の用法で用いることができる(例「大量／多量／数多くのりんご」「大勢の学生」)。この点においては「たっぷり、どっさり、いっぱい」よりも「数量詞」と「量の副詞」の両方の条件を満たす。

さらに「大勢」は、用法①②④は可能であるが、用法③「\*生徒大勢が／を／で／に」(宇都宮 1995:8)を満たさないことから「数量名詞」の条件を満たさない。

このように、本研究で考察対象とする語は、名詞としての「数量詞」と副詞としての「量の副詞」にまたがっているが、同書の基準では本研究の考察対象とする語の中で「たくさん」以外は名詞なのか副詞なのか区別が難しい。

## 2.2.2 仁田 (2002)

### 2.2.2.1 仁田 (2002)

仁田 (2002) は、「単語のごみ箱的存在」(仁田 2002:1)とされてきた「副詞」を体系的に記述した研究である。仁田は、命題内の「副詞的修飾成分(以後「副詞」と表記)を大きく5つ(①結果②様態③程度量④時間関係⑤頻度)の副詞に分け、この中の「程度量の副詞」を以下のようなテスト・フレームを用いて①純粹程度の副詞②量程度の副詞③量の副詞に下位分類している。

[I] 「オ酒ヲ[X]飲ンダ」 / 「[X]歩イタ」

[II] 「彼は[X]大きい」 (仁田 2002:163)

仁田は、[X]に適当な副詞を入れてみて、[I] [II] 両方に挿入可能であれば②量程度の副詞、[I]のみ可能であれば③量の副詞、[II]のみ可能であれば①純粹程度の副詞であるとしている。

その上で、「典型的な量の副詞の中心的な用法は、主体や対象の個体の数量限定である」(p. 192 下線は引用者)とし、周辺的な用法として「動きの量限定」をあげている。

つまり、仁田 (2002) は、上の分類 [I] の2例 (A「オ酒ヲ[X]飲ンダ」、B「[X]歩イタ」)において、Aの用法が中心的な用法であって、Bの用法は周辺的な用法であると述べていると思われる。

ここで、XはAにおいては「お酒」すなわち「主体や対象の数量限定」を行う用法であり、Bにおいては「歩く」という「動きの量」を限定する用法である。つまり、後者は動きそのものの量限定を行うと言える(本研究においても「動きの量」をこの意味で用いる)。

「主体や対象の数量」と「動きの量」の違いについて、仁田は次のように説明している。「だいぶ酒を飲んでいる」という例において、「だいぶ」は酒の量であるとともに「飲む」

という動きの量がそれに応じる量であるということである。これらは、対象の数量限定を行いながら、動きの量限定を行っている。言い換えれば、動きへの量限定が対象の数量限定として実現しているタイプである。また、「悪いこともずいぶんしたなあ」などは、対象の数量限定が、動きの回数そのものを規定する、というあり方で動きの量限定になっている例である（仁田 2002:185-186）。

一方、「数量詞」については「いわゆる数量詞と呼ばれるものも、広い意味で量の副詞の一類であろう」と記述している。その上で、量の副詞との違いについて、「動きそのものの量限定の働きを有していない」（p. 195）と述べている（つまり、B の用法を持たない）。さらに、「数量詞は、形式として格助辞を容易に後接させうるものである。その意味で名詞性が高いと言えよう」（p. 193）と述べ、格助辞の後接という基準で、「名詞性」の高さを判定し、高いものを「数量詞」、そうでないものを「量の副詞」、と分類していることが分かる。ここで仁田の言う「数量詞」とは益岡・田窪の「数量名詞」の中の「数の名詞+助数辞」（例「3本」「5頭」「7枚」）を指す。

さらに、数量詞の用法について、主体（ガ格名詞）や対象（ヲ格名詞）と共に使われる場合は、「日本人二三百人ガ〜」と言えるにも拘わらず、「すでに気の早い日本人が二三百人、校庭に整列しているのが見えた」などのように、「副詞的に使われることが多い」（pp. 193-194）と指摘している。つまり、用法③で用いることができるとはいえ、主な用法は④であると述べていると思われる。「数量詞」の用法において連用修飾用法（用法④）が基本であるという点については「数量詞」を対象にした研究である岩田（2007、2013）など、多くの先行研究において見解が一致している。

その上で仁田（2002）は、以下のように分類を立てている（p. 191）。

#### ①典型的な量の副詞

たくさん、大勢、いっぱい、たっぷり（と）、たんまり（と）、しこたま、どっさり（と）、ごっそり（と）、ふんだんに、あまた

#### ②量の副詞の周辺に位置する存在

②-1：全体（数）量に対する割合のありようを表すもので、典型的な量の副詞に比して名詞性が高い。いわゆる数量詞につながるもの。

（例「全部、全員、大部分、半分、大多数、少数、総て、みんな、あらかた、おおかた、残らず」）

②-2：形式としての名詞性が高くなったもの。いわゆる数量詞とよばれるもの。

（例「二つ、3個、4台、5箇所、6本、数十人…」）

#### 2.2.2.2 検討

仁田（2002）は、数量詞（二つ、3個など）と、量の副詞の共通性を指摘し、量程度の副詞をテスト・フレームを用いて分類し、量の副詞の用法について「動きの量限定」を記述

した点が注目できる。

しかし、「大勢」について「量の副詞」としているが、仁田のテスト・フレームの〔I〕の2例の中で、Aを改変して、たとえば「学生が大勢集マッタ」のように「主体の数量限定」は可能であるが、B「大勢歩イタ」においては「歩く」という動きそのものの量を表すことができないことから、主体や対象の数量限定はできても、動きの量限定はできないと思われる。つまり、仁田の「量の副詞」の基準を満たさない。

もう一つの基準である「格助辞の後接」という点から見ると、前節で見たように、①の用法で用いられる語に「多く、多数、大勢」がある（例「多く／多数／大勢が賛成した」）。しかし、「多く」と「大勢」は③では難しいことを見た（例「\*60円切手多くを同封して」「\*生徒大勢が／を」）。

つまり、2.1で見たように、益岡・田窪（1992）の分類では「大勢」は「名詞（数量詞）」に分類されていたが、仁田（2002）の分類では「格助辞の後接」が可能であり、「B 動きの量限定」が不可であるにもかかわらず「典型的な量の副詞」に分類されている。また、「どっさり」も「動きの量限定」は不可である。このように仁田のテスト・フレームは仁田が「典型的な量の副詞」としているものの基準を満たさない。

また、仁田（2002）は文の成分（構成要素）としての副詞的成分を体系的に分類考察した研究であるが、上のように「数量詞」については記述されているが（②-2）、本研究の考察対象である「大量、多量、多数、多く、数多く」などについては記述がない。

また、典型的な量の副詞の中心的な用法は「主体や対象の個体の数量限定」であるとしているが「水をたくさん飲んだ」と言えるように、「たくさん」の表す「主体や対象」は「個体」に限らない。

## 2.2.3 日本語記述文法研究会（編）（2009）

### 2.2.3.1 日本語記述文法研究会（編）（2009）

日本語記述文法研究会（編）（2009）は、「量を表す副詞的成分（量副詞）とは、文中に現れる名詞の数量や動きの量を限定する副詞的成分である」（p. 203）と定義しており、表す対象が「個体」に限定されていない。この点以外は仁田（2002）の記述とほぼ同じである。

同書は「量を表す副詞的成分」として以下の①をあげ、さらに「直接述語に係って副詞的な働きをすることもある」名詞として②③④をあげている。このうち④のみを「数量表現」（p. 181）としている。

- ①量を表す副詞的成分：たくさん、いっぱい、どっさり（と）、たっぷり（と）、など
- ②集合の部分や全体を表す名詞：全部、全員、すべて、みんな、大部分、大多数、半分、一部、など
- ③数量の多い少ないを表す名詞：大勢、多数、少数、など



④具体的な数量を表す名詞：1つ、2人、3本、4匹、5個、6冊、など

(日本語記述文法研究会(編)2009:203-204)

### 2.2.3.2 検討

日本語記述文法研究会(編)(2009)は、仁田(2002)では「量の副詞」と分類されている「大勢」を「(数量の多い少ないを表す)名詞」として分類している。しかし、本研究の考察対象である「大量、多量、多く、数多く」についての記述はない。

日本語記述文法研究会(編)(2009)の上の分類は、2.2.1 で見た益岡・田窪の分類の、「数量名詞」の意味上の分類とほぼ同じと言える。

また、同書は「数量構文は、数量表現の出現位置によって、動詞修飾型、名詞修飾型、添加型の3つのタイプに分かれる」「量副詞は、この3つのタイプうち、動詞修飾型と名詞修飾型にはなるが、添加型にはならない」(p.181)と述べている。この基準も、2.2.1 で見た益岡・田窪の「数量名詞」の用法上の区分である「①述語の補足語の働きをするもの②名詞の修飾語の働きをするもの③名詞に後続して数量を明示する働きをするもの④述語の修飾語として用いることもできるもの」の4つの用法の中で、量副詞は用法②④が可能であると記述しているのとほぼ同じである(日本語記述文法研究会(編)(2009)は用法①については言及していない)。

しかし、先述のように、確かに量副詞「たくさん、いっぱい、どっさり(と)、たっぷり(と)」は添加型(益岡・田窪の用法③)にはならないが、(6)のように「たくさん」以外の「量副詞」は名詞修飾型(益岡・田窪の用法②)が難しい。

- (5) 田中先生は学生を 3人 / たくさん (いっぱい / \*たっぷり / どっさり) 呼び出した。  
(動詞修飾型)
- (6) 田中先生は 3人の / たくさんの (\*いっばいの / \*たっぷりの / \*どっさりの) 学生を呼び出した。  
(名詞修飾型)
- (7) 田中先生は学生 3人 / \*たくさん (\*いっぱい / \*たっぷり / \*どっさり) を呼び出した。  
(添加型)

(日本語記述文法研究会(編)2009:181 引用者が一部改変)

したがって、「(量の)副詞」と「数量詞(数量表現)」の区別は添加型(=名詞に後続して数量を明示する働き)になるか否かで可能であるが、2.2.1 で述べたように、同書が量の副詞としている「いっぱい、たっぷり、どっさり」は名詞修飾型も難しい(例「\*いっぱい / \*たっぷり / \*どっさりの本がある」)。このようにすべての量副詞が名詞修飾型になれるわけではない。さらに、上述のように、「どっさり」は「動きの量を限定する」ことも難しい(例「\*どっさり歩いた」)。

つまり、日本語記述文法研究会(編)(2009)の記述においても、他の2つの先行研究同様、

「量副詞」としてあげている語の中で「たくさん」以外は基準を満たさない。

また、「数量の多い少ないを表す名詞」とされる「大勢、多数、少数など」の振舞いについては「直接述語に係って副詞的な働きをすることもある」という記述があるのみである。

ここで「大量、多量」について考えると、「\*水大量／\*水多量を消費した」のように添加型が難しい点において、「大量、多量」は「量副詞」と同じ振舞いをする。このことから量副詞の定義を「添加型にならないもの」とするならば、「大量、多量」は「いっぱい、たっぷり、どっさり」同様「量副詞」になる。さらに、「大量、多量」は名詞修飾型（「大量／多量の水」にもなることから「量副詞」「数量詞」両方の条件を満たす。しかし、動詞修飾型になるには「に」が必要である。この「に」については、次節で加藤（2003）の記述を見る。

以上のように、日本語記述文法研究会（編）（2009）の基準からも、「量の副詞」とされるものと「数量の多い少ないを表す名詞」とされるものを明確に区分することが難しい。

「数量を表す語」の共通性に着目し、同じ範疇にまとめるのが次の加藤（2003）である。

#### 2.2.4 加藤（2003、2006a、2013）

##### 2.2.4.1 加藤（2003、2006a、2013）

まず、前節で触れた（「大量に、多量に」の）「に」について、加藤（2003：503-504）は「{特に／常に／一斉に／十分に}警戒する」という例をあげて以下のように説明している。

これらの用例では「警戒する」を修飾する連用修飾成分はいずれも「Xに」の形態をとっているが、その修飾機能や統語構造に異なるところがない。しかし、従来の品詞記述では、「特に」は副詞であり、「に」は副詞の一部ということになる。「一斉」は名詞として扱われるので、「に」は格助詞である。「十分に」は形容動詞「十分だ」の連用形「十分に」として扱われるので、伝統的な枠組みではこの場合の「に」は連用形の語尾ということになる。「常」は名詞と扱う辞書が多いが、「常に」を副詞としている辞書もあり、格助詞なのか副詞の一部なのか、記述も分かれている。本書ではこれらの「に」は、連続的な関係にあり、分離して扱うことができないことを理由に、統一的に扱うことを主張した。すなわち、いずれも「に」が名詞的な要素についたものと解釈し、「Xに」のXにあたるものを《実詞》として、その下位区分を行うことを考えたのである。（加藤2003:503-504）

このように、名詞、形容動詞（の語幹）、副詞などをまとめて「実詞」と呼び、動詞と形容詞をまとめて「用詞」と呼んでいる。上の「実詞」を加藤（2013）では「体詞」と呼び、「体詞」は、「体言」の意ではなく、体言を中心的要素として含む、体言的なものの大範疇の意である、としている（p. 34）。そして、以下のように表にまとめている（p. 29）。

表1 品詞体系の大区分（試案）（加藤 2013 : 29）

詞	用詞	動詞・形容詞類
	体詞	名詞類・副詞類／副語基類
辞	助動辞	（従前の助動詞に相当）
	助辞	（従前の助詞に相当）

これらの記述から、本研究の対象である語はすべて加藤（2013）の言う「体詞」と言える。

さらに、加藤（2003 : 431）は、「数量詞」について以下のように記述している。

- (8) 数量詞は、一般に「名詞」と理解されることが多いが、連用用法が中心のものは「副詞」に分類されることもある。「数量詞」は、もちろん、品詞体系上は横断的に存在しており、特定の品詞に属するわけではない。（加藤 2003 : 431）

その上で、加藤（2003）は、「数量詞の定義」については「数量を表す語（句）と定義してもよいはずであるが（略）数量詞に関する先行研究は多いがその大半は数量詞に完全な定義を与えていない」とし、以下のように例をあげて定義している。

- (9) 祐子は北陸自動車道を 250km 走り、休憩をとった。  
 (10) 祐子は北陸自動車道を かなり 走り、休憩をとった。  
 (11) 義男はひとりで牛肉を 200 g 食べた。  
 (12) 義男はひとりで牛肉を たくさん 食べた。（加藤 2003 : 431）

たとえば、(9) の「250km」は一般に数量詞として扱われるが、語彙の機能という観点から見れば同じように距離を表している (10) の「かなり」も数量詞であるはずである。また、(12) の「たくさん」も (11) の「200g」と同じように牛肉の量を表している。両者の違いは、「250km」と「200 g」が類別詞を伴った特定の数量であるのに対して「たくさん」は類別詞を伴っておらず、不特定の数量を表すにすぎないということである。以下、前者を特定数量詞、後者を不特定数量詞と呼ぶことにする。

（加藤 2003 : 431）

そして、「不特定数量詞」は「特定数量詞」と異なり、統語的な性質が均一でないことを指摘している（以後、「数量詞」とは「3 個、200 グラム」などのように数詞と助数詞からなる語の意味で用いることにする。つまり、加藤の言う「特定数量詞」の意味で用いる）。

さらに、加藤（2003 : 443）は、「存在数量を表す数量詞」を「存在数量詞」と呼び、そうでないものを一括して「非存在数量詞」と名付けている。(13) (14) における「本」と「3 冊」の関係は、本の数量が 3 であるというものであるのに対し、(15) (16) の「階段」

と「10 段」の関係は、階段の数量が 10 というものではない、と述べ、「3 冊」を存在数量詞、「10 段」を非存在数量詞であるとしている。

(13) 3 冊の本を読んだ。

(14) 本を 3 冊読んだ。

(15) 10 段の階段を登った。

(16) 階段を 10 段登った。

(加藤 2003 : 442)

上の例において、非存在数量詞である「10 段」は (15) の連体数量詞構文においては階段の「属性」<sup>4</sup>を表し、(16) の NCQ タイプ (N・C・Q という表記は「名詞」、「格助詞」、「数量詞」を表す) で用いられる数量詞 (=遊離数量詞) 構文では「動作量」<sup>5</sup>を表すとしている。加藤 (2003 : 467) は非存在数量詞では、そもそも存在の数量を表すわけではないので類別詞のずれが生じる、と指摘し、(15) と (16) のように連体数量詞構文と遊離数量詞構文で意味が異なるものは、この種の類別詞のずれによるものであると指摘している。さらに加藤 (2003 : 466) は、従来知的意味はほとんど変わらないとされてきた (13) (14) のような存在数量詞においては、類別詞のずれは生じないが、「3 冊の本」のような「連体数量詞は、その名詞句を指示する時点で、既にその数量が一つのまとまりのある単位であるという認識があると説明可能」であることから「既定的単位」を表し、(14) (16) の遊離数量詞構文では「その名詞句を指示する時点で、まとまりのある単位、全体がひとつの意味のある集合体となっているとは捉えてはいない」ことを示すことから「未定的単位」を表すとしている (p. 466)。このように、存在数量詞と非存在数量詞が用いられる構文によって意味や機能の違いを持つことを以下のように表にまとめている (p. 467)。

表 2 (加藤 2003 : 467)

非存在数量詞	連体数量詞	《属性》を表す
	遊離数量詞	《動作量》を表す
存在数量詞	連体数量詞	《既定的単位》であることを表す
	遊離数量詞	《未定的単位》であることを表す

ただし、加藤 (2003) は、「存在数量と非存在数量は連続的に考えなければならない面が

<sup>4</sup> 加藤 (2003) は、一般に、「属性」はその種類・種別を表す目安ともなる、と述べ (p. 449)、「30 センチの定規を買う」「雅美は、6 畳の勉強部屋を持っている」「400m のトラックを疾走する」は、単に長さや広さを表しているだけでなく、その種類を表してもいる。属性はそのもの固有のもので、ふつう可変的なものではない。この点で《動作量》という概念とも相容れない。また、(略) 動作量が結果的な捉え方をしているのに対し、固有の属性とは結果として捉えたものではない、と記述している (p. 449)。

<sup>5</sup> 加藤 (2003) は、「動作量」とは、矢澤 (1985) の「達成量」に相当するものであり、動作・作用の完了時に達成された数量であると定義し「いわば結果的に捉えたものであるから、開始や継続のAspectとは共起しにくいと言える」と述べている (p. 447)。

ある。初めから存在数量と考えるとよいものもある一方で、どういうものに関する数量を表すかで評価を変えねばならないものもある」とし、体積や重さは「1 個」「2 本」などの個別の個数を表すものと異なり、連続的な数量表示を行うとしている (p. 467)。

(17) 「{???500g の牛挽き肉を／牛挽き肉を 500g} 買ってきて」 (加藤 2003:463)

(18) 「200g のステーキ肉を買ってきて」 (加藤 2003:463)

加藤 (2003) は、(17) の「500g」は存在数量詞として機能しているが、(18) の「200g」は 200g で 1 枚になっているということがそのステーキ肉の属性を表していると見ることは十分可能であることから、「属性」と見なすことも、「集合的認知によるまとまった単位」とみなすこともできる、つまり、非存在数量とも存在数量とも見なしうる、と記述している。これに対して、『5 本』『10 本』は明らかに存在数量である。この 2 種類の数量詞の違いは、前者が連続的な量として表示するのに対し、後者が不連続な数として個別の存在個数を表しているというところにある」としている (p. 464)。

さらに、加藤は「長さ・面積などは非存在数量詞として機能することが多く、体積・重さなどは存在数量詞と見るべき場合が多いが、これらは戴然と区別しにくいものもある。」(p. 467) としている。つまり、連体数量詞構文において、<属性>を表すものが非存在数量詞であり、<既定的単位>を表すものが存在数量詞である、と基本的には区分できるが、上の説明のようにどちらとも見なしうる例があり、「存在・非存在」という二つの概念が連続的であることを記述している。

また、加藤 (2006a: 26) は、存在数量の連体用法「ガレージに 5 台の車がある」においては「5 台の」は「5 台の車が置かれた状態」として提示すべきもの、いわば「存在の様態」とも言うべきものであって車に固有の特性ではない、と記述している。また「連用数量詞が動作量と解釈されるのは、述部に動作と解しうる意味がある場合であって、存在や単なる状態を表す述部の場合はこの動作量という解釈はできない」と記述している (加藤 2006a: 28)。また、同書は連用修飾用法が無標であるとしている。この点については、先述のように、仁田 (2002) や岩田 (2013) などの先行研究においても一致している。

#### 2.2.4.2 検討

加藤 (2003) の定義に従えば、本研究で考察する語はすべて (数量大を表す) 「不特定数量詞」に含まれる。

加藤は、上で見た 3 つの先行研究とは異なり、(名詞か副詞かといった) 統語的な振舞いからではなく、(不特定および特定) 数量詞の表す意味 (存在か属性か) に注目し、「存在数量詞」と「非存在数量詞」に分け、構文と意味の結びつきを指摘している。この区別について、岩田 (2013: 14) は、助数詞にも「人、匹、本」のように個体を分類するものと、「キロ、グラム、トン」のように連続体を区別するものがあり、こういった区別は多くの

研究で採用されている、として加藤の「存在数量詞」と「非存在数量詞」の区別をあげている(2.3.4参照)。このことから、不特定数量詞と特定数量詞の共通性が窺われる。

加藤(2003、2006a)をまとめると、「200g」という連続数量の場合は属性になり得るが、個体の数量の場合(「5台の車」)は「存在の様態」であって特性(属性)ではない、と記述していると思われる。そして、その理由は、「この2種類の数量詞の違いは、前者が連続的な量として表示するのに対し、後者が不連続な数として個別の存在個数を表しているところにある」としている(加藤2003:464)。

本研究の考察対象である「たくさん」と「多く」は、基本的に「個体の集合」と「連続体」の両方を表すことができる。他方、「大量」と「多量」は連続体、「多数」は基本的に「個体の集合」を表すと考えられる。しかしながら、個性が高いとされる「人間」を表す場合にも、日本語母語話者は「大勢」と「大量」、さらには「たくさん、多数、数多く、多く」などを使い分けている。

また、本研究の考察対象である「いっぱい」と「たっぷり」は、連体修飾用法では、先述のように、存在を表す場合は基本的に用いられないが、「いっぱいの客席」はたとえば「がら空きの客席」と分別される客席の種類(状態)を表すのであり、「たっぷりの熱湯」は、たとえば「ひたひたの熱湯」と分別される「熱湯」の種類を表すことから存在量というよりも「属性」を表す場合には用いることができる。このことから存在数量詞よりもむしろ非存在数量詞に近いと考えられる。つまり、本研究の考察対象である語にも特定数量詞同様、用法による意味の違いが認められ、特定数量詞との共通性が窺われる。

## 2.2.5 先行研究のまとめ

前節において、加藤(2003)は「数量を表す語(句)」を形式の上から「特定数量詞(数詞+助数詞)／不特定数量詞」に分けていた。さらに、意味の上から「存在数量詞／非存在数量詞」に分けていた。この「存在数量詞／非存在数量詞」の分類は連続的であり、典型的には「個体／連続体」に対応すると指摘していた。これは助数詞の区別に対応しているという指摘があった。

また、不特定数量詞の振舞いが統一的でなく、名詞性の高いものから副詞性の高いものまであること、さらに存在量を表すものと属性を表すものがあることを確認した。

一方で、数量詞と本研究の考察対象とする不特定数量詞の振舞いの共通性が認められた。これらの先行研究は大きく以下のようにまとめることができる。

- ①「特定数量詞」は「QのNC型(=名詞修飾型、連体修飾用法)」「NQC型(=添加型)」「NCQ型(=動詞修飾型、連用修飾用法、遊離数量詞構文)」になるが「量の副詞」は「NQC型」にはなれない。
- ②「名詞」であれ「副詞」であれ、NCQ型が基本である。

本研究の考察対象とする語は、(数量)名詞とされるものから、(量の)副詞とされるも

のまで先行研究によって、分類が異なっていた。李（2003:27）は、副詞に関する先行研究を整理・検討した上で、「プロトタイプに基づくカテゴリー化」理論（詳しくは第3章3.2参照）をとり入れ、以下のように主張している。

「副詞」というカテゴリーの成員は、その成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周近的なものがあったり、成員間で段階性がみられることになる。また、他の品詞との関係、つまり複数のカテゴリー間における境界は連続的かつ曖昧であるということをも認めることになる。（李 2003:27）

本研究の考察対象とする語も、李（2003）に従って、品詞間における境界は連続的かつ曖昧であり、それぞれの品詞の成員もプロトタイプから周近的なものまで段階性があると考える。

以上の考察から、本研究においては、品詞の決定には立ち入らず、連用修飾用法（=NCQ型、動詞修飾型、遊離数量詞構文）を基本とする副詞的成分として、文中に現れる名詞の数量限定を行う語で、添加型（=NQC型）では用いられにくいという共通の振舞いをする語であって、「の」を介しての連体修飾用法（=QのNC型、名詞修飾型）を持つもの、あるいは、動きの量を表すものも含む「不特定数量詞」として、これらの語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点について考察する。

ところで、上のすべての先行研究において、「数量詞（数詞+助数詞）」と「量の副詞」との振舞いの連続性、共通性が指摘されていた。特定か不特定かの違いはあっても両者は「数量を表す語」であり、基本的に連用修飾用法で用いられることも共通していた。

さて、日本語には助数詞が500以上もあると言われているが（飯田 2005:22）、これほど多くの助数詞が存在する理由と本研究の考察対象を含む助数詞以外の数量表現も非常に多く存在する理由の共通性を指摘したのは水口（2007、2009）である。助数詞を伴う特定数量詞と本研究の考察対象である不特定数量詞の存在理由の共通性について水口の主張を次節で見てみよう。なお、助数詞は名詞を類別することから類別詞とも呼ばれるが、本研究では引用の場合を除いて、基本的に助数詞という用語を用いる。

## 2.3 特定数量詞と不特定数量詞

### 2.3.1 「なぜ日本語には量化表現がたくさんあるのか」について

水口（2009:24）によれば、類別詞とは、「名詞の意味的分類を表す言語手段」であり、人間がどのように森羅万象を認識して、それをいかに言語表現に反映させているかを示しているもの、とされる。類別詞には多様な種類があるが（詳しくは水口 2004a、2009 など参照）、日本語は「学生が三やって来た」とは言えないように、類別詞が数量表現と義務的に現れることから「数量類別詞言語」である（水口 2009:26-27）。

水口（2007）は、日本語の助数詞の機能について以下のように説明している。

日本語は、数量類別詞を持つ言語である。名詞の数は必要がなければ単数・複数の指定をする必要がない。例えば「昨日学生が訪ねてきた」といっても、それだけでは訪ねてきた学生の数は分からない。必要がある場合には、「学生が一人」や「数人の学生」のように、名詞に先行あるいは後行する「数＋類別詞」によって数を指定する。類別詞言語の名詞自体は、「範疇」を表すだけと言われているが、類別詞には「個別化」に加えて「範疇化」の機能もある。「学生」は人間であるので、数える時も人間を数えている、ということを類別詞によって表さなければならない。この場合範疇が合致しなくても個別化する単位が違っていても不適切な表現となる。例えば「七匹の侍」という映画がかつてあったが、動物を数える「匹」で人間を数えることは基本的にできないのにもかかわらず、映画のタイトルとして有名になったのは、人間らしい扱いをされていない七人の侍の話、という含意があったからである。水口 (2007:156)

その上で水口は、以下のような例をあげて、量化接辞「全」に関しても、量化対象が集合全体であることを示すばかりではなく、集合がどのような範疇に類別されるかと、どのような単位で個別化されるかをあわせて示している、と述べている。

(19) 全員、全体、全部、全幅、全貌、全面、全容、全クラス、全集、全州、全館、全巻、全店、全紙、全校、全署、全省、全問、全国、全科、全課、全期、全戸、など

水口 (2007:156)

水口は、(19) は、「全」のつく量化表現 (=数や量を指定する表現を含む言語表現) のごく一部であるが、例えば「全員」といえば人間の集合であり、「全戸」なら家の集合が量化の対象であることを表している、と記述している。さらに、「全」は、「チーム」や「グループ」などの自由形態素、「部、紙、誌、校」などの数量類別詞、や「幅、貌、面、容」などの束縛形態素と共起することができる、と述べている。その上で、「類別詞言語では、数量化だけではなく量化する場合にも、個別化と範疇化をすると考えられ、したがって量化子の数が類別詞の数くらいあっても不思議ではない」と述べている (水口 2007:157)。つまり、助数詞以外の量化表現においても、独自の個別化と範疇化をするため、例えば「2」という同じ数量を個別化する場合にも「2 部、2 紙、2 誌、2 校」などと別々の類別詞が存在するように、同じような数量を表す量化表現の数が助数詞の数くらいあっても不思議ではない、と説明していると思われる。

その上で、水口は「なぜ日本語では同じような意味をもつ量化表現をたくさんもっているのか」(p. 143) という問いに対して、「日本語は類別詞言語であり、量化表現も、類別詞の機能である個別化と範疇化の機能を併せ持つことが、その数の多さの原因である」(p. 159) と記述している。「個別化」とはものを数や量に分割する機能であり、「範疇化」とはものをどのような範疇に分類するかという機能である (水口 2009:23)。



本研究は水口（2007、2009）に従い、助数詞を伴う（特定）数量詞のみならず、本研究の考察対象である不特定数量詞にも個別化と範疇化の機能があり、各語が異なる個別化と範疇化機能を持つために、冒頭で示したように数量が大であることを表す場合にも同じような意味を持った不特定数量詞が多種多様に存在すると考える。したがって、これらの独自の個別化と範疇化の機能を明らかにするのが本研究の目的となる。

そこで、多くの先行研究の積み重ねがある日本語の助数詞の研究を手掛かりに、本研究の考察対象とする語の範疇化と個別化を明らかにすることを試みる。本研究は日本語の助数詞の先行研究を手掛かりにすることから、まず、日本語の助数詞の基本的な機能である「範疇化」と「個別化」について水口（2004a、b、2009）の説明を概観する。

### 2.3.2 助数詞の機能：範疇化

範疇化は言語によって異なるが、日本語ではものを有生・無生に大きく二分し、有生は人間と動物に、無生は形状、機能に基づいて多数の類別詞に下位分類される。例えば、日本語では「匹」によって動物の上位範疇を表すが、「匹」の下位範疇には「頭（とう）、羽（わ）、杯（はい）、尾（び）」がある。この場合、名詞の意味素性が数量類別詞の意味範疇とマッチする場合のみ共起することができるのであり、例えば動物の範疇を示す「匹」を人間と用いてはならない。また、上位のデフォルトの類別詞は下位の細分化された類別詞のかわりに使うことができるが、逆は真ではない。例えば、無生のデフォルト類別詞「個」は、リングでも椅子でも数えることができるが、椅子を数える類別詞「脚」でリングまで数えることはできない。このように類別詞と共起できる名詞には厳しい意味制約がある。（水口 2009：24-25）。そして以下の図を示している。

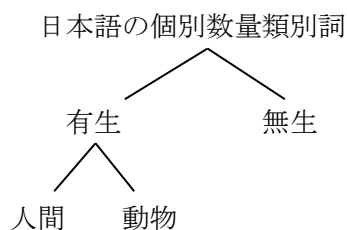


図1 （水口 2009：25）

水口の指摘どおり、助数詞と共起できる名詞には厳しい意味制約があると考えられる。たとえば、「スターを一目見ようと、大勢の人が会場につめかけた」（講談社 類語辞典 p.1428）という例文において「大勢」を「100人」とは置き換えできるが、「100匹」は許されない。ただし、先述の水口（2007:156）が述べているように、動物を数える「匹」で人間を数えることは基本的にできないのにもかかわらず、「7匹の侍」と言える。これは、「人間らしい扱いをされていない七人の侍の話、という含意があったからである」と説明されているように、「人間らしい扱いをされていない」と話し手が捉えれば、まぎれもない「人間」であっても「匹」で数えることが可能になる。つまり助数詞の範疇化は、対象自

体の特徴のみならず、「話し手が主体的に対象を捉えてゆく認知活動に基づいているもの」（篠原 1993 : 49）と考えることができる。このような対象の捉え方は、第1章で述べた認知言語学と同様の言語観に基づくものである。

本研究で考察対象とする語にも、範疇化が認められる。たとえば、「大勢」は人間専用の表現であることから、有生・無生、さらには人間・動物の区別が認められると言える。

井上（2003 : 268）は、「日本語の類別詞は、人間に使われるもの（「人」「名」「方」）、人間以外の生物に使われるもの（「匹」「羽」「頭」）、無生物に使われるもの（「つ」「個」「本」「枚」「粒」「台」「冊」など）の3つに大きく分類され、通常の用法ではその区別を超えて用いられる類別詞はない（例えば、細長くても、生きているへびには「本」を使えない）。無生物の領域では、＜ゼロ次元的＞な「粒」、＜一次元的＞な「本」、＜二次元的＞な「枚」がある（「個」は＜三次元的＞と考えられるかもしれない）」と述べている。

無生物の範疇を表す個別類別詞について、水口（2004b : 70）は、飯田（1999）を引用して以下のように述べている。

非形状的・機能的な範疇を表す個別類別詞は、たいへん数が多く、飯田（1999）では、図2のように「具体」と「抽象」にさらに分類している。前者には機械類などを表す「台」、大型の機械・施設を表す「基」、車両を表す「輛・両」、船を表す「隻、艇、艘」、飛行機を示す「機」、道具を数える「丁・艇」、建造物を表す「軒、棟、戸」などがある。後者のイベントを数える類別詞には「回、度、発、件、便、服」などがあり、下位範疇は数が非常に多い。

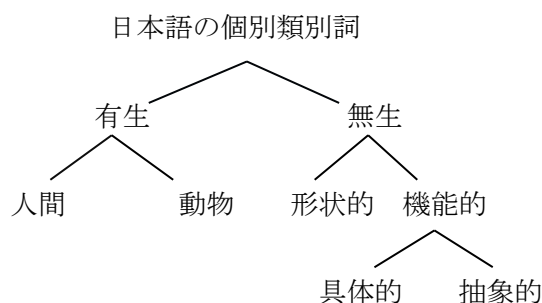


図2 飯田（1999）の日本語の個別類別詞の範疇化（水口 2004b : 70）

本研究の考察対象とする語においては、人間に使われるものは、一語（「大勢」）のみであり、人間以外の生物専用に使われるものは認められない。また、イベントを数えることができるものとしては「多く、たくさん、数多く、多数」がある。形状的・機能的な区別は認められない。無生物のみに使われるものは、「多量」があると思われる。ところが、「大勢」を「多く、多数、たくさん」、あるいは「大量、数多く、いっぱい」とも置き換えることも可能である。これらの事実から、本研究の考察対象とする語の範疇化は助数詞の範疇化よりも制限がゆるいことが予想される。また、私たちは同じ対象を異なる捉え方で範疇化、個別化していることが分かる。

### 2.3.3 助数詞の機能：個別化

水口（2009：26-27）は、「数量類別詞言語で数量を指定するには数量だけでは不十分で、可算、不可算を問わず、類別詞が義務的に付与されなければならない。例えば、『学生が三人やって来た。』という文で類別詞『人』を省略することはできない。類別詞は数に関して中立的な日本語の裸名詞の数を指定することで名詞を『個別化』している」と述べている。

ただし、どのような名詞も同じように個別化するわけではなく、名詞はそれぞれ、その最小単位が認知的に決まっており、名詞をどのような最小単位に個別化するかによって、類別詞を三種類に分類し、最小単位として個体を個別化する類別詞を「個別類別詞」、個体が集まったグループが最小単位を形成していることを示す類別詞を「集合類別詞」、量を測る類別詞を「計量類別詞」と呼び、以下のように提示している。

#### (20) 日本語の類別詞の三分類（水口 2009：27）

- a. 個別類別詞（人、匹、本、枚、粒、台、丁、個、つ、など）
- b. 集合類別詞（対、足、束、輪、山、セット、グループ、列、チーム、など）
- c. 計量類別詞（杯、匙、袋、切れ、抱え、包み、キロ、グラム、リットル、など）

その上で水口（2009：27）は、上の区別は実は絶対的なものではなく、何を「最小の単位」と見なすか、という認識は認知的なものであり、場面によって変化するものである、と述べている。つまり、個別化とは、(20) の a「個別類別詞」、b「集合類別詞」、c「計量類別詞」の区別であることが分かる。

水口は、例えば、「紙」でもいろいろな数え方があり、「枚」は一枚一枚、紙を個別に数える時に用い、「束」や「パック」はコピー用紙のように複数の紙をまとめたものを数える時に用い、パックがいくつか集まって箱に入っている時は「箱」を用いる。業務用の印刷紙などはトン単位で数えることも稀ではない、と述べ、例えば、「トン」と共起する「紙」は個体として「最小単位」を個別化していないので不可算名詞になるが、「枚、束、パック、箱、梱」と使われる場合は、それぞれ最小単位を認識しているので、紙は可算名詞ということになる（水口 2004：65）、と述べている。つまり「数える最小単位」は一定ではなく、「これはとりも直さず名詞の意味的な性質も変わる」ということであり、ある場面における認識の仕方を表しているのが数量類別詞なのである」と述べている（2009：27 下線は引用者）。その上で、（この「可算」と「不可算」のように）名詞の性質が数的に変わる、という性質は、「何も日本語や数量類別詞に限られたことではなく、（中略）英語のような数を形態的に義務的に表す印欧語にも、普通に観察されることである」（水口 2004：65）と述べて、以下の例をあげて説明している。

#### (21) an apple/two boxes of apples/three grams of apple/much apple

(21)においては、apple（りんご）は、「最小単位」が個体のりんごや、箱である場合に

は、数が指定され可算名詞として使われるが、量で計る場合には最小単位は考慮されないので、数が指定されることなく不可算名詞として使われている。(水口 2004b: 65-66)

つまり、可算名詞として用いられる apple は、特徴的な輪郭、境界線を保った丸のままの「りんご」を指しているが、不可算名詞として用いられる時は、りんごらしい境界がなくなつて「物質」となっていることを意味する。すなわち、切り刻まれたり、すりおろされた「りんごの果肉」を指す(野村 2005: 15)。このように「意味的な性質が(数的に)変わる」ということを、「紙」を「枚」(個別類別詞)で数える場合と「トン」(計量類別詞)で数える場合でもう一度考えると、「枚」で数える場合は個別性の高い個々の「紙」に注目しているのであり、それ自体で境界を持ち、1、2・・・と数えることができる。すなわち個体として捉えていることが分かる。これに対して、「トン」で数える場合は紙の1枚1枚には注目せず、それ自体では境界を持たないものとして、言い換えれば、連続体として捉えらる。

つまり、水口は「認識は認知的なものであり、場面によって変化するものである」と説明しているが、言い換えれば、個別化の仕方(個別類別詞「枚」で数えるか計量類別詞「トン」で測るか)は、人間の使用上の目的など私たちと「紙」との接し方によるものである。つまり、あくまで、「人間が対象といかに接し、概念化してゆくか、その対象と我々人間とのかかわり方のあらわれである」(篠原 1993:44)と考えることができる。このように個別化の仕方は、まさに、人間と対象との相互作用の経験を通して形成されるものであると考えられる。

また、個別化の仕方が異なれば「紙」という同じ対象についても「個体」として捉えるか「連続体」として捉えるかといった「意味的な性質」が異なつて認識されるということは、すなわち「個別化」の仕方と「範疇化」とは直接結びついていると考えることができる。このことと、上の「学生が三人やって来た」において数詞「三」と助数詞「人」のどちらか一方を省略することはできず、形態的に義務的に表すこととは類像性が認められる<sup>6</sup>。

なお、水口(2004a:19)は、「水」や「砂」のような不可算名詞は、「2杯」や「3リットル」のように量に分けられることが普通であることから、その意味では「個別化」ではなく「部分化」というのが正確であろうと述べている。「個別化」であれ「部分化」であれ、日本語の類別詞は、数に関して中立的な日本語の裸名詞を、「個別化」して数える対象とする機能がある(水口 2004b: 64)ということが確認できる。

さらに、水口(2004a:18)は「個別化とは逆に、『種』を表す場合には、数量詞言語では名詞を個別化せず、裸で使う」と述べている。例えば、日本語で、「学生」というと「学生一般」をさしているのか、「個別の学生」をさしているのか、文脈を見ないと名詞だけでは判断できない。これに対して、「学生が三人」や「五組のカップル」というと、個別の読み

<sup>6</sup> 類像性とは、言語構造と意味の間の何らかの対応、類似性を指す言葉であり、認知言語学の根底的な考え方である(森・高橋(編) 2013: 138)。

しかできない。すなわち、数量類別詞は数量表現と共起することによって、名詞を個別化していることになる（水口 2004:18）が、「種」を表す総称用法では、個別化を行わないのである。ただし、「多く」は「種」を表す総称用法に用いることができる（第9章参照）。

#### 2.3.4 「個体／連続体」と「可算／不可算」、「有界／非有界」

前節で見たように、日本語の類別詞の分類に「可算」と「不可算」という概念が大きく関わっている。そこで本節では「可算／不可算」、「個体／連続体」、「有界／非有界」について先行研究の説明をまとめる。

池上（1983）は、「<個体>と<連続体>という対立は、言語表現のレベルでは、いわゆる『可算(countable)名詞』と『不可算(uncountable)名詞』という文法範疇の対立として現れる。『可算名詞』は『不可算名詞』に対して、語形上、『単数』と『複数』の区別を有すると言う点で特徴づけられる」と述べている（pp. 244-245）。さらに同書は、「日本語には文法的なレベルの問題となるような形での『単数』と『複数』の区別はないし、『可算(名詞)』と『不可算(名詞)』という区別も個々の場合の意味的な条件によって規定されるという形を除いては特に問題にならない。言い換えれば、<個体>、<個体の集合>、<連続体>のどれとして捉えるかという区別は言語表現の際の義務的な選択としては課せられないわけである」（p. 247）と記述している。たとえば、池上は「岩にしみいる蟬の声」における「蟬」も「英訳では単数にしているものも複数にしているものもある」とし「日本語では単数と複数の区別がなされない」としている（p. 247）。

また、井上（2003）は「英語の water のような不可算名詞は<物質>を表すものであり、それぞれを取り分けて分量を示すのには a piece of のような分量語彙が必要となる。類別詞をもつ言語は、いわばすべての名詞がこのような名詞であるため、類別詞が幅広く必要になる」（p. 267）とし、「カテゴリー化のプロセスを代表する類別詞は、認知言語学にとっても非常に示唆に富む研究対象である」と記述している（p. 270）。

岩田（2007:17）は、Langacker（1987）を引用しながら、英語の名詞の可算・不可算の区別は名詞の有界性に関わるとし、可算名詞は‘bounded region’を表し、不可算名詞は‘unbounded region’を表すと記述している。

さらに、岩田（2007:16）は、上の水口の分類（20）は「計量類別詞」に「杯、匙のように、対象を個体化して‘数える’タイプの助数詞と、キロ、グラムのように対象の量を‘測る’タイプの助数詞が同じものとして扱われている」とし集合類別詞と計量類別詞の中の「杯、匙のように、対象を個体化して‘数える’タイプの助数詞」を除外し、助数詞を大きく次の2つに分ける。

(22)分類類別詞：人、匹、本、枚、粒、台、丁、個、つ、など

測定類別詞：キロ、グラム、トン、など

この2分類について岩田は、「人、本、台などのように個体の数を数えるときに用いるものと、メートル、グラムのように単位として連続体の量を測るものである。分類類別詞は個体の‘数を数える’ものであり、測定類別詞は連続体の‘量を測る’ものである」としている。

以上、本節の用語をまとめると、個体・連続体という区別は有界・非有界を表し、英語の名詞のように数の区別があるものは可算名詞・不可算名詞という文法範疇として現れる（可算名詞の場合、単数・複数の区別がある）。名詞に可算・不可算の区別がない日本語においては、裸で現れるときは、数に関しては中立である（＝個別化を行わない）が、数量表現を伴う場合、類別詞がこれらの区別を行う。すなわち、分類類別詞は個体名詞と共起し、測定類別詞は連続体名詞と共起し、それぞれ「個体」、「連続体」の数量を表す。不可算名詞は、一般に個体ではなく物質を表すので物質名詞と呼ばれることもある。

なお、「apple」や「紙」の例からも分かるように、ものにおける可算・不可算（個体・連続体）の区別は有界性の違いによるものであるが、絶対的に決められるものではない。篠原（1993：45）は（英語における）「名詞の可算・不可算としてのカテゴリー化は（もちろん、知覚上、影響は受けるものの）対象の物理的サイズや客観的な個体の顕在性のみによってあらかじめ決定付けられているものではなく、あくまで、人間が対象といかに接し、概念化してゆくか、その対象と我々人間とのかかわり方のあらわれである」と記述している。このような対象の捉え方は、先述の通り、認知言語学と同様の言語観に基づくものであると言えよう（詳しくは第5章参照）。

### 2.3.5 特定数量詞と不特定数量詞の違い

先述のように、日本語は数や量を指定する表現を含む言語表現（量化子）が大変多いとされるが、水口（2007：159）は、助数詞以外の数量表現も助数詞の機能である個別化と範疇化の機能を併せ持つことがその原因であると指摘している。この記述から本研究で考察する語と数量詞、あるいは助数詞の機能は共通性が大きいと思われる。そこで本節では、分析に入る前に、助数詞の果たす役割について、先行研究ではどのように記述されているかをまとめてみる。

まず、飯田（2005：54）は、「助数詞」は「その言語の話し手がどのように数えるものを捉えているのか、どの特徴に注目して数えているのかをはっきりと映し出してくれます。と同時に、その言語を使う人々の文化や習慣をも映し出してくれる、まさに、“鏡”の機能を持つのです」（p. 54）と記述して「捉え方」に注目している。たとえば「匹」と「人」の使い分けについて、おとぎ話や民話に出てくるオニを数える場合、絵本「桃太郎」の前半では、オニは、退治すべき迷惑な存在、人間に危害を加える可能性がある悪者として描かれ、獣と同じだと恐れられているため「匹」で数える。ところが、桃太郎がオニ退治をしてオニ達が心を入れ替えて人間と仲良くなるととたんに、「人」で数えるようになる。このことから飯田は、オニの数え方は人間がどのようにオニを捉えているのかをはっきり映し出

す、と述べ、人間に友好的な存在なら「人」、そうでなければ「匹」で数えるルールがある、と説明している（飯田 2005 : 87）。

井上（1999）は①「数える対象物の分類化」②「切り取る機能」とともに③「代名詞としての役割」をあげている。①と②は、それぞれ水口の「範疇化」、「個別化」と対応すると思われる。さらに、④「話し手や書き手の視点、態度、創造性が盛り込まれた類別詞の、コミュニケーションに果たす役割があげられる」としている。例として、井上（1999 : 32）は「匹」と「頭」について、昆虫（オオクワガタ）を「頭」で数えるのはその道の専門家たちの間では一般的であることから、「特定の類別詞の選択が、話し手の職業や趣味といった経験を通して獲得された知識を反映するという事実も、類別詞の持つ重要な機能の一つとして注目すべき点である。つまり、どの類別詞を用いるかによってコミュニケーションにおけるレジスターが生まれるということである」と記述している。その上で「このような類別詞の機能は、モダリティの特徴を表わしている」と記述している。すなわち、「命題」にあたる客観的情報が「名詞」あるいは「数詞」として文法化されているとすると、「モダリティ」、つまり主観性の文法化されたものとしての「類別詞」が付随することにより、主体の側に関わる事柄（オオクワガタへの態度、判断など）を表わす形式が成り立っていることになる、と述べている（井上 1999 : 32）。

李（2010）は、助数詞の分析にあたり視点と話し手の主観性に注目する。たとえばペットとして犬や猫を飼っている人の中には、動物であるにもかかわらず「匹」ではなく、「人」で数える場合があることから、数える対象自体が持つ外的属性、たとえば「自然物である」、「人間ではない」、「小動物である」といった特徴のみでは予測できないものがあり、話し手がどのような視点で対象を捉えているのかを明らかにする必要があると述べている（李 2010 : 49-50）。つまり、上の井上の「モダリティの特徴」を李（2010）は「視点」と捉えていると言える。

岩田（2013）は、井上（1999）が指摘している「代名詞としての役割」について、Downing（1986）が先行文脈に既出のものを数量詞が追跡するという照応表現であることを指摘していることに加えて、現場の参加者を追跡する直示表現についても指摘している。前者は「父は二人に逢おうとはしなかった」のような例における「二人」の機能であり、後者は（女性→聞き手二人への発話）「待って！！」「二人には言わなかったけど（略）」のような例である。岩田（2013 : 127）は数量詞の「代名詞用法」について、「先行文脈に既出である、または現場に参加している指示物を数量詞が追跡する用法で、数量詞を、代名詞もしくは指示物そのものを表す名詞に置き換えることが可能なもの」と定義している。

(23) 五人のキャンプは労働力が多いから楽だ。 一人が何か一つのことをやればいい。

（岩田 2013 : 127）

(24) …、兵庫県警は、同県明石市内の市立中学3年の男子生徒（15）を殺人未遂容疑で逮捕し、女子生徒も共犯として逮捕したと15日、発表した。2人は同じ中学の生徒で、

上の定義によれば、(23) は全く指示物がなく、数量詞が何かの代わりに用いられているわけではないから代名詞用法ではない。「五人の人間で行なう」というような意味であり、「五人」が誰なのかは決められなくてもかまわない。一方、(24) では、先行する指示物（‘男子生徒’ ‘女子生徒’）を追跡する照応表現として使われている。このため (24) は数量詞の代名詞的用法である、と岩田は説明している（pp. 127-129）。

(23) の「五人」に、本研究で考察対象とする語を入れてみると、「大勢」のみが置き換え可能であると思われるが、「大勢のキャンプ」は「大勢の人間で行なう」というような意味であり、「五人のキャンプ」同様、代名詞用法に当てはまらない。このことから、本研究の考察対象とする語は「代名詞用法」では用いられにくいと言える。

以上、先行研究において、助数詞の機能として「範疇化」「個別化」があり、そこには対象自体の持つ属性のみならず「話し手の視点、主観性」が関わることを指摘されていることを確認した。同じ対象を異なる捉え方で主体的に範疇化、個別化できることを確認した。助数詞には「代名詞的用法」があるが、本研究で考察対象とする語には「代名詞的用法」は認められないと思われることを述べた。また、本研究で考察対象とする語の範疇化は助数詞の範疇化よりも制限がゆるいことが窺われることを述べた。

#### 2.4 第2章のまとめ：考察対象とする語の位置付け

先述のように、水口（2007、2009）は、助数詞以外の数量表現も類別詞の機能である個別化と範疇化の機能を併せ持つことを指摘している。しかしながら、個別の数量表現における個別化と範疇化の機能について詳しく分析するには至っていない。また、助数詞の機能についての先行研究の記述から、助数詞の使用には主体の捉え方が大きく関わり、捉え方は対象と人間との相互作用や経験が重要な役割を果たすことが記述されていた。

そこで本研究は、経験基盤主義をとる認知言語学のアプローチに依拠し、〈数量大〉を表す数量表現の範疇化と個別化の機能を体系的に記述し、その使用は数える名詞の指示対象の客観的な性質のみならず、話し手による主体的な捉え方に大きく関わっていることを論じる。以上の考察から、本研究で考察対象とする語を以下のように位置付ける。

##### 考察対象とする語の位置付け：

1. 「に」や「と」を伴って、あるいは、単独で動詞を修飾する位置に生じ、文中に現れる名詞の数量が大であることを表す不特定数量詞である。
2. 名詞を範疇化し、個別化する機能を持つ。
3. 「の」を介しての連体修飾用法において名詞の数量や属性を表したり、連用修飾用法において動きの量を表すことができるものも含まれる。



## 第3章 理論的背景

### 3.1 本章の目的

第2章において、本研究で考察対象とする語を、特定の品詞で論じることが難しいことを確認し、「数量を表す表現」の下位分類である「不特定数量詞」として位置付けた。また、多くの先行研究のある数量詞（数詞+助数詞）の意味機能の分析において、認知言語学のアプローチが有効であることを見た。

そこで、第3章では、考察対象とする語のより詳細な意味分析を行う前提として、本研究の理論的基盤である認知言語学の基本的概念について確認する。さらに、本研究が取り組む意味分析の課題方法について述べる。以下、本章の構成について述べる。

まず、3.2では、プロトタイプに基づくカテゴリー化について述べる。3.3ではプロトタイプ・カテゴリーとしての多義語について述べ、多義語分析の課題を述べる。3.4では意味の転用・拡張のしくみとしての、メタファー、シネクドキー、メトニミーという三種の比喩について述べる。3.5では、概念に基盤を与えるイメージスキーマについて述べる。3.6はまとめを行う。

### 3.2 カテゴリー化

靱山（2010：18-21）は「カテゴリー化(categorization)」を「さまざまなモノやコトを、必要に応じて何らかかの観点から整理・分類する（＝まとめるべきものはまとめ、区別すべきものは区別する）こと」と定義し、カテゴリー化の結果作り出されたまとまりの1つ1つを、「カテゴリー (category)」と定義している。そして、カテゴリー化の2つの方法とその認知的基盤について靱山（2010：18-25）は以下のように説明している。以下は要約である。

#### ①必要十分条件に基づくカテゴリー化

「4、10、58、726」などの一群の数を「偶数」と言うが、「2で割り切れる整数」と規定できる。この規定は偶数の必要十分条件であり、この条件を満たす数であれば必ず偶数というカテゴリーに属し、この条件を満たさない数は偶数ではないことから、必要十分条件に基づくカテゴリーは、あるものがカテゴリーに属するか否かが明確であって（つまり、カテゴリーの境界が明確であって）、しかも、カテゴリーのメンバーは同じ資格でそのカテゴリーに所属している。

#### ②プロトタイプに基づくカテゴリー化

「偶数」というカテゴリーとは対照的に、ある書き物を見て、「論文」というカテゴリーには、「論文」と言うべきか、むしろ「報告」と言うべきかと迷う場合がある。一方、迷わず「論文」と見なせるもの、だれもが「論文」と認めるもの（いわば、論文らしい

論文)が存在する。それは、「学術的な研究に値するテーマを取り上げている」「独自の明示的な仮説が提示されている」「仮説が適切に検証されている」といった条件を満たすものである。このようなあるカテゴリーの典型的なメンバー、あるいは典型的なメンバーが満たす条件・特性の集合をプロトタイプと言う。また、プロトタイプに基づき形成されたカテゴリーを「プロトタイプ・カテゴリー」と言う。プロトタイプ・カテゴリーは、必要十分条件に基づくカテゴリーとは異なり、メンバーによって典型性の程度に差がある(=優劣が存在する)とともに、カテゴリーの境界が明確ではない。

また、カテゴリーの中には、境界は明確であるが、メンバーによって典型性の程度に差がある、つまり、プロトタイプ的なメンバーとそうでないメンバーが存在するというものもある。たとえば、私たちには「鳥」は境界が明確なカテゴリーではあるが、「鳥」と聞いてすぐ頭に浮かぶのは「ハト」「スズメ」などであり、「ダチョウ」「ペンギン」などは浮かびにくい。つまり、前者はプロトタイプ的な鳥であり後者はそうでないということであるが、この場合、特に、「飛ぶことができる」という特徴がプロトタイプか否かを区別するものだと考えられる。このような「鳥」に関するプロトタイプ的知識は、「生まれ変わったら鳥になりたい」という文における「鳥」の理解の基盤となっている。つまり、すべての鳥が空を飛べるわけではないが、プロトタイプ的な鳥は空を飛べるという知識が、このような理解を支えている。(靱山 2010: 18-25 より要約)

ここで、第 2 章で見た水口の「範疇化」の説明をもう一度見てみよう(2.3.2)。助数詞は名詞を必要に応じて何らかの観点から整理・分類することから「範疇化」は「カテゴリー化」と同じ意味で用いられていると考えられる。さまざまな事物を数える日本語の類別詞を一つの大きなカテゴリーとみると、そこでは、有生・無生に大きく 2 分されている。また、有生のカテゴリーは人間と動物に下位分類されている。ここまでを見ると、①の必要十分条件に基づくカテゴリーであるように見える。

しかし、たとえば、「人(ニン)」で数えるカテゴリーを詳しく見ると、そうとは言えないことが分かる。「ニン」で数えるカテゴリーは「人間」から「オニ」まで属することを見た。逆に、人間であっても「7 匹の侍」のように「匹」で数える例も見た。つまり、「人」あるいは「匹」で数える対象のメンバーは、典型的なものから、周辺的なものまで典型性に程度差があり、境界が明確ではないことから、プロトタイプに基づくカテゴリーであることが分かる。

またそのカテゴリー化の動機付けについて、たとえば「オニが人間にとってどういう存在なのかによって数え方が違ってくるのです」(飯田 2005: 86)と記述されているように、対象(オニ)自体の特徴というよりもむしろ、対象との相互作用による身体的な経験がオニを数える認知主体の類別詞の使用を動機付けているのである。

本研究では、以上に述べた「プロトタイプに基づくカテゴリー化」という立場に立ち、本研究の考察対象である数量大を表す不特定数量詞 10 語の個別の意味と相互の意味の類似

点・相違点について考察していく。

### 3.3 多義語分析の課題

本研究で考察対象とする語には複数の意味を持つ多義語<sup>7</sup>が含まれる。国広（1997：174）は「国語辞典の記述で最も大きな問題は、多義語項目の記述をめぐる諸問題である」と述べ「多義的意味の分析、意味相互間の関係付けの問題がある」と指摘している。また、このような問題が生じる理由として「多義語の研究がほとんど進んでいないことがあると言えよう」と指摘している。

靱山（2002）は多義語分析の課題として、少なくとも以下の三つが考えられると述べている。

- (1) 複数の意味の認定
- (2) プロトタイプの意味の認定
- (3) 複数の意味の相互関係の明示

その上で、靱山（2002：101-102）は上記の課題の必然性と理論的背景について以下のように説明している。

まず、(1)の課題は、多義語の定義から必然的に導かれるものである。つまり、多義語は（相互に関連する）複数の意味を持つため、多義語（と想定されるもの）の意味を記述するにあたり、複数の意味が存在することを示すことが前提となる。

(2)の課題は、認知言語学において広く認められるプロトタイプに基づくカテゴリー化理論（3.2参照）に基づくものである。つまり、多義語の複数の意味全体を一つのカテゴリーと考えた場合、そのカテゴリーを構成する個々の要素、つまり個々の意味は、すべて同等の重要性を持つのではなく、何らかの意味で優劣があるということを前提とするものである。このような前提に基づき、複数の意味のなかで最も基本的であり、慣習化の程度が高く、想起しやすいといった特徴を備えたものをプロトタイプの意味と認定することになる。

(3)の課題は、多義語の定義から必然的に導かれる。つまり、多義語の複数の意味には相互に何らかの関連が認められるものであるから、個々の多義語の分析にあたり、その関連の実態を明らかにすることが課題となる。

以上の課題に加え、靱山（2002）は、さらに、多義語の実際の分析を通して、複数の意味の間には一般にどのような種類の関連が認められるかということも重要な課題である、と述べ、意味転用・拡張を生じさせる比喻の重要な下位類としてメタファー（隠喩）、シネクドキー（提喩）、メトニミー（換喩）という三種の比喻が認められ、さらには、比喻

---

<sup>7</sup> 「多義語」(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う（国広1982：97）。

によって生じた新しい意味が定着した場合に多義語が生じるということからすれば、必然的にこの三種の比喩が多義語の複数の意味を関連付ける重要なメカニズムであることになる、と述べている (pp. 101-102)。

### 3.4 比喩の定義とスキーマ

本研究は、靱山で指摘されている三つの課題達成を目指して意味分析に取り組むことにする。(2)のプロトタイプの意味の認定としては「複数の意味のなかで最も基本的であり、慣習化の程度が高く、想起しやすいといった特徴を備えたもの」をプロトタイプの意味と認定することにする。本研究は、多義派生の動機には、メタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喩が関わっていると考え、(3)の多義的別義の関連性について、この3つの比喩による説明を試みる。なお、比喩、メタファー、シネクドキー、メトニミーの定義については、靱山(2009)は、以下のように述べている。本研究はこの定義に従う。

- \*比喩とは、ある言葉(=語・句・文)を本来の意味とは異なる意味に用いることである。比喩の下位分類として、メタファー、シネクドキー、メトニミーがある。
- \*メタファーとは、2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、本来は一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩のことである。メタファーは、比較するという認知能力を基盤とする。
- \*シネクドキーとは、本来はより一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆に、本来はより特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩のことである。シネクドキーは、同一の対象を異なるレベル・異なる精密さで捉えるという認知能力を基盤とする。
- \*メトニミーとは、2つの事物の外界における隣接性、あるいは、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、本来一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩のことである。メトニミーは参照点能力という認知能力を基盤とする。参照点能力とは、私たちが、ある対象(=目標)を把握あるいは指示する際に、その対象を直接捉えるのが難しい場合、別のより把握しやすいもの(=参照点)を経由して、目標の対象を捉えるという認知能力のことである。

(靱山 2009: 33-34)

また、靱山(2002: 112)は、ラネカーの一連の研究(Langacker 1987、1988a、1988b)に基づく概念である「スキーマ」という概念を導入することにより、複数の意味の関係をさらに明確に表せるとしている。ラネカーは、多義語を扱うモデルとしてネットワーク・モデル(network model)を提案している。以下、ネットワーク・モデルについて、『新編認知言語学キーワード事典』(2013: 288)から説明を引用する。

複合カテゴリーは、複数の成員から構成され、その成員が互いに密接に関連づけられた、ネットワーク状の内部構造を形成している。認知文法では、精緻化と拡張というカテゴリー化関係によって節点がリンクされるような構造をもつ、カテゴリー化のモデルを「ネットワーク・モデル」と呼ぶ。

図1はプロトタイプ、拡張事例、スキーマという3つの節点のみからなる最小のネットワークを表している。ネットワークには、認知的際立ち度が高く、カテゴリーの中核として機能するプロトタイプが存在する。このプロトタイプと、拡張（図の破線矢印）というカテゴリー化関係によって結びつけられているのが拡張事例である。拡張事例はプロトタイプと異なる性質を持ち合わせているけれども、それと同じカテゴリーに属すると認識されるのに十分な類似点も備えている事例である。さらに、プロトタイプと拡張事例の共通点のみを抽出し、概略化して表すスキーマも存在する。逆に表現すると、スキーマを精緻化（図の実線矢印）するものがプロトタイプと拡張事例である。

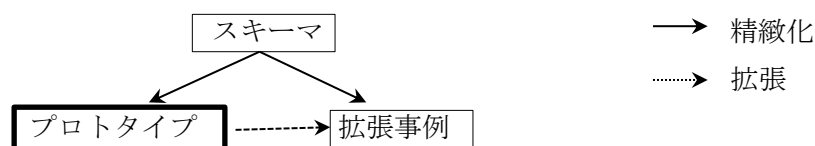


図1 ネットワーク（熊代 2013 : 288）

上のネットワーク・モデルと先述の「メタファー、シネクドキー」の関係については靱山（2001）に詳しい説明がある。以下、靱山（2001 : 37-38）の説明を引用する。

ネットワーク・モデルでは、ネットワークにおける各々の節点が語の確立した意味を表し、節点は、「スキーマ関係」（schematicity/実線の矢印によって示される）と「拡張関係」（extention/破線の矢印によって示される）という2つの基本的なタイプの「カテゴリー化関係」（categorizing relationships）によって関連付けられる。

スキーマ関係は、[A]、[B]をそれぞれ多義語の確立した意味とした場合、[[A]→[B]]と表示され、この表示は、[A]が[B]に対してスキーマ的であり、[B]は[A]の詳細化されたもの（elaboration）あるいは具体化されたもの（instantiation）であることを表す。つまり、[B]は[A]と矛盾しないが、[B]の意味記述は[A]の意味記述よりも詳細であることになる。従って、この関係は意味上の「特殊化」（specialization）あるいはその逆の「抽象化」（abstraction）の関係である。

以上のラネカーによるスキーマ関係に対する説明から、スキーマ関係が、（中略）比喩の下位分類であるシネクドキーに相当することは明らかである。例えば、（中略）「花」という語の「植物が咲かせる美しく一目を引くもの」という意味と「サクラ」という意味は、ラネカーのネットワーク・モデルにおいてはスキーマ関係にあり、意味上の「特

殊化」が起こっていると考えられる。また、「下駄箱」の「下駄」の〈下駄〉という意味と〈履物一般〉という意味も同様にスキーマ関係にあるが、「花」の場合とは逆に、意味上の「抽象化」が起こっていることになる。

続いて、カテゴリー化関係のもう 1 つのタイプである拡張関係について見る。拡張関係は[[A] ……▶[B]]と表示されるが、拡張された意味[B]に達するには、(基本的)意味[A]のある意味特徴が保留あるいは変更されねばならない。つまり、拡張関係は意味における何らかの不一致を含むことになる。

以上のラネカーによる拡張関係に対する説明から、拡張関係が、(中略)メタファーに相当することが理解できると思われる。つまり[A]と[B]という 2 つの意味が部分的に食い違う面があるということは、2 つの意味がまったく共通点がないのでもなく、まったく同一でもないということであり、つまりは「類似」しているということである。(中略)メタファーの例として、「花」の〈植物が咲かせる美しく人目を引くもの〉と〈美しく人目を引く人〉という 2 つの意味の類似性に基づき、後者の意味が成り立っているということを見たが、この 2 つの意味は、類似しているのであり、まったく異なるのでも、まったく同一でもないということである。(靱山 2001:37-38)

なお、ネットワーク・モデルにおいては、スキーマが関与するメタファーとシネクドキーは取り込めるが、それだけでは不十分であるとして、これにメトニミーを加えることによって「多義の実相 (=多義の共時的な記述)」(瀬戸 2007:42)をよりよく反映できると考え、3種類の比喩をそれぞれ独立した意味拡張のパターンであると位置付け、3種類の比喩に基づくネットワークにより多義を分析しようという考え方は、靱山(2001)、瀬戸(2007)、松本(2010)などにおいて共通している。

### 3.5 概念に基盤を与えるイメージスキーマ

本節では、「認知言語学の研究の中心的な概念である」とされる(山梨 2009:93)イメージスキーマについて概観する。冒頭で見たように、言葉には、環境に働きかけ、環境と共振しながら世界を解釈していく主体の感性的な要因や身体性にかかわる要因(五感、運動感覚、視点の投影、イメージの形成等)がさまざまな形で反映されている。イメージスキーマは「概念構造に先行する認知の図式の種類であり、言葉の創造的側面に密接にかかわっている」(山梨 2009:94)とされる。

靱山(2010:77)は、「イメージスキーマとは、人間が、身体を通して世界と相互作用をする中で、一般化、抽象化した形で抽出することができる(認知)図式のことである」と記述している。

たとえば、イメージスキーマの 1 つである「容器のイメージスキーマ」の形成について、靱山(2014:15-16)は以下のように説明している。

私たちは、生命を維持するための基本的な営みとして、空気を吸い込み、吐き出す、また、食べ物を摂取するとともに排泄するといったことをする。このような身体的な経験を通して、私たちは自分の体を「容器」として理解するようになる。また、私たちは、建物の中に入る、建物の中にいる、建物から外に出るといった日常的な経験を通して、「建物」などを「容器」とみなすとともに、自分自身を「容器の内容物」になりえるものとして理解する。以上のような経験を通して、私たちは、「内部」、「外部」、両者を区別する「境界」を構成要素とする「容器」のイメージスキーマを形成するに至る。

(靱山 2014 : 15-16)

さらに、靱山 (2010) は「イメージスキーマが概念に基盤を与え、その概念の一部が言語表現の意味に反映していると考えられる」と述べている (p. 78)。

イメージスキーマに基づく概念構造の拡張のプロセスとして、山梨 (2009 : 94) は、「イメージスキーマの比喩的な写像による拡張」と「イメージスキーマのブリーチング (意味の漂白化) による拡張」があると述べている。前者の典型例としてとして、容器のイメージスキーマの物理的空間から社会的、心理的空間への比喩的な拡張が考えられるとして、以下の例をあげて説明している。

- (1) a. 彼は寝室に入った。〈物理的空間〉
- b. 彼は新しいクラブに入った。〈社会的空間〉
- c. 彼は躁状態に入った。〈心理的空間〉

(1) の a の「寝室」は、物理的空間に基づく容器として理解される。これに対し、b の「新しいクラブ」は、社会的な空間に基づく容器に、また c の「躁状態」は、心理的空間に基づく容器のイメージスキーマに比喩的に拡張されている。

山梨 (2009 : 94-95)

他方、「イメージスキーマのブリーチング (意味の漂白化) による拡張」の例として、以下の例をあげて説明している (山梨 2000 : 142-143)。

- (2) a. 穴から蛇が出てきた。
- b. (X から) いい色が出てきた。
- c. {月が／霧が} 出てきた。

この場合には、容器のイメージスキーマが、前景化されて意識されているか、背景化され意識されなくなるかが問題になる。(2) の a の場合には、「穴から」という表現から明らかなように、問題の蛇がどこから出てきたかの出所 (すなわち、穴という容器としての出所) が前景化されている。これにたいし、(2) の a から b の例にいくにしたがって、出所としての容器のイメージスキーマは相対的に背景化されて

いる。cの場合には、月や霧がどこから出てきたかと問われても、具体的にその出所を意識することは不可能である。図2は容器のイメージスキーマが、aからb、bからcにいくにしたがって、次第に背景化されていくプロセスを示している。

<イメージスキーマの背景化／ブリーチング>



図2

山梨 (2000 : 143)

上の(1)において、物理的空間である「寝室」のみならず、「新しいクラブ」や「躁状態」が「容器」として理解される仕組みについて、つまり、これらに類似性が認められる仕組みについて、靱山 (2014 : 16-17) に詳しい説明がある。靱山は、「4月に入る (と、ようやく暖かくなった)」と「A大学に入る」という表現について以下のように説明している。

まず、「4月に入る」の「4月」は、言うまでもなく、1年のうちの他の月と区別される1つの月であり、始まりと終わりが明確な期間である。また、「4月」はもちろん空間上の範囲ではなく、時間上の期間であるが、期間内 (内部) と期間外 (外部) を明確に区別できることから、一種の「容器」とみなせるものである。さらに言えば、その期間内に、つまりは容器内に人間が容器の内容物として存在することができる。このように考えると、「4月に入る」などの時間に関する表現も、容器のイメージスキーマに基づくことがわかる。(中略) 次に、「A大学に入る」という表現は「A大学の学生になる」という意味を表せる。また、A大学の学生であるか否かは明確に区別できることである。つまり、ある1人の人に関して、A大学の学生であるか、そうでないかのどちらしかない。このように考えると、「A大学の大学生であるという身分」は、境界が明確であって、一種の「容器」とみなせるものであり、やはり容器のイメージスキーマに基づくことがわかる。

(靱山 2014 : 16)

ここで、あらためて山梨の例(1)を見ると、「新しいクラブ」は「大学」と、「躁状態」は「4月」とそれぞれ平行的に考えることができる。つまり、「新しいクラブ」は、クラブのメンバーであるか否かという「境界」が明確に区別できることから、容器とみなすことができよう。同様に「躁状態」も、躁状態である (期間内) と躁状態でない (期間外) を区別できることから、容器とみなすことができよう。このように、容器のイメージスキーマは、空間における物理的移動を表す表現だけでなく、より抽象的な移動あるいは変化を表す表現の基盤ともなっている (靱山 2014 : 16)。



さらに、靱山 (2010:82) は、「学校／会社／サークル／野球チーム／仲間に入る」といった一連の表現の背後には、「組織に加わることを、容器の内部に移動することを通して捉える」という概念メタファーが存在していると考えられる、と述べている。概念メタファーとは、ある対象 (= 目標領域) をよりよく理解したいという場合に、別のよくわかっている物事 (= 起点領域) を通して理解するという認知のしくみのことである (靱山 2010:82)。

靱山は、「容器の内部に移動する」という空間における行為 (= 起点領域) の方が、「組織に加わる」という抽象度の高い行為 (= 目標領域) よりも、理解しやすいことは明らかであろうと述べ、さらには、典型的な「容器」と同様に、「組織」にもウチとソトを区別する境界があり、「組織」に属する人と属さない人が区別される。そして、「組織」に属する人とは、「組織」の内部にいる人である。このことを踏まえると、「組織に加わる」ということは「組織」の外部にいた人が「組織」の内部に移行することと考えられる、と述べている (靱山 2010:82)。

つまり、容器の「内部」と「外部」、そして両者を区別する「境界」を構成要素とするイメージスキーマの基本的な構造が、「組織に加わる」という目標領域においても維持されていることが確認できる。以上のように、概念メタファーにおいて、起点領域のイメージスキーマ構造が目標領域に投射され、目標領域においても維持されることを、「不変性原理 (invariance principle)」と言う (靱山 2010:82-83)。

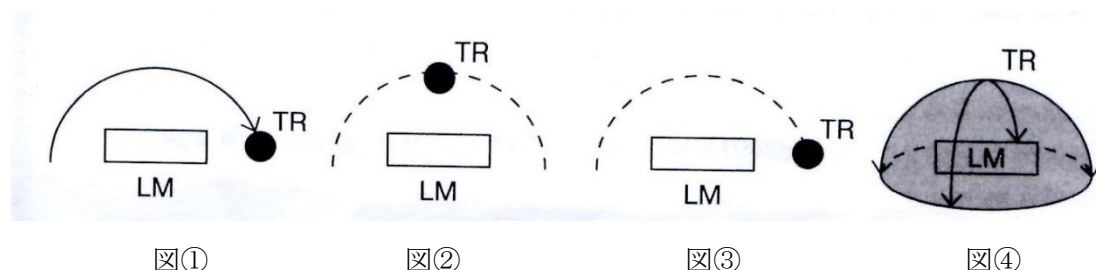
一方、谷口 (2013:17) は、上のような類似性に基づく意味拡張とは別に、「基本的なイメージスキーマの構造に一部変更が加えられることによって、同じ空間義ではあるが、基本的用法とは異なる位置関係を示すように変化するという拡張も存在する」、とし「このようにイメージスキーマそのものにバリエーションを生み出す作用を、「イメージ・スキーマ変換」と言う (Lakoff 1987) と述べ、以下のように説明している。

イメージ・スキーマ変換には、プロファイル (焦点) を交替させる方法や、当初のイメージ・スキーマを構成要素とする構造へと拡張させる方法などがある。Over を例に示すと (Lakoff 1987, Dowell 1994 の分析に基づく)、中心的なイメージ・スキーマは、図① (The plane flew over the hill) のように、LM (ランドマーク)<sup>8</sup>の上方を横切る弧を軌跡とする移動である。一方で、図② (The painting is over the fireplace) はLMの上方部分のみをプロファイルする。図③ (Sam lives over the hill) は主観的移動が関与しており、イメージ・スキーマの軌跡が心的走査に置き換えられ、実際にはその終点

<sup>8</sup> ランドマーク (LM) とトラジェクター (TR) は以下のように説明される。

認知文法は主観的意味論の立場を取り、概念内容が同じであっても、捉え方が違えば意味が異なると考えるが、その捉え方の違いの1つに際だちがある。ある特定の認知領域内の構造は、その際だちの違いによって、背景的要素として機能するベースと、焦点化され、際だちの大きいプロファイルと呼ばれる部分とに分かれる。このプロファイルが、ある事物と他の事物の間に成立する関係を表している場合、双方ともプロファイルされていても、その間にはさらなる際立ちの違いがある。このような、関係を表すプロファイルにおいて、際だちの最も大きい部分構造を「トラジェクター」と呼び、それ以外の際だちの大きい部分構造を「ランドマーク」と呼ぶ。このトラジェクターとランドマークの区別は、図地分化という基本的な認知能力の言語的現れであると言える (熊代 2013:255)。

だけがプロファイルされている。さらに図④ (She spread the cloth over the table) は軌跡が三次元化され、LM を立体的に覆うイメージ・スキーマに変換された例である。



(谷口 2013 : 17 図番号は引用者が改変)

その上で、谷口は、「このように、中心的なイメージスキーマの構造の一部分のみを取り出したり、あるいはさらに大きな構造へと変化するというイメージ・スキーマ変換は（中略）イメージスキーマを保持し領域が交替する隠喩的拡張とは対照をなす」と述べている (p. 17)。

前節で、メトニミーは隣接性、関連性に基づく比喩であることを見たが、靱山 (2010) は、基本的な空間的隣接の例として、「黒板を消す」をあげている。すなわち、本来<黒板>を表す「黒板」という形式を、<黒板>と隣接している<黒板に書かれた文字>を表すのにも用いる例である。さらに靱山は、空間的な隣接の特殊な場合として、「部分と全体の関係」に基づくメトニミーの例をあげている。たとえば、「扇風機が回っている」における「扇風機」は扇風機の部分である<羽根>を指している。<扇風機>と<羽根>の関係は別個の存在ではなく、<羽根>は<扇風機>という全体の部分であり、この例は、本来（機械）全体を表す「扇風機」という言葉が<羽根>という部分を表しており、「全体→部分」という方向のメトニミーであるとしている。逆に、「部分→全体」という方向のメトニミーとして「手が足りない（から手伝って）」をあげている。この表現における「手」は、<「手を部分として含む」人間の体全体>を表す。つまり、本来は<人間の体全体の部分>を表す「手」という語を、<人間の体全体>を表すのに使っている、と説明している (靱山 2010 : 45)。このように考えると、上のイメージスキーマ変換において、1 つのイメージスキーマの焦点化する部分を変えるという認知プロセス（すなわち、プロファイルシフト）もイメージスキーマを基盤とする、メトニミーに基づく意味拡張の一種と考えることができる<sup>9</sup>。

以上の先行研究の記述から、イメージスキーマとは、メタファー、メトニミー、参照点構造などといった認知メカニズムと矛盾するものではなく、むしろ同時に成立しうる認知構造である。あるいは、イメージスキーマの方がより基本的と言ってもよいかもしれない、

<sup>9</sup> Langcker (2008) は、「狭い意味ではメトニミーは、プロファイルシフトとして特徴づけることができる」と述べ、この例として、レストランでウェイトレスに I'm the tiramisu と言った客は、自分がイタリア料理のデザートであると主張しているわけではなく、レストランの文脈においては、プロファイルがデザートからデザートを注文した人へとシフトするため、注文者が tiramisu の指示対象となる場合が多い、という例をあげている (翻訳は、山梨 (監訳) (2011 : 89-90) による)。

(清水 2006 : 71-72) と結論づけることができる。

### 3.6 第3章のまとめ

以上、本章では次章以降での分析において援用する、認知言語学の諸概念について確認し、本研究の取り組む課題について述べた。さらに、イメージスキーマについて概観した。

本研究は、一般的な認知能力を重視することに加えて、私たちの身体を通してのさまざまな経験が、言語の習得・使用の重要な基盤をなしていると考え、という経験基盤主義を重視することを述べたが、本研究は、意味拡張の動機付けとしてのメタファー、シネクドキー、メトニミーという 3 つの比喩に基づく意味ネットワークによって、多義語と見られる語のカテゴリーの構造を明らかにすることを目指す。さらに、「さまざまな形で日常言語の概念構造の創造的な拡張を可能としている」(山梨 2009 : 94) とされるイメージスキーマが概念構造の創造的な拡張を動機付ける一面を明らかにしたい。

## 第4章 考察対象とする語の分類基準について

### 4.1 本章の目的

本章では、考察対象とする語のより詳細な意味分析を行う前提として、下位分類を行う。同じく「数量大」を表す数量表現の中でも、意味が相対的に近い語と遠い語が存在すると考えられる。

考察対象とする語：「たくさん」「いっぱい」「たっぷり」「どっさり」「大勢」「多数」「多量(に)」「大量(に)」「数多く」「多く」の10語

### 4.2 下位分類

本節では、下位分類の基準として以下の基準を立てることとする。

- 1) 個体(数)を表すか連続体(量)を表すか
- 2) 動きや出来事の量を表すか
- 3) 人間を表すか
- 4) プラス評価を与えているか、マイナス評価を与えているか
- 5) 種類を表すか
- 6) 文体差

以下、各基準間の関連性、立てた基準の適格性について述べる。なお、本研究で立てた基準は統語・意味の面を踏まえたものである。

まず、本研究で考察する語は、基本的に、名詞(N)の数量が大であると捉える表現であることから、本研究の考察対象は「Nについてその数量が大であることとカテゴリ情報を表すもの」である。たとえば、「学生が大勢・・・」という場合においては、「学生」の数量(が大であること)および、「学生」は「大勢」のカテゴリに含まれると考える。また「大勢の学生」も同様である。

第2章で見たように、水口(2007:159)は、類別詞以外の数量表現も類別詞の機能である個別化と範疇化の機能を併せ持つことを指摘している。しかしながら、個々の数量表現における個別化と範疇化の機能について詳しく分析するには至っていない。

また、日本語では助数詞において「個体」と「連続体」の区別があり、それぞれ個別類別詞と計量類別詞が用いられている。さらに、無生物においては「抽象物」と「具体物」の区別があることから、本研究で扱う数量詞においても「個体と連続体」、「抽象物と具体物」の区別があると思われる。

2番目に、動きや出来事を表すかという基準を立てる。第2章で見たように、日本語では

助数詞において「抽象物」の中に「イベント」を表すものとして「回、度、発、件、便、服」などがある。本研究で扱う数量詞においても出来事を表すものがあると思われる。

影山（編）（2011）は、「名詞は基本的にモノ名詞とデキゴト名詞に大別できる」（p. 38）とし、「両者の本質的な相違は、時間の概念が関与するかどうかである」（p. 43）と述べている。本研究で考察する語はすべて「文中に現れる名詞の数量や動きの量を限定する副詞的成分」（日本語記述文法研究会（編）2009：203）であるが、1）で述べた基準は「モノ名詞」における区別であり、デキゴト名詞と共起するかどうかを区別する必要があると考える。さらに、本研究の考察対象である語の中には「名詞の数量」のみならず動きの量や頻度（出来事の回数）を表す用法を持つ語も含まれる。

3 番目に、1）の基準の下位基準として人間を表すか否かで区別する。第2章で見たように、日本語の助数詞の範疇化においては有生・無生に大きく二分し、有生は人間と動物に、無生は形状・機能に基づいて多数の類別詞に下位分類されていたが、本研究で考察する語も人間専用の語と、無生物専用の語、さらに有（無）生性に関して中立の語がある。

4 番目に、数量大を表す語は何らかの評価性を表す語が含まれる。先述の加藤（2003：431-432）は、数量詞を「250km」「200g」のように助数詞を伴った「特定数量詞」と、「かなり」「たくさん」のように助数詞を伴わない不特定の数量を表す「不特定数量詞」に分け、「不特定数量詞は、数量そのものを明確に表すわけではないが、一般に価値判断を含んでいることが多い」（p. 432）と記述している。第2章において、本研究で考察対象とする語を加藤の言う「不特定数量詞」と位置付けた。しかしながら、加藤（2003）は、個々の数量表現についての評価性については記述していない。そこで、本研究では話し手が数量に対してプラス評価を与えているか、マイナス評価を与えているかという基準を立てる。

さらに、本研究ではこのプラス・マイナスの評価性は、体感に関わる経験に動機付けられていると考える。というのは、靱山（2009）は、「気温 12 度」という状況について、たとえば名古屋に住む人なら、真冬であれば「暖かい」と言うでしょうし、春（＝4月か5月）であれば「寒い」と言いたくなる気温度です、と述べ、同じ状況に対して異なる評価が可能であることを記述している（pp. 93-94）。このように、同じ状況に対しても（暖かい・寒いという）体感に関わる経験がプラス・マイナス相反する評価に動機付けを与えていると考えることができる。

5 番目に、「数量」ではなく「種類」を表すことができるかどうかという基準を立てる。「数量」を表すということは個別化と関連する。2.3.3 で見たように、数量類別詞言語では、類別詞（助数詞）によって名詞を個別化する。個体は個別類別詞によって、連続体は計量類別詞によって個別化される。つまり、個体・連続体にかかわらず、数量を表すということは、対象を個別化するという認知のプロセスを経て初めてできることである。

一方、先述のように、水口（2004a:18）は、個別化とは逆に、「種」を表す場合には、数量類別詞言語では名詞を個別化せず、裸で使うと記述している。本研究で考察する「多く」は、「多くの」という形式（名詞修飾用法）で用いられた場合、裸ではないが、名詞を個別

化しない場合があると考えられる。つまり、「数量」よりも「種類」に注目する用法を持つと考えられる。

6番目に文体差について基準を立てる。

以下では、6つの基準に基づき、考察対象とする語がどのような特徴を持っているかを検討していく。

#### 4.2.1 範疇化と個別化の度合い

眞野 (2004) は「数えるという行為はその対象が個別化されて初めて可能となるものである」(p. 134) と述べ、対象物の認知に関して「個別化の度合い=対象となる名詞句が表すものや概念が個別的に認知しやすいかどうかという度合い」があり、具体物における「固体 (例「鉛筆」) と「液体・気体 (例「水」)」の間に観察されるような差異が抽象物にも存在しており、「数えるという行為において、抽象物にも具体物と同様の認知が行われうる」(p. 132) と主張している。たとえば「愛」などの感情的な抽象概念は個別化が難しいため、「\*3つの愛」のように「通常数えることができない」。一方、より具体性の高い「問題」のような抽象概念は、個別化しやすく「3つの問題」のように個別類別詞を使い数えることができると指摘している (pp. 133-134)。

さらに、眞野 (2004) は抽象物が持つメタファーについて、「抽象物と具体物の認知の共通性を示していること」と「メタファーの違いはその抽象物の個別化の度合いの違いを反映していること」を主張している (pp. 138-139)。たとえば「固める、壊す、結ぶ」などの固体のメタファーを持つ抽象物は可算的であり、「膨らむ、あふれる、流れる」などの気体・液体のメタファーを持つ抽象物は数えること自体が難しいものが多い、という相関関係が観察されると述べている (p. 139)。その上で、以下のように例をあげて図にまとめている。

1. 個別化しやすい抽象物 (数えられる・固体のメタファーを持つ)
  - ①a. 3 {つ/個} の {問題点/証拠}
  - b. 問題点/証拠を固める。 (固体)
  - ②a. 3つの意見/証拠/日程/態度
  - b. 意見/証拠/日程/方向 (ママ) を固める。 (固体)
2. 個別化しにくい抽象物 (数えられない・液体/気体のメタファーを持つ)
  - ③a. \*3つの愛情
  - b. 愛情が膨らむ。 (気体)
  - ④a. \*3つの憎しみ/愛/平和
  - b. 憎しみ/愛/平和に満ちる。 (液体)

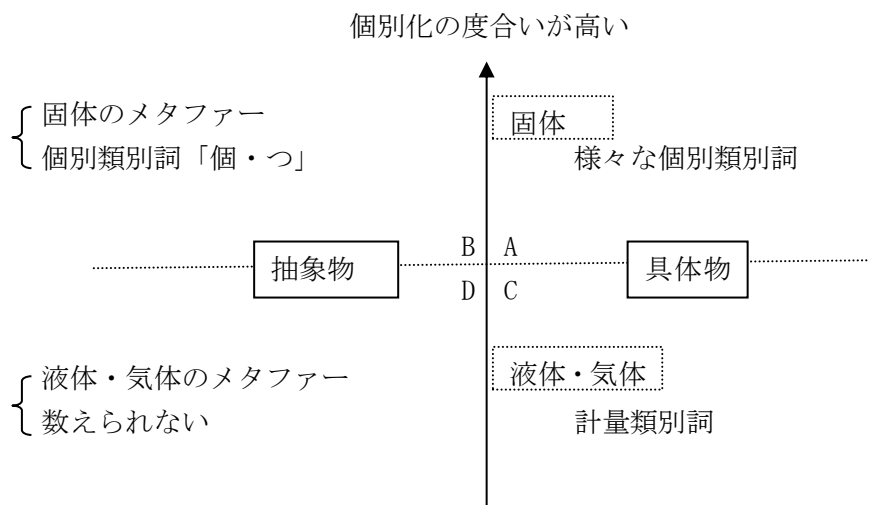


図1 対象物の認知に観察される相関関係（眞野 2004:140 引用者が ABCD 追加）

このように、モノ名詞においては個別化の度合いが、具体物のみならず抽象物にも反映されていることを眞野は指摘している。

上の図を参考に、下の連用修飾用法（NCQ「Nが／をQ」型）において、本研究の対象となる語と共起する名詞を考察する。

まず、「たくさん」は有生・無生の区別に対して何の制約もない（岸本 2002 : 168）とされる。また、宇都宮（2001）は「30 リットルの水→たくさんのお水」「100 本の鉛筆→たくさんのお鉛筆」「1 万人の学生→たくさんのお学生」をあげ、「たくさん」は「数える対象の種類を選ばない便利なことばとして捉えることができる」（p. 93）と記述している。このように、「たくさん」は個別化の度合いにかかわらず、さらに具体物か抽象物にかかわらず幅広く数えることができる（個別化できる）。そこで、本研究では、「たくさん」をものの数量が大であることを表す無標の表現であるとみなし、以下の文において、(1)～(4)の「たくさん」の位置に入ることができるかどうかで本研究の対象となる語を分類する。

- (1) 人間／本がたくさんある（いる）。（具体物：個別化の度合い高い A）
- (2) 問題点／特徴がたくさんある。（抽象物：個別化の度合い高い B）
- (3) 水／空気がたくさんある。（具体物：個別化の度合い低い C）
- (4) 時間／愛情がたくさんある。（抽象物：個別化の度合い低い D）

まず、(1)～(4)すべてに入ることができる語として、「いっぱい」「多く」がある。「いっぱい」は文体差はあるが「たくさん」と置き換えが可能である。文体差については後述する。

NLT (1.2 参照) を利用して検索すると、「多く」と共起する上位の名詞は「人」、「場合」、「人々」、「国」の順番で圧倒的に個別化の度合いが高いものが上位を占めている（第 9 章

参照)。しかし、「水分」「時間」「二酸化炭素」などの個別化の度合いが低いものも観察できる。また、「問題点」「不安」など抽象物も可能である。このことから、「多く」は抽象物か具体物かについても、また個別化の度合いにも制約がないと言える。

ただし、「スーパーで野菜をたくさん買った」は言えるが「?スーパーで野菜を多く買った」は（スーパーでいろいろな食品を買った中でのような）母集合を仮定することが自然でないコンテキストでは、「容認性が落ちる」（加賀 1997:104）ことから、「多く」は基本的に比較の基準に対する相対的な量を表す語であると考えられる。（このことから、まとめの表 1 において△を記した。）

「どっさり」は、個別化の度合いの高い具体物と共起する例が圧倒的に多い。連続体においては「水」は可能であるが「空気」は難しい。このことから、「どっさり」の対象は、典型的に個別化の度合いの高い具体物であると考えられる。また、数えられる抽象物においては偏りが見られる。というのは、抽象物（2）において「問題点」は可能であるが「特徴、信念」などは言い難い（「問題点/??特徴/??信念がどっさりある」）。また、インターネットの検索では「不満、悩み、ストレス」などが観察できることから、数えられる抽象物において、主体に体感としての負担をもたらすものであると想定できる。つまり、個別化の度合い、または、抽象度とは別の基準があると考えられる。また、「どっさり」が「人間」を表す例も観察できる。

「たっぷり」は、「野菜」「牛乳」など個物や連続体の具体物と共起し、「時間」や「愛情、ユーモア、魅力」など、感情的、精神的な抽象物とも問題なく共起することから、抽象物・具体物に関しても、個別化の度合いにも制約なく用いられると考えられる。ただし、抽象物において「??特徴/??意見/??信念/??憎しみがたっぷりある」などとはは言いにくいことから、「どっさり」同様、共起できる語に偏りがあると考えられる。対象となる抽象物は、主体に「満足感」のようなプラス評価の体感をもたらすものであると想定できる。このことから、抽象物については△を記した。すなわち「たっぷり」は、個別化の度合い、ないしは抽象物か具体物かどうかとは別に、話し手の体感のような別の基準によって用いられると考えられる。

続いて、個別化の度合いの高い名詞と共起する語として「大勢、多数、数多く」がある。この中、「大勢」は人間専用の語である。

「多数」も人間を表す例が多く観察できるが、人間のみならず「企業、意見、国」など個別化の度合いの高い抽象物が観察できる。

「数多く」も個別化の度合いが高い具体物と抽象物に限られている、と考えることができる。

次に、個別化の度合いが低いものとのみ共起する語として「多量」がある。「多量」は「水、汗、血液」など、個別化の度合いが低いものが上位を占める。有生物を表す例も観察することはできるが、BCCWJ（1.2 参照）の検索では人間 5 例、生物が 1 例のみであり（詳しくは 5.4.1 参照）、「多量」が有生物と共起する例は周辺例と考えられる。また、「多量」は抽



象物とは共起が難しい（\*問題点/ \*時間/ \*愛情が多量にある）。つまり、具体物専用の表現である。

ここで問題となるのは「大量」である。「大量」は、「多量」同様、「水、情報、血」など液体を表す語の頻度が高いという偏りが見られるが、「多量」とは異なり、「人、移民」など人間を表す語も多く観察できる。しかし、抽象物とは、個別化の度合いにかかわらず共起しにくいと言う点は「多量」と同じである。つまり、「大量」は具体物であれば個別化の度合いにかかわらず広く用いることができる。

以上の検討の結果をまとめると、以下の表1のようになる。

表1 モノ名詞における下位分類

数える対象となる語の例	A 人間・本	B 問題点・考え・悩み	C 水・空気	D 時間・憎しみ・愛情・自信
個別化の度合い	高	高	低	低
具体物か抽象物か	具体物	抽象物	具体物	抽象物
たくさん	○	○	○	○
いっぱい	○	○	○	○
たっぷり	○	△	○	△
どっさり	○	△	△	△
多く	△	△	△	△
多数	○	○	×	×
大量	○	×	○	×
数多く	○	○	×	×
多量	×	×	○	×
大勢	△（人間）	×	×	×

モノ名詞の数量を表す場合、本章の考察対象である10語は表1のような分布になる。この表から言えることは、本研究の考察対象とする語は体系性を持つと考えられるということである。第3章において、プロトタイプに基づくカテゴリーについて確認したが（3.2参照）、大堀（2002：48）は、「プロトタイプ=特性リストという解釈がある」として、この考えでは、リストの特性を多くもつほど中心的なメンバーであり、それがプロトタイプということになる、と述べている。そして、たとえば「鳥」というカテゴリーについて、「羽ばたいてい飛ぶ」、「嘴がある」、「卵を産む」、「羽毛がある」、「野生である」などの条件をあげ、すべてを満たすものをプロトタイプとし、一部の特性に欠ける、つまり点数の低いものを周縁的メンバーとするのはこの立場である、と述べている。

さらに、大堀（2002：49-50）は「特性リストによってプロトタイプを分析する際に、重

要なのは中心メンバーからのバリエーションが体系性をもつという点である」と述べ、表 2.1 と表 2.2 をあげ、前者は「体系的バリエーション」であり、後者は「非体系的バリエーション」であるとしている。

表 2.1 体系的バリエーション  
(大堀 2002 : 49)

	f1	f2	f3	f4	f5
m1	+	+	+	+	+
m2	+	+	+	+	+
m3	+	+	+	-	-
m4	+	+	-	-	-
m5	-	-	-	-	-

表 2.2 非体系的バリエーション  
(大堀 2002 : 50)

	f1	f2	f3	f4	f5
m1	+	+	+	-	-
m2	+	+	-	-	+
m3	-	+	-	+	-
m4	+	-	-	+	-
m5	-	-	+	-	-

大堀 (2002 : 49) は、m1-m5 のメンバーについて、f1-f5 の特性リストに照らした結果、表 2.1 において、上位の m1 と下位の m5 には共通するが、中位の m3 にはないような特性は見られない。この限りで、カテゴリー内のバリエーションはランダムではない、と説明している。

他方、プロトタイプ効果が見られる場合、表 2.2. のような分布はしないとしている。表 2.2 では、m1 と m2 が三つの特性リストを満たしており、上位に数えられるが、m2 に当てはまる特性 f5 は他のメンバーには当てはまらない。また m1 にあって m2 にない特性 f3 は、他のメンバーでは m5 だけがもっているため、バリエーションは体系的とはいえない、と説明している。その上で「特性リストを用いてバリエーションの体系性を分析するのは、カテゴリーの内部構造を明らかにするうえで有効な方法である」と述べている (p. 50)。

ここであらためて表 1 を見ると、「たくさん、いっぱい」は、ABCD のすべての領域のものを表すことができ、すべての特性を満たしていることから、プロトタイプであると考えられることができる。周辺例として一つの領域のみを表す「多量、大勢」をあげることができる。このように、本研究の考察対象である数量表現は体系的バリエーションをなすと考えられる。

さて、表 1 から、「多数、大量、数多く、多量、大勢」は抽象物に制限があることが分かる。そこで第 5 章では、人間専用の語である「大勢」と、次節で述べるようにデキゴト名詞を表すことができる「数多く」を除外して、モノ名詞の中で抽象物に制限がある点で共通している「多数、大量、多量」について、個別化の度合いと抽象物・具体物に関して制約のない無標の表現である「たくさん」を含めた 4 語における類義語分析を行う。「多数、大量、数多く」の 3 語は人間を表すこともできることから、第 7 章では、「大勢」を含めて人間を表す場合の相違点を考察する。

#### 4.2.2 動きの量と出来事の量

本研究の考察対象である語はすべて文中に現れる名詞に対する数量限定を行う。しかし、名詞と言っても「もの」に近いものから「出来事」(動詞)に近いものまでである。さらに、本研究の考察対象である語の中には名詞の数量ではなく動きの量や頻度を表す用法を持つ語も含まれる。上の眞野の分析においては、デキゴト名詞は除外されている。

まず、名詞の分類として影山(1993)と影山(編)(2011)は、「モノ名詞」と「デキゴト名詞」に区別する。さらに、デキゴト名詞を「単純デキゴト名詞」と「複雑デキゴト名詞」に分ける。影山の説明を見てみよう。

先述のように、影山(編)(2011:38)は、「名詞は基本的にモノ名詞とデキゴト名詞に大別できる」とし、両者の違いは、「時間」の観念がそれ自体に含まれるかどうかということであると述べている。たとえば、モノ名詞である「鉛筆」はそれ自体に時間の観念が含まれないのに対し、デキゴト名詞である「火事」は出火から消火まで一刻一刻変化していったと想定できると記述している。さらに、影山(1993)はデキゴト(出来事)名詞を単純デキゴト名詞(単純事象名詞)と複雑デキゴト名詞(複雑事象名詞)に区分し、単純デキゴト名詞と複雑デキゴト名詞の違いは、前者は可算名詞として「多数」などの数量詞を取ることができるが、後者は動詞的概念であるから数量詞とは相容れない、とし以下の例をあげている(影山1993:272 一部省略 下線は引用者)。

##### 単純事象名詞

- (5) 学生たちはボランティア活動を多数行っている。
- (6) 母校のサッカーチームは、海外への遠征を多数している／行っている。

##### 複雑事象名詞

- (7) \*息子は家出を多数している。
- (8) \*JRは運賃の値上げを多数した。

影山(1993)は、(7)(8)の数量詞「多数」は「家出、値上げ」などの回数を表すとは解釈できない。意味的に同じでも数量詞の代わりに「幾度も、たびたび」など純然たる副詞を用いると、複雑デキゴト名詞(動名詞)でも成り立つが、この場合の頻度副詞は動名詞(「家出」「値上げ」)ではなく「する」を修飾している、と記述している(p.272)。

上の例において「単純デキゴト名詞(「ボランティア活動」「遠征」)」と共起する(5)(6)の「多数」は「数多く」と置き換えることができる。さらに、「複雑デキゴト名詞」と共起できないとしている(7)(8)の「多数」を「数多く」に置き換えると容認度が上がると思われる。つまり、「数多く」は「多数」とは異なり「複雑デキゴト名詞」と共起できる場合があると思われる。そして、その場合、頻度を表すと考えることもできよう。

続いて、「動きの量」を表すかどうかについて検討する。

「たくさん」と「いっぱい」は先行研究で指摘されているように、動きの量を表すことができる。

(9) たくさん殴った。 (日本語記述文法研究会 (編) 2009 : 204)

(10) 外でいっぱい遊んだ。 (日本語記述文法研究会 (編) 2009 : 203)

深田・仲本 (2008 : 229) は langacker (1990) を引用して、動詞の<完了>/<未完了>の違いは、名詞の可算/集合の違いと平行的に捉えられる、と述べ次のように記述している。「動詞がプロファイルしている<プロセス>の中で最も重要な概念は、<時間>である。ある動詞がプロファイルしている<プロセス>の<時間>に『有界性』(bounding)が認められれば<完了>、認められなければ<未完了>となる。この<時間>の有界性は、名詞がプロファイルする<モノ>の概念的な区域の有界性と平行的に捉えることができる。この観点から見れば、有界的な時間の中での変化を表す完了動詞は有界的な区域を表す可算名詞と、また、非有界的な時間(永続的な時間)の中で一定の変わらない状態を表す未完了動詞は非有界的な区域を表す集合名詞と、それぞれ平行的に捉えられる」(p. 229)。

この対応関係から、本研究で考察対象とする不特定数量詞が動きの量を表す場合においても、完了と未完了に関わる場合があると予想できる。そこで、瞬間動詞と継続動詞の区別を立てる。

上の(5)~(8)において、「多数」の位置に考察対象とする語を当てはめてみると、以下の表3のようにまとめることができる。さらに、動きの量を表すかどうかを(9)(10)の「たくさん」と「いっぱい」の位置(Q)に当てはめてみた結果を表3にまとめる。

表3 単純・複雑デキゴト名詞および動きの量による下位分類

	デキゴト名詞		動きの量	
	単純デキゴト名詞	複雑デキゴト名詞	継続動詞	瞬間動詞
例	遠征・検討を Qする	家出・値上げを Qする	Q遊んだ	Q殴った
たくさん	○	○	○	○
いっぱい	○	○	○	○
数多く	○	○	×	○
多く	△	△	△	△
多数	○	×	×	×
たっぷり	△	△	△	△
どっさり	△	△	×	×
大勢	×	×	×	×
大量(に)	×	×	×	×
多量(に)	×	×	×	×

「たくさん」は、先述のように「数える対象の種類を選ばない便利なことば」とされ、単純デキゴト名詞・複雑デキゴト名詞の区別なくデキゴト名詞（の指示対象物）の量を表すことができる。動きの量も継続動詞・瞬間動詞の区別なく用いることができる。

「いっぱい」は、（文体差はあるが）「たくさん」と同様の振舞いをする。

「たっぷり」と「どっさり」は、単純デキゴト名詞（「?検討をたっぷり／どっさりした」）も、複雑デキゴト名詞（「?値上げをたっぷり／どっさりした」）もともに普通、言いにくいと思われる。

動きの量に関しても「\*どっさり遊んだ／殴った」のように「どっさり」は容認されない。「たっぷり」は、「たっぷり遊んだ」とは言えても「たっぷり殴った」では、違和感がある。「たっぷり」は先述のように、単なる数量を表すのではなく、別の基準が想定でき、それは体感に関わる身体的経験に基づくことが想定できる（詳しくは 8.2.3 参照）と考えられる。このことからまとめの表 3 において△を記した。

他方、「大勢、大量、多量」の 3 語は、デキゴト名詞の数量も動きの量も表すことができない。

また、「多く」は、デキゴト名詞の場合、「?検討／?値上を多くした」は容認度が低い、たとえば「他社より」といった、基準となる語が明示されれば容認される。つまり、「多く」を用いるには基準の明示、あるいは想定が必要であると考えられる。同様に、動きの量においても「?多く遊んだ」は言いにくい、「いつもより」などといった基準が示されれば容認できる。このことから、まとめの表 3 において△を記した。

以上の考察から、単純・複雑デキゴト名詞および動きの量を表すという特性においても、本研究で考察対象とする語は体系的なバリエーションを成すことが分かった。プロトタイプは、単純・複雑デキゴト名詞と共にでき、動きの量も表すことのできる「たくさん、いっぱい、数多く、多く」であり、この 4 語は複雑デキゴト名詞と共にできることから、影山の言う「純然たる副詞」としての用法があると考えられる。ただし、「たくさん、いっぱい、数多く」は、以下のように「頻度」を表す「多く」と置き換えることはできない。

- (11) トップ面談は通常秘密保持の関係で仲介業者のオフィスで行うことが多く（\*たくさん／\*いっぱい／\*数多く）あります。 (BCCWJ)

そこで第 6 章では、上の表 3 から（文体差はあるが）「たくさん」と同じ振舞いをする「いっぱい」と、体感に関わる基準が想定される「どっさり」と「たっぷり」、さらにデキゴト名詞の量や動きの量を表すことができない「大勢、大量、多量」を除外した「たくさん、数多く、多く、多数」の 4 語について、これらと共に起する名詞と動詞に注目して 4 語の共通点・相違点を考察する。また「数多く」の個別の意味分析を行う。

### 4.2.3 人間と非人間

先述のように、日本語の助数詞の範疇化においては有生・無生に大きく二分し、有生は人間と動物に、無生は形状・機能に基づいて多数の類別詞に下位分類される（水口 2009）。考察対象とする語においても有生物に用いられるか無生物に用いられるかで区別があると思われる。

①有生か無生かに関して制約がない

：たくさん、いっぱい、多く、大量、数多く、多数、(多量、どっさり)

②有生（人間のみ）：大勢

③無生：たっぷり

以上から分かるように、助数詞とは異なり、本研究の考察対象である表現は有生・無生にかかわらない語が多い。一方、「有生（人間）であること」を必要条件とする語として「大勢」が、「無生であること」を必要条件とする語として「たっぷり」がある。ただし、「有生・無生に関して制約がない語」の中においても、「人間」の表しやすさにおいて程度差があり、前節で述べたように「多量、どっさり」は、「人間」を表しにくい。このことを図に示すと以下のようなになる。

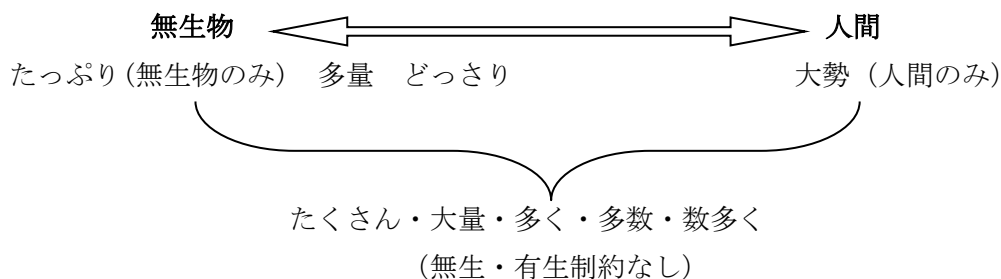


図2 人間との共起しやすさ

上の図から分かるように、「大勢」という人間専用の語があるにもかかわらず、なぜ「たくさん、大量、多数」などの語も用いられるのか。そして、これらの語が人間の数量を表す場合どのような意味の差があるのでしょうか。第7章では、「大勢、たくさん、大量、多数、数多く」の5語について人間を表す場合の動機付けについて考察する。「多く」については第9章で「たくさん」と類義語分析を行う。

### 4.2.4 プラス評価とマイナス評価

本研究で考察対象とする語について、プラス・マイナスの評価性を記述している辞書類は管見の限り『現代擬音語擬態語用法辞典』のみである。その記述を見ると「たっぷり」と「どっさり」についてそれぞれ以下のように説明している。

たっぷり：必要量を超えて多量にある様子を表す。ややプラスイメージの語。

「たっぷり」は「どっさり」に似ているが、「どっさり」は重量・豊富の暗示がある。

どっさり：多量に存在する様子を表す。ややプラスよりのイメージの語。

「どっさり」は「たっぷり」に似ているが、「たっぷり」は必要量を超えて多量にある様子を表し、豊富・余裕・充足の暗示がある。

(12)彼は莫大な遺産を相続したのはいいが、借金もどっさり抱え込むはめになった。

(13)×彼は借金もたっぷり抱え込むはめになった。

(『現代擬音語擬態語用法辞典』p. 330 下線は引用者)

上の記述を見ると、「たっぷり」と「どっさり」について「似ている」としながら、それぞれ、「ややプラス」、「ややプラスより」とほぼ同じ記述となっている。しかし、その根拠については記述されていない。その上で(13)の「たっぷり」は「×」とされているが、筆者には批判や皮肉の解釈の場合には容認可能であると思われる(これについては8.2.3.1で詳しく述べる)。このことから、評価性とその動機付けについてもさらなる説明が必要と思われる。

(12)の「借金」は、マイナスの評価性を持つ語である。この「たっぷり」は読み手に違和感を与えるが、話し手の批判や皮肉を表すと解釈できる。これは本来プラスの評価性を持つ「たっぷり」が「借金」という、マイナス評価を持つ語と共起する衝突によって生じるものと考えられる。このことから「たっぷり」は基本的にプラス評価を与える語であると考えられる。

一方、「どっさり」は(12)のようなマイナスの文脈においても、「今年は米がどっさり取れた」(『現代擬音語擬態語辞典』p. 329)のようなプラスの文脈においても用いることができる。このことから「どっさり」の評価性は基本的に中立であると考えられる。

さらに、本研究は、先述のように、「どっさり」「たっぷり」がプラス・マイナス両方に用いられる理由は体感に動機付けられていると考える。

仲本(2013)は、「人間の圧覚を反映する概念は、視覚に基づく客観的な事態の捉え方(観察表現)と異なり、事態を内部的に体感するもう1つの認識のあり方(体感表現)を示す」とし(p. 35)、人間の圧覚に基づく経験を基盤とする「きつい」の多義構造を記述している。仲本は、「きつい」は身体的な圧覚を反映するものであり、ある特定の状況に埋め込まれた主体の感覚を表す、と述べ、「この服は小さい」「今日は風が強い」という場合と「この服はきつい」「今日は風がきつい」という場合を比べると、後者の方が主体の態度(この場合、不快感)を強く反映していると感じられる、と記述している(pp. 25-26)。その上で、「きつい」という形容詞は、客観的に事態を記述するというよりも、主体がしめつけられて<苦痛である>と感ずること、またその結果、主体の能動的な活動が制約されて<困難である>と感ずるといった意義を含意する、と述べている。

「どっさり」と「たっぷり」も身体的な感覚(体感)に基づく経験を基盤とする表現で

ありそれが主体の心的態度と結びついていると考えられる。たとえば、「おかずがたくさんある」「宿題がたくさんある」と言う場合と「おかずがたっぷりある」「宿題がどっさりある」と言う場合を比べると、後者の方が主体の態度（好ましいという評価や満足感）や重くて負担になるという体感を伴って感じられる。

このように、「たっぷり」と「どっさり」は私たちの内部にもたらされる「体感」の共通性が意味拡張の基盤になっていると考えることができる。

さらに、「たっぷり」と「どっさり」が、オノマトペであることも体感を伴って感じられる理由であると思われる。喜多（2013:79）は、「擬音語・擬態語」の意味表象が普通の言葉と質的に違うということを示唆する現象として、第一に「擬音語・擬態語」は経験の生き生きとした質感を呼び起こす、という点をあげ、以下のように説明している。

- (14)たとえば、「べちゃべちゃ」という擬態語を聞くと、濡れたものをさわったときの触感とそれにとまなう不快感があたかも実体験を再現したかのように具体性を帯びたかたちで立ちおこってくる。実体験の再現を促すということは、擬音語・擬態語はイメージの喚起と同等の機能を果たすことができるということもできる。すなわち、擬音語・擬態語の意味は「イメージ的」であるということができる。

（喜多 2013:79-80）

そこで、第 8 章では体感に関わる経験を反映すると考えられる「たっぷり、どっさり」について個別の意味分析と類義語分析を行い、どのような体感が基盤となっているのか考察する。

また、高見・久野（2006：265-266）は「たくさん」と「いっぱい」の違いについて、以下のように記述している。

「いっぱい」は、本来、ある限られたスペースが何かで「いっぱい」になるという意味であるのに対し、「たくさん」は、（そのような意味合いがなく）あるものの数や量が単に多いという意味である。そのため、次の例では興味深い意味の違いがある。

- (ii) a. 風呂おけに水をいっぱい入れた。  
b. 風呂おけに水をたくさん入れた。

(iia) では、風呂おけが水でいっぱいになっているという意味合いがあるが、(iib) では、風呂おけは水で必ずしもいっぱいになっている必要はなく、例えば水を 6 割方入れたとしても、(iib) を用いることができる。しかし、そのような状況で (iia) を用いると不自然になる。

（高見・久野 2006：265-266）



上の説明のように、「いっぱい」は本来、容器における（連続体を典型とする）中身の量を表すと考えられる。『大辞林』（第三版）によれば「入れ物・場所などに物が満ちているさま」と記述される。つまり、空間認知に関わる経験に根ざしていると考えられる。一方、「たっぷり」は「満ちあふれるほど十分なさま」と記述される。つまり「たっぷり」も「満ちあふれる」という表現から分かるように「容器」を基準としている点で、空間認知に関わる経験に根ざした表現であると考えられる。そこで、第8章では「体感に関わる経験」を表す「たっぷり、どっさり」に加えて、「空間認知に関わる経験」を表す「たっぷり、いっぱい」の類義語分析を試みる。

ところで、人間を数える場合にも「大量」と捉えるか「多数」と捉えるかでは人間に対する評価性が異なると考えられる。

(15) 自分の体力年齢を測定してみませんか。多数の人の参加をお待ちしております。

(15) の「多数」を「大量」に置き換えると違和感があり、失礼な感じを与える。このことから、人間を数える表現として「大量」を用いた場合、マイナス評価が付与される場合があると考えられる。この理由については第7章で考察する。

#### 4.2.5 種類を表すか

『大辞林』（第三版）で「たくさん」を引くと「数量の多い・こと（さま）」と記述している。『講談社 類語辞典』においては、「多く」と「たくさん」はともに「数量が多い様子」と記述されている。このように、「多く」と「たくさん」は意味が近い表現であると思われる。しかし、以下の文においては「多く」以外是用いることができない。

(16) 多く（\*たくさん／\*多数／\*大勢／\*大量／\*数多く）の学生は、いつの時代でも花形産業に就職したがるものだ。（日経 1983/06/14）

(16) は「ものだ」が後続していることから総称文と解釈できる。眞野（2008）は、益岡・田窪（1992:123）が「ものだ」を「対象の本来の特徴を述べるもの」としていると引用しながら、「ものだ」は「総称文にのみ付与される表現」（p. 74）であると記述している。つまり、「多くの学生」は、「学生」の「数量」を表す（＝個別化する）のではなく、総称名詞句の役割をしている、言い換えれば、（個々の学生ではなく）種としての学生一般を表すと考えることができる。当然のことながら学生一般は（概念であって）数える対象ではない。(16)は、対象である「(一般の) 学生」が「花形産業に就職したがる」という属性を有することを述べると考えられる。このことは「いつの時代でも」という時間的限定性を超越した語が生じていることから分かる。

さて、市川（2010）は（17）は誤用であり「たくさん」代わりに「多くの」を用いた方がよいと述べている（pp. 318-320）。

（17）誤 「この本は子供のための本です。けれども、たくさんの大人も好きです。」

市川（編著）（2010）は、その理由について、「大人」という語がやや抽象的な語であること、また、数量が多いことを具体的に目に見えるような形で述べている状況ではないので、より抽象的な表現の「多くの」を用いたほうがよい、と説明している（p. 320）。しかし、「たくさん」は、4.2.1 で述べたように、抽象度や個別化の度合いにかかわらずものの量を不特定に表す無標の表現であると考えられる。したがって、「たくさん」が「数量が多いことを具体的に目に見えるような形で述べる」とは限らない。そこで、本研究では（17）の「たくさん」がなぜ誤用であって「多く」が正用である理由を考察することによって、「多く」と「たくさん」の違いを検討する。

水口（2009:28-29）は、「日本語の複数形は種の意味を表さない。『絶滅する（be distinct）』という述語は、個々の恐竜の特性ではなく、種として恐竜の特性を表す述語である。日本語では種の読みを表すのは複数形ではなく、裸名詞である」として次の例をあげている。

（18）英語 Dinosaur are distinct.

日本語 恐竜（\*たち）は絶滅した。（水口 2009：29）

水口（2009）の記述をもとに考えると、「種」としての対象の特性を表す場合、数量を表す表現も許容されないと予想できる。そして予想される通り、「\*100 頭/\*たくさん/\*多数\*大勢の恐竜（北京原人）は絶滅した」とは言えない。「多くの恐竜は絶滅した」も恐竜の（数量ではなく）種類を表す場合以外には言えないと思われる。しかし、（16）のように、「多く（の）N」という形式が、（裸名詞同様）種を表すことができる例が認められることから、「多く（の）N」は（裸名詞同様）個別化それ自体に関わらない場合があると考えられる。一方「たくさん、多数、大勢」などは、「100 頭」「10 億人」同様、数量を表し、すなわち、名詞を個別化する語であって、「種」を表すことはできない。

そこで第 9 章では、辞書類の意味記述がほぼ同一である「多く」と「たくさん」の意味について、種類を表す意味に注目して類義語分析を行う。

#### 4.2.6 文体差

先行研究において、文体差について以下のような記述が見られる。

靱山（2005:580）は「あした／みょうにち」という類義表現について、「この 2 語は指示対象・意味範囲は同じであるが、文体あるいは位相が異なる」としている。国広（1982：82）は、前者を口語、後者を文語としている。本研究で考察する語について、たとえば人

間の数を「いっぱいいる」と「多数いる」では文体差があると考えられる。そこで、文体差について先行研究の記述を概観する。

まず、『日本語語感の辞典』は「どっさり、いっぱい、たっぷり」は主に会話で使われ、「たくさん」は会話や軽い文章で使われる表現、と記述している。また「多量」と「多数」は、改まった会話や文章に用いられる漢語であると記述している。

一方、「多い」は「くだけた会話から硬い文章まで幅広く使われる日常の基本的な和語」と記述している。「大量」は、「会話にも文章にも使われる漢語」とされる。「大勢」は「会話にも文章にも広く使われる日常語」と記述している。

このように『日本語語感の辞典』の記述から、大きく、会話で使われる表現と文章で使われる表現という区別があること、さらに、この区別は連続的であることが分かる。また、和語と漢語においては、大きく、前者が会話で使われやすく、後者が文章で使われやすいという対応があるが、「大量」(漢語)と「多い」(和語)は会話と文章の両方において使われる、ということから、絶対的な対応ではないことが分かる。

次に、「いっぱい」と「たくさん」の文体差について、高見・久野(2006)は、「たくさん」と「いっぱい」は、「もちろん同義ではない」とし、両者の違いを次のように説明している。

(A) 「いっぱい」は「たくさん」に比べ、より口語的でくだけた会話体で用いられるため、次に示すように、形式ばった表現にはそぐわない。

- (i) a. 日本全国から著名な先生方が、わが校にたくさんおいでになった。
- b. ??日本全国から著名な先生方が、わが校にいっぱいおいでになった。

次に、瀬戸(2002:181)は「どっさり」と「たくさん」について以下のように記述している。

文章には調子があります。つまり、文体とかスタイルとかいわれるものです。

つぎの二つの文を比べましょう。

(一) 宿題がどっさりあるとき、ふうとため息をついて

(二) 宿題がたくさんあるとき、ため息をついて

大きな差はないのですが、(一)のほうが臨場感があるでしょう。(二)はもう少し距離をおいた表現です。(一)には声喩(オノマトペ)が用いられています。「どっさり」は擬態語で、「ふう」は擬音語です。また、「どっさり」は、「たくさん」と比べて口語的です。そのぶん、親しみやすい表現といえるでしょう。

(瀬戸 2002:181-182 下線と強調は引用者)

また、市川(編著)(2010)は、『たくさん』という語は何にでも使えて便利そうである

が、話しことばであり、書いたものに使うと幼稚な印象を与えるので注意が必要である」(p. 320) と説明している。

以上の先行研究から、話し言葉（くだけた文体、口語体、会話体）とされる中でも連続性があり、「たくさん」より「いっぱい、どっさり、たっぷり」のほうがくだけた文体で用いられやすいということが分かる。

第 1 章で示したように、本研究で使用するコーパスは書き言葉コーパスのため、新聞、文学、白書といったジャンルにおける使用頻度に注目して考察する。

宮内 (2012) は、「フォーマルな」という概念は、「改まった」と言い換えることができ、「フォーマルでない」といった場合は「くだけた」特徴を指すとし、話し言葉であっても、改まったものとくだけたものがあり、書き言葉も同様であると述べ、「フォーマルさ」と「話し言葉的・書き言葉的」という概念は、異なる尺度であると記述している (p. 42)。その上で宮内 (2012) は、BCCWJ のサブコーパスのジャンルの文体的特徴について、書籍、新聞、白書の順に、よりフォーマルな特徴が見られると記述している (p. 43)。

宮内の記述を手掛かりに、考察対象の 4 語について白書と書籍におけるジャンル別の出現頻度を検索してみると、最もフォーマルな特徴が見られるとされる白書においては①「多く」2671 件、②「多数」430 件、③「大量」405 件、④「数多く」68 件、⑤「多量」32 件、⑥「たくさん」4 件、⑦「いっぱい」3 件が観察できるのに対して、「大勢、たっぷり、どっさり」は 1 件も観察できない。

この中で「多く」は、10 語の中で圧倒的に頻度が高い。「多くの」も 638 件観察できる。ただし、2671 件中「専門別に見ると、工学が最も多く、次いで理学、保健、農学の順となっている」(科学技術白書) のように形容詞「多い」の連用中止法などで用いられる例が含まれる。八亀 (2007: 70) は、「多い、少ない、乏しい、豊富な」などの存在を表す形容詞の述語文について「実際の使用例は、抽象的な論説文などで多用され、具体的な事物の存在より、抽象的な出来事の存在の多寡を表すことで、婉曲的な表現のグループを作っている。典型的には『～ことが多い』『～も少なくない』」と記述している。このように、「多い」と「多く (の)」はフォーマルな文体において多用されることが分かる。

一方、書籍においても「多く」は 26326 件（「多くの」12628 件を含む）観察できる。このことから、「多く (の)」は改まった文体においても、日常的な文体においても広く用いられると言えよう。

そこで本研究では、「多く」を除き、大きく以下のような区別があると考えられる。

主に日常的な文体で用いられる：いっぱい、どっさり、たっぷり、大勢、たくさん

主に改まった文体で用いられる：大量、多量、多数、数多く

文体については各語の意味分析や類義語分析において個別に考察する。

### 4.3 第4章のまとめ

本章では、考察対象とする語のより詳細な意味分析を行う前提として、6つの基準を立てて下位分類を行った。検討の結果、大きく以下の5つに再分類した。

次章からは以下の5つの分類に従って、各語の意味と相互の意味の類似点・相違点について考察していく。

- 1) モノ名詞の数量を表す「たくさん、多数、大量、多量」(第5章)
- 2) 出来事、動きの量を表す「たくさん、数多く、多く、多数」(第6章)
- 3) 人間を表す「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」(第7章)
- 4) 「体感に関わる経験」を表す「たっぷり」と「どっさり」  
「空間認知に関わる経験」を表す「いっぱい」と「たっぷり」(第8章)
- 5) 種類を表す「多く」と数量を表す「たくさん」(第9章)

## 第5章 モノ名詞の数量を表す「たくさん、多数、大量、多量」の意味分析

### 5.1 はじめに

本章ではモノ名詞の数量を表す「たくさん、多数、大量、多量」の4語について考察する。前章の下位分類(4.2.1)で見たように、この4語はモノ名詞の中で具体物を数える点が共通している。以下、図1と表1は、それぞれ第4章の図1と表1の再掲である(表1は、本章で取り上げる4語が該当する部分のみを再掲した)。

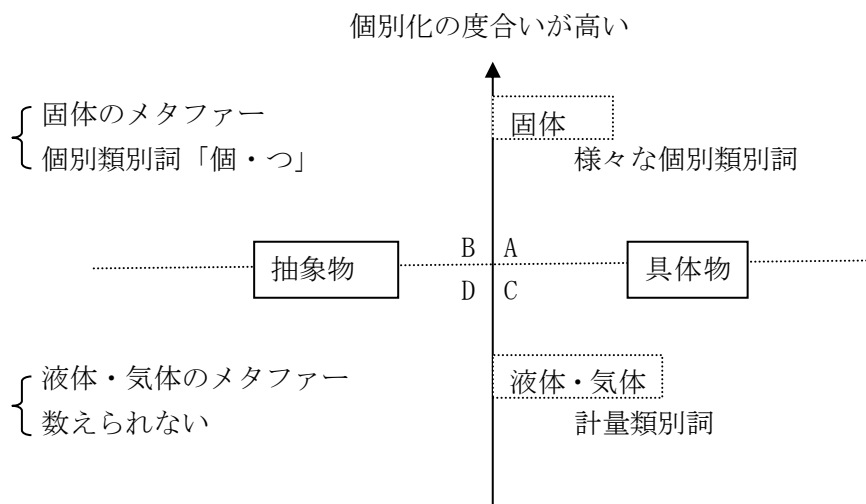


図1 対象物の認知に観察される相関関係(第4章 図1再掲)

表1 対象物の認知に観察される相関関係(第4章 表1より)

数える対象となる語の例	A 人間 ・本	B 問題 ・悩み	C 水 ・空気	D 時間・憎しみ ・愛情・自信
個別化の度合い	高	高	低	低
具体物か抽象物か	具体物	抽象物	具体物	抽象物
たくさん	○	○	○	○
多数	○	○	×	×
大量	○	×	○	×
多量	×	×	○	×

本章の考察対象である、モノ名詞の数量を表す語は表1のような体系的バリエーションをなすと考えられる。しかし、これら4語は以下の例のように同じ名詞で指される対象の

数量を表すことができる。その場合、これらはどのような違いがあるのでしょうか。

- (1) 全国規模の情報圏を支える情報通信基盤には、より**大量** (たくさん/多量/多数) の**情報**を、より早く伝達するための全国規模のネットワークの形成が要請されてきた。(BCCWJ)
- (2) 実際に船上で目視調査を行っている、沿岸域ではあまりに数多くのゴミが発見されるため記録が間に合わないことがしばしばある。特に異なる水塊が隣接する潮目では**多数** (たくさん/多量/大量) の**漂流物**が発見される。(BCCWJ)
- (3) 種子島にポルトガル人によって伝えられた鉄砲は、領主種子島時堯によって、2 挺が 2000 金の大金によって、購入されたが、これが当時この島に来ていた根来寺 (和歌山) の僧によって、根来寺に伝えられた。これは、その後堺市に移されて、ここで工場制的生産段階にまで高めて、**多量** (たくさん/大量/多数) の**鉄砲**を生産した。(BCCWJ)
- (4) 海岸では遠い昔の時代とのつながりを感じとることもできます。街から流れて海には川を通じて街の**ゴミ**が**たくさん** (多数/多量に/大量に) 流れ着きます。(BCCWJ)

## 5.2 先行研究とその検討

国語辞典類における 4 語の意味記述を確認してみよう。

### 『大辞林』(第三版)

**たくさん**：数量の多い・こと (さま)<sup>10</sup>。

**多数**：人や物の数が多いこと<sup>11</sup>

**多量**：量が多い・こと (さま)

**大量**：量の多い・こと (さま)

### 『講談社 類語辞典』

**たくさん**：数量が多い様子

**多数**：数の多い様子

**多量**：量が多い様子

**大量**：「多量」の、より口語的な言い方

### 『日本語語感の辞典』

<sup>10</sup> 『大辞林』(第三版)は、「たくさん」の意味を 3 つ記述しており、この記述は意味①である。②と③を以下にあげる。②十分なこと。もうそれ以上不要なこと。また、そのさま。「お酒はもうーです」「争いはもうーだ」③(名詞の下に付いて、「たくさん」の形で)それが十分であったり十分すぎたりするさまを表す。「子ー」「盛りー」

<sup>11</sup> 『大辞林』(第三版)は、「多数」の意味を 2 つ記述しており、この記述は意味①である。②として「他方よりも人数が多いこと。『一意見』と記述している。

- たくさん**：数量が多い意で、会話や軽い文章に使われる表現。「多い」よりくだけた感じで、「いっぱい」ほどではない。  
「人が一いる」「お土産を一もらう」「本が一ある」「一用意する」「一召し上がれ」「まだ一残っている」
- 多数**：人や物の数が多い意で、いくらか改まった会話や文章に用いられる漢語。  
「一決」「不良品が一出回る」「大一の人が賛成に回る」「一犠牲を出す」「最大一の最大幸福」
- 大量**：数や量がきわめて多い意で、会話にも文章にも使われる漢語。  
「一生産」「一に出回る」「一に購入する」「一の注文を受ける」「多量」と違い、数の多い場合にも使い、まとまった感じがある。
- 多量**：物の分量が多い意で、改まった会話や文章に用いられる硬い感じの漢語。  
「出血一」「海に一の油が浮く」「一の薬物が検出される」「一の薬を服用する」  
別に「多数」という語がある関係で、「大量」と違い、量の多い場合に限って使う傾向があり、数については用いない。「少量」と対立。

まず、『大辞林』（第三版）と『講談社 類語辞典』の記述はほぼ同じであり、両辞書の意味記述における「たくさん」、「多数」、「多量、大量」の対象は、それぞれ「数量」、「数」、「量」と記述している。しかし前節で見たように、これら 4 語は同一の対象の数量を表すことができるが、その場合どのような違いがあるかについて不明である。

両辞書の相違点は、『大辞林』（第三版）においては「大量」と「多量」の記述がほぼ同じであり相違点が不明であるのに対して、『講談社 類語辞典』は「大量」は「より口語的」としている。この意味記述から両語には文体差があると考えられる。しかし、BCCWJ を利用して検索してみると「大量」は「白書」のような改まった文体で用いられる例も多く観察できることからさらに詳しい説明が必要であると思われる。

続いて、『日本語語感の辞典』によれば、4 語には①文体差があり、「たくさん」は「会話や軽い文章」に使われ、「多数、多量」は「改まった会話や文章」に、「大量」は「会話にも文章にも」用いられるとされる。また、②「大量」は「数や量がきわめて多い意」と記述されているように、「大量」は他の 3 語よりも量程度が大であることが分かる。さらに、③「大量」は「数の多い場合にも使う」と、「多量」との違いが指摘されている。

本研究は上の三点について基本的に『日本語語感の辞典』の記述に従う。しかし、「大量」が「数」を表す場合「たくさん、多数」との違いが問題となる。また、本研究では「多量」と「大量」は抽象物に用いられにくいという制約があるがこの点については記述されていない。さらに、上述のようにこの 4 語は同一の対象の数量を表すことができることからより詳しい説明が必要である。

辞書以外では宇都宮（2001）に以下のような短い記述が見られる。宇都宮は、「数えること」の基本は「何」＋「どのくらい」であり、「どのくらい」にあたることばが「数えるこ



とば」であるとし、日本語の数えることばは「《数》+《要素》」という形をしていると述べ (p. 90)、第4章で見たように、「たくさん」について、「たくさん」は《要素》が付いていないが、明らかに「どのくらい」を表しているとし、「30 リットルの水→たくさん水」「100 本の鉛筆→たくさんの鉛筆」「1 万人の学生→たくさんの学生」をあげ、「たくさん」は「数える対象の種類を選ばない便利なことばとして捉えることができる」(p. 93)と記述している。基本的に本研究もこの指摘に従う。ただし、「たくさん」は「要素」が想定できず数を数えることも、量を測ることもできない抽象物(例「たくさんの愛情をいただいた」)についてもが用いることができる(詳しくは次節参照)。

以上の先行研究を踏まえ、5.3ではまず「会話や文章にも使われる」ということから、日常的な文体で用いられるという共通点を持つ「たくさん」と「大量」の個別の意味分析を行い、その上で相互の相違点・共通点について考察する。5.4では「大量」と「多量」について、それぞれの個別の意味と類義語分析を行う。5.5では、まず「多数」の個別の意味を記述し、「大量」と「多数」の類義語分析を行う。5.6では、「多数」と「多量」の類義語分析を行う。5.7はまとめである。

### 5.3 「たくさん」と「大量」の意味分析

#### 5.3.1 「たくさん」の意味分析

##### 5.3.1.1 別義①：<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

「たくさん」の意味を分析するにあたって、まず、「たくさん」が高頻度で共起する名詞見てみよう。NLTを利用して検索すると、「たくさん+の+名詞」の形式は出現頻度が31900である。頻度順に13位までの名詞を以下の表2に示す。

表2 「たくさん」と共起する上位頻度の名詞13語(併記の数字は出現頻度)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
人	種類	方々	情報	お客様	子供	人々	花	本	お客	思い出	お金	経験
3883	731	679	452	442	372	365	238	229	184	183	164	156

上の表から分かるように、「たくさん」と共起する名詞は圧倒的にヒト名詞が多い。「人、方々、お客様、子供、人々、お客」のように敬意を含む、含まないにかかわらず用いられる。これらのヒト名詞は、同じく上位にあがっている「花、本、お金」などと同様に私たちが直接見たり接したりする、私たちの身近に存在する具体物である。また「種類、情報、思い出」などの抽象物も観察できる。これらの抽象物は具体物ではないとはいっても、私たちが体感できる身近なものである。続いて実例を見てみよう(連用修飾用法や表2の上位13語以外の語を含む)。

(5) このように、ひとつの料理が食べられるようになるまでにたくさんの人が働いてい

- ます。 (NLT)
- (6) 本をたくさん読んでも、一回の取り引き経験に勝るものはありません。 (BCCWJ)
- (7) 水をきれいにするためにたくさんの水が必要になります。 (NLT)
- (8) できれば、今まで就いていた職場よりも楽に沢山のお金を稼ぎたい。 (NLT)
- (9) 人との交流にたくさんの時間を持ちましょう。 (NLT)
- (10) 自然食品店に行ってみると、思った以上にたくさんの種類加工品が売られています。 (BCCWJ)
- (11) 死と向かい合って私が得たものはたくさんありました。まず、周囲の人々から与えられたたくさんの愛情です。 (BCCWJ)
- (12) 小さい時からたくさんの経験をさせたいから、日程の許す限り参加させています。 (BCCWJ)

(5) ~ (8) の「たくさん」は、それぞれ「人」「本」「水」「お金」の数量に注目して話し手が一般的な基準で「数量が大である (多い)」と捉えている<sup>12</sup>。個体・連続体の区別なく用いられる。続いて、(9) ~ (11) の「たくさん」はそれぞれ「時間」「種類」「愛情」という抽象物と共起している。この中で「時間」「種類」は計量単位や助数詞を付けることによって特定して数量化することが可能である (例「3 時間」「5 種類」など)。しかし、「たくさん」は特定の形状や特徴を指定せず、「不特定な数量」を表すのであって、特定の計量単位や助数詞を想定する必要がない。このことは、「たくさん」が普通、数量化することができない抽象物である「愛情」の量を表すことから分かる。助数詞や計量単位によって数えたり測ったりすることはできないが、私たちは「愛情」の有無・多寡に注目し、「愛情」を「持つ」たり「注い」だり「感じ」たりすることから「本」や「水」など身近な具体物と同様に捉えていることが分かる<sup>13</sup>。さらに、(12) の「たくさん」は「経験」の数を表す。「経験」は、「経験が 3 回」のように回数として表現することができることからデキゴト名詞としての解釈もできる。さらに、「またわれわれの心は絶えず安易さに惑わされ、一つ二つの経験だけで型にはまった考え方をするようになる」(BCCWJ) のように「つ」でその数を数えることができる。この助数詞「つ」は、「人」や「個」同様、モノだけに適用されるもので、デキゴトにはふつう適用されない (本多 2013 : 159)。したがって「経験」はものとしての解釈も可能である。(12) においては、モノ名詞と考える。というのは、先述のようにモノ名詞とデキゴト名詞の本質的な相違は「時間の概念」、すなわち、「ある出来事や動作がどれくらい継続し、いつ終わったかといった概念」が関与するかどうかである (影山 (編) 2011 : 43)。「たくさんの経験」においては、時間概念が失われ結果 (まとめ) の量に注目しているのであって、時間の流れに沿って「経験」を数えているとは捉えられ

<sup>12</sup> この基準は、「体験的に獲得された典型値や、状況から判断してこれくらいであろうという期待値」であると考えられる (高水 2001:91)。

<sup>13</sup> NLT を利用して検索すると、「愛情が」と高頻度で共起する動詞、形容詞の 1 位はそれぞれ「ある」、「ない」である。「愛情を」と高頻度で共起する動詞は、1 位「持つ」、2 位「注ぐ」3 位「感じる」の順である。

ないからである。

このように、「たくさん」は名詞（句）として文中に現れた（あるいは文脈から想定できる）ものの数量が大であることを表す。対象の抽象度や（個体・連続体など）個別化の度合いにはかかわらない。数を数えることも、量を測ることもできない抽象物（例「たくさんの愛情をいただいた」）にも用いることができる。すなわち、前節で見たように、「数える対象の種類を選ばない便利なことば」と考えることができる。

以上の考察から、「たくさん」の別義①をくあるものの数量が><大であると捉えるさま>と記述する。

#### 5.3.1.2 別義②：くある動きの量が><大であると捉えるさま>

(13) 今日は皆でたくさん遊びました。 (BCCWJ)

(14) いつもよりたくさん勉強したご褒美に、好きなだけ食べていいよと言われても、そんなわけにはいかない。 (BCCWJ)

上の例における「たくさん」は、動詞が表す動きの量に注目している。まず(13)の「たくさん」は「遊ぶ」という動き、(14)は「勉強する」という動きそのものに注目し、その量を大であると捉えている。

#### 5.3.1.3 別義③：く話し手が体験したある量が><それだけで十分であると捉えるさま>

(15) 神のこと、罪のこと、救い主のことについて順番に話す際、むやみに多くの聖句を引用してはかえって迷わせる。一つの題目に関して一つの引照で十分であると思う。例えば神のことについては、ローマ書一章18～20節でたくさんである。(NLT)

(16) いわゆる原始時代には人間は食べるために三時間ほど働けば十分だったという。

(BCCWJ)

(15)は、「神のこと」について引用する「聖句」の量を、引用するべき量に対して「ローマ書一章18～20節」だけで十分であると捉えている。「十分」とは「必要量・許容量を満たす余裕のある状態」(森田 1989:535)である。また、「むやみに多くの聖句を引用してはかえって迷わせる」という表現から、それ以上は必要ないと捉えていることが分かる。つまり、別義③の「たくさん」は「必要量・許容量」という基準が想定され、対象となる量がそれだけでその基準を満たすと話し手が捉えていることを表す。

ただし、「十分」が用いられる例を見ると、「たくさん」に置き換えることができない場合が多い。たとえば、(16)の「十分」は「三時間ほど」という時間の量をそれだけで十分であると捉えているが、この「十分」を「たくさん」と置き換えると容認度が下がる。これは(16)の「十分」は、「原始時代」における知識上の事柄を述べているのであって、話し手の体験を前提とした、話し手の心的態度を述べるのではないからであると思われる。

すなわち別義③の「たくさん」は、話し手の直接体験を前提とした、ある量に対する話し手の心的態度を表す主観的な表現であると考えられる。この「たくさん」が話し手の心的態度を表す主観的な表現であることは、「たくさん」が「たくさんだ」という叙述形式で用いられ、否定文（例「\*今日はそれでたくさんではありません」）や疑問文（例「\*あなたはそれでたくさんですか」）など、他の形式では用いられにくいことから窺える。

#### 5.3.1.4 別義④：

〈ある事柄に対して〉〈それ以上受け入れられない状態にあると捉えるさま〉

- (17) 貧困、そして混乱！ぼくは苦しきのあまり涙を流しながら、つぶやいていた。「もうたくさんだ！これ以上は我慢できない！」と。 (BCCWJ)

(17) の「たくさん」は、「貧困、そして混乱」による「苦しい」という状態を、それ以上受け入れられないものとして捉えていることを表す。そのように捉えるまでには、話し手が問題となる状態や出来事を継続して（繰り返して）経験していることが前提となる。このことは「これ以上は我慢できない」という表現からも窺える。別義④は「～はもうたくさんだ」という形式で用いられる例が多く、話し手のマイナス評価の心的態度を表す。

以上、「たくさん」は4つの多義的別義を持つ多義語であることを記述したが、別義③と別義④は「たくさんだ」という叙述形で用いられ話し手の心的態度を表す。その場合、「大量、多量、多数」などと置き換えができないことから、次節以降において、別義①と別義②について類義語分析を行う。

#### 5.3.1.5 別義間の関連性

本節では、4つの別義間の関連性について考察する。

まず、別義①と別義②の関連性について考察する。意味①では、ものの量を表す「たくさん」が、別義②では動きの量を表す意味へと拡張している。本来ものを表す形式でことを表す意味になったが、ともに数量大を表すという共通点（スキーマ）がありこの点で2つの意味は類似している。従って、この意味拡張はメタファー（第3章参照）に基づくと考えられる。捉えにくい動きの量を捉えやすいものの量に基づいて理解しようとする人間の認知プロセスを示していると考えられる。

別義③と別義①は時間的隣接関係が認められることから、メトニミー（第3章参照）に基づく意味拡張であると考えられる。というのは、通常我々は外界の対象に対して、感覚器官などを通してただ単に知覚するだけではなく、さらにその対象について、深く理解したり、何らかの判断を下そうとする場合が多いと考えられるからである。つまり、別義①では、話し手は、視覚などの感覚によって知覚する対象の量を大であると捉えているが、別義③では、さらに進んで、それだけで十分であると判断している。すなわち、本来は、数量大を表す「たくさん」という表現で、これに時間的に後続（隣接）する、「それだけで

十分である」という意味を表していると言える。

なお、別義③と別義①は必ずしも明確に区分できるわけではない。これについて少し補足すると、田中（1999）は「見る」の持つ「視覚によって対象を認知する」（例「走りながら空を見た」）意味と「対象を視覚的に認知し、さらにより高次の理解・判断を行う」（例「イルカの知能がきわめて高いことは、シャチの曲芸を見てもわかる」）意味の連続性について次のように述べている。

（2つの意味の）境界も明確ではない。人は何かを見ると自然にその対象を必要な限りどこまでも理解し、判断し、評価しようとする。対象をあるカテゴリーのものとしてその存在を認知しそこで止まるか、それともその対象に注意を集中してさらなる判断を下そうとするかは、見る主体の関心のありようや必要性によってさまざまなケースがありうる。  
（田中 1999：62）

このように、「たくさん」の別義③は、別義①と切れ目なく連続しているものと思われる。

さらに、別義③の「たくさん」は「それだけで十分である」という意味を表すが、別義④は問題となる状態や出来事をすでに十分に継続して（繰り返して）経験したことが原因となって「それ以上受け入れられない」という話し手の心的態度を表す。つまり、別義③と別義④は原因と結果の関係にあり、関連性に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。このように、「たくさん」の別義④は、別義①、別義③と連続しているものと思われる。

また、この意味拡張は「数量が大である」から「それだけで十分である（それ以上必要ない）」、さらには「それ以上受け入れられない」へと、数量の多さを機縁として含むフレームの異なる段階に焦点がシフトしていることに基づくと考えることができる。

「フレーム」とは、日常の経験を一般化することによって身につけた、複数の要素が統合された知識の型のことである（靱山 2010：86）。靱山（2010）は、「適切なフレームを設定することによって、一連の言葉の相違点を、フレーム内のどの要素、あるいはどのような要素間の関係に焦点を当てるのかの違いとして明確に把握することができる」と述べ（p. 93）、メトニミーはフレームの観点から説明することもできると指摘している（p. 92）。たとえば、「（お）手洗い」は、本来は＜用便＞のあとに行う＜手を洗うこと＞を表すが、時間的な隣接関係に基づくメトニミーによって、＜手を洗うこと＞の前に行う＜用便＞（さらには、＜用便するところ＞）を表すことができる（pp. 46-47）。このことを「トイレ」のフレーム（「トイレに入る→排泄する→手を洗う→トイレから出る」）に基づいてあらためて考えると、「手を洗う」ことから「排泄する」ことに焦点がずれる（シフトする）ことと考えることができると説明している（p. 92）。

「たくさん」の場合も、「数量が大である」ことを機縁として含むフレーム、すなわち、「数量が大である→それだけで十分である（それ以上必要ない）→それ以上受け入れられない」の異なる段階に焦点がシフトしていることに基づくと考えることができる。

以上をまとめると、図2のように表すことができる。

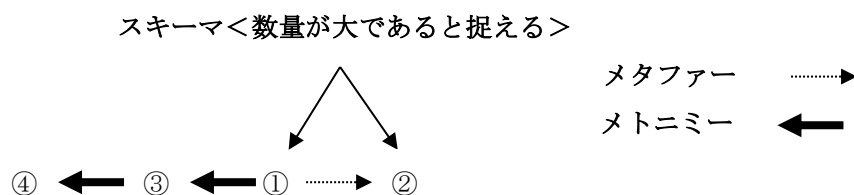


図2 「たくさん」の多義構造

### 5.3.2 「大量」の意味分析

まず、「大量+の+名詞」の形式において「大量」と共起する名詞を見てみよう。NLT を利用して検索すると、「大量+の+名詞」の形式は出現頻度 18238 である。頻度順に 14 位までの名詞を以下の表3に示す。

表3 「大量+の」に共起する上位頻度の名詞14語（併記の数字は出現頻度）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
水	デー タ	情報	放射	汗	放射 線	ごみ	エネ ル ギー	土砂	資金	放 射 能	出血	メー ル	水分
810	439	362	323	258	181	180	160	157	147	145	140	129	110

上の表から分かるように、「大量」は「水」「汗」といった液体や、「放射線、ごみ、土砂」のような特定の形態をもたない均質な存在、つまり連続体と共起する例が圧倒的に多く観察できる。連続体は、特徴的な形や明確な境界線、内部構造を持たない均質なくモノ>として捉えられる（深田・仲本 2008：215）。また、これらは空間に存在する具体物である。さらに、「データ、情報、資金」といった抽象物も観察できるが、これらは抽象物とはいえ具体的に計量類別詞によって数量化できるものである。ただし、「大量」は「人」のような（特徴的な形と明確な境界線、内部構造を持った）個体を表す名詞とも問題なく共起する。実例を見てみよう（連用修飾形や表3の上位14語以外の語を含む）。以下の例はすべてBCCWJとNLTからの引用であるが、ジャンルの参考のために出典を記す。

- (18) もっとも気候が暖かい現在は、週末にもなるとビーチに大量の人が観光も兼ねて押し寄せてくる。  
（書籍『えっせい』人間化学研究所(NLT)）
- (19) ニュースになったりもしましたが、大量の本は床をズチ抜きます。  
（本を捨てたくない。。。でも整理はしたい！という人のための「捨てない整理術（収納術）」 - シンプルモダンインテリアスタイル.net(NLT)）
- (20) フロッピーディスク装置などの周辺機器の高性能化により、大量のデータを迅速

に処理できるようになったこと。 (『中小企業白書』(BCCWJ))

(21) 一方、8月以降、中南米諸国において株価が急落し、**大量**の**資金**が流出した。

(『外交白書』(BCCWJ))

(22) IC のもうひとつの特長はこれが著しい量産効果をもっていることだ。はじめの1個の費用は10万ドルかかるが、2個目からは5セントがかかるだけだなどといわれる。つまり、装置工業の製品なのである。そこで、ゆるがせにできない点は、いかにして**大量**の**需要**を確保するかということだ。

(<http://www.nawa-k.info/doc2.html> (NLT))

(23) 近所のおばあさんから**ゴーヤ**を**大量**に戴きました。 (Yahoo!知恵袋(BCCWJ))

(24) ぼくはただちにスーパーマーケットにおもむき、**コンニャク**を**大量**に購入することにした。コンニャクを**五枚**買い求めた。(書籍『なんたって「ジョージ君」』(BCCWJ))

(25) メガフロートには巨大な空間があるので、非常用発電設備、医療設備、**大量**の**水**や食糧などを用意しておくことができ、その中には2万人までの避難者を受け入れることができる。(書籍『技術社会関係論』(BCCWJ))

(26) 瓶、缶類を買いだめする必要がなくなりました。それに代わって、最近の傾向としては**大量**の**ミネラルウォーター**を常備する家庭が増えています。

(書籍『Dr. コパのまるごと風水事典』(BCCWJ))

(18) (19) の「大量」は、それぞれ、「人」「本」の数量が著しく大であることを表す。これらの名詞の指示対象は、普通、特徴的な形と明確な境界線、内部構造が認められる個体であるが、(18) (19) においてはその特徴的な形と明確な境界線、内部構造が際立たない。たとえば(18)の「大量の人」は「押し寄せる」と共起している。「押し寄せる」は「多くの人やものが勢いよく迫って行く。また、迫って来る。」(『大辞林』(第三版))と記述されるが、NLB を利用して検索すると、共起する頻度が最も高い語は「波」である<sup>14</sup>。人の集まりは、境界領域を持つ個体の成員からなる集合である。しかし、「大量の人」は個々の「人」に注目せず、この複数の個体の集合を「波」と同様の連続体として認知し、複数の個体全体のダイナミックな動きを叙述している<sup>15</sup>。同様に、(19)の「本」も「床をブチ抜きます」という表現から分かるように複数個体全体(の重量)に注目しているのであって、個々の本には注目しない。すなわち、「大量」で表される対象は内部構造が際立たない連続体として捉えられている。

「個体」が「連続体化」する条件として、池上(1983:246)は「(数が無限に多くなったり、大きさが無限に微小になったりして)際立たなくなる」と述べている。上の例にお

<sup>14</sup> NLB を利用して検索すると「が押し寄せる」の頻度は365で、共起する名詞は頻度が高い順から①「波」(頻度67)②「人」(頻度18)③「客」(頻度14)であった。

<sup>15</sup> 山梨(1995:125 下線は原文のまま)は「この大阪駅へ、群衆は、押し寄せては、また四方へ流れ出てもいる。」という文について、「人の集まり(この場合、群衆)は、境界領域をもつ個体の成員からなる集合である。しかし、われわれは、この複数の個体の集合を液体と同じように連続体として認知し、この後者のイメージに基づいて複数の個体全体のダイナミックな動きを叙述している」と記述している。

いて「大量」で表される「人」や「本」は数量が（大であることから）連続体化する条件を満たすと考えられる。

さらに、(20)～(22)の「大量」は、それぞれ「データ」「資金」「需要」という抽象物の数量（が大であること）を表す。ただし抽象物は、先述のように、具体的に計量単位で表すことが想定できる一部の名詞に限られる。たとえば、(20)の「データ」は「パソコンの世界では8ビットを1バイト(byte)と定義して、データの大きさをこの「バイト」と云う単位で表します」<sup>16</sup>のように計量単位で表すことができる。同様に(21)の「資金」もたとえば「3億ドル」のように単位で表すことができる。(22)の「需要」は、具体物である製品「IC」の数量を表す。このように「需要」は商品の数量や金額として助数詞や計量単位で表すことが想定でき、その有無・多寡が問題となる語である<sup>17</sup>。

一方、(23)(24)の「大量」は、それぞれ「ゴーヤ」「コンニャク」の量を表す。(23)(24)において、これらは明確な輪郭を持つ個体と想定でき、その個数を数えることができると考えられる。たとえば「ゴーヤ」は、「近所のおばあさん」から「戴いた」量であり、いくら多くても手に取って数えることができる程度であると思われる。同様に、「コンニャク」も「5個」にすぎない。これらは、くだけた、話しことば的な文体であり、大げさに強調されていると感じられる。この「強調」の意味は、「ゴーヤ」や「コンニャク」が、明確な境界を持った個体であり、文脈と私たちの持つ世界の知識から、いくら多いとはいえ「大量」が用いられるほどでもない量である（無標の表現として「たくさん」が用いられると考えられる）と想定できるのに「大量」が用いられていることにより生じると思われる。つまり「ゴーヤ」や「コンニャク」の数量が、上述の連続体化する条件に当てはまるとは想定できないにもかかわらず「大量」が用いられているため、おおげさであると感じられると考えられる。一方、(18)(19)においては、書籍からの引用であって、(白書のような)改まった文体ではないが、それぞれ「人」と「本」の量が著しく大であると想定でき、「大量」が大げさに強調する用法で用いられているとは特に感じられない。

また、(20)(21)は「白書」からの例文であり、最も改まった文体であると言える。(20)(21)においては、著しく大きい量を表すと解釈でき、大げさに強調されているとは感じられない。したがって、「大量」は、くだけた文体において量を大げさに強調する用法と文体差に関係なくその量が著しく大であることを表す用法があると考えられる。ただし、大げさに強調する用法かどうかの判断はあくまでも私たちの持つ世界の知識によるものであり、明確に区別できるものではない。以上の考察から、「大量」の意味を以下のように記述する。

(27) 「大量」の意味：＜具体物の数量が＞＜（個別性が際立たないほど）著しく＞  
＜大であると捉えるさま＞

<sup>16</sup> [http://www.1101.com/dictionary/hobojisyo/data\\_tanni.html](http://www.1101.com/dictionary/hobojisyo/data_tanni.html)

<sup>17</sup> NLBを利用して検索すると「需要が」と共起する述語は、頻度が高い順から「ある」「高まる」「増える」であった。



「個別性が際立たないほど」が括弧に入っているのは、「大量」は、対象の個別化の度合いにかかわらず用いることができるが、この記述は（もともと個別性の際立たない連続体ではなく）個別化の度合いが高い具体物（個体）を表す場合に限るからである。

池上（2007）は、可算の名詞が不可算に解釈されるプロセスとして、「連続体化」と「抽象化」の2つのプロセスをあげている。前者は、複数の個体からなる集合体が認知的に均質な連続体として再解釈されるプロセスである。後者は、本来的には具体的な個体を指示する表現として使われる名詞が、一般的（ないしは総称的）な意味として再解釈されるプロセスである（山梨 1995:123 より再引用）。典型的に連続体を対象とする「大量」が、まぎれもない個体である「人間」や「本」などの量を表すことができるのは、前者の「連続体化のプロセス」に関わると考えられる。

### 5.3.3 「たくさん」と「大量」の類似点と相違点

前節の意味分析に基づき、本節では「たくさん」と「大量」の相互の意味の共通点・相違点について考察する。

まず、両語の共通点は対象の個別化の度合いに関わりなく数量大を表すことである。相違点として、文体差がある。第4章の下位分類で見たように、先行研究において、改まった文体においては「たくさん」は用いられにくいという指摘があった。下の(28)のように、最も改まった文体的特徴が認められる（宮内 2012）とされる「白書」においては「たくさん」は用いられにくい。このことから、基本的に「たくさん」は日常的な文体で用いられると考えられる。一方、「大量」は改まった文体で用いられるとはいえ、日常的な文体でも広く用いられ、その量が著しく大であることを表す。ただし、前節で見たように「大量」はくだけた文体において量を大げさに強調する用法がある。さらに詳しく見てみよう。

(28) 押収量としては史上第2位の洋上取引による覚せい剤約151キログラムを押収したが、大量（\*たくさん）の覚せい剤の密輸手口としては引き続き洋上取引が目立った。 （『警察白書』(BCCWJ)）

(29) ぼくはただちにスーパーマーケットにおもむき、コンニャクを大量に（たくさん）購入することにした。コンニャクを五枚買い求めた。 （書籍(BCCWJ)）(= (24))

(30) くすりはたくさん（\*大量）の水で飲みましょう。  
（「知っておきたいくすりの知識 和歌山県ホームページ」(NLT)）

(28) において、「大量」は「覚せい剤」の量を表すが、「たくさん」に置き換えることは難しい。その理由は、まず文体差がある。「白書」においては「たくさん」は用いられにくい。他方「大量」は文体差に関係なく用いられる。ただし、(29) のようにくだけた文体において大げさに強調する用法の場合、「大量」を「たくさん」に置き換えることはできるがその表現効果は異なる。「たくさん」は、日常的な文体においてものの量が

であることを表す無標の表現であって、大げさに強調するといったニュアンスは感じられない。

また、このことから「大量」と「たくさん」には数量の程度差があることが分かる。というのは、(29)において「たくさん」が無標の表現であると捉えられるのに対して、「大量」が大げさな強調表現であると捉えられるのは、先述のように、「五枚」は、「大量」を用いる条件、つまり（数が無限に多くなるという）個体が連続体化する条件にあてはまらないにもかかわらず用いられているためと説明できるからである。「大量」が「たくさん」よりもさらに大きな量を表すことは、(30)において「たくさん」を「大量」と置き換えることができないことから分かる。

ただし、両語が表す対象には、程度差とともに質の差も認められる。以下の例を見てみよう。

(31) 2016年リオデジャネイロ五輪・パラリンピックの大会組織委員会は3日、運営に携わるボランティアの参加申し込みが10万人を超えたと発表した。(略) 組織委の担当者は「非常にたくさん (\*大量) の人々が南米初の五輪とパラリンピックに携わり、興奮を共有したいと希望していることを幸せに思う」とコメントした。

(朝日 2014/10/04)

(32) 実験に使った人間や馬は焼却炉で処理された。丸太を運搬する引込み線までつくられていたから、大量 (たくさん) の人が殺され、跡形もなく始末されたのだ。

(BCCWJ)

(31) の「たくさん」は「(ボランティアの参加申し込みをした) 人々」の数を表す。「非常に」という程度副詞を伴っていることから「たくさん」より程度が大であり、「10万人を超えた」ということから著しく大であると想定することが可能である。「たくさん」と「大量」の違いが程度差のみであれば、「非常にたくさん」を「大量」に置き換えが可能であろうと思われるが上のように置き換えが難しい。(31) は「ボランティアに参加申し込みした」ということから自ら意志を持って行動する人間であることが分かる。すなわち「たくさんの人々」は人間らしい特徴を持つと考えられる。つまり、ここで「大量」を用いることができないのは、人間らしい特徴が際立つからと考えられる。これに対して、(32) の「大量」が「人」を表すことができるのは、「実験に使った人」であり、「殺され、跡形もなく始末された」物レベルの人間であり、人間らしさが際立たないからと考えることができる。このように「大量」と「たくさん」の表す人間は、数量の程度差のみならず、人間らしさの際立ちの程度も異なる、つまり質の差があると考えられる（詳しくは第7章）。

さらに、文体差、程度差とは別に具体物か抽象物かの区別がある。「大量」の対象は何らかの助数詞や計量単位が想定できるものであった。つまり、(ある程度) 具体的で客観的な量であると捉えることができる。一方、「たくさん」の対象には(33)のように助数詞や計量単位が想定できないものも含まれる。

(33) 死と向かい合って私が得たものはたくさんありました。まず、周囲の人々から与えられたたくさん(\*大量)の愛情です。 (= (11))

(33) において「たくさん」は「愛情」の量を表している。5.3.1.1 で見たように「愛情」は、「与える」ことや「持つ」ことができるとはいえ、客観的にその量を測ることが不可能な抽象物である。この「たくさん」を「大量」に置き換えることができないのは、「大量」は、典型的に空間に存在し、数量を測ることが想定できる存在物の量を表すのであって、測ることが想定できない「抽象物」を表しにくいからである。すなわち、「たくさん」と「大量」は具体物か、抽象物かの差も認められる。

以上、「大量」と「たくさん」は文体差、程度差の他に、質の差、具体物・抽象物の差が認められることを述べた。

## 5.4 「大量」と「多量」の意味分析

### 5.4.1 「多量」の意味分析

「多量」の意味を分析するにあたって、まず、「多量」と高頻度で共起する名詞見てみよう。NLT を利用して検索すると、「多量+の+名詞」の形式は出現頻度が 2849 である。頻度順に 14 位までの名詞を以下の表 4 に示す。

表 4 「多量+の」に共起する上位頻度の名詞 14 語 (併記の数字は出現頻度)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
水	出血	水分	飲酒	汗	発汗	アルコール	放射線	降 雨	雨	放射	血液	場合	情報
186	80	72	71	54	50	48	47	34	33	32	30	29	29

上の表から分かるように、「多量」と高頻度で共起する名詞は「水、汗、アルコール、放射線<sup>18</sup>」などの連続体（液体、気体、粒子など）である。これらはその量を測ることが想定できる具体物であり、「リットル、ベクレル」といった計量単位で表すことが想定できる。

また、上述のように抽象物より具体物が圧倒的に多く観察できる。上の表において抽象物は「場合」と「情報」がある。この中で「場合」は、「出血多量の場合 (に) は」の形式で圧倒的に多く用いられ、「出血」の量を表す。すなわち、「場合」と共起する「多量」は連続体の量を表すと解釈できる。ただし、合成語の意味は、構成要素の意味を足し合わせた以上の意味を持っている場合が多い (靱山 2010 : 11) ため、本研究においては考察対象外とする。

一方、「情報」は「情報量」という語があるように、量 (の多寡) が問題になる語である。さらに「情報」は、多くは文字や画像などで記録され、書類やコンピューターなど記

<sup>18</sup> 放射線とは、「運動エネルギーを持って空間を飛び回っている小さな粒 (素粒子)」(公益財団法人放射線影響研究所 <http://www.rerf.jp/general/whatis/index.html>) である。

憶媒体で保存されることから、書類の量や (MB (メガバイト)、GB (ギガバイト) といった) 情報量の単位によって具体的で客観的な量として捉えることが想定できるため、抽象物とはいえ具体物と同様に捉えやすいと考えられる。以上のことから、「多量」と共起する対象は、典型的に、化学的な知識を含む専門的な知識によってその量を測ることが想定できる連続体の具体物であると考えられる。

これに対して、「憎しみ、愛情」といった抽象名詞は「満ちる、あふれる」と言えることから、(固体や気体など) 連続体のメタファーを持つ (4.2.1 参照)。ところが「多量」との共起が難しい (「\*多量の憎しみ・愛情がある」)。これらの量を表すには、前節で見たように「たくさん」が用いられる。このことから「多量」の対象は空間に存在し助数詞や計量単位で測る必要がある具体物が典型であることが支持される。

本多 (2013) は、「同じモノでも、違う捉え方で捉えれば、それを指し示す言語表現は違う意味になる」と記述し (pp. 151-152)、「塩化ナトリウム」はそのモノを化学的な知識に基づいて捉えた語であり、それに対して「しお」は、そのモノを日常的な知識に基づいて捉えた語である、と記述している (p. 151)。本多の説明に沿って考えると、「多量」は、典型的には化学的な知識を含む専門的な知識に基づいて量を捉える表現であるのに対して、「たくさん」は日常的な知識に基づいて量を捉えた語であると言えよう。

さらに、「多量」が有情物 (人間、動物) を表す例は、前章で述べたように BCCWJ の検索では、人間 5 例、生物が 1 例のみであり<sup>19</sup>、「多量」は有情物と共起は難しいという選択制限があると考えられる。続いて実例を見てみよう (以下の例は、連用修飾形や表 4 の上位 14 語以外の語を含む)。

- (34) 水こそすべての化学物質のなかで最も多量に存在し、砂漠以外では最も簡単に入手でき、最も化学的に研究が行われた化合物である。 (BCCWJ)
- (35) 人好みの味に作り変えた、おしゃれに言えば、グルメのカレーである。味のベースは、多量の玉ねぎ、これをバターでソテーし、ゆっくり甘味を引き出す。 (BCCWJ)
- (36) 多量の情報を集めた後、1つのラベルに1つの情報を書き込み、すべてのラベルを無作為に広げ、類似するものを集めて表札をつくるという作業を繰り返し、最終的に図式化、叙述化を行う。 (BCCWJ)

<sup>19</sup> 以下の例が観察できるが、人間を表す①～⑤の「多量」は筆者には違和感がある。⑥は小動物である。  
①したがって、千葉局という一つの局が総武線というのを中心に、そこに非常に多量のお客さんを抱えておると、しかしその他閑散線区も抱えておる。  
②しかしいずれも永続的な政府の出先の施設はなく、蝦夷の族長がコホリの長であり、多量の他域からの移住者もないという点で柵中心のコホリとは違っていた。  
③これだけ多量の石垣をわずか四年で積むのである。ありとあらゆる石材を用意し、多量の技術者をもって全体に一気に積むのである。  
④その点、ドイツ大学はもっと多量の科学者を生み出した。  
⑤それでは大いに物議をかもす結果になろうし、またかれらにかわる 多量の有能な文官を即時に補充しようと思っても、適当な人的資源が見つからないのである。  
⑥湖ハゼ (汽水性ハゼでウキゴリ属の一種) や、幻のトンボといわれているナゴヤサナエの多量の生息地でもある。

- (37) そうなるとこれ以後、同じ量の原料産物が以前より多量の製造品と等価になり、土地所有者は以前よりも多量の便益品や装飾品や贅沢品を入手できるようになるわけである。 (BCCWJ)
- (38) 私はひどく心を傷つけられた。夜は眠れなくなり、だんだん多量 (?大量)の睡眠薬を飲むようになった。 (BCCWJ)
- (39) この酵素系が喫煙によって活性化されると、薬によっては相互作用がおり、薬物代謝が促進されて、薬効が低下したり、薬の持続時間が低下したりすることがあります。とくに多量 (一日二十本以上)の喫煙者ではこの相互作用が頻繁におこるとされています。 (BCCWJ)
- (40) 自然体系の崩壊により最も被害を受けたアマラ州の農民は、「食」を求めてバグダードに多量 (大量)に流出した。 (BCCWJ)

(34) の「多量」は「水」の量が大であることを表す。この例において「水」は「化学物質」や「化合物」として捉えられていることから、「多量」が化学的な知識に基づいて捉える表現であることが分かる。

さらに、(35)～(38)の「多量」はそれぞれ、「玉ねぎ」「情報」「製造品」「睡眠薬」の(数)量が大であることを表す。

先述のように、これらの「多量」の対象は個体としても解釈が可能である。たとえば、(35)の「多量」は「玉ねぎ」の量を表す。「玉ねぎ」は明確な輪郭を有する個体であるが、ここではその輪郭は失われ、話し手は均質な「素材」としての全体量に注目している。

池上(2007:144)は「<個体>は一定の輪郭を有しているのであるから、その認知に際しては当然その<形態>に注意が向けられよう。<連続体>の方にはそれを特徴づける一定の形はないのであるから、何らかの形を与えられる前の<素材>という点での注目が際立つことになろう」と述べている。この記述をもとに考えると、(35)の「玉ねぎ」が個体ではなく連続体として解釈できることから、「多量」は「個体」を背景化し「素材」を際立たせる表現であることが分かる。同様に、(36)の「多量」は「情報」の量を表すが、話し手は情報の一つ一つにではなく、「何らかの形を与えられる前の素材」としての量に注目している。「情報」自体は抽象物とはいえ、後続する「1つのラベルに1つの情報を書き込み」という表現からも分かるように、他の種類との差異化ができ輪郭を有するものとしてその数を数えることもできる。しかし、(36)においては差異化される以前の「情報」の全体量に注目しているのであって、個々の情報の輪郭は不明瞭に捉えられている。

さらに、(38)の「睡眠薬」も(「粒」「錠」などで)数えることができる個物として数えることができるが、ここでは素材としての全体の量に注目している。薬を使用する場合、当然、個数よりも全体の量がまず重要な情報となろう。このように、「多量」の対象は(圧倒的に物理的な「個体」よりも物理的な「連続体」の頻度が高いが)物理的に個体か連続体かにかかわらず、あくまでも「明確な輪郭を持たない均質なまとまり(=連続体)」と

して捉えるかどうかという、話し手の捉え方に関わると言える。

また、(40)の「多量」は「(アマラ州の)農民」というヒト名詞の数量を表すが、「流出した」という表現から分かるように、「個体」というよりもむしろ「連続体」と捉えられていることが分かる。つまり、「多量」は有情物と共起は難しいという選択制限があると考えられる。

ところで、(34) (37)の「多量」はそれぞれ「すべての化学物質のなかで最も」「以前より」という表現から分かるように、比較の基準が明示され、「他の化学物質の量」や「以前(の製造品)の量」という基準に比べての相対的な量を表している。同様に(39)の「多量」は「喫煙者」の量ではなく、喫煙(するタバコの)量である。つまり「喫煙量が多量である喫煙者」と解釈できるが、これも「一日二十本以上」という表現から分かるように喫煙量が単独で大であることを述べるのではなく、「一日二十本」という基準との比較において相対的に「多量(の喫煙者)」と判断している。このように基準が明示あるいは想定される場合、「(～より)多量」であるという判断は誰においても同一であり、客観的な基準である。これに対して(36) (40)において、それぞれ「情報」「農民」の量を「多量」と判断する基準は話し手による主観性の高い基準であり基準が際立たない。

ここで判断の基準について考えると、「多量」を用いる際にはもちろん、話し手が何らかの基準と比較して対象の量がその基準を上回っていると捉えている。つまり、基準が明示されておらず、具体的な基準の想定も難しい(36) (40)のような例においても話し手は何らかの基準を設定している。これらの例において「多量」は、全体の中の割合や他の構成要素との比較のような、文中に示される、あるいは文脈的に想定される基準に基づく相対的・客観的な判断ではなく、先述の「体験的に獲得された典型値や、状況から判断してこれくらいであろうという期待値」(高水 2001:91)のような一般的な基準との比較に基づく主観性の高い判断である。

このように、「多量」には、判断基準が明示(あるいは想定)され、相対的な量を表す用法と、明示されない(独自に量を表す)用法の2つのタイプがあることが分かる。前者は基準の際立ちが高いタイプであり、後者は際立ちの低いタイプである。この基準の際立ちは文脈によって連続的・段階的であり、私たちの持つ世界の知識によるところが大きい。以上の考察から、「多量」の意味は以下のように記述できる(ただし、この意味記述は類義語分析の結果を反映させ、次節で修正する)。

- (41) 「多量」の意味：<個別化の度合いの低い><有情物を除く具体物の数量が>  
<大であると捉えるさま>

#### 5.4.2 「大量」と「多量」の共通点と相違点

「大量」と「多量」の違いについて、先述の『日本語語感の辞典』が指摘するように、「多量」は改まった文体において、「大量」は改まった文体とくだけた文体の両方で用いられる

点と、「大量」は数や量のきわめて多い意であるという2点について本研究も基本的に同じ立場である。さらに同書は、「多量」は「大量」と違い、量のみを使い、数については用いないと記述しているが、本研究ではこの点についてさらに詳しく検討する。そして、前節で確認したように、有情物との共起についての違いがあることを指摘し、その理由についても考察する。さらに、両語は抽象物とは共起が難しいという共通点があると思われるが、この点に関しては記述がない。そこで、本節では文体と程度以外の両語の共通点・相違点をさらに詳しく考察する。

先にあげた表3と表4を比較してまず分かることは、「大量」と「多量」に共起する名詞の共通性である。最も頻度が高い語はともに「水」であり、この他に6語（「情報、放射、汗、出血、水分、血液」）が共通している。これらの名詞の指示対象物は個別化の度合いの高い個体ではなく、連続体である。また、ギガバイト、マイクロシーベルト、リットルといった計量単位や計量類別詞で表す（測る）ことが想定できる具体物である。逆に、前節で見たように、（たとえば「勇氣、愛情」といった）計量単位や計量類別詞が想定できない抽象物は観察できない。このことから、両語の指示対象物は概ね共通しており、典型的には、計量単位や計量類別詞で表すことが想定できる連続体の具体物であると言える。以下の例を見てみよう。

- (42) とくに多量（一日二十本以上）の喫煙者ではこの相互作用が頻繁におくとされています。 (= (39))
- (43) 私はひどく心を傷つけられた。夜は眠れなくなり、だんだん多量（?大量）の睡眠薬を飲むようになった。 (= (38))
- (44) それは、彼らが食べていた植物性食品の性質による。デンプン質の穀物はほとんど食わず、果物や野生のイモ類をかなり大量に食べていたのだ。また、ビタミンCを大量（多量）に含む臓物を食べていたためでもある。彼らが摂っていたビタミンCの量は、現代のアメリカ人の平均摂取量の五倍だった。 (BCCWJ)
- (45) 黄銅は銅と亜鉛の合金で真鍮とも呼ばれ、最も大量（多量）に工業的に使われる合金です。 (BCCWJ)

先述のように、「多量」は基準となる量に注目している。たとえば(42)の「多量」は、喫煙者のたばこの量が「一日二十本」という基準に比べて大であることを述べるのであって、単独で量が大であることを述べるのではない。同様に、(43)の「多量」も「だんだん」という表現から分かるように基準（以前の睡眠薬の量）との比較による相対的な量を表すのであって、「大量」に置き換えが難しい（私たちの世界の知識から「大量」の睡眠薬を飲むと生命に関わると考えられることからこの文脈では不自然な表現になると思われる）。このことは、「普段よりは多量（\*大量）に飲んだがわずかであった」とは言えるが、「大量」とは言いにくいことから確認できる。

すなわち、「多量」は、前節で見たように、相対的な量を表すことができ、数量がある基準に照らして大きければ、どの程度に大きくても「多量」ということができる。これに対して、「大量」は「多量」の範囲のうちの、特に程度の大きい部分しか示すことができないと考えられる。

ただし、「大量」が比較の文脈で用いることができないというわけではない。(44)の「大量」は「ビタミン C」の量を表すが、(文中に明示されていない)一般的な食品に含まれるビタミン C の量と比較して著しく大きな量を表すと捉えられる。後続する「平均摂取量の五倍」といった表現からも、絶対量の大きさが自然に想定できる。(45)の「大量」も「最も」という比較を表す副詞と共に起している。(44)(45)における「大量」は「多量」と置き換えることができるが、「多量」よりもさらに著しい量であると捉えられる。つまり、「多量」と「大量」はともに比較の文脈において用いることができるが、比較表現の場合、「多量」は他方を数量的に上回るの意であって、必ずしも絶対的な多さを意味するものではない。これに対して、「大量」は絶対的に大きな数量を表すという点において異なるということができる<sup>20</sup>。「多量」と「大量」が相互に置き換え可能な例においても、「大量」の方が量が大きであると感じられるのはこのためであると考えられる。以下の例においても「多量」と「大量」は置き換え可能である。

(46) 洗淨液の量 洗淨圧と同時に大切なことは、できるだけ大量の洗淨液を使うことです。それほど高い圧でなくても多量 (大量)の水を使えば、有効な除菌効果が得られるというデータもあります。(BCCWJ)

(46)において、「多量」は「水」の量を限定している。これらの「大量」と「多量」を相互に置き換えた場合、量は「大量」が「多量」を上回ると捉えられる。つまり、連続体の量を表す場合、両語は量程度の差が認められる。

しかし、量程度の差とは別に両語には決定的な違いがある。NLTを利用して検索してみると、「大量」では「人」をはじめとして、「失業者、敵、難民、労働者」といったヒト名詞が観察できるが、「多量」ではわずかに「女性」と「労働者」各1例が観察できるのみである<sup>21</sup>。人間は典型的に個別化の度合いの高い個体である。实例を見てみよう。

<sup>20</sup> 森田(1989)は、「多い」と「たくさん」の相違点について「比較表現の場合、『多い』は他方を数量的に上回るの意であって、絶対的な多さを意味するのではない。この点が『たくさん』(中略)などと異なる。『女子が多い』と言っても、大勢いるとは限らない」と記述している(p.218)。「多量」と「大量」の違いも、比較表現の場合、「多い」と「たくさん」の違いと平行的に考えることができる。

<sup>21</sup> ①は「労働者」②は「女性」の例である。

①例えば一九～二〇世紀的テクノロジーは、鉄鋼、石炭、鉄道といった基幹産業と結びついていたので、そこに集められた多量の労働者は、今日の視点からみるといまだたぶんに農村的な共同体を構成し、しかもそれが先端的テクノロジーと結びついていたがため、それは比較的容易に社会主義革命という大規模な政治・文化的価値を形成しえた。(NLT)

②貧困の女性化とは、1970年代にアメリカに生じた、多量の女性が貧困者のカテゴリーに入った現象である。(NLT)



- (47) しかし、一九八八年から始まった再整備によりプロムナードと新しく名付けられたこの通りは、現在では週末ともなれば**大量 (\*多量)**の人やストリートパフォーマーなどで賑わう、大変活気のある通りとして生まれ変わったのである。(BCCWJ)
- (48) 安全で速く、かつ**大量 (\*多量)**の人を一度に運ぶことができる夢の高速鉄道が走っている。そうPRした新幹線が、世界の注目を集めたことは間違いありません。(朝日 2014/02/26)
- (49) 自然体系の崩壊により最も被害を受けたアマラ州の農民は、「食」を求めてバグダードに**多量(大量)**に流出した。(= (40))

(47) の「大量」は「通り」に賑わう「人」の量を表すが、一人ひとりには焦点はなく一まとまりの量と捉えることができる。同様に、(48) の「大量」は「新幹線」で一度に運ぶことのできる「人」の量を表すが「多量」とは置き換えが難しい。ところで、「複数の個体」→「集合体」→「連続体」という過程を経て、均質の個体の集合が連続体に読み替えられる認知プロセスが存在することは先行研究で指摘されている(Lakoff1987、篠原 1993、池上 2007 など)。このような認知プロセスによって、「大量」の表す人間の集合も、表1で見た「水」や「情報」など、両語と共起する語と同様に、連続体として捉えられていると考えられる。ところが、(47) (48) の「大量」は「多量」との置き換えが難しい。BCCWJの検索においても、「多量の人」は1件も観察できなかった。ところが、(49) では、「多量」はヒト名詞(「農民」)を表すが、先に述べたように、後続する「流出した」という表現が(「個体」である)人間ではなく「連続体」の意味を支えていると考えられる。つまり、繰り返し述べているように「多量」は人間を表すには制限が厳しい。

以下、この理由について考える。人間は個体という概念のプロトタイプと言え、人間以外のものに比べて際立ちが高い(池上 1983、2007 など)。有情物が「多量」と共起しにくい理由は、先述のように、個体の連続体化には「集合を構成する個体が(数が無限に多くなったり、大きさが無限に微小になったりして)際立たなくなる」ことが前提となるが、数量において「多量」は「大量」よりも少なく「無限に多い」と想定しにくいいため、輪郭や内部構造の際立つ人間には用いにくいと考えられる。すなわち際立ちの高い「個体」を「連続体」として捉えるための条件が「大量」よりも厳しいと考えられる。

さらに、池上(2007:119)は、「仮りに、そこに放り込むとすべてのものが無定形の物質に化せられてしまうような『万能破砕器』(universal grinder)があったとすると、一個のステーキをそこに放り込めば無定形の挽き肉になる。同じことを人について行くとすると、個体という概念のプロトタイプとも言うべき<人>を表す語が、<不可算>(連続体)として十分正当に扱われうる」と述べている。しかし実際には、私たちの経験上、空間に存在する人間を「挽き肉」として接する状況は考えにくい。このような理由からも人間は「多量」と共起しにくいと考えられる。つまり、「多量」が人間を表すには量的条件のみならず、(輪郭が失われた)「均質なまとまり」として接するという二つの条件のい

ずれも満たすことが難しい。

人間以外の生物についても、BCCWJで「多量の」を検索すると、生物が共起する例は1例のみであった。また、「多量にいる」の例は1例も観察できない。しかし、Yahoo!で検索すると「多量にいる」と共起する生物は、「蚊、ナメクジ、クラゲ、カニ」などの小動物や「細菌、ウィルス、バクテリア」など菌類の例が多く観察できる。これらは物理的に小さい生物であり、我々の身体性に基づいて、大きさの小さいものほど個別性の低い連続体として把握されやすいと考えられる<sup>22</sup>。

以上のことから「多量」は、基本的に有情物（人と動物）には用いられにくいという選択制限があると考えられる。これに対して、「大量」は動物に加えて「人、人間、人々」のみならずヒト名詞が多種多様に観察できる。

以上をまとめると、両語の相違点として、第一に文体差がある。「大量」は、くだけた文体で用いられ量を大げさに強調するために用いる用法がある。「多量」はそのような用法は認めにくい。第二に比較表現の場合、「多量」は他方を数量的に上回るの意であって、絶対的な多さを意味するのではない。すなわち、ある基準を超えていれば、どの程度超えているかという上での制限なく「多量」と言うことができる。これに対して「大量」はあるものの数量が著しく多い場合にしか使うことができない。すなわち、「大量」は「多量」の中の、程度の非常に大きい部分とのみ対応する。第三に、個別化の度合いの違いがある。

「大量」は人間、動物を問わず生物を表すことができるが「多量」は文脈の支えなしに有情物（人間、動物）を表すことが難しい。この理由として我々の身体性をあげることができる。先述のように、池上（1982：76）は「集合を構成する個体が（数が無限に多くなったり、大きさが無限に微小になったりして）際立たなくなればなるほど、〈個体の集合〉は〈連続体〉に近づく」と述べている。つまり、「大きさ」とともに「数」も連続体化に関わると考えられるが、「大きさ」と「数」は普通我々の視覚によって認知されるものである。

「多量」が「大量」よりも対象となる数量が少ないことから個体の際立ちが薄れにくく、均質なまとまり（連続体）として捉えにくいと考えられる。この三点が、両語の意味を区別する基本的な相違であると考えられる。

前節で「多量」を〈個別化の度合いの低い〉〈有情物を除く具体物の数量が〉〈大であると捉えるさま〉と記述したが、「大量」よりもさらに個別化の度合いが低い、均質なまとまりと捉えるという意味は「大量」との類義語分析の結果から明らかになった意味であり、「多量」の意味を以下のように訂正する。

(50) 「多量」の意味：〈均質なまとまりである〉〈有情物を除く具体物の数量が〉

<sup>22</sup> 池上（2007：122）は、〈小石〉(pebbles)-〈豆〉(beans)-〈米〉(rice)-〈砂〉(sand)のように、「構成する〈個体〉の粒が小さくなるにつれ、〈集合体〉よりも〈連続体〉として知覚される容易さが増す」とし、「構成する〈個体〉の大きさということが個体の集合を〈集合体〉か〈連続体〉か、いずれとして知覚するか重要な関わりを持っていることは明らかである」と述べ、これは「話す主体としての人間の〈身体性〉に関わる要因である」と記述している。

<大であると捉えるさま>

## 5.5 「大量」と「多数」の意味分析

### 5.5.1 「多数」の意味分析

本節では、「多数」の意味を記述する。まず「多数」と高頻度で共起する名詞のカテゴリーを見てみよう。NLTを利用して検索すると、「多数+の+名詞」の形式は頻度 25890 であり、この形式において「多数」と高頻度で共起する名詞上位 14 語を以下の表 5 に示す。

表 5 「多数+の」(25890 中)における上位頻度の名詞 14 語 (併記の数字は出現頻度)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
人	場 合	人 々	人 間	国 民	方 々	企 業	参 加	患 者	意 見	死 者	国	ユーザ ー	応 募
1883	688	668	322	285	228	218	200	199	193	182	161	152	146

表 5 から分かるように、「多数」と高頻度で共起する名詞は人間を表す名詞が圧倒的に多い。上位 1、3、4、5、6 位が「人、人々、人間、国民、方々」であり、14 語中 8 語がヒト名詞である。このことから、「多数」は基本的に人間に注目する表現であることが分かる。人間は典型的な個体である。人間を表す名詞以外としては、2 位「場合」、7 位「企業」、8 位「参加」、10 位「意見」、12 位「国」、14 位「応募」がある。この中で、「場合」は「申込多数の場合」のように用いられ、「申込」の数を表すのであって「場合」の数を表すわけではない。また、先述のように、合成語は本研究では考察対象外とする。これらヒト名詞以外の名詞の指示物は、抽象物や出来事であるが数えることができ、個別性の高いものである。さらに、BCCWJ からの実例を見てみよう (以下の例は、連用修飾形や表 5 の上位 14 語以外の語を含む)。

- (51) 広場の左手の巨大な石壁と多数の窓をそなえ、堂々とした建物が、ピッティ宮殿だ。(BCCWJ)
- (52) あれから 63 年が経過、いまだに原爆症の認定を得られない人が多数いる。(BCCWJ)
- (53) その沼にはマラリアの病原体をもった蚊が多数生息していることが分かった。(BCCWJ)
- (54) 東京湾アクアライン・海ほたるパーキングエリア内。駐車場は多数だが、週末はかなり混雑。渋滞もしばしば。(BCCWJ)
- (55) 機内マッサージ、無料アイスクリーム、テレビゲームなどの特徴を多数打ち出すことで、差別化もされていた。(BCCWJ)
- (56) 種類や数、画質など、CPU クーラーやマザーボードと同じく使い勝手に影響する差異が多数あります。(BCCWJ)

(57) 一方、Ca<sup>2+</sup>拮抗薬を用いた再灌流障害予防に関する検討も多数なされている。代表的なものは diltiazem や verapamil で、虚血後再灌流した心筋の収縮性の低下を軽減するとされる。(BCCWJ)

(51) ～ (56) の「多数」はそれぞれ、「窓」「いまだに原爆症の認定を得られない人」「蚊」「駐車場」「特徴」「差異」の数が大であることを表す。このように「多数」の対象は生物、無生物を問わず、空間に存在する具体物から、「特徴」「差異」のような抽象物、さらに (57) の「検討」のような出来事までさまざまであるが、共通点として1、2・・・と「数」を数えることができるものであることが分かる。ここで数えることができるというのは、個別化の度合いが高いという意味である。たとえば、(55) の「特徴」は空間に存在する個物ではないが、「機内マッサージ、無料アイスクリーム、テレビゲームなど」と「特徴」が他の特徴と差異化されて、すなわち個別化されて数えられている。同様に、(56) では「種類や数、画質など」と「差異」が個別化されている。

さらに、(57) の「検討」は出来事を表すとはいっても、後続する「代表的なものは diltiazem や verapamil で」という表現から分かるように「(Ca<sup>2+</sup>拮抗薬を用いた再灌流障害予防に関する) 検討」の種類が差異化されていることから、時間概念を伴う出来事というより、むしろものに近い出来事と解釈することが可能である。以上のことから、「多数」の意味を以下のように記述する。

「多数」の意味：

<個別化の度合いの高いものや出来事の数量が><大であると捉えるさま>

ところが、「多数」は上で記述した意味と異なる意味で用いられることがある。たとえば次のような例の場合である。

(58) 諸外国において、日本についての本は意外にたくさんある。すぐれたものもいくつもある。英語で書かれたものがむしろ多数を占める。(BCCWJ)

(59) しかし、アメリカ人の多数は、アメリカの軍事的／政治的優位を保つために、化学技術の発展は必要であり不可避であると信じてもいた。(BCCWJ)

上の例における「多数」は、「ものの数」ではなく、ある全体が想定され全体に占める部分の「割合」を表す。たとえば、(58) の「多数」は、「日本についての本」というカテゴリーの全体の中で部分である「英語で書かれたもの」の割合が他方（英語以外の言語で書かれたもの）より大であることを表す。同様に、(59) は「アメリカ人」というカテゴリー全体の中で、「化学技術の発展は必要であり不可避であると信じてもいた」人の割合が他方（信じていない人）より大であることを表す。このように、「割合」を表す場合にも

カテゴリーの構成要素は人間や本など個別化の度合いが高いものであることが分かる<sup>23</sup>。

以上のことから、「多数」の別義②を<全体における><個別化の度合いが高い構成要素の割合が><他方より><大であると捉えるさま>と記述することができる。このように「多数」は大きく2つの多義的別義を持つ多義語と言える。

なお、別義①と別義②の関連性を考えると、別義②は別義①と類似性が認められることから、メタファーに基づき生じたと考えられる。つまり、別義①は「ものの数」を表し、別義②は「割合」を表すという意味の違いがあるが、「個別化の度合いが高いものの量が大きであると捉えるさま」という共通点を見出すことができ、2つの別義の間には類似性が認められる。ここまでの考察の結果を以下に記述する。

(60) 「多数」の意味：

別義①<個別化の度合いが高いものや出来事の数量が><大であると捉えるさま>

別義②<全体における><個別化の度合いが高い構成要素の割合が><他方より>  
<大であると捉えるさま>

### 5.5.2 「多数」と「大量」の類似点と相違点

本節では「多数」と「大量」の相互の意味の類似点と相違点を考察する。以下に「大量」の意味記述を再掲する。

「大量」：<具体物の数量が><(個別性が際立たないほど)著しく><大であると捉えるさま>

「多数」と「大量」の意味記述から分かるように、両語は①個別化の度合いと②程度の甚だしさ、さらに③具体物か抽象物かにおいて異なる。また、「大量」は「出来事」は表さない。

前節の表3で見たように、「大量」と共起する名詞は「水」をはじめとする連続体の出現頻度が高い。しかし、「(多量)とは異なり」「失業者、人、移民」など、人間を表す名詞をはじめとする個体との頻度も高い。これらは空間に存在する具体物である。一方、「多数」は、前節の表5で見たように、具体物、抽象物、さらに出来事を表す名詞とも高頻度で共起する。実例を見てみよう。

(61) アークコミュニケーションズは、今後も海外に広く自社サービスを展開するため、さらに**多数**(\***大量**)の言語でのサイト制作も予定しております。

(朝日 2013/08/08)

<sup>23</sup>『大辞林』(5.2参照)は、意味②の対象を「人数」としているが、このように「多数」の対象は「人数」に限らない。

- (62) 今回発売されるのは、一太郎とA.T.O.K.がセットになった標準パッケージと、追加の日本語フォントやA.T.O.K.用電子辞典、グラフィックスソフト「花子」なども加わった「プレミアム」、さらに多数（\*大量）のソフト類をパッケージした「スーパープレミアム」の3種です。 (朝日 2014/02/06)
- (63) 6月に肺がん検診を実施しましたが、受診希望者が著しく多数（\*大量）であったため、来年1月ころに再度検診を行う予定です。 (BCCWJ)

(61) の「多数」は「言語」の数を表すが、「大量」と置き換えられない。これは「言語」が抽象物であるからと考えられる。これに対して「多数」は「言語」を数えることができるのは、「言語」は「英語、日本語」など、基本的に明確な種類（個別性）を持つと捉えられるためである。先述のように、「大量」と「多数」は、前者が抽象物を表しにくいという相違点がある。

さらに、(62) の「多数」は、「ソフト類」の数量を表すが、「大量」と置き換えが難しい。「ソフト類」は、抽象物ではあるが（「大量のソフトを1円で落札」[http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q13121525088](http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13121525088)）のように、「大量」で表すことができる。しかし、(62) は、「さらに」という表現から分かるように、比較の基準が（前回発売されたソフトの種類の数であると）想定でき、ソフトの数がその基準を超えていることを表すのであって、絶対数が著しく大であると想定できないため「大量」と置き換えが難しいと考えられる。

この「多数」と「大量」の違いは「多量」と「大量」の違い (5.4.2) と平行的に考えることができる。つまり、比較表現の場合「多数、多量」は他方を数量的に上回るの意であって、絶対的な多さを意味するのではない。これに対して「大量」は数量が著しく多い時にしか用いることができない。すなわち、「大量」は「多数」のうちの、程度の非常に大きい部分とのみ対応する。

ただし、両語の違いは単なる数量の程度の違いのみではないと考えられる。(63) の「多数」は「(肺がん検診の) 受診希望者」を表すが、この「多数」を「大量」に置き換えると、失礼で不適切な表現になると思われる。この「多数」は「著しく」を伴っていることから、「多数」と「大量」の違いが数量の程度のみであれば置き換え可能であるはずであるが、このように置き換えが難しい。したがって「多数」と「大量」の表す人間は、数量の程度のみならず質的な違いがあることが示唆される。つまり、「大量」は「均質なまとまり」（連続体）と捉えると同時に「人間としての特徴」も薄れるため、物同様に捉えられ、「多数」と置き換えができない場合があると考えられる（詳しくは第7章参照）。

以上の考察から、冒頭で述べたように両語は①個別化の度合いと②数量の程度、さらに③具体物か抽象物かにおいて異なることを確認した。また、人間を「大量」で数えると人間としてのアイデンティティ（特徴的な形と境界、内部構造）を失った均質な存在に近い

ものとして解釈されることが分かった<sup>24</sup>。

## 5.6 「多数」と「多量」の類似点と相違点

本節では「多数」と「多量」について相互の類似点・相違点を考察する。

まず、類似点としては 5.4.2 と 5.5.2 で見たように、数量の程度がある基準より大であれば用いることができることである。つまり、相対的な量を表すことができることである。

相違点としては、表 4 と表 5 で見たように、共起する名詞の個別化の度合いと具体物か抽象物かにおいて異なる。すなわち、「多量」の対象は典型的に個別化の度合いが低いものであり、他方「多数」の対象は、個別化の度合いが高いものである。また「多量」は具体物（「水、汗」など）と高頻度で共起するが、「多数」は具体物（「人、方々」など）とも、抽象物（「企業、国」など）とも高頻度で共起する。

ただし、このことは、指示対象自体の持つ客観的な性質のみによってあらかじめ決定付けられているということではない。両語に同じ名詞が共起する例を見てみよう。

- (64) 災害、重大事故等の発生時には、多量（多数）の情報を迅速かつ的確に伝達する  
ため、日常の通信手段に加えて、各種メディアによる応急的な通信手段をいち早く  
確保する必要がある。 (BCCWJ)
- (65) 町の人口、面積などを掲載した統計編をはじめ、観光施設の案内や官公庁の所在  
地、郷土の歳時記（市町のイベント）、その他、さが県民手帳ならではの仕事や、暮  
らしに役立つ情報が多数（?多量に）掲載されています。 (NLT)
- (66) 縄文の祈りと造形船迫窯跡公園では 12 月 2 日まで秋の特別展『縄文』が開催され  
ています。京築管内で出土した縄文時代の代表的な土器などが多数（?多量に）展示  
されています。 (<http://chikujo-rekishi.jp/> 築上町歴史散歩ホームページ)
- (67) また里山などに住む獣類の骨・角から素材を調達し、各種の骨角器を作った。土  
器も集落近辺から調達した粘土で、文様や形に願いを込めて多量に作った。主に煮  
炊きや祭りの道具、土器棺などに使用され、日本の縄文文化を特色付けている。工  
芸的に優れた土器・漆製品は、世界最古であり、世界に誇れる文化である。 (NLT)

(64) の「多量」と (65) の「多数」は、「情報」の数量を表すが捉え方が異なる。(64) の「多量」は「災害、重大事故等の発生時」に「伝達」する情報を均質なまとまりとして捉えている。災害、重大事故等の発生時に伝達する情報は実際には多種多様な個別の情報  
が想定できるが、それらの個別性は捨象され全体性（まとまりの大きさ）が際立つ。この

<sup>24</sup> 深田・仲本 (2008 : 216) は、以下の例において、通常可算名詞として用いられる *cat* が、集合名詞として用いられているのは、「話し手が、車にひかれた猫を、猫としてのアイデンティティ（特徴的な形と境界、内部構造）を失った均質な存在と解釈しているために *cat* が集合名詞として用いられている」と記述している。

After I ran over the cat with our car, there was *cat* over the driveway.

「多量」を「多数」に置き換えることはできるが、置き換えると情報の個別性が際立ち、ニュアンスが異なると感じられる。

逆に、(65)では「町の人口、面積、観光施設の案内、官公庁の所在地、郷土の歳時記（イベント）、その他」といった「(仕事や、暮らしに役立つ) 情報」が種類によって差異化され情報の構成要素が際立つ。この「多数」を「多量」に置き換えると容認度が下がるのは、「多量」は「均質なまとまり」と捉えるのであって) 構成要素の際立ちと相容れないからであると考えられる。

同様に、(66)の「多数」と(67)の「多量」は「土器(など)」の集合の数量を表すが捉え方が異なる。「土器」は構成要素の個性が高く、形・機能の面でも多様であり均質とは言えない物体の集合である<sup>25</sup>。(66)において「多数」は「土器など」の構成要素各々に注目して捉えた表現である。というのは、「展示されています」という状況から分かるように、展示物としては(たとえ完全な形の土器ではなく一部分のみの展示物であったとしても)一点一点の形や機能に注目するため個体の際立ちが高いと考えられるからである。このような場合、「多数」を「多量」に置き換えると容認度が下がる。

これに対して、(67)においては、「土器」の各構成要素の形・機能など多様性は捨象され、我々人間と対象の関わり方(「粘土で、文様や形に願いを込めて」作られ、「主に煮炊きや祭りの道具、土器棺などに使用される」)に注目している。その限りでは、土器の各構成要素は(物理的サイズがいかにも異なろうとも)均質な性質を持つものの集合と捉えることができる。つまり、この抽象レベルにおいて、「土器」は均質な要素のまとまり、すなわち連続体と見なすことができる<sup>26</sup>。この「多量」は「多数」と置き換えが可能であるが、置き換えた場合、一つ一つの個体の輪郭が際立つのであって、均質なまとまりとは捉えられない。

深田・仲本(2008:217)は「可算名詞(count nouns)」を「集合名詞(mass nouns)」へと変えてしまうのは、「抽象化や一般化のプロセスによって、その名詞が、ある均質な性質を持つ<モノ>のカテゴリーをプロファイルすると解釈し直されるからである、と述べている。特徴的な形と境界、内部構造を持った「土器」の集合を「多量」と捉えるのも、我々人間と対象の関わり方といった抽象レベルにおいて均質な性質を持つモノのカテゴリーをプロファイルすると解釈できるからである。

<sup>25</sup>『小学館 日本大百科全書(ニッポニカ)』によれば、土器とは小石や砂などの混ぜ物をつなぎとした粘土を素材に形づくり、焼き上げた容器。深鉢、浅鉢、皿、甕(かめ)、壺(つぼ)、高坏(たかつき)などの種類に区別される、とされる。

<sup>26</sup> 篠原(1993:48)は英語の「garbage(ゴミ)」が不可算扱いである、すなわち、連続体とみなされる理由について、「ゴミ」の構成要素は「furniture(家具)」の場合同様、サイズは多種多様であるが、「無用なもの」という観点からいわば、意図的に一つのカテゴリーに凝集されたものである。つまり、「ゴミ」の構成要素各々の知覚的側面は捨象され「無用なもの」という我々人間と対象との関わり方(目的)に焦点が当てられているわけである。その限りでは、garbageを構成する個々の要素は(物理的サイズがいかにも異なろうとも)均質性を保っていると考えられているわけである、と記述している。「土器」も「多量」で表す場合、「土器」の構成要素各々の知覚的側面は捨象され、均質性を保った「連続体」と捉えられると考えられる。



池上（2007）は、可算の名詞が不可算に解釈されるプロセスとして、＜連続体化＞と＜抽象化＞の2つのプロセスをあげており、5.3.2では、「大量」が前者の連続体化のプロセスを関わっていると考えられることを述べた。これに対して、「土器」が「多量」で捉えられるのは後者の「抽象化」のプロセスに関わると考えられる。

繰り返し述べているように「連続体」と「個体」の区別は、もちろん知覚上の影響を受け、すなわち身体的基盤に基づき、典型的には対象の物理的な特徴（固体、液体、気体の区別やサイズなど）に関わっている。しかし、あるものの数量が「たくさん、多数、大量、多量」のいずれかに扱われるかはあらかじめ決定付けられているものではなく、あくまで、人間が対象といかに接し、概念化してゆくか、その対象と我々人間とのかかわり方の現れであると言える。

## 5.7 第5章のまとめ

以上、本章では「たくさん、多数、大量、多量」を取り上げ、それぞれの意味と相互の意味の類似点・相違点について考察した。以下、分析結果を簡単にまとめておく。まず、4語の意味は次の通りである。

「たくさん」：

別義①＜あるものの数量が＞＜大であると捉えるさま＞

別義②＜ある動きの量が＞＜大であると捉えるさま＞

別義③＜話し手が体験したある量が＞＜それだけで十分であると捉えるさま＞

別義④＜ある事柄に対して＞＜それ以上受け入れられない状態にあると捉えるさま＞

「多数」：

別義①＜個別化の度合いが高いものや出来事の数量が＞＜大であると捉えるさま＞

別義②＜全体における＞＜個別化の度合いが高い構成要素の割合が＞＜他方より＞＜大であると捉えるさま＞

「大量」：＜具体物の数量が＞＜（個別性が際立たないほど）著しく＞＜大であると捉えるさま＞

「多量」：＜均質なまとまりである＞＜有情物を除く具体物の数量が＞＜大であると捉えるさま＞

類似点・相違点は以下の通りである。

①「たくさん」は、特定の形状や特徴を指定せず、さらに具体物・抽象物にかかわらずものの量を不特定に表す無標の表現である。したがって、個別類別詞（人、個、つ…）や計量類別詞（kg、cm…）などで数を数えたり、量を測ることを想定できない抽象物（例「愛情」、「勇氣」など）も対象にとることができる。このように「たくさん」は日常的な知識に基づいて量を捉える表現である。

他方「大量」と「多量」は、助数詞や計量単位で表すことが想定できる、すなわち、空間に存在すると想定できる具体物に限られる。特に、「多量」は化学的、専門的な知識に基づいて量を捉える表現である。また、空間に存在する具体物ではないがより具体性の高い（個体として捉えやすい）ものや出来事の場合（例「特徴」、「検討」など）、「多数」が用いられる。さらに、「大量>たくさん>多量・多数」の順で数量の程度が大であることが認められる。このことから、「たくさん、多数、大量、多量」の使用には、文体の他に、個別化の度合い、具体性（抽象性）、数量の程度、の3点が大きく関わる。

②「大量」と「多量」は、ともに個別性の低い具体物（連続体）と高頻度で共起する。しかし「大量」は有情物を始めとして、個別化の度合いの高い具体物とも共起するのに対して、「多量」は有情物を表すには「大量」より制限が厳しく文脈の支えが必要である。このことから、「多量」は「大量」よりもさらに内部構造が均質なまとまりであると捉える表現であると考えられる。ただし、人間を表す場合、「大量の人」は「たくさんの人」「多数の人」よりも使用に制限が認められる。つまり、この4語の表す対象には「多量>大量>多数・たくさん」の順で、特徴的な形と境界、内部構造が失われる度合いが高いという質的な差異が認められる。

③「多量」と「多数」は、ともに相対的な量を表すことができる。すなわち、数量がある基準に照らして上回っていれば、どの程度でも「多量」と「多数」を用いることができる。それに対して、「大量」は「多量」と「多数」の表す範囲のうちの、特に程度の大きい部分しか示すことができない。この違いが「大量」と「多量・多数」の置き換え可能な例においても、前者の方が数量が大であると捉えられる理由であると考えられる。

④池上（2007）は、可算の名詞が不可算に解釈されるプロセスとして、＜連続体化＞と＜抽象化＞の2つのプロセスをあげている。前者は、複数の個体からなる集合体が認知的に均質な連続体として再解釈されるプロセスである。後者は、本来的には具体的な個体を指示する表現として使われる名詞が、一般的（ないしは総称的）な意味として再解釈されるプロセスである。「たくさん」や「多数」で数えることが可能な個体を「大量」あるいは「多量」で数える場合、この「連続体化」と「抽象化」のプロセスがそれぞれ関わると考えられる。

第2章で見たように、日本語の名詞自体には「可算・不可算」「数」という概念は文法的に現れないが、具体的な数を表現する場合、類別詞がこれらの区別をするとされている。本研究の考察対象である不特定数量詞も、名詞を個別化し範疇化する役割を担っていると考えることができることを記述した。

そしてその個別化と範疇化は、指示対象の「物理的数」や「物理的に個体か否か」という客観的事実の投影ではなく、話し手が主体的に対象を捉えてゆく認知活動に基づいているものと思われる（篠原 1993 : 49）ことを確認した。

## 第6章 出来事、動きの量を表す「たくさん、数多く、多く、多数」

### の意味分析

#### 6.1 はじめに

本章は、類義関係にある「たくさん、数多く、多く、多数」の4語を考察対象とし、特に、出来事と動きの量を表す用法における相違点・類似点について考察する。また「数多く」と「多く」の個別の意味を分析する。

第4章の下位分類で見たように、この4語はモノ名詞はもちろん、デキゴト名詞と共起しその数量を表すという点で共通している。相違点として、文体差がある。さらに「多数」は複雑デキゴト名詞と共起できないのに対して「たくさん、数多く、多く」は複雑デキゴト名詞と共起する例が観察できた。また、「たくさん、数多く、多く」の3語は動きの量を表す例も観察できた。下の表1は、第4章の表3の再掲である（本章で取り上げる4語が該当する部分のみを再掲）。

表1 単純・複雑デキゴト名詞および動きの量による下位分類

	デキゴト名詞		動きの量	
	単純デキゴト名詞	複雑デキゴト名詞	継続動詞	瞬間動詞
例	遠征 ・検討をQする	家出 ・値上げをQする	Q遊んだ	Q殴った
たくさん	○	○	○	○
多く	△	△	△	△
多数	○	×	×	×
数多く	○	○	×	○

単純デキゴト名詞と共起する場合、この4語が類義関係にあることは以下の(1)において文全体の意味を大きく変えることなく4語を置き換えることができることから分かる。一方、出来事の数を数える(2)(3)(4)においては、置き換えると容認度が下がったり、非文になることから、4語の間には相違点があることも同時に確認できる。

- (1)また、生コン会館の「協働センター」内に設置された労働相談ホットラインにも**多数**（たくさん/数多く/多く）の相談が寄せられた。(BCCWJ)

- (2)ほとんどのクリーニング店では、クリーニング前の点検工程（事前に破れなどがな  
いかをチェックする工程）を行います。その時に虫食いを発見することが、数多  
く（\*たくさん/\*多数/多く）あるからです。（NLT）
- (3)ハリウッド映画はただの娯楽でメッセージ性を持たないと多く（\*たくさん/\*数  
多く/\*多数）言われるが、そう思うか。日本映画も娯楽でメッセージ性を持た  
ないと思うか。（NLT）
- (4)私もこの半年間で悩んだり不安になったり辛いこともたくさん（数多く/多く/\*  
多数）あったけど、それを乗り越えたらなんだか自分が強くなった気がします。  
（NLT）

第2章で見たように、これら4語は共通して(1)のような「の」を介しての連体修飾用法と(2)～(4)のような連用修飾用法で用いられる頻度が高い。

NLTを利用して検索してみると、「数多い+名詞」は出現頻度が636であるのに対して、「数多く+の+名詞」は出現頻度が14963であった。つまり、連体修飾用法において、「数多くの+名詞」という形式は「数多い+名詞」の形式より圧倒的に多く用いられている。また、「数多く+動詞」は出現頻度が19685であり、連用修飾用法で用いられる例も多い。しかし、「数多く」は「\*数多くだ（です）」など叙述形を取ることができない。一方、「多数」は数量名詞（益岡・田窪1992）とされるが、NLTで検索してみると「多数+動詞」は頻度が29920、「多数+の+名詞」が25890であるのに対し、「多数だ（です）」は1511であり、「数多く」同様、「の」を介しての連体修飾用法と連用修飾用法で用いられる頻度が圧倒的に高いことが分かる。「多く」「たくさん」も同様である。

そこで、本章では4語に共通するこの二つの用法において意味の共通点・相違点について考察する。以下、本章の構成について簡単に述べる。

- 6.2では、「多く」と「数多く」の個別の意味分析を行う。
- 6.3では、出来事の量を表す「多数」と「数多く」の類義語分析を行う。
- 6.4では、出来事と動きの量を表す「数多く、たくさん、多く」の類義語分析を行う。
- 6.5では、まとめを行う。

## 6.2 「多く」と「数多く」の意味分析

### 6.2.1 先行研究とその検討

「多く」と「数多く<sup>27</sup>」が国語辞典類においてどのように記述されているかを見てみよう。

多く

\*『大辞林』（第三版）

<sup>27</sup> 「数多く」を見出し語に立てている辞書は管見の限り見当たらないため、ここでは「数多い」の記述を引用する。ただし、NLB、NLTにおいては見出し語となっている。

おおく [多く] [形容詞「多し」の連用形から]

(1) (名) ①たくさん。「一の書を読む」

②大部分。「批判の一は的はずれだ」

(2) (副) たいてい。おおかた。「運動会は一秋に行われる」

\* 『講談社 類語辞典』: 数が多い様子。

「一の人がそう考えていた」「彼には一の著書がある」

数多い

\* 『大辞泉』(第二版): [形] [文] かずおほし [ク] 数がたくさんある。

\* 『日本国語大辞典』(第二版): 数が多い。多い。

\* 『講談社 類語辞典』: 数が多い様子。「彼は一研究者の中でも有望視されている」

辞典類の記述においては、「数多い」と「多い」はいずれも「数が多い」または「たくさん」と記述されており意味の違いが不明である。

### 6.2.2 「数多く」の意味分析

「数多く」の意味を分析するにあたって、まず、「数多く」が高頻度で共起する名詞を見てみよう。冒頭で述べたように、NLT を利用して検索すると、「数多く+の+名詞」の形式は出現頻度が 14963 である。頻度順に 13 位までの名詞を以下の表に示す。

表 2 「数多く+の」に共起する上位頻度の名詞 13 語 (併記の数字は出現頻度)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
人	経験	作品	実績	問題	活動	種類	お客様	方々	こと	写真	命	賞
315	253	234	214	131	125	120	116	80	80	75	73	70

上の表から分かるように、「数多く」は「人、お客様、方々」といった人間や「作品、写真」といった具体物、「実績、問題、種類、こと、命、賞」といった抽象物と高頻度で共起する。さらに「経験、活動」といったデキゴト名詞の頻度も高い。これらは生物・無生物、具体物・抽象物を問わず、個別化の度合いが高くその個数や回数を数えることができる。実例を見てみよう (連用修飾用法や表 2 の上位 13 語以外の語も含む)。

(5) 塚本晋也監督作品は『ヒルコ/妖怪ハンター』『バレット・バレエ』『双生児』ほか。  
俳優としても数多くの作品に出演。 (NLT)

(6) いつも先生の言葉に支えられ、数多くのことを学ばせて頂きました。 (NLT)

(7) 車がないと不便なところが唯一の欠点だが、それ以外は数多くの魅力を備えた優良ビーチ。まず砂浜が広く水が綺麗。そしてワイキキからのアクセスが不便なため人口密度が低い。 (BCCWJ)

- (8) MARKTcafe (マルクト カフェ) 数多くの撮影が行われている本店。 (NLT)
- (9) たくさんの衣類をお預かりするクリーニング工場で作業をしていると、ご家庭の虫食いの被害の多さに毎年驚きます。ほとんどのクリーニング店では、クリーニング前の点検工程（事前に破れなどがないかをチェックする工程）を行います。その時に虫食いを発見することが、数多くあるからです。 (NLT)
- (10) なぜなら、「ダンサーは舞台に数多く立つことでしか磨かれない」からだ。 (BCCWJ)
- (11) 自分の体力、能力に合ったバットを使う。数多く振ればよいというものではない。 (BCCWJ)

(5)～(7)の「数多く」は、それぞれ「作品」「こと」「魅力」の数量が大であることを表す。このように「数多く」の対象は具体的な個物から、「魅力」のような抽象物までさまざまであるが、共通点として1、2…と数を数えることができ、「個別化」の度合いが高いものであることが分かる。たとえば、(7)の「魅力」は空間に存在する個物ではないが、「砂浜が広く水が綺麗」「人口密度が低い」と「魅力」が個別化され数えられている。すなわち、「魅力」は空間に存在する有界性の明確な具体物同様、個別化の度合いが高いものとして捉えられる。以上のことから、「数多く」は基本的に「個別化の度合いが高いもの」の数量を表すと考えられる。

一方、(8)の「数多く」は「撮影」という出来事の回数を表す。同様に、(9)は「虫食いを発見すること」という出来事の回数を表す。また、(10)の「数多く」は空間に存在するもの（「舞台」）の数ではなく「舞台」という空間に「立つ」（位置を占める）という動きの量を表す文字通りの意味からメトニミー的に拡張して、「舞台に立つ」という句全体で、概ね「（本番の）舞台で演技する」といった意味を表すことから、動きというより出来事の数を表していると捉えられる。

さらに、(11)の「数多く」はもの（「バット」）の数ではなく「振る」という動きの量を表している。「動き」や「出来事」とは、「もの」とは異なり、時間の流れの中で捉えられるものである（詳しくは6.4参照）。

以上のことから、「数多く」の意味を＜個別化の度合いが高いもの・出来事・動きの数量が＞＜大であると捉えるさま＞と記述することができる（この記述は6.3の類義語分析の結果を受けて修正する）。

### 6.2.3 「多く」の意味分析

#### 6.2.3.1 別義①：

＜あるものや動きの数量が＞＜ある基準より＞＜大であると捉えるさま＞

- (12) いまは、お客さまのほうが多くの情報をもち、それぞれの価値観を持っていますから、売り手側が商品や価格を決めてお客さまに提示するというのは、ある意味、無駄なことになってしまう場合もあるのです。 (BCCWJ)

(13)先日テレビで外国人のほうがカルシウムを多く摂取しているのに日本人の方が骨密度が高いと言っていました。(BCCWJ)

(14)おつりを多くもらいすぎた時は皆さんどんなふうに対処するのでしょうか。(BCCWJ)

(15)運動 今よりも1000歩多く歩きましょう！(BCCWJ)

(12)～(14)の「多く」は、それぞれ「情報」「カルシウム」「おつり」というものの量がある基準を上回っていることを表す。このように、「多く」の対象は具体物・抽象物を問わない。上の例においては、「多く」と判断するための基準が明示されているか、あるいは想定できる。たとえば、(12)では基準となる「売り手側(の情報量)」が基準となり、「お客さま(の情報量)」がこの基準を上回ることを表す。同様に、(13)は「日本人(のカルシウムの摂取量)」が基準となり、「外国人(のカルシウムの摂取量)」がその基準を上回ることを表す。(14)は「おつり」の「(正しい)金額」が基準となると想定できる。

また、「カルシウム」は普通「mg」といった計量類別詞で測るのであって、1、2…と数えることはできない。このことから、「多く」は対象の量が判断の基準を上回ることを表すのであって、対象が個体か連続体かを問わないことが分かる。

さらに、(15)の「多く」は、「歩く」という動きの量に注目し「今」という基準を上回ることを表す。(15)において、「今よりも1000歩」という基準が示されなければ、落ち着きのない文になることから、「多く」は、基本的に基準が明示されるか想定できる表現であることが分かる。

この点について、加藤(2003:428)は、「挽肉をもっと多く買ってあげばよかった」などでは「多く」が連用成分として用いられており、適格文として成立する。ただし、「多く」が遊離数量詞として用いられる場合にはある種の制限があるようで、「挽肉を多く買ってこい」よりは「挽き肉をたくさん買ってこい」のほうが明らかに自然になる、と記述している。つまり、加藤の言う「遊離数量詞」(＝連用修飾用法)における「ある種の制限」とは、以下のような制限であると考えられる。

(16)「多く」を用いるには、個別の基準が明示されるか想定できなければならない。

以上の考察から、「多く」の別義①を<あるものや動きの数量が><ある基準より><大であると捉えるさま>と記述することができる。ただし、「ある基準」とは、上述のように、基準の際立ちが高いものと低いものの2つのタイプがあるが、両者は明確に区別できるものではない。

なお、この別義①におけるものや動きの量というのは、「おつりを1円多くもらってしまった」のように、問題となる基準を上回っていれば、(おつり自体の)絶対量にかかわらず

用いられる<sup>28</sup>。

#### 6.2.3.2 別義②：＜全体における＞＜ある構成要素の割合が＞＜高いと捉えるさま＞

(17) 女子では10～99人の小企業(23.2%)で最も高く、次いで1,000人以上の大企業(20.5%)となっている。なお、いずれの事業所規模でも、男子の多くが大卒であるのに対し、女子の場合は短大卒が高い割合を占めている。(BCCWJ)

(17)の「多く」は、母集合の数量が定まっており、その中の問題となる一部の構成要素(部分集合)の割合が高いことを表す。すなわち、調査対象となった特定の「(企業に勤める)男子」の集合を想定できる。そして「多く」はその集合の中における一部分「大卒」の割合が高い(=人数が大である)ことを表す。また、母集合における一部の構成要素(部分集合)に注目することから、自然と対比される他の部分集合(「短大卒」など)の数量が想定できる。ところが以下の例においては、母集合の数が特定されにくい。

(18) 引きこもる子の多くは怠け者ではなく、繊細で人の気持ちに過敏だから外に出られなくなる。(朝日2014/03/11)

(19) 第三には、生きがいの問題がある。日本人の多くは、家族や仕事を生きがいとしてあげる。(BCCWJ)

(18)は、母集合の数量は定まっておらず、「ひきこもる子」というカテゴリーには「怠け者ではなく、繊細で人の気持ちに過敏(な子)」という下位カテゴリーが存在するというカテゴリー化関係を述べながら、同時に「怠け者ではなく、繊細で人の気持ちに過敏(な子)」という下位カテゴリーの成員の集合が大であることを、すなわち、上位カテゴリーにおける下位カテゴリーの成員の割合が大であることを表している。この場合、「ひきこもる子」と「怠け者ではなく、繊細で人の気持ちに過敏(な子)」はカテゴリーの上位と下位の関係になっている。同様に(19)は、(日本人の数は統計上は定まっているとはいっても)特定数の母集合を前提とするのではなく、「日本人」というカテゴリーには「家族や仕事を生きがいとしてあげる(日本人)」という下位カテゴリーが存在するというカテゴリー化関係を述べながら、同時に「家族や仕事を生きがいとしてあげる(日本人)」の数量が大であることを表す。つまり、2つのカテゴリーを基盤として、下位カテゴリーの成員の割合が大であることを表す表現である。比率関係は、全体の数量の多寡が定められない限り全体に占める割合は決まらない(田中2011:153)。それではなぜ、(18)(19)においては、母集合の数量が特定されないにもかかわらず「多く」がその割合(大部分)を表すと捉えられるのであろうか。(18)(19)は「Nの多く」という部分構造を含む。「NのQ」(Qは数量表現を、

<sup>28</sup> 5.4.2で見たように、森田(1989:218)は「多い」と「たくさん」との相違について「比較表現の場合『多い』は他方を数量的に上回るの意であって、絶対的な多さを意味するのではない。この点が『たくさん』(中略)などと異なる。『女子が多い』と言っても、大勢いるとはかぎらない」と指摘している。



N は語彙名詞を指す) という形式は「部分-全体の関係 (比率関係も含む) を表す典型的な形式」とされる (田中 2011:151)。また、上位カテゴリーと下位カテゴリーの関係は類種関係と捉え直すことができる。(18) (19) において上位カテゴリー (類) と下位カテゴリー (種) の数はともに明確ではないが、類種関係は、大きな類が小さな種を包むという関係である (瀬戸 1997:110) ことから、「Nの多く」という構造を基盤として、下位カテゴリーの成員の数量が大であれば、上位カテゴリーの中で大きな割合を占めると推論することが可能である。このため割合の意味が生じると考えられる。

つまり、別義②においても別義①と同様「多く」は比較対象との相対的な関係に注目しているが、母集合の数が定まっており全体-部分を表すタイプと、類種関係を表す2つのタイプがあり、いずれも一部の要素の割合を表す。また、別義①においては、比較の基準が際立つ場合と際立たない場合の連続性が見られたが、別義②においても、母集合の全体数が際立つタイプと、全体数が定まっておらずある一部分 (ある構成要素) の割合が大であることを表すタイプに2つのタイプがあることが分かった。

### 6.2.3.3 別義③：〈あるものの数量が〉〈大であると捉えるさま〉

以下の例においては基準となる比較対象が明示されておらず、想定も難しいが「多く」が用いられている。

(20) このカロリヌムには、天文学者ケプラーから哲学者デカルトに至るまで、有名な学者が多く訪れた。 (BCCWJ)

(21) 平和維持活動については、能力的な限界が指摘され、また、財政問題など検討すべき課題が多くあることも同時に明らかとなっている。 (BCCWJ)

(22) 世の中には、多くの情報がはらんしていますが、正しい情報を見分ける力が必要です。 (BCCWJ)

(23) 商業祭「十日町いろは市」が十日町商店街で開催され、多くの人で賑わいました。 (BCCWJ)

(20) ~ (23) の「多く(の)」はそれぞれ「有名な学者」「検討すべき課題」「情報」「人」の数量を表す。上の例においては判断の基準は明示化されていないが、「多く(の)」を用いるには、もちろん、何らかの基準との比較が前提となっていると考えられる。この判断の基準とは、先述の「体験的に獲得された典型値や、状況から判断してこれくらいであろうという期待値」のような際立ちの低い基準に基づく、話し手の判断であると考えられる。したがって、これらの例における「多く」の基準は、文中に明示化されたり、想定できる基準よりも際立ちの低い主観的な基準による判断であると言える。この点で別義③は別義①と区別される。

(16) において、加藤の「ある種の制限」を示したが、なぜ (20) ~ (23) においては

(16) の制限が無効なのであろう。(20) ~ (23) は、「ある対象 X がある属性 Y を有することを述べる」すなわち「属性叙述」(益岡 2004) であると考えられる(9.4.1 参照)。たとえば(20)においては「多く」は「有名な学者」の数を述べているが、「有名な学者」の数を述べるというよりも、むしろ、「このカリフォルニア」が「有名な学者が多く訪れたいくなるような性質を持っている」という属性を表すと捉えることができ、属性叙述であると考えることができる。同様に、(21)は「平和維持活動」の属性を表すと捉えることができる。また、(22)、(23)においても「多くの情報」と「多くの人」はそれぞれ、「世の中」と「十日町いろは市」の属性を表すと捉えることができる。

つまり、「多く」が単にものの存在量を表す場合、制限が有効であるが、対象の特徴付けをする属性叙述である場合、この制限が無効になると考えられる(詳しくは第9章参照)。

以上のように、「多く」と判断する基準には、①文中に明示化された、あるいは想定される際立ちの高い個別の基準と、②明示化されない、あるいは想定も難しい際立ちの低い一般的な基準の2つのタイプの基準があることが分かった。

また、(20) (21)は連用修飾用法であるが(22) (23)は連体修飾用法であることから「遊離数量詞」として用いられる場合のみならず、連体修飾用法においても、同様に2タイプの基準があることが分かる。

#### 6.2.3.4 別義④：<ある出来事の生起する回数・頻度が><大であると捉えるさま>

(24) 飛行機事故は離陸時と着陸時に多く発生します。(BCCWJ)

(25) 風水害発生時の心構えと準備は大丈夫ですか。9月は台風や集中豪雨が多く発生する季節です。(BCCWJ)

(24) (25) の「多く」はそれぞれ「飛行機事故」「台風や集中豪雨」という出来事の量に注目し、その量がある基準を上回ることを表す。まず、(24)は(滞空飛行時などの)他の時間帯(の発生件数)が基準となってそれよりも「離陸時と着陸時」における発生件数が上回ることを表す。同様に、(25)の「多く」は「台風や集中豪雨」という出来事の量に注目し、「9月」は他の月よりも発生件数が上回ることを表す。したがって、(24) (25) の「多く」は基準が想定できるタイプである。

一方、以下の例(26) (27)においては判断の基準となる比較の対象は明示されておらず想定もされにくい。

(26) 過失の有無を判断する日本医師会の賠償責任の審査には時間がかかりすぎるという声を聞くことが多くある。(BCCWJ)

(27) ハリウッド映画はただの娯楽でメッセージ性を持たないと多く言われるが、そう思うか。日本映画も娯楽でメッセージ性を持たないと思うか。(= (3))

(28) 不特定多数の出入りが多くある施設に最適です。Suica などの IC カードをかざす

だけで、開錠と同時に交通費精算や打刻管理も同時に行うことが可能です。

(朝日 2015/03/10)

(26) (27) の「多く」は、それぞれ「時間がかかりすぎるという声を聞く」「ハリウッド映画はただの娯楽でメッセージ性を持たないと言われる」という出来事の回数が大であることを表している。これらにおいては、比較の基準が明示されず想定もされにくい。たとえば、(26) では「時間がかかりすぎるという声を聞く」という出来事の回数を、話し手が先述のような一般的な基準によって「多く (ある)」と判断するのであって、(たとえば「外国の医師会」と比べてなど) 基準が示されておらず、(基準の) 想定もしにくい。ただし、(27) ではたとえば「ハリウッド映画」以外の映画に比べてと想定することは可能である。さらに、(28) の「多く」は「不特定多数の出入り」という出来事の回数が一般的に大であることを表し、「施設」を特徴付けている。この場合「不特定多数の出入りが多くない (=少ない) 施設」という補集合が想定できるが、個別の基準 (たとえば、「1 日に 100 人、あるいは 1000 人以上」など) は不明である。このように、判断基準が明示 (あるいは想定) される用法であるか、際立ちの低い用法であるかの判断は連続的ではあるが、(26) ~ (28) においては、個別の基準は際立たないことから、話し手が一般的な基準で判断していると考えられる。

それでは、これらの文において話し手が個別の基準を明示せずに「多く」を用いた意図は何であろうか。これらの「多く」は「～より (多く)」という基準が示されないため、当然のことながら、基準が明示される場合より話し手の主観性の高い (逆に、客観性が低い) 判断である。たとえば、(26) において「時間がかかりすぎる声を聞く」という出来事の生起する回数が「大である」かどうかは客観的には不明である (=判断する主体によって変わりうる)。しかし、ここでの話し手の意図は、単に「時間がかかりすぎるという声を聞く」という同じ経験が反復する「回数や頻度」 (が大であることを) を述べるというよりもむしろ、対象 (「日本医師会の賠償責任の審査」) についての一般的、客観的な (「時間がかかりすぎる」という) 性質、あるいは評価を述べることであり得る。というのは、同じ出来事の反復は、一般的、客観的な (誰がいつ対峙しても同じ結果が得られる) 性質、評価であると捉え直すことができるからである<sup>29</sup>。

また、出来事 (コト) の生起がモノの性質に読み替えられるプロセスについて、堀川 (2012 : 170-171) は、「この病気は三十代の女性がよくかかる」という文は帰納的推論による属性叙述文であるとし、そのしくみは、「三十代の女性がこの病気にかかる」という事態が多数、発生した場合、「この病気」そのものの性質の中に、「三十代の女性がかか

<sup>29</sup> 篠原 (2008 : 99) は「同じ経験の反復」と「対象の特徴・性質」の関係について、知覚者の「身体経験」が「対象の性質」として読み替えられるプロセスは、「知覚者が対象と接する際得られる同じ身体経験の反復から生ずる」とし、「反復は、反復であるがゆえに客観的なもの (誰がいつ対峙しても同じ結果が得られる) と捉えられ、知覚者や知覚行為といった側面は背景に退く」「つまり、反復は対象の側に当該の体感をもたらす性質が備わっていると捉え直されているわけである」と記述している。

りやすい」特性があるのではないかと帰納的に推論することができる。つまり、複数回のコトの生起をもとにモノの性質を把握するのであり、図式的に言えばコトからモノへの推論が成り立つという構図である、と記述している。この記述をもとに考えると、(26) (27)においても同様に、モノの性質と生起した事態の関係を話者が認定する属性叙述文であると考えられる。たとえば(26)においては、「時間がかかりすぎるという声を聞く」という、同類の事態が複数回生起したという経験的事実から帰納的に推論してモノ（「日本医師会の賠償責任の審査」）の属性（「時間がかかりすぎる」）を認定するというメカニズムが働くと考えられることができるからである。

同様に、(27)においても基準が示されないことから、「ハリウッド映画はただの娯楽でメッセージ性を持たないと言われる」という出来事の生起する回数が客観的に大であるかは不明である。しかし、ここで「多く」を用いた話し手は、当該の出来事の生起する回数・頻度が大きいことを述べることによって、「ただの娯楽でメッセージ性を持たない」は「ハリウッド映画」の性質、あるいは一般的な評価であることを述べることであると考えられる。同様に、(28)においては「不特定多数の出入り」の回数・頻度が、「施設」を特徴付けている。

以上の考察から、別義③においても「多く」と判断する基準には、①文中に明示化された、あるいは想定される際立ちの高い個別の基準と、②明示化されない、あるいは想定も難しい際立ちの低い一般的な基準の2つのタイプの基準があることが分かった。そして、対象の特性を叙述する場合(16)の制限が無効になると考えられることを述べた。

### 6.2.3.5 別義間の関連性

前節での検討を踏まえ、本節では「多く」の4つの別義間の関連性について考察する。

別義①と別義②の関係を考えると、ともに基準が明示されるか、あるいは想定できることが必要である。別義①では他の要素が基準となり、別義②では全体において対比される要素が基準となっている。別義①と別義②の違いは全体が想定できるか否かにある。別義①と別義②から、<基準より><数量が大であると捉える>というスキーマを抽出できることから、メタファーに基づく意味拡張と考えられる。

別義①は、比較の基準に注目しその<基準を上回る（すなわち、基準より大である）>という意味であったが、別義③では基準の際立ちが薄れ、対象の数量を話し手が主体的に判断している。別義①と別義③から<数量が大であると捉える>というスキーマが抽出できるが、別義①より一般化している。したがってこの意味拡張は、狭い意味から広い意味に転用されるシネクドキーに当てはまる（靱山2014:55）。別義④は別義③同様、基準の際立ちは低い。別義③は注目する要素が<もの>の数量であったが、別義④では<出来事>の量（つまり頻度）へと拡張している。ともに<数量が大であると捉える>というスキーマが抽出でき、別義④は別義③からメタファーに基づく意味拡張であると考えられる。以上をまとめると図1のように表すことができる。

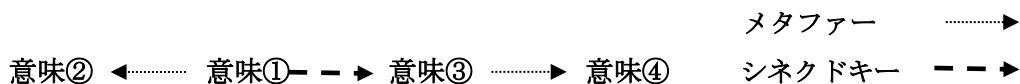


図1 「多く」の多義構造

### 6.3 「多数」と「数多く」の類似点と相違点

本節では、特にデキゴト名詞と共起する「多数」と「数多く」の類義語分析を行う。まず、これまでの分析における両語の意味記述を確認する（「多数」の個別の意味分析は第4章参照）。また、「多く」と「たくさん」の意味記述も確認する。

「数多く」:

＜個別化の度合いが高いもの・動き・出来事の数量が＞＜大であると捉えるさま＞

「多数」:

別義①＜個別化の度合いの高いものや出来事の数量が＞＜大であると捉えるさま＞

別義②＜全体における＞＜個別化の度合いの高い構成要素の＞＜割合が＞＜他方より＞  
＜大であると捉えるさま＞

「多く」:

別義①＜あるものや動きの数量が＞＜ある基準を＞＜上回ると捉えるさま＞

別義②＜全体における＞＜ある構成要素の割合が＞＜高いと捉えるさま＞

別義③＜あるものの数量が＞＜大であると捉えるさま＞

別義④＜ある出来事の生起する回数・頻度が＞＜大であると捉えるさま＞

「たくさん」:

別義①＜あるものの数量が＞＜大であると捉えるさま＞

別義②＜ある動きの量が＞＜大であると捉えるさま＞

上の記述から分かるように「たくさん、数多く、多く、多数」の4語は、出来事の量を表す点で共通している。さらに、「多数」を除く3語は動きの量も表すことができる点で共通している。それでは、出来事の量を表す場合、「数多く、多く、たくさん、多数」の4語はどのような違いがあるのであろうか。また、動きの量を表す場合、「数多く、多く、たくさん」の3語はどのような違いがあるのであろうか。

第4章で見たように、出来事を表すといっても、デキゴト名詞の中には、ものに近いものから動詞に近いものまで連続性・段階性があることが指摘されている。そこで本章ではまず、モノ名詞とデキゴト名詞の両方と共起する「多数」と「数多く」の類義語分析を行った上で、出来事と動きの量を表す「たくさん、数多く、多く」の3語の類似点・相違点を考察する。

### 6.3.1 類似点

前節の意味分析の記述において、「数多く」と「多数」の意味①の記述は「動きの量」を表すか否か以外で同じであり、(1) で見たようにほぼ同じ意味で置き換えが可能なことから、モノと出来事の量を表す場合、両語は類義関係にあり相互の意味は非常に近いと考えられる。両語の類似点は<個別化の度合いが高いものや出来事の数量が><大であると捉えるさま>を表すことと言える。

### 6.3.2 相違点

#### 6.3.2.1 連用修飾用法

本節では、連用修飾用法の「数多く」と「多数」を比較する。以下の例を見てみよう。

- (29) 自分の体力、能力に合ったバットを使う。数多く (\*多数) 振ればよいというものではない。 (= (11))
- (30) なぜなら、「ダンサーは舞台に数多く (\*多数) 立つことでしか磨かれない」からだ。 (= (10))
- (31) その時に虫食いを発見することが数多く (\*多数) あるからです。 (= (9))
- (32) その上、検事調書には、榎本が供述しなければ検事も知りえないことが多数 (数多く) ある上に、「本件の他の関係者の供述内容とは異なる全く独自の供述事項などが多数録取されている」点からも、供述の任意性、信用性は十分という。(BCCWJ)
- (33) 管理体制良好のマンションが多いので、マンションでの空き巣等の発生は聞かない。小学校の通学路にはボランティアの指導員が多数 (数多く) 立ち、子供たちを交通事故や不審者からガードしている。(http://www.mansion-note.com/area/)

6.2.2 で見たように、(29) (30) の「数多くは」それぞれ「振る」「立つ」という動詞を修飾しているがこれらが表す事態は異なっている。(29) の「振る」は「物の一端を持ったり固定したりして、前後左右または上下に何度か往復させるように動かす」(『大辞林』(第三版)) という一瞬で終わる動きであり、「数多く」は、この具体的な「動き」の実現する回数を表している。前節の意味記述からも分かるように、(ものではなく) 動きの数量(回数)を表す場合「多数」は用いることが難しい。

一方、(30) の「立つ」は、文字通りには「舞台という空間的場所に位置する」といった一瞬で終わる動きを表すが、「舞台に立つ」という句全体で、概ね「(本番の) 舞台の上に立ち演技する」という、「舞台に立つ」ことから連続して生じる一連の行為の全体を表す。つまり、具体的な動きの量ではなく出来事の数を表すと考えられ、「数多く」はその動きや出来事を時間軸上における点として数える<sup>30</sup>と考えられる。

<sup>30</sup> これについて、宇都宮 (2001 : 181) は、「回数は時間軸上の出来事が位置する点の数を数えている」と記述している。

さらに、(31) (32) は同じく「ことがある」という存在文を含むが、両語の容認度が異なる。(31) の「数多く」は、「虫食いを発見すること」という出来事の生起する回数や頻度を表す。この「ことがある」を含む文は「経験・蓋然性を表す存在文」(大西 2011) であると考えられる。経験・蓋然性を表す存在文においては「その出来事の数や頻度を表す副詞句が生起できる」(大西 2011 : 353) とされる。つまり、「数多く」は「回数や頻度を表す副詞句」の役割をすると考えられる。このように、(ものではなく) 回数や頻度を表す意味が際立つ場合、「数多く」を「多数」に置き換えることは難しい。

一方、(32) においては「多数」が言えるのは、ものの数を数えると解釈できるからである。すなわち、この「多数」は「榎本が供述しなければ検事も知りえないこと」という内容を指す。このため、具体物ではないが実質的な意味を持ち、ものとして捉えることができる。同様に、(33) の「多数」は「立つ」と共起しているが、主体である「ボランティアの指導員」の数を表す。このように「多数」は基本的にももの数を数えると言える。

ところが、前節の分析でも見たように「多数」が(ものではなく) 出来事の数数を数えている例も観察でき、「数多く」との置き換えも可能である。

(34) 一方、Ca<sup>2+</sup>拮抗薬を用いた再灌流障害予防に関する検討も**多数**(**数多く**) なされている。(BCCWJ)

(35) C型慢性肝炎の根治療法として広く I F N 治療がおこなわれ、最近では抗ウイルス効果がより高い治療方法として、リバビリンと I F N の併用治療も**多数**(**数多く**) おこなわれている。(BCCWJ)

「多数」も (34) (35) のように、「検討」「併用治療」という出来事を表す名詞と共起しその数を数えることができる。このように「多数」が数えることのできる出来事と、前述のように数えることのできない出来事の違いは、何なのであろう。

第 4 章で見たように、影山 (1993) は出来事(デキゴト) 名詞を単純デキゴト名詞(単純事象名詞) と複雑デキゴト名詞(複雑事象名詞) に区分し、単純デキゴト名詞と複雑デキゴト名詞の違いは、前者は可算名詞として「多数」などの数量詞を取ることができるが、後者は動詞的概念であるから数量詞とは相容れない、とし以下の例をあげている(影山 1993 : 272 下線は引用者 再掲)。

#### 単純事象名詞

(36) 学生たちはボランティア活動を**多数**行っている。

(37) 母校のサッカーチームは、海外への遠征を**多数**している／行っている。

#### 複雑事象名詞

(38) \* 息子は家出を**多数**している。

(39) \* JR は運賃の値上げを**多数**した。

影山（1993）は、(36) (37) の数量詞「多数」は「家出、値上げ」などの回数を表すとは解釈できない。意味的に同じでも数量詞の代わりに「幾度も、たびたび」など純然たる副詞を用いると、複雑デキゴト名詞（動名詞）でも成り立つが、この場合の頻度副詞は動名詞（「家出」「値上げ」）ではなく「する」を修飾しているとしている（p. 272）。

これらの振舞いの違いから、影山（編）（2011：216）は「単純デキゴト名詞は時間の概念を含む出来事を表すという意味の特徴において動詞と共通する性質を持つが、（略）複雑デキゴト名詞のように動詞の持つ統語的な特徴は示さない。このことは、単純デキゴト名詞は動詞よりモノ名詞に近く、複雑デキゴト名詞はモノ名詞ではなく動詞に近いということを示している」と述べ以下のように図示し、「名詞」において時間的な概念の関与の仕方に連続性・段階性があることを指摘している。

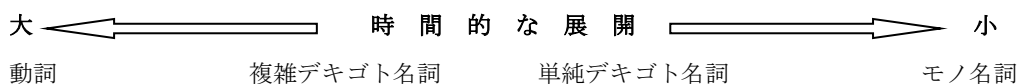


図2（影山（編）2011:216）

上の例において「単純デキゴト名詞（「ボランティア活動」「遠征」「手術）」と共起する(36) (37)の「多数」は「数多く」と置き換えることができる。さらに、「複雑デキゴト名詞」と共起できないとしている(38) (39)の「多数」を「数多く」に置き換えると容認度が上がると思われる。つまり、「数多く」は「多数」とは異なり「複雑デキゴト名詞」とも共起できる場合があると考えられる。実際、インターネットの検索においても「数多く」が「値上げ」という影山の言う「複雑デキゴト名詞」と共起する例を見つけることができる。

(40) 同社は、2004年から6回の値上げを実施し、値上げ幅は累計で22.4%となっている。これまでは、1回の値上げで3-6. %（加重平均）値上げしてきたことになるという。これに対し、今後の価格政策について、原田 CEO は「もっと低い、1%という値上げを**数多く（\*多数）**やっつけていかなければならないと予測している。

（<http://jp.reuters.com/article/topNews/idJPTYE97806.R20130809>）

(41) 入管専門の行政書士事務所です。人それぞれの事情により様々な対応が必要となります。お任せ下さい。趣味のサーフィンを通じ、オーストラリア、バリ島、ハワイなど**数多く（\*多数）**旅行をしてきました。旅先でトラブルに見舞われた時、不慣れた外国で言葉もうまく通じず困っている時、親切な現地の人に助けられたこともしばしばあります。（NLT）

(40)の「数多く」は「値上げ（する）」という出来事が時間軸上に生起する数を表している。同様に、(41)の「数多く」は「旅行」という複雑デキゴト名詞と共起して出来事が時



間軸上に生起する数を表している。上の文において「値上げ」「旅行」は時間軸（回数の意味が）が際立つため「数多く」を「多数」と置き換えることはできない。

つまり、同じく出来事を表す名詞とはいっても、「多数」はその中でより時間的概念の関与が低い「単純デキゴト名詞」と共起してその数を表すことができるが動詞に近い名詞とは共起が難しいのに対して、「数多く」は「モノ名詞」と「単純デキゴト名詞」に加えて「複雑デキゴト名詞」の一部とも共起してその（回）数を表すことができる場合がある。さらに周辺の例においては 6.2.2 で見たように、名詞（の指示対象）の表す数ではなく、動詞の表す動きや出来事の（回）数を数えることができる場合があると考えられる。

以上のことから、「多数」は基本的に出来事をもの的に数える表現であり、他方「数多く」は、「多数」よりも動きや出来事を時間軸上で順次数えることができる表現であると考えられる。ただし、もの的に捉えるか時間軸上で捉えるかは上の図 1 から分かるように連続的・段階的なものであり、「数多く」がすべての動詞やデキゴト名詞と共起できるといわけではない（例「??花子は英語の勉強を数多くした」）。また、影山（1993：270）が「同じ名詞が複雑デキゴト名詞と単純デキゴト名詞の両方の機能を担うことは、しばしば見られる」と述べているように、ある名詞が複雑デキゴト名詞か単純デキゴト名詞かは必ずしも明確に区分できるものではない<sup>31</sup>。

ここで、モノ名詞と共起する「多数」の例を見てみよう。以下の例においては「多数」を「数多く」に置き換えると容認度が下がる。

(42) 共同人名票は、表題部に記載すべき所有者もしくは各区に記載すべき登記権利者または登記義務者が多数（??数多く）あるときに、表題部または各区に記載するのに代えて、共同人名票という別個な用紙に記載されます。 (BCCWJ)

(43) 椅子や机が多数（??数多く）設置されているテレコムセンター展望台。窓外にはきらめく夜景が。 (http://www.tripadvisor.es/)

(42) の「多数」は、「登記権利者または登記義務者」の数量を表す。この「多数」を「数多く」に置き換えると、「登記権利者または登記義務者」の各構成要素が何らかの意味を持つように感じられ、すなわち構成要素が際立ち容認度が下がる。このことから、この文で「多数」を用いた話し手は単に「登記権利者または登記義務者」の一まとまりの数に注目するのであって、構成要素に注目するわけではないと考えられる。

同様に、(43) の「多数」は「机や椅子」の数を表す。この文で「多数」を用いた話し手

<sup>31</sup> 影山（1993：270-271 下線は引用者）は、「胃潰瘍の父が胃の手術をした」「大学病院の医師たちが花子に心臓移植の手術をした」における「手術」について、前者の「胃」は「手術」という行為の直接の対象であるから目的語に相当するため、「手術」は複雑事象名詞と認定できるとしている。他方、後者の「心臓移植の」は「手術」の内容を描写するものであるから、項ではなく修飾語である。項を取らないことからすると、この場合の「手術」は単純事象名詞と見なすことができるとしている。また、「報告」や「研究」は複雑事象名詞、単純事象名詞、および結果名詞の3つの語彙エントリーに記載されていると考えられる、と述べている。

は、展望台の特徴として「机や椅子」の一まとまりの数に注目するのであって個々の「椅子や机」に注目するわけではない。それゆえ「数多く」と置き換えると容認度が下がると考えられる。このように、「数多く」は個々の構成要素を際立たせることから、構成要素に注目しない場合には用いることが難しい。

以上、連用修飾用法において、①「多数」は話し手が出来事をもの的に数える表現であるのに対して、「数多く」は出来事を時間軸上で数えることができ、さらに動きの回数も数えることができる表現であること、②「多数」は個々の構成要素よりも一まとまりに注目するのに対して、「数多く」は個々に注目するということが分かった。まとめると、もの的に捉える場合は一まとまりに注目し、時間軸上で順次捉える場合は個々に注目しやすいと言える。これらの対応はどのような関係があるのであろうか。影山（1999）は、Langcker（1991）を引用しながら動詞(construct)と名詞(construction)の違いを連続走査と累積走査の概念に対応させて以下のように説明している。

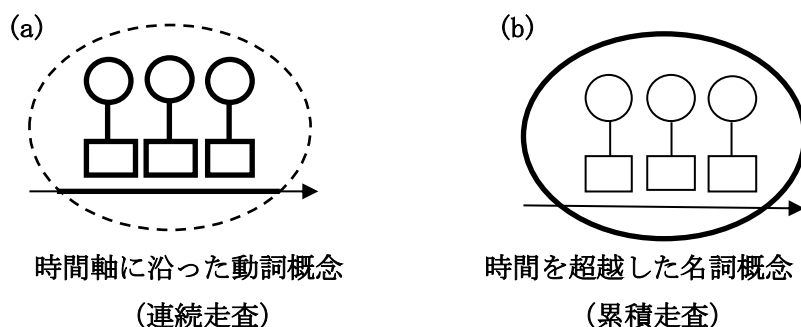


図3（影山1999：100）

動詞が時間の流れに沿って出来事の有様を表現することを、Langcker（1991）は連続走査（sequential scanning）と呼び、(a)の図として表している。(a)の図で○と□が繋がったものは、行為から変化、結果へと至る一瞬一瞬の局面を表し、その下の太い線は時間の経過を表している。これに対して、construction という名詞になると、建設過程を時間を追って順々にたどるのではなく、始めから終わりまでをひとまとまりの概念として提示する。このことを Langacker は累積走査（summary scanning）と呼び、名詞がひとまとまりの概念となることを図(b)のように、過程全体を太い枠で囲むことで表す。(b)では、時間軸（横向き矢印）が細い線になっていて、時間の流れが消えていることに注意。また、全体を丸く囲むことで、出来事を構成する一瞬一瞬の局面は薄い線になっている。これは、全体が枠をはめられたために、内部の行為の流れを逐一見ることはできないということである。

（影山1999:100-101 図の番号は本研究の通し番号 下線は引用者）

上の説明に沿って考えると、時間的な展開がより際立つ名詞（図2参照）と共起できる「数多く」は、時間の軸に沿って構成要素の一つ一つに注目することができる（図3(a)）。

一方、時間的な展開の際立つ名詞と共起できない「多数」は時間の流れを捨象し、「全体が枠をはめられた」すなわち、一まとまりとして捉え、個々の構成要素の際立ちが低い（図3(b)）と言える。

つまり、時間軸が際立つ「連続走査」という捉え方は個々の構成要素が際立ち、逆に「時間の流れが消える」とされる「累積走査」という捉え方は構成要素よりも全体が際立つことと矛盾しないことが分かる。また、数えるという行為は、たとえ（対象となるもの自体は時間の概念を含まない）モノ名詞を数える場合においても、個々に注目して1、2、3…と数える行為自体に時間の流れが関与する。以上のことから、「多数」は累積走査に関わる表現であり、「数多く」は連続走査に関わる表現であると考えることができる。

ただし、際立ちとはあくまで相対的・段階的なものであり、全体が際立つ場合でも構成要素が全く際立たないということではない。

### 6.3.2.2 連体修飾用法

本節では、「の」を介しての連体修飾用法における「数多く」と「多数」の類義語分析を行い、前節の分析が当てはまるのかどうかを確認する。冒頭で述べたように、NLTを利用して検索すると「数多く+の+名詞」の形式は出現頻度14963、一方「多数+の+名詞」の形式は、出現頻度25890である。上位の名詞を頻度順に以下の表に示す（「数多く」は表2の再掲、「多数」は第5章の表5の再掲）。

表3 「数多く+の」（14963中）と「多数+の」（25890中）に共起する上位頻度の名詞10語

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
数多く	人 315	経験 253	作品 234	実績 214	問題 131	活動 125	種類 120	お客様 116	方々 80	こと 80
多数	人 1883	場合 688	人々 668	人間 322	国民 285	方々 228	企業 218	参加 200	患者 199	意見 193

上の表を見ると、共起する名詞は両語ともに「人、お客様、方々、人々、人間、国民」など、人間を表す名詞が上位を占め、人間に対する注目の高さが分かる。また、「数多く」と共起する「経験、作品、問題、種類」は、「多数」と問題なく共起できる。一方、「多数」と共起する頻度が高い「場合」は「申込多数の場合」といった複合形式で多く用いられる表現であり、複合形式を取らない「数多く」と置き換えが難しい。しかし3位以下の「企業、参加、患者、意見」は、「数多く」と問題なく共起できる。このように、両語と高頻度で共起する名詞は基本的にほぼ同じであり、その場合、両語をほぼ同じ意味で置き換えることができることから、両語の意味が近いことが分かる。

ところが、以下のように「数多く」を「多数」に置き換えると容認度が下がる例も観察できる。

(44) 年若い老人ホームで孤独な生活を送っていても、数多く (?多数) の過去のよろこびを思い出としてたくさんためこんでいる人は幸せです。 (BCCWJ)

(45) それに、その地位を守るためには、彼らは 数多く (?多数) の恥をしのばなければならなかったのだ。 (BCCWJ)

(44) (45) の「数多く」はそれぞれ「よろこび」「恥」の数を表す。「よろこび」や「恥」は感情的な抽象概念であり、感情的な抽象概念は抽象物の中でも個別化の度合いが低く「通常数えることができない」(眞野 2004 : 134) とされている。ところが、なぜ「数多く」は個別化の度合いの低い感情的な抽象概念も数えることができるのであろうか。

眞野 (2004) は、「出来事名詞では異質性における個別化ではなく、時間的に異なる出来事を数えることで個別化を行うことができる」(眞野 2004 : 137 下線は引用者) と述べている。(44) (45) において「通常数えることができない」感情的な抽象物を「数多く」が数えることができるのは、「よろこび」や「恥」という感情を主体が体験した回数を「時間的に異なる出来事」として数えているからではないであろうか。つまり「よろこび」や「恥」といった感情的な抽象物は、「時間」の観念がそれ自体に含まれるとは捉えにくいことから、前節で見た影山 (編) (2011) の定義によれば典型的な「デキゴト名詞」とは考えにくい<sup>32</sup>。しかし、それらの感情を体験した経験を出来事として話し手が一つ一つ時間軸上で数えることができる。

以上、連体修飾用法においても副詞的用法と同様、①時間軸 (の展開) が際立つ場合においては (「多数」は用いることができず) 「数多く」が用いられること、②「数多く」が個々を際立たせるという二つの分析が当てはまることが分かった。

以上の考察から、6.2.2の「数多く」と前章で分析した「多数」の意味記述を次節で訂正して示す。

### 6.3.3 まとめ

以上、本節では 5.5.1 で分析した「多数」と 6.2.2 で分析した「数多く」の意味の類似点・相違点を考察した。「多数」は個々の構成要素よりも一まとまりに注目するのに対して、「数多く」は個々に注目することは、6.3.2の類義語分析の結果分かったことであり、両語の意味を修正して記述する。両語の意味は次の通りである。

「**数多く**」 : <個別化の度合いが高いもの・出来事・動きの><構成要素に注目して>  
<数量が><大であると捉えるさま>

「**多数**」 : 別義①<個別化の度合いが高いものや出来事の数量が><一まとまりとして>  
<大であると捉えるさま>

<sup>32</sup> 影山 (編) (2011) は「時間の概念」とは「ある出来事や動作がどれぐらい継続し、いつ終わったかといった概念—現在・過去という『時制』よりむしろ発生・継続・完了といった『アスペクト』の概念—を指し、それは典型的には動詞が担当する意味概念である」と記述している (p. 43)。

別義②<全体における><個別化の度合いが高い構成要素の><割合が><他方より><大であると捉えるさま>

類似点と相違点は以下の通りである。

①「数多く」と「多数」はともに、典型的には個別化の度合いの高いものの数を数えるが「数多く」はものに加えて、動きや出来事といった「動詞」に近い概念を数えることができる。これに対して、「多数」は「動き」は数えることが難しく、「出来事」の中でもよりものに近い出来事（例：検討、治療、活動、遠征など）を数えるが「動詞」に近い出来事（例：家出、値上げなど）を数えることはできない。このことから、「数多く」は時間の流れに沿って数える表現であり、一方「多数」は時間の流れを捨象して一まとまりとしての全体に注目する表現であると考えられる。逆に、一まとまりの全体に注目し、個々の構成要素が際立たない場合、「数多く」を用いることは難しい。

②個別化の度合いの低い感情的な抽象物は通常、個別化ができないとされる。しかし、「数多く」は「多数」が個別化できない、すなわち境界の捉えにくい抽象概念を、主体が体験した出来事として捉えることによって個別化できる。このため、「数多く」は個別化の度合いの低い感情的な抽象物も数えることができる。

①と②から、「数多く」の個別化には時間軸上で個々の構成要素を数える連続走査が大きく関わっているのに対して、「多数」の個別化には時間軸上のプロセスが捨象され、一まとまりのものとして数える累積走査が大きく関わっていると考えられる。そして、この両語の個別化の仕方の違いが両語の意味の違いをもたらしていると考えられる。

つまり、両語の使用は数える対象の持つ外的特徴に基づくというよりも、むしろ話し手による主体的な、異なる捉え方に基づくことが明らかになった。

#### 6.4 出来事と動きの量を表す「数多く、たくさん、多く」

前節ではモノ名詞とものに近い名詞（単純デキゴト名詞）の数量を表す「多数」と「数多く」の意味の違いについて考察した。本節では、出来事と動きの量を表す「数多く、多く、たくさん」の3語について、連用修飾用法における意味の類似点・相違点を考察する。以下の例を見てみよう。

(46) 10回くらい運転したと言っていますがもっと**数多く** (**多く/たくさん**) していた  
のでしょ。教育者としては論外な行為です。 (BCCWJ)

(47) 運動を**多く** (**たくさん/\*数多く**) すれば痩せると思う。(「耳ツボダイエット・  
適正チェック 次の質問に答えて自分の体質や生活環境をチェックしてみましょ  
う」) (NLT)

(48) 久しぶりに**たくさん** (**多く/\*数多く**) 歩いて疲れもしたが、何よりも頭の中が  
混乱していた。 (BCCWJ)

- (49) 首都圏の山を中心に、時には南北アルプス・八ヶ岳方面へも遠征されている sanpo さん。表題に散歩道とありますが、なかなかどうしてマイナールートや健脚コースなども数多く(たくさん/多く)歩かれています、山が大好きな女性です。(NLT)
- (50) 軸足がボールから近いと思うのなら、少し離して踏み込んでみる。軸足の踏み込みが浅いと思うのなら、少し深く踏み込んでみる。また、軸足以外にも、体の傾き方が甘いと思うのなら、少し体を傾けてみる。助走の角度に違和感があるのなら、少し角度を変えてみる。こういった調整を加えながら、自分の最適な蹴り方を見つけてください。最適な蹴り方が見つかるまでには、数多く(たくさん/多く)蹴る必要があります。(NLT)
- (51) 自分の体力、能力に合ったバットを使う。数多く(たくさん/多く)振ればよいというものではない。(= (11))
- (52) なぜなら、「ダンサーは舞台上に数多く(たくさん/多く)立つことでしか磨かれない」からだ。(= (10))

(46) の「運転」と (47) 「運動」はともに複雑デキゴト名詞と考えられるが、「数多く」の容認度が異なる。(46) の「数多く」は「運転(する)」の回数を表す。この「数多く」は(文体差はあるが)「多く、たくさん」とほぼ同じ意味で置き換えることができる。他方、(47) の「多く」は「たくさん」とは置き換えが可能であるが「数多く」は難しい。これは、(47) の「多く」は「運動」の量を、たとえば継続時間や距離、激しさなど、(頻度、回数などを含め)結果的に一まとまりに捉えるのであって、たとえば「何回」運動したかといった個々の(運動の)構成要素に注目しているわけではないからと考えられる。このことは「運動」を「腹筋運動」といった回数に注目しやすい個別の運動に置き換えると「数多く」が容認可能になることから分かる。

同様に、(48) の「たくさん」は「歩く」という継続する動きの量を、たとえば移動時間や距離といった連続量を結果的に一まとまりに捉えるのであって、その回数に注目しているわけではない。この場合、「たくさん」は「多く」とは置き換え可能であるが「数多く」は難しい。つまり、「数多く」は行為や動作、出来事を点として捉え、その回数を数えるのに対して、「多く、たくさん」は動きの量を一まとまりに捉えると考えられる。このことは、(49) において「マイナールートや健脚コースなど」と個々の構成要素が明確に捉えられる場合「数多く」が用いられることから分かる。

続いて、(50) (51) の「数多く」はそれぞれ「蹴る」「振る」という動きの量を表す。「蹴る」「振る」という動きは一瞬で終わる動きであって、「数多く」はその瞬間的な動きの個々に注目し回数を数えている。この「数多く」を「たくさん、多く」に置き換えると、動きの量を結果的に一まとまりに捉えるのであって、「数多く」とニュアンスの差が感じられる。

以上の観察から、「数多く」が出来事や動きの量を表す場合、当該の行為や動作、出来事の「個別性」に注目し、どの程度行ったかという数量的規模を「回数」として捉えること

が分かる。他方、「多く、たくさん」は個別性には注目せず、当該の出来事や動き、行為をどの程度行ったかという数量的規模を結果的に一まとまりに表すと考えることができる。

加藤（2006a：37）は、「連用数量詞は広義の動作量と解釈される」とし、「動作量の解釈は、A. 動作主の数量、B. 動作対象事物の存在数量、C. 動作対象物の属性数量・部分数量、D. 達成量、E. 動作・行為の持続時間、F. 動作・行為の回数・頻度、などがあるが、DはBやCであることもあり、これらは排他的分類にはなっていない」、「ただし、動作量解釈が、A-Fのいずれと結び付きやすいかは動詞の意味による。最も結び付きやすいものが連用不定数量詞の無標の解釈としてあらわれる」と述べている。

確かに、上の例から分かるように（連用修飾用法における）動作量の解釈は「歩く」といった継続動詞の場合、「動作・行為の持続時間」や距離など「達成量」<sup>33</sup>と解釈することが可能である。他方、「振る、蹴る」といった瞬間動詞の場合、「動作・行為の回数・頻度」と解釈できることから「動作量解釈がいずれと結びつきやすいかは動詞の意味による」と考えられる部分が多い。

しかし、同じく「蹴る」という動詞と共起しても、「数多く」は動きの個々の構成要素に注目して一回一回数えるのに対して、「たくさん、多く」は、個々の構成要素には注目せず、動きの量を一まとまりとして捉える。このことから、「動作量解釈が、A-Fのいずれと結び付きやすいか」は（「動詞の意味」それ自体よりもむしろ）「数多く、たくさん、多く」のような「不特定数量詞」が際立たせると考えることができる。このことは、影山（編）（2011：17）が、「学生、医者、子供」などの名詞が「～人」という類別詞を選ぶのか、それとも逆に、「～人」という類別詞のほうが対象物を選ぶのかという問いに対して、「類別詞が名詞を限定している—たとえば『～人』という類別詞は人間を表す名詞を選び、『～台』という類別詞は機械類を表す名詞を選ぶ—と考えるのが正しいだろう」と答えていることと平行して考えることができる<sup>34</sup>。

一方、(52)の「立つ」は、6.2.2で見たように、概ね「(本番の) 舞台の上に立ち演技する」という経験の量を表す。この場合「数多く」をほぼ同じ意味で「たくさん、多く」と置き換えることができると思われる。このことから「多く、たくさん」は具体的な行為、動きの「回数」の意味を際立たせることは難しいが、経験の量として一まとまりに表す場合については容認度が高いと思われる。

それでは、連用修飾用法における「たくさん」と「多く」の相違点は何なのであろうか。

### (53) 野萱草（ノカンゾウ）

山菜というと山の奥深くに生えるイメージがありますが、ノカンゾウは別。人里

<sup>33</sup> 加藤（2006a：35）は「動作の達成量」として「走った距離」や「他動詞の目的語の数量」も含めることができると記述している。

<sup>34</sup> 影山（編）（2011：17）は、その証拠として、「たとえば『私が見たのは』と言っただけでは何を見たのか不明であるが、『私が見たのは3人です』と言えば人間を見たと解釈され、『私が見たのは3匹です』と言えば何らかの動物を見たと理解できる。類別詞が手がかりになって、対象物の姿が分かってくるのである」と述べている。

で多く (たくさん/?数多く) 目にする山菜です。アクもクセもなく、普通の野菜と変わらぬ清々しい味わいが特徴。(NLT)

(54) ハリウッド映画はただの娯楽でメッセージ性を持たないと多く (\*たくさん/\*数多く) 言われるが、そう思うか。日本映画も娯楽でメッセージ性を持たないと  
思うか。(= (3))

(53) の「多く」は「ノカンゾウを目にする」頻度・回数を表すと思われる。この「多く」は「たくさん」と置き換えることができる。ただし、ニュアンスが異なる。「たくさん」は「頻度・回数」ではなく、「ノカンゾウ」というものの数に注目すると捉えられる。

一方、(54) の「多く」は「言われる」という出来事の生起する頻度・回数を表すと捉えることができる。この場合、「たくさん」は容認できないことから「たくさん」は頻度・回数  
を表すことが難しいことが分かる。また、先述のように、「ハリウッド映画はただの娯  
楽でメッセージ性を持たない」という評価は実際、客観的なものかどうかは不明である。  
しかし、ここで「多く」を用いた話し手の意図は、「ハリウッド映画はただの娯  
楽でメッセージ性を持たないとされる」という出来事の生起する頻度・回数が大であると述べる  
ことによって、「だだの娯楽でメッセージ性を持たない」という「ハリウッド映画」の特  
徴や評価を述べることである。先述のように、複数回の同類の事態生起から帰納的推論に  
よって、それが一般的な特徴や評価であると捉えることが可能になるからである。ここ  
でもう一度 (53) を見ると、ここで「多く」を用いた話し手の意図は、「人里で目にする」と  
いう出来事の頻度・回数を大であると述べることによって、「ノカンゾウ」の特徴を述べる  
ことにあると考えられる。すなわち、「ノカンゾウ」は「人里に生育する」という属性を持  
つことを述べることでありと捉えられる。以上の考察から、「多く」は頻度・回数を述  
べることによって属性を表すことができるが、「たくさん」は難しいと考えられる(詳細は  
第9章)。

## 6.5 第6章のまとめ

以上、本章では出来事の量を表す「多く」と「数多く」の個別の意味を分析し、相互の  
意味の類似点・相違点を考察した。さらに動き・出来事の量を表す「多く、たくさん、数  
多く、多数」の4語の意味の類似点・相違点を考察した。

まず、「多く」と「数多く」の個別の意味を以下のように記述した。

「**数多く**」: <個別化の度合いが高いもの・出来事・動きの><構成要素に注目して><数  
量が><大であると捉えるさま>

「**多く**」:

別義①<あるものや動きの数量が><ある基準を><上回ると捉えるさま>

別義②<全体における><ある構成要素の割合が><高いと捉えるさま>



別義③<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

別義④<ある出来事の生起する回数・頻度が><大であると捉えるさま>

類似点と相違点は以下の通りである。

まず、「数多く」と「多数」はともに、典型的には個別化の度合いの高いものの数を数えるが「数多く」はものに加えて、動きや出来事といった「動詞」に近い概念を数えることができる。これに対して、「多数」は「動き」は数えることが難しく、「出来事」の中でもよりものに近い出来事（例「検討、治療、活動、遠征」など）を数えるが「動詞」に近い出来事（例「家出、値上げ」など）を数えることはできない。このことから、「数多く」は時間の流れに沿って数える表現であり、一方「多数」は時間の流れを捨象して一まとまりとしての全体に注目する表現であると考えられる。逆に、一まとまりの全体に注目し、個々の構成要素が際立たない場合、「数多く」を用いることは難しい。

さらに、個別化の度合いの低い感情的な抽象物は通常、個別化ができないとされる。しかし、「数多く」は「多数」が個別化できない、すなわち境界の捉えにくい抽象概念を、主体が体験した出来事として捉えることによって個別化できる。このため、「数多く」は個別化の度合いの低い感情的な抽象物も数えることができる。

以上の考察から、「数多く」の個別化には時間軸上で個々の構成要素を数える連続走査が大きく関わっているのに対して、「多数」の個別化には時間軸上のプロセスが捨象され、一まとまりのものとして数える累積走査が大きく関わっていると考えられる。そして、この両語の個別化の仕方の違いが両語の意味の違いをもたらしていると考えられるということ述べた。

つまり、両語の使用は数える対象の持つ外的特徴に基づくというよりも、むしろ個別化の方法の違いに基づくことが明らかになった。

また、「数多く」と「たくさん、多く」については、連用修飾用法において出来事や動きの量を表す場合、「数多く」はあくまでも動きの構成要素に注目し、一つ一つ数えるのに対して、「たくさん、多く」は動きやデキゴトの量を結果的に一まとまりに表すことが明らかになった。

最後に、「たくさん」と「多く」は同じく出来事や動きの量を一まとまりに表すことができるが、「たくさん」は頻度・回数を表すのは難しいのに対し、「多く」は、頻度・回数（が大であること）を表すことによって対象の特徴を述べる属性叙述に用いられ、総称的な意味を表す用法があることが明らかになった。

4語の使用は、出来事や動きの量に対する異なる個別化と範疇化による主体的な捉え方に動機付けられていることが明らかになった。

## 第7章 人間を表す数量表現の類義語分析

### 7.1 はじめに

本章は、「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の5語を考察対象とし、特に人間を表す場合のこれらの語の類似点・相違点を分析することによってこれら5語の使用を決定付ける要因を明らかにすることを目的とする。また、「大勢」の個別の意味を分析する。これら5語は『講談社 類語辞典』では、以下のように記述されている（「大量、たくさん、多数」の個別の意味記述については第5章、「数多く」については第6章参照）。

「大量」：「多量」の、より口語的な言い方。（多量：量が多い様子）

「たくさん」：数量が多い様子。

「多数」：数の多い様子。

「数多い」：数が多い様子。

「大勢」：人がたくさんである様子。

以上のように『講談社 類語辞典』によれば、それぞれ「大量」は「量」、「たくさん」は「数量」、「多数」と「数多い」は「数」の「多い様子」を、「大勢」は「人」が「たくさんである（＝数量が多い）様子」を表すとしている。しかし、これら5語は同じく人間を表す例が多く観察できるが、人間を表す場合どのように異なるのであろうか。

靱山（2006：10）は、日本語にはもっぱら「人間」について述べる、いわば「人間」専用の言葉もたくさんあるとし、「名詞：天才」「動詞：話す」「形容詞：そそっかしい」などの表現をあげている。「大勢」も人間専用の言葉であるが、人を数える場合、「大勢」という表現があるのになぜ「大量、たくさん、数多く、多数」などの表現も多用されるのであろうか。

### 7.2 類似点

本節では、「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の5語の類似点について確認する。まず、第5章と第6章における分析結果を下にまとめる<sup>35</sup>。

「大量」：＜具体物の数量が＞＜（個別性が際立たないほど）著しく＞＜大であると捉えるさま＞

「たくさん」：＜あるものの数量が＞＜大であると捉えるさま＞

<sup>35</sup> 第5章で記述したように、「たくさん」と「多数」は多義語であるが、人間を表す意味での比較考察のため、ここでは別義①のみあげる。

「数多く」：＜個別化の度合いが高いもの・出来事・動きの＞＜構成要素に注目して＞＜数量が＞＜大であると捉えるさま＞

「多数」：＜個別化の度合いが高いものや出来事の数量が＞＜一まとまりとして＞＜大であると捉えるさま＞

続いて、「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の5語と共起する名詞を確認してみよう。NLTを利用して連体修飾用法（数量表現+の+名詞）において5語と共起する名詞を検索すると上位15位は以下の表1の通りである（「大量、たくさん、多数」は第5章、「数多く」は第6章参照）。

表1 連体修飾用法における名詞上位15語（併記の数字は出現頻度）

	大量 (18238 中)	大勢 (9929 中)	たくさん (31903 中)	数多く (14964 中)	多数 (25890 中)
1	水 810	人 2779	人 3883	人 315	人 1883
2	データ 439	人々 586	種類 731	経験 253	場合 688
3	情報 362	方々 316	方々 679	作品 234	人々 668
4	放射 323	前 269	情報 452	実績 214	人間 322
5	汗 258	子供 214	お客様 442	問題 131	国民 285
6	放射線 181	人間 186	子供 372	活動 125	方々 228
7	ごみ 180	観光 140	人々 364	種類 120	企業 218
8	エネルギー 160	お客様 128	花 238	お客様 116	参加 200
9	土砂 157	人達 125	本 229	方々 80	患者 199
10	資金 147	皆様 121	お客 184	こと 80	意見 193
11	放射能 145	仲間 106	思い出 183	写真 75	死傷 182
12	出血 140	お客 104	お金 164	命 73	死者 162
13	メール 129	市民 92	経験 156	賞 73	国 161
14	水分 110	登山 90	患者 154	国 60	ユーザー 152
15	血液 108	患者 84	写真 153	失敗 53	応募 146

表1から分かるように、連体修飾用法において「大勢、たくさん、数多く、多数」の4語と共起する名詞は「人」「人々」などの人間を表す名詞（「ヒト名詞」）が多く観察できる。

一方、「大量」と高頻度で共起する語の中にはヒト名詞は含まれていないが、第5章で見たように、「大量」は「人」を始めとするヒト名詞と共起する。ヒト名詞と共起する場合、これら5語は以下のように置き換えることができる。

(1)しかし、一九八八年から始まった再整備によりプロムナードと新しく名付けられた

- この通りは、現在では週末ともなれば大量の人やストリートパフォーマーなどで賑わう、大変活気のある通りとして生まれ変わったのである。(BCCWJ)
- (2) この頃、弾圧で大勢の人が殺され、暗い雰囲気<sup>1</sup>が村に立ちこめていた。(BCCWJ)
- (3) だから、これらの災害が起こるとたくさんの人が死んで、世の中が引っ繰り返ったような状態になるわけです。(BCCWJ)
- (4) 彼はボスニアで数多くの人間を殺してきた。殺しすぎて、いつしか殺した人数も忘れてしまっていた。(BCCWJ)
- (5) 現在、地球上には銃に代表される小型武器が無数に出回っています。それは日々、多数の人間を殺傷しています。その意味で銃も大量破壊兵器といえるのです。(BCCWJ)

上の例における「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」は、いずれも「人」あるいは「人間」の数量が大であることを表す。(1)の「大量」の部分には(1)の意味を大きく変えることなく、他の4語のいずれも当てはめることができる。(2)～(5)においても、これら5語いずれも用いることができ、また文の持つ意味も大きく変わらない。すなわち、これら5語は「数量が大であると捉える」という類似点を持つ類義語であることが分かる。

ただし「大量」は、他の4語とは異なり、個体よりも「水」などの連続体と共起する例が多い(表1)。また、他の4語と置き換えるとニュアンスの差が感じられたり、同じ意味では置き換えられない例も多く観察できる。この点について、第5章では「たくさん、多数」と「大量」の表す対象には量的および質的な違いがあることを述べた。

そこで、次節ではまず「大量」とその他の4語についての相違点を考察する。

続いて、7.4では「大量」を除いた4語について以下の4点について考察する。7.4.1では「文体差について」、7.4.2では「存在物としての人間の際立ち」について、7.4.3では「出来事の意味の際立ち」について、次に7.4.4では「個々の際立ちの違い」について考察する。最後に7.5ではまとめを行う。

### 7.3 「大量」と「大勢、たくさん、数多く、多数」の相違点

まず、「たくさん」と「大量」を比べてみよう。

- (6) そして二人はとても幸福に暮し、たくさん (**\*大量**) の子供たちが生まれました。(BCCWJ)

(6)の「たくさん」は「子供たち」の数を表す。この「たくさん」は「大量」に置き換えられないが、その理由は「子供たち」の数が、(普通多くても10人以下であり)「大量」を用いるには少なすぎるからと考えることもできる。

一方「たくさん」は、ある基準に照らして大であれば、どの程度であっても「たくさん」

と言える。つまり「たくさん」は、必ずしも絶対的な多さを意味するのではない。これに対して「大量」は、あるものの数量が著しく多いと想定できる場合にしか用いることができない。すなわち、第5章で述べたように、「大量」は「たくさん」のうちの、程度の非常に大きい部分とのみ対応すると考えられる。

しかし、「たくさん」と「大量」の違いは（数量の）程度の違いのみではない。なぜなら、以下(7)(8)において「非常にたくさん」を「大量」と置き換えることが難しいからである。

(7) じゃ、承知しているということなんで申し上げるのですが、このプロパンガスの利用というのは、都市ガスなどと同じように非常にたくさん (?大量) の人が利用されております。(BCCWJ)

(8) 2016年リオデジャネイロ五輪・パラリンピックの大会組織委員会は3日、運営に携わるボランティアの参加申し込みが10万人を超えたと発表した。(略) 組織委の担当者は「非常にたくさん (\*大量) の人々が南米初の五輪とパラリンピックに携わり、興奮を共有したいと希望していることを幸せに思う」とコメントした。  
(朝日 2014/10/4)

(7) の「たくさん」は「(プロパンガスを利用する) 人」の数を表す。「非常に」という程度副詞を伴っていることから「たくさん」より程度が大であることを表し、著しく大であると想定することも可能である。「たくさん」と「大量」の違いが程度差のみであれば、「非常にたくさん」ということから「大量」と置き換えが可能であろうと思われるが上のように置き換えが難しい。(7) は「利用されております」という表現から対象に対する敬意を表す表現であることが分かる。このことからまず、敬意の対象となる場合には「大量」は用いることが難しいことが分かる。同様に、(8) の「たくさん」は「(ボランティアの参加申し込みをした) 人々」の数を表す。「10万人を超えた」ということから著しく大であると想定することが可能である。「たくさん」と「大量」の違いが程度差のみであれば、「非常にたくさん」を「大量」に置き換えが可能であろうと思われるが上のように置き換えが難しい。(8) は、「ボランティアに参加申し込みした」ということから自ら意志を持って行動する人間であることが分かる。すなわち「たくさんの人々」は人間らしい特徴を持つと考えられる。つまり、ここで「大量」を用いることができないのは、人間らしい特徴が際立つからと考えられる。このように、「大量」と「たくさん」とでは、数量の程度のみならず、人間らしさの際立ちの程度も異なると考えられる。

この「大量」との違いは、「たくさん」のみならず「多数、数多く、大勢」においても同様に認められる。「多数」の例を見てみよう。

(9) まだまだ苦勞、そして大変な思いをされている方々が多数 (\*大量に) いらっしや

るかと思ひます。

(BCCWJ)

(10)あれから 63 年が経過、いまだに原爆症の認定を得られない人が多数 (\*大量に)いる。

(BCCWJ)

(11)実験に使った人間や馬は焼却炉で処理された。丸太を運搬する引込み線までつくられていたから、大量の人が殺され、跡形もなく始末されたのだ。

(BCCWJ)

(12)中東の民主化要求運動 (アラブの春) の影響で、シリアでも 2011 年 3 月からデモが激化し内戦化して、多数(大量)の難民が周辺国に逃れた。

(朝日 2014/02/22)

(9) の「多数」は「苦勞、そして大変な思いをされている方々」を表す。この例において数量は不明であるが、「方々」は敬意を表す表現である。(9) の「多数」を「大量」に置き換えると、失礼で不適切な表現になると思われる。また、(10) の「多数」は「いまだに原爆症の認定を得られない人」の数量を表すのであって、当該の「人」自体は敬意を含む表現ではない。しかし、この「多数」を「大量」に置き換えると(「認定を得る」といった)待遇を受けるべき「人間」として扱っていないような違和感が感じられ、やはり失礼な表現になると思われる。

このことから、人間とは(敬うべき)特徴や人格を持った存在であると考えられるが、「大量」が表す人間は、絶対量の多さからそのような人間としての特徴や性質、人間らしさが捨象されることが示唆される。

これに対して、(11) の「大量」が「人」を表すことができるのは、「実験に使った人間」であり、「殺され、跡形もなく始末された」馬と同等のレベルの人間であり、人間らしさが際立たないからと考えることができる。(12) の「多数」は「難民」を表すが、(程度の違いは感じられるが)「大量」で置き換えることが可能である。

人間らしさの際立ちの程度差について、池上(1983)は、人間は人間以外のものに比べて際立ちが高い、としながらも以下のように説明している。

<静>の状態よりも<動>の状態にある時の方が<人間>らしさが発揮されている。

(中略)しかし、<動>の状態にあっても、自らの力でなく何らかの力に従って動いているというような場合は、人間であっても<モノ>のレベルで捉えられうる。高いところから下へ向かって落ちて行く人間は、枝から落ちるりんごと同じように引力の法則に従って動いている<モノ>にすぎない。そうすると、<人間>が自らの力で何かをしている時—そういう場合が<人間>がいちばん<人間>らしい時と言えそうである。述語を使って言うならば<人間>が<動作主>(agent)として働く場合である。

(池上 1983 : 271 下線は引用者)

池上の説明に沿って考えると、(11) の「実験に使った人」や(12) の「難民」は、「自らの力で何かをしている」というよりむしろ、「自らの力でなく何らかの力に従って動いて

いる」と捉えられる。つまり、(11) (12) の「大量」の表す人間は「モノのレベル」で捉えられていると考えることができる。このことから、人間を数える表現として「大量」を用いた場合、マイナス評価が付与される場合があると考えられる。

続いて、「数多く」と「大量」を比べてみよう。

(13) 清盛も父に似て、数多く (\*大量) の子を持った。 (BCCWJ)

(14) 本日、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多く (\*大量) の人々と、その遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。 (朝日 2014/10/04)

(13) の「数多く」は「(清盛の) 子」の数を表すが、我々の一般的な知識から量的に著しく大であるとは想定しにくい。このような場合、「大量」は用いられにくい。一方、(14) の「数多く」は、「かけがえのない命を失った人々 (戦没者)」の人数を表す。厚生労働省の HP によれば、当該の数は 310 万人とされ量的には著しく大であると想定することが可能である。しかし、「かけがえのない命を失った人々」であり、「深い悲しみ」の対象であることから人格を備えた人間であることが分かる。このような人間らしさが際立つ人間に対しては、先述のように、「大量」を用いることはできない。

最後に、「大勢」と「大量」を比べてみよう。

(15) 母の作品展も無事終了いたしました。大勢 (\*大量) の方にご訪問頂き本当にありがとうございました。 (BCCWJ)

(15) の「大勢」は「(母の作品展を訪問した) 方」の人数を表す。この人数は不明であるが、「方」という表現から分かるように敬意の対象であり、「大量」と共起できない。

以上をまとめると、「大勢、たくさん、多数、数多く」はある程度以上の複数の人間の数量を表す。これら 4 語は、「難民、病人」のようなマイナス評価の人間はもちろん、人間としての待遇を受けたり配慮の対象となる人間らしさを備えた人間も、プラス・マイナスの評価性にかかわらず、表すことができる。これに対して「大量」を用いるには、これら 4 語とは異なり、まず量的に絶対的な多さが想定できなければならない。さらに、質的にも人間としての特徴や人間らしさが際立たないという制限があると考えられる。

第 5 章で述べたように、可算の名詞が不可算に解釈されるプロセスとして、「連続体化」と「抽象化」の 2 つのプロセスが指摘されている。前者は「複数の個体」→「集合体」→「連続体」という過程を経て、個体が連続体に読み替えられる認知プロセスである (Lakoff 1987、篠原 1993、池上 2007 など)。5.3.2 において、典型的に連続体を対象とする「大量」が、まぎれもない個体である「人間」や「本」などの量を表すことができるのは、前者の「連続体化のプロセス」に関わると考えられることを述べた。

このような認知プロセスによって、「大量」の表す人間の集合も「水」や「砂」といった連続体と同様に捉えられていると考えられる。連続体は、先述のように、典型的には特徴的な形と境界、内部構造をもたない均質なものであり個性や個性は認識されない。人間に「大量」が用いられる場合も、集合の絶対的な数量の大きさが動機付けとなって、構成要素である個体としての人間の個別性が捨象される。この認知プロセスにおいて、人間としての特徴や人間らしさも捨象される。このため、人間としての個性を持った人間はもちろん、敬意や配慮の対象としての人間、すなわちプラス評価の人間を表すことができないと考えられる。それゆえ、人間らしさを残したまま絶対的に大きな数量を表したい場合は「非常に」のような副詞的成分を付加して「大勢、たくさん、数多く、多数」など「大量」以外の表現が用いられるのではないであろうか。

ところで、松本（1991:102）は、類別詞の使用について、類別詞間に優先順が存在し、優先的に用いられる類別詞は選択されない類別詞と比べて伝えられる情報量が高い、と記述している。このことから、「車一つ」や「車一個」がおかしいのは、「台」を知っているのに使わないことが Grice（1975）の「必要な情報を与えよ」といった語用論の原則の違反であるからと次のように説明している。

「台」は、無生物のデフォルト類別詞である「つ」や「個」より情報量が高い。このため、話者が「台」を知っているのに「車一台」を使わなかったとすれば、その指示物は「台」の条件を満たさないのだと推論され、「車一つ」や「車一個」はその車がポンコツか何かという印象を与える（松本 1991:102）というわけである。

人間を表す「大量」も、松本の説明と平行的に考えることができる。「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の5語はいずれも人間を対象にとることができるが、「大量」が使われる場合、マイナス評価であると感じられる場合があるのは、「人間」の条件を満たさないと推論されるからと考えることができよう。

以上、「大量」が人間と共起する条件は、まず、絶対量の大きさ（＝著しく大である）が想定できる場合であり、第二に、人間としての特徴や人間らしさが際立たない場合であると言える。つまり、「大量」で人間を表す場合、他の4語とは、量程度の違いとともに人間らしさの質的な（内部構造の）違いが認められることを述べた。

#### 7.4 「大勢、たくさん、数多く、多数」の相違点

本節では「大勢、たくさん、数多く、多数」の4語について考察する。前節ではこれら4語の表す人間が量的、質的に「大量」と異なることを見た。それでは、これら4語にはどのような違いがあるのであろうか。

##### 7.4.1 文体差について

これら4語の用いられる文体的特徴に差があることを BCCWJ のサブコーパスから確認する。4.2.6 で見たように、宮内（2012）は、「フォーマルな」という概念は、「改まった」と



言い換えることができ、「フォーマルでない」といった場合は「くだけた」特徴を指すとし、話し言葉であっても、改まったものとくだけたものがあり、書き言葉も同様であると述べ、「フォーマルさ」と「話し言葉的・書き言葉的」という概念は、異なる尺度であると記述している (p. 42)。そして、BCCWJ のサブコーパスのジャンルの文体的特徴について、書籍、新聞、白書の順に、よりフォーマルな特徴が見られると記述している (p. 43)。

本節における考察対象の 4 語についてジャンル別の出現頻度を検索してみると、最もフォーマルな特徴が見られるとされる白書においては「多数」430 件、「数多く」68 件、「たくさん」4 件が観察できるのに対して、「大勢」は 1 件も観察できない。従ってこの順でフォーマルな傾向があると考えることができよう。人間を表す場合にもこの傾向が当てはまると考えられる。それでは実例を見てみよう。

- (16) 消防団は火災時における消火活動はもちろんのこと、多数 (数多く / ?たくさん / ?大勢) の要員を必要とする大規模災害時において重要な役割を果たしており、阪神・淡路大震災等を契機にその組織力が再認識された。 (『消防白書』BCCWJ)
- (17) 広域型商業機能をもつ地域に立地する中小商店では、「交通事情・交通条件等がよく、人の流れが多いこと」あるいは「大型店の近くあるいは商店街の中にあるので顧客吸引力が強いこと」など顧客としての人の流れが多い点を有利としているのに対し、近隣型商業機能を持つ地域に立地する商店では、「消費者が近隣に数多く (多数 / ?たくさん / ?大勢) 住んでいること」を最も有利な条件としている。 (『中小企業白書』BCCWJ)
- (18) 「きさまの仲間は大勢 (たくさん / ?多数 / ?数多く) いたはずだ、その連中はどこへ行った。」 (書籍『若さま黄金絵図』BCCWJ)
- (19) おかげで、うさちゃんのほかにも、おおぜい (たくさん / ?多数 / ?数多く)、ともだちができて、こぶたたちは、およろこび。 (書籍『こぶたのかくれんぼ』BCCWJ)
- (20) 写真を撮って、日本に帰ったら送るから住所書いて、と紙を渡すとスラスラと書いて、「たくさん (大勢 / ?多数 / ?数多く) の日本人から写真送ってもらったよ」と言っていた。 (書籍『マツモトヨーコの脱日常紀行』BCCWJ)

上の (16) (17) は白書からの例文である。(16) の「多数」は「要員」を、(17) の「数多く」は「消費者」の数を表すが、これらの「多数、数多く」を「大勢、たくさん」に置き換えると容認度が下がる。一方、(18) は話し言葉、(19) は書き言葉であるが、ともにくだけた文体である。この場合、「大勢」と「おおぜい」を「たくさん」に置き換えることは可能であるが、「多数」と「数多く」では容認度が下がる。同様に、(20) もくだけた文体であり、「たくさん」を「大勢」に置き換えることはできるが「多数」と「数多く」は難しい。

以上のことから、人間を表す場合にも、フォーマルな文体では「多数、数多く」が用い

られ、「大勢、たくさん」は用いにくい傾向があると言える。逆に、くだけた文体では「大勢、たくさん」が選択される傾向があることを確認した。

#### 7.4.2 存在物としての人間の際立ち

「大勢、たくさん、数多く、多数」の4語はすべて人間を表す語と高頻度で共起し、「大量」とは異なり、人間らしさが際立つ場合にも用いることができるとはいっても、この4語が表す人間らしさの程度においても段階性があることが予想される。まず、「大勢」は人間専用の語であることから、人間らしさの程度が最も高いと予想できる。以下の例において「大勢」は、ヒト名詞以外の名詞と共起している。

(21) 人前で話すこともできなかった自分が、大勢 (\*たくさん/\*数多く/\*多数) の前でマジックを披露できるようになるなんて思いもしませんでした。(BCCWJ)

(22) サッカーの中村俊輔選手を育て、全国高校サッカー選手権大会準優勝を果たした、桐光学園の佐熊裕和監督は、大勢 (\*たくさん/\*数多く/\*多数) の前で叱ったほうがよい選手と、そうでない選手を2分した指導を行っています。(BCCWJ)

7.2の表1で見たように、「大勢」と共起する名詞は、頻度の高い順に「人、人々、方々」などのヒト名詞が占める。ところが4位に挙がっている「前」は(位置を表すのであって)普通、人間を表さない。(21)(22)の「大勢」は人間の数を表すが、「たくさん、数多く、多数」とは置き換えることができない。置き換えるには「たくさんの人(人々、人間)の前で」などのように人間を表す語が必要である。

「大勢の前」とは言っても「たくさん/数多く/多数の前」が言いにくい理由について、空間を表す「N(名詞)の前」という形式におけるNは、Nを基準として相対的な位置を表すことから空間に存在する具体的なものが選ばれやすいと考えられる。つまり、「大勢」は単に「数」を表すのみならず、人間の集まりという具体的な存在物として捉えることができるが、「たくさん、数多く、多数」は(物や人間はもちろん抽象物も数えることはできるが)「数」に注目するのであって、具体的な存在物として捉えにくいため基準になりにくいと考えられる。

続いて、人間らしさの程度を「ある」と「いる」との共起から考察する。以下の例では人間を表しても「ある」が用いられている。

(23) 共同人名票は、表題部に記載すべき所有者もしくは各区に記載すべき登記権利者または登記義務者が多数 (?大勢) あるときに、表題部または各区に記載するのにかえて、共同人名票という別個な用紙に記載されます。(BCCWJ)

(24) そのようにモーツァルトを高く評価した人物が、多数 (?大勢) ありながら、モーツァルトの葬儀が、ミサやレクイエムによる通夜なしで行われたという「事実」を

取り巻く事情は、極めて厳しいものであったと解釈しなくてはならない。

(BCCWJ)

(25) また、周辺事態法、これが憲法違反だという見解を持っておる日本の政治家というのはたくさん (?大勢) ありますし、私もそうでありますし、そのような方が知事や市町村長あるいは地方議員に当選をされるということももちろんあるわけで  
(略)

(BCCWJ)

(26) 法然門下では、ひとり高名の士ばかりでなく、強盗・遊女のような人たちであっても、その信仰の真実の故に、立派な感動物語のヒーロー・ヒロインとして、名誉の名を長く伝えている人が数多く (?大勢) ある。

(BCCWJ)

(23) の「多数」は、存在主体である「(表題部に記載すべき所有者もしくは各区に記載すべき) 登記権利者または登記義務者」の数を表すが、世界の中のある個体を指し、その個体がある空間的場所に存在していることを述べているのではない。つまり、存在主体は物理的に存在する個体を指示するのではなく、[x が登記権利者または登記義務者である]という命題関数を表す変項名詞句であり、「多数ある」でこの命題関数に含まれる x の値が大であることを述べていると考えられる。今井・西山 (2012 : 192) は、このように「存在主体を表す名詞句が変項名詞句であり、文全体が変項の値の有無を述べているタイプの存在文を絶対存在文とよぶ」(強調は原文のまま) とし、「台所に母がいる」のように場所表現を伴う存在文 (以下「場所存在文」) とは「異質な存在文」であるとしている。

また、「ある」と「いる」の使い分けについて、場所存在文において、有生の主語を取る場合は「いる」のみが許容されるのに対し (例「田中さんは研究室に{いる/\*ある}」)、場所表現を伴わない存在文では「ある」も「いる」もともに許容される (例「病気をしても絶対病院に行かない人も{いる/ある}」) (金水 2006 : 19)。(23) が場所存在文ではないことは、「登記権利者または登記義務者」が物理的な個体の存在を表す (場所存在文の) 場合は「会議室に登記権利者または登記義務者が多数{いる/\*ある}」のように「いる」のみが許容されることから分かる。

同様に、(24) の「モーツァルトを高く評価した人物」も [x がモーツァルトを高く評価した人物である] を表す変項名詞句であり、「多数ある」は変項の値が大であることを述べている。

この場合、先述のように文体差はあるが、「多数ある」は、「たくさんある」「数多くある」と置き換えることが可能である。(25) の「周辺事態法、これが憲法違反だという見解を持っておる日本の政治家」も変項名詞句であり、「たくさんある」は変項の値が大であることを述べている。同様に、(26) の「立派な感動物語のヒーロー・ヒロインとして、名誉の名を長く伝えている人」も変項名詞句であり、「数多くある」は変項の値が大であることを述べている。これらは絶対存在文であり、「たくさん」と「数多く」が「ある」と共起している。これらは「大勢」と置き換えると容認度が下がると思われる。

一方、BCCWJの検索において「大勢」が「ある」と共起する例は以下の2例のみであった。

(27) 僕だって強いことは言えないよ。若い連中と違って子供が大勢ある。(BCCWJ)

(28) 諸君。「花岡の家来」云々と言って新入生の内藤君にからかふものが諸君の中に大勢あるやうです。(BCCWJ)

(27)の「大勢」は「子供」の数を表すが、空間的場所における「子供」の有無を表す存在文ではなく、所有を表す。このような所有の表現においては、人間であっても「ある」が使われることはよく知られている。一方(28)の「大勢ある」の主体は、[xが新入生の内藤君にからかふものである]という命題関数を表す変項名詞句であって今井・西山(2012)のいう絶対存在文である。

さらに、検索エンジンYahoo!を利用して検索すると、「人がたくさんある」は6340万件、「人が多数ある」は574万件、「人が数多くある」は138万件観察できるのに対し、「人が大勢ある」はわずかに5件のみであった。たとえば以下のような例が観察できる。

(29) 原発反対の人が大勢あることを考えると、脱原発は大部分の国民の声だろうと思う。  
(<http://dendrodium.blog15.fc2.com/blog-category-18.html>)

(29)の「大勢」は「多数、たくさん、数多く」と置き換えることができる。このように、「絶対存在文」においてヒト名詞が「大勢ある」と共起する例も観察することはできる。しかし、(23)～(26)のように容認度が下がる例が多く、量的にも圧倒的に少ない。つまり、絶対存在文においては「大勢ある」は用いられにくいとすることができる。

絶対存在文において有生名詞に「ある」が用いられる理由として寺村(1982:159)は、「この種の表現では、存在主体が生きものであるかどうかという区別意識が全くなく、アルとイルの区別もなくなる」と述べている。つまり、「大勢ある」が用いられにくいのは、「大勢」は「存在主体が生きものであるかどうかという区別意識」が際立ちやすい、すなわち「大勢」によって「存在主体」が「生きものである」と捉えられやすいからであると考えられる。ただし、(28) (29)においては「大勢ある」が用いられていることから、すべての絶対存在文において「存在主体が生きものであるかどうかという区別意識」が「全くない」というわけではなく、区別意識はあくまでも段階性があり、同じくヒト名詞が絶対存在文に用いられても、有生物としての人間の意味がより際立つ場合と希薄化する場合があり、際立つ場合には「大勢ある」は用いられにくいと考えられる。

また、「大勢ある」が絶対存在文に用いられにくいということは、先述のように、「大勢」が「大勢の前」のように用いられて物理的な存在物としての(複数の)人間を表すことができることと矛盾しない。これらの事実から、「大勢」は人間らしさの際立ちの程度が最も高いことが確認できる。

### 7.4.3 出来事の意味の際立ち

前節では、人間らしさの際立ちに注目して「大勢」と「たくさん、数多く、多数」の違いについて述べた。「大勢」は、数量のみならず、具体的存在物としての人間を表すこともでき、他の 3 語に比べて人間らしさが際立つ表現であることを確認した。本節では、出来事の意味の際立ちに注目してこれら 4 語の違いについて考察する。

先に、連体修飾用法において、これら 4 語と共起する名詞は、ヒト名詞が圧倒的に多いことを見た。さらに、連用修飾用法においてこれら 4 語と共起する動詞を、NLB と BCCWJ を利用して検索した。この中で上位 10 語の動詞を以下の表 2 に示す。

表 2 連用修飾用法における上位頻度の動詞 10 語 (併記の数字は出現頻度)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
大勢 (500 中)	いる 153	集まる 34	来る 33	出る 15	見る 11	乗る 8	やってく る 7	連れる 6	参加する 6	殺す 5
たくさん (5576 中)	ある 1310	い る 1005	出る 222	作る 113	入る 105	持つ 103	食べる 102	できる 78	使う 67	いただく 66
数多く (1057 中)	ある 178	存在す る 58	見る 54	残す 38	残る 27	いる 24	出る 18	作る 17	登場する 14	発表する 11
多数 (1284 中)	いる 222	あ る 174	存在す る 106	おる 26	出る 22	含む 22	参加する 17	寄せる 16	発生する 15	見る 15

上の表から分かるように、これら 4 語は共通して「いる、ある、存在する」など、存在を表す動詞と共起する頻度が高い。ところが、表 2 において人間を表す場合に「多数」と高頻度で共起する動詞がある。「発生する」である。以下の例を見てみよう。

(30) コンビナートが建設され、完全操業となる六〇年から「四日市ぜん息」とよばれるぜん息患者が**多数** (数多く/?たくさん/?大勢) 発生することになった。

(BCCWJ)

(31) 警察や入管当局が心配していたように、観光ビザで入国した中国人ツアーに行方不明者が**多数** (数多く/?たくさん/?大勢) 発生して日本政府は慎重に対応せざるを得なかったのだろう、と思われるかもしれない。

(BCCWJ)

(30) (31) の「多数」はそれぞれ「ぜん息患者」「行方不明者」というヒト名詞の数を表すが「発生する」という動詞と共起している。「発生」は漢語であり、フォーマルな文体で用いられやすいからだと考えられる。しかし、文体にかかわらず、「発生する」は「新しい物や事が生ずること。また、生じさせること。」(『大辞林』(第三版))であって、人間に用いることは難しい。このことは「大勢」が「発生する」と共起する例が 1 例も観察で

きないことから確認できる。実際、「発生する」と共起するヒト名詞には厳しい制限があると思われる。たとえば、「見物人、看護婦、犯人」といったヒト名詞は「発生する」とは言えない。それでは、なぜ「多数」が数えるヒト名詞は「発生する」と言えるのであろうか。

宮島（1997）は、ヒト名詞を「アスペクト的性格」によって次の4つに分類している。

- (A) 現実のシテ「…している人」例：見物人、運転者、参加者、住人、利用者など
- (B) 潜在的なシテ「…する人」例：看護婦、教師、小説家、愛読者、視聴者など
- (C) 経験者「…したことがある人」例：犯人、被害者、犠牲者、殺人者など
- (D) 一定の状態にある者「…している人」例：病人、入場者、婚約者、失業者など

宮島（1997：157-165）の説明を詳しく見てみよう。

まず、(A)の「見物人」は、見物するという動作をしているかぎりにおいて「見物人」なのであって、なにかの見物がおわって、あるきだしてしまえば、もう「見物人」ではない。(B)の「看護婦」は看護するという動作を、げんにしているかどうかにかかわらず、自宅にしようが、球場で野球の見物をしていようが、つねに「看護婦」である。(C)の経験者は、たんに過去のある時点で、ある行動をしたということではない。その経験が現在においても経歴として焼き付けられているということが重要なのである。現在どういう状態にあるかを問題にしない。たとえば、「犯人」は、現在くいあらためているかどうかに関係なく「犯人」である。しかし、ある動き・事件があって、その後ひきつづき一定の状態にある、ということが重要な名詞がある。(D)の「病人」はその例であって、病気にかかる、という経験をへて、その後も（問題にしている時点で）病気にかかっている、という状態にあることをしめす。

宮島の4分類の中で、「発生する」と共起できるヒト名詞は(C)の「経験者」と(D)の「一定の状態にある者」の中の一部に限られ、(A)や(B)の「シテ」は言いにくいと思われる。

宮島の説明を手掛かりに、「発生する」と共起するヒト名詞について考えると、「シテ」である(A)の「見物人」や(B)の「看護婦」が「発生する」と言いにくいのは、これらはそれぞれ「(見物を)している人」、「(看護を)する人」を表し、自らの力で、すなわち意図的に、ある動きを行う動作主として働く人間である。7.3で見たように、動作主として働く人間は人間らしさの際立つ人間であり、この場合「発生する」とは言いにくいと考えられる。同様に、(C)の「犯人、殺人者」が「発生する」と言いにくいのは、「犯人、殺人者」は、(多くは)自分の意図によって犯罪や殺人を起こした人間であるからと考えられる。これに対して、同じく「経験者」であつても「被害者」や「犠牲者」は「発生する」と言えるのは、それぞれ「被害を受けた人」「戦争や災害などで死んだり、大きな被害を受けたりした人」(『大辞林』(第三版))であつて自らの意図とは関係なく出来事を非意図的に、

あるいは受動的に経験した人間である。さらに (D) の「病人、失業者」も (多くは) 自らの意図とは関係なく病気や失業という出来事を経験した人間である。他方、同じく「一定の状態にある者」であっても意図的な出来事である「入場、婚約」を経験した「入場者、婚約者」は言えない。つまり「発生する」と言えるヒト名詞は、非意図的な、あるいは受動的な出来事の主体であると思われる。さらに、非意図性、受動性ととも、偶然性も関わると思われる。というのは、ある出来事が非意図的、あるいは受動的であることは偶然性と大きく関わると考えられるからである。たとえば、「入場、婚約」といった意図的な出来事は (多くは) あらかじめ計画され偶然性が低い。同様に、たとえば「当選者、合格者」は、自らの力で (意図的に) 「当選」や「合格」を経験するわけではないとはいっても、「当選、合格」という出来事 (の発生) 自体はあらかじめ決められている計画的な出来事であり、偶然性が低い。このため「発生する」と言いにくいと考えられる。このことは「落選者、不合格者」がやはり「発生する」と言いにくいことから分かる。

さらに、「発生する」と共起するヒト名詞には、「難民、死傷者、犠牲者」といったマイナス評価のヒト名詞が多く観察できるが、プラス評価のヒト名詞は観察できない。これは非意図的に、あるいは受動的に偶然生じる出来事は一般にマイナス評価の出来事が多いことによるのではないであろうか。また、先述のように「発生する」の主体は普通「物や事」であって「人間」に用いられない表現であることも、(人間扱いされていない、すなわち、人間の条件を満たさないと捉えられ) マイナス評価を伴いやすい理由であると考えられる。

以上をまとめると、「発生する」と言えるヒト名詞は、非意図的に、あるいは受動的に偶然生じたある出来事を表すと考えられる。たとえば (30) の「ぜん息患者」は、非意図的に偶然「病気 (ぜん息) にかかる」という出来事を表す。同様に、(31) の「行方不明者」も、(多くは) 受動的に、自らの意図とは関係なく偶然に「行方不明になる」という出来事を表す。

以上のことから、「発生する」と言える人間は、(生き物としての人間らしさが際立つ) 「人間」というよりむしろ「出来事」を表すと捉えることができる。つまりヒト名詞が「発生する」の主体である場合、「多数」は、出来事の数を表すと考えることができる。

ここでもう一度、共起するヒト名詞に注目して 7.2 の表 1 を見てみよう。先述のように、これら 4 語と共起するヒト名詞は「人、人々、人間」などが上位にあることが共通している。しかし、これらのヒト名詞が「発生する」と共起する例は観察できない。これに対して「多数」は、「死傷者、患者、被害者」など動詞「発生する」と共起するヒト名詞が多く観察できる。この理由は先述のように「多数」と高頻度で共起する動詞に「発生する」が含まれることから自然に導かれる。

先に「発生する」と共起するヒト名詞が、出来事を表すと捉えることができる例 (「ぜん息患者、行方不明者」など) を見たが、「多数」と共起する「死傷者」、「被害者」も、出来事を表す名詞であると考えられる。

影山 (編) (2011) は、日本語ではモノ名詞 (= 具体的なし抽象的な個物を表す) ・デ

キゴト名詞 (=出来事や動作・活動を表す) の区別は重要な文法的働きをする (p. 252) とし、「参加者、欠席者」などのようなヒト名詞は「事態発生を意味する要素が名詞の一部として組み込まれている」(p. 253) と記述している。さらに「参加者、欠席者」といった名詞は人間を表すと同時に、「参加、欠席」という出来事も意味すると述べている (p. 254)。この記述をもとに考えると、「死傷者、被害者」も人間を表すと同時に「死傷 (する)、被害 (を受ける)」という出来事 (の発生) を意味することから、これらのヒト名詞と共起した「多数」は出来事の数を表すと考えることができる。

(30) (31) の「多数」は「数多く」と置き換えることができる。一方、「たくさん」は「発生する」と共起する例が 5 例観察できるが、人間を表す例は観察できない<sup>36</sup>。「大勢」は先述のように「発生する」と共起が難しい。つまり、物理的な存在物である生き物としての人間らしさが際立たず、出来事 (の発生) の意味が際立つ場合、「多数」が最も選択されやすく、「数多く」も用いることができる。一方、「たくさん」と「大勢」は選択されにくいと言える。

#### 7.4.4 個々の際立ちの違い

本節では、「大勢、たくさん、数多く、多数」の 4 語が人間を表す場合の個々の (人間の) 際立ちの違いについて考察する。次の例では「数多く」が個々を際立たせている。

(32) ここまま差し出せば幕府に嘘がばれるので、対馬藩は「奉書」と改竄して江戸へ届ける。これによって国交が回復し、朝鮮通信使が数多く来朝することになった。その都度、江戸までの往復の警護の任に当たったのが対馬藩である。 (BCCWJ)

(32) の「朝鮮通信使」は、ものと出来事の 2 通りに捉えることができる。ものとして捉えると「数多く」は、朝鮮通信使の構成員である人間の数を表すと解釈できる。他方、出来事として捉えると朝鮮通信使の来朝という出来事の回数を表すと解釈できる<sup>37</sup>。

(32) の「数多く」は両方の解釈が可能であるのに対して、「数多く」を「大勢、たくさん、多数」に置き換えると、前者の解釈のみ可能である。すなわち「朝鮮通信使」の構成員である人間の集合が一まとまりとして大であると捉えられ、後者の出来事の手数を数えるという解釈は難しい。このように、「大勢、たくさん、多数」は、もの個数を、一まとまりとして捉える表現であるのに対して、「数多く」は時間の流れに沿って出来事の手数を一つ一つ数えることができる。

<sup>36</sup> たとえば以下のような例が観察できる。

①ただし、取引は発生した順に記帳しなければならないので、取引が一日のうちでもたくさん発生すると、仕訳帳を利用していると正確に発生順に記帳することが難しくなります。 (BCCWJ)

②車の中に、蟻がたくさん発生しました。 (BCCWJ)

<sup>37</sup> 李進熙 (1980) 『NHK ブックス 359 日本文化と朝鮮』によれば、江戸時代の朝鮮通信使の来朝は 12 回、1 度に来る構成員は正使、随行員、水夫などを加えると総勢 500 人程度である。「数多く」は 12 回という「来朝」の手数を表すとも、来日した構成員の人数を表すとも解釈可能である。



ところで 7.3 で見たように、この 4 語はマイナス評価の人間も、尊敬や配慮の対象としてのプラス評価の人間も数えることができる。すなわち、評価性にかかわらず人間を数えることができる。ただし、「数多く」は話し手がプラス評価を付与する以下のような文脈で用いられる例が多く観察できる。

(33) 国立大学法人 名古屋大学

名古屋大学は、1939 年に設立された名古屋帝国大学を母体とし、9 学部 14 研究科で、附属病院も含め数多く (多数/たくさん) の研究施設を有する国立総合大学です。4 人のノーベル賞受賞者をはじめ、世界中に数多く (多数/たくさん/大勢) の人材を輩出し続けています。(朝日 2013/08/21)

(34) なお、本書の著者陣は 20 年来、Z 会東大マスターコース英語科講師としての実績がある、東大英語に精通し、数多く (多数/たくさん/大勢) の受験生を東大合格へと導いてきた最強のチームです。(BCCWJ)

(33) (34) は、公的な宣伝・紹介の文でありややフォーマルな文体である。ここで「数多く」は、話し手が個々の構成要素に注目し際立ちを与えている。たとえば (33) の最初の「数多く」は「研究施設」の数を表すが、ここで「数多く」を用いた話し手は「名古屋大学」を宣伝、紹介するにあたり、単に (研究施設の) 数の多さを述べるのではなく、施設の一つ一つを際立たせている。同様に、2 番目の「数多く」は「人材」の数を表すが、単に (人材の) 数の多さを述べるのではなく、「人材」一人一人を際立たせている。「研究施設」と「人材」の数は「名古屋大学」を宣伝、紹介するにあたり、プラスの効果をもたらすと想定できる。

さらに、(34) の「数多く」は「受験生」の数を表すが、ここで「数多く」を用いた話し手は、単に (東大合格へと導いてきた) 受験生の数を述べるのではなく、一人一人に注目して際立ちを与えていると考えられる。当該の数は、「本書」を宣伝するにあたり大きな効果をもたらすと想定できるからである。

(33) (34) の「数多く」を「大勢、たくさん、多数」と置き換えることはできるが、置き換えると際立ちが下がると感じられる。

このように「数多く」が宣伝・紹介の文で用いられ、個々に際立ちを与える理由として、先述のように、「数多く」が複数の対象を一まとまりとして捉えるのではなく、回数を数えることができるからと考えられる。

前節で「多数」が出来事を表すヒト名詞を数えることを見たが、「多数」はあくまでもものを数える表現である。このことは、たとえば「参加者」といった出来事を表すヒト名詞を数える場合、(出来事を数える「回」ではなく) ものを数える助数詞「名」や「人」が用いられることから分かる。これに対して、「数多く」は時間の流れに沿って出来事の回数を数えることができる。たとえば「来朝」の数は「回」で数えるのであって、これを「多

数」で数えることはできない。このように、「数多く」は時間の流れに沿って数えるため個々の構成要素に注目でき、構成要素に際立ちを与えると考えられる。

逆に、個々の構成要素に注目し、際立ちを与えることが意味のある文脈ではない場合、「数多く」は用いることが難しい。以下の例を見てみよう。

(35) 客がたくさんいればいるだけ一人一人を見ることはないです。ただ、あーたくさん (大勢／\*多数／\*数多く) いる一っつて思うだけです。むしろ空席のほうが気になりました。(BCCWJ)

(36) うちの子も6ヶ月から無認可に通っています。たくさん見学しましたよ！質問することは、保育師の数と子供の数(出来れば年齢ごとに)・食事・おやつとの与え方・外遊びや行事の有無あとは全体の雰囲気や子供の顔、保育師の接し方やなつき方。大きい子がたくさん (大勢／多数／\*数多く) いるところでは、言葉使いも気になりました。(BCCWJ)

(35) の「たくさん」は「客」の数を表すが、日常的な文体であって、先述のように「多数」は文体の制限から「たくさん」と置き換えるのが難しい。ここで「数多く」を用いることも難しいのは、「一人一人を見ることはないです」という表現から分かるように、「たくさん」は目の前に存在する客の集まりを一まとまりに捉えているのであって、客の一人一人に際立ちを与える文脈ではないからと考えられる。さらに、(36) の「たくさん」は「大きい子」の数を表す。この「たくさん」を「数多く」に置き換えることが難しいのは、ここで「たくさん」を用いた話し手は、あくまでも一まとまりの数に注目するのであって、一人一人に注目しないからであると考えられる。

(35) の「たくさん」は「大勢」とほぼ同じ意味で置き換え可能である。(36) の「たくさん」は(文体差はあるが)ほぼ同じ意味で「大勢、多数」と置き換えることができる。このように「大勢、たくさん、多数」は、あくまでも個体のまとまりに注目しているのであって個々の際立ちは「数多く」よりも低いことが確認できる。

以上の考察を踏まえ、「大勢」の意味を以下のように記述する。

(37) 「大勢」：<一まとまりとしての人の数量が><大であると捉えるさま>

## 7.5 第7章のまとめ

以上、本章では「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」を取り上げ、人間を表す場合の相互の意味の類似点・相違点について考察した。以下、分析結果を簡単にまとめる。

まず、「大勢」の意味を<一まとまりとしての人の数量が><大であると捉えるさま>と記述した。

次に、類似点として、これら5語はすべて人間の数量が大であることを表すことができ

る。

続いて、相違点として、以下の5点について記述した。

①「大量」と「大勢、たくさん、数多く、多数」の対象は、量的および質的に異なる。すなわち、人間の絶対数が著しく大であると想定でき、個体としての人間の特徴や人間らしさが捨象され際立たない場合「大量」が選択される。従って、「大量」が数える人間は人間の条件を満たさない（「物」と捉えられ、敬意や配慮の対象になりにくい。逆に、敬意や配慮の対象である人間を数える場合、他の4語が用いられる。

②「大勢、たくさん」は「数多く、多数」よりも日常的な文体で用いられやすい。逆にフォーマルな文体では「数多く、多数」が用いられやすい。

③有生の存在物としての人間の意味を際立たせる場合には「大勢」が用いられる。特に、「Nの前」のような形式において、空間に存在する具体物であることが焦点化される場合「大勢」以外は用いることができない。

④人間を具体的な存在物としてではなく「出来事」と捉えてその個数を数える場合、「多数」が最も選ばれやすい。

⑤「数多く」は、時間の流れに沿って数えるため個々の構成要素に注目できる。それゆえ宣伝・紹介の文で用いられ、個々の構成要素に注目して際立ちを与えることができる。逆に、個々の構成要素の際立ちが低い場合、「数多く」を用いることはできない。構成要素の際立ちが低く、個々の構成要素よりも一まとまりに注目する場合、「大勢、たくさん、多数」が用いられる。

このように、「大量、大勢、たくさん、多数、数多く」の使い分けは、文体差のみならず、同じ対象（人間）に対して、個体として捉えるか連続体として捉えるか、さらに、空間に存在する具体的な存在として捉えるか出来事のような抽象的概念として捉えるか、という存在論的カテゴリーの違いを反映していることを記述した。また、個々に注目するか、一まとまりとして捉えるかという構成要素の際立ちに差があることを指摘した。つまり、これらの語の使い分けは、人間という客観的事実の投影ではなく、あくまで話し手が主体的に「人間」を捉えてゆく認知活動に基づいていることを確認した。

## 第8章 「たっぷり、どっさり、いっぱい」の意味分析

### 8.1 はじめに

本章では、「たっぷり、どっさり、いっぱい」を取り上げ、それぞれの語の意味分析を行うとともに、相互の意味の類似点および相違点を考察する。

山梨(2012:61)は「日常言語の概念体系は、言語主体の身体的な経験に根ざしている。その中でも、特に日常生活の伝達に関わる主観的な意味のかなりの部分は、言語主体と環境との相互作用に基づく身体的経験をその発現の背景的な基盤としている。また、一見したところ抽象的な概念として慣用化している意味のかなりの部分は、身体的経験によって動機づけられている」と述べ、「身体的な経験」として「(i)空間認知に関わる経験」「(ii)五感に関わる経験」「(iii)運動感覚に関わる経験」「(iv)体感に関わる経験」の4つをあげている。

その上で、「この種の経験は、日常言語の概念体系の基本的な意味の発現の背景的な基盤となっている。例えば、(i)空間認知に関わる経験は、上・下、高・低、前・後、遠・近、左・右、等の次元、(ii)五感に関わる経験は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の次元、(iii)運動感覚に関わる経験は、速度、バランス、等の次元、(iv)体感に関わる経験は、軽・重、寒・暖、等の次元の意味の基盤を構成している」と記述している。さらに、同書は「ただし、この種の身体的な経験がすべて相互に独立して存在する訳ではない」とし、「ある対象の深・浅の判断(例えば、川が深いか/浅いかの判断)」について以下のように説明している。

この場合、深・浅の判断は、川を見ることによって判断することも可能である。しかし、目で見なくても、例えば川に石を投げ入れ、その時の「ポチャン」、「ドボン」などの水音によって(すなわち、聴覚の経験を介して)深いか浅いかを判断することも可能である。さらに、体感ないしは運動感覚の経験を介して、川の深さを判断することも可能である。例えば、(状況によっては危険がともなうが)川に飛び込み、自分がどこまで沈んでいくかを体感することにより、その深さを判断していくことも可能である。

この種の事実は、少なくとも上に見た(i)~(iv)の身体的な経験の一部は、外部世界の知覚に複合的に関わっていることを示している。日常言語の概念体系は、この種の身体的な経験を反映する基本的な意味と、これらの基本的な意味を比喩的に拡張した主観的な意味や抽象的な意味によって特徴づけられている。(山梨2012:62)

本章では、「たっぷり」と「どっさり」は、「体感に関わる経験」が意味の基盤に大きく関わり、「たっぷり」と「いっぱい」は、「空間認知に関わる経験」が意味の基盤をなして

いると考え、この 2 つの身体的な経験との関わりに注目して分析を進める。山梨が記述しているように、この 2 つの身体的な経験が、独立して存在しているわけではなく、私たちの知覚に複合的に関わっていることを明らかにすること、そして、身体的な経験を反映する基本的な意味と、基本的な意味から比喩的に拡張した主観的な意味や抽象的な意味を明らかにすることを目指す。

また、第 2 章で見たように、先行研究においてこれら 3 語は「たくさん」と並んで「典型的・代表的な量の副詞」(仁田 2002) と位置付けされている。日本語記述文法研究会(編)(2009: 203) は、「量を表す副詞的成分(量副詞)とは、文中に現れる名詞の数量や動きの量を限定する副詞的成分である」と定義し、量副詞としてこの 3 語をあげている。

これら 3 語は主に会話で用いられると指摘されている点においても共通している(4.2.6 参照)。さらに、多くの国語辞典類の意味記述において「たくさん」が用いられている点も共通している。ところが、第 2 章で見たように、「たくさん」とは置き換えることができない例が観察できる。

- (1) 田中先生は学生をたくさん (\*たっぷり/どっさり/いっぱい) 呼び出した。  
(動詞修飾型)
- (2) 田中先生はたくさんの (\*たっぷりの/\*どっさりの/\*いっぱいの) 学生を呼び出した。  
(名詞修飾型)
- (3) 田中先生は学生 \*たくさん (\*たっぷり/\*どっさり/\*いっぱい) を呼び出した。  
(添加型)  
(第 2 章より一部改変して再掲)

日本語記述文法研究会(編)(2009) は、「数量構文は、数量表現の出現位置によって、動詞修飾型、名詞修飾型、添加型の 3 つのタイプに分かれる」「量副詞は、この 3 つのタイプうち、動詞修飾型と名詞修飾型にはなるが、添加型にはならない」(p. 181) と述べ、上の (1) ~ (3) の「たくさん」の例をあげている。確かに、添加型 (3) にはならないとの指摘は妥当である。しかし、動詞修飾型 (1)、名詞修飾型 (2) においても、上のように振り舞いの違いが認められる。

以上のことから、「たっぷり、どっさり、いっぱい」の 3 語の意味について、「たくさん」との違いを含めてさらなる説明が必要と思われる。

本章の構成について簡単に述べる。

8.2 ではまず、同じく体感に関わる経験に基づくが、体感の違いから異なる価値評価(心的態度)を表すと考えられる「たっぷり」と「どっさり」の個別の意味と、相互の意味の類似点と相違点について考察する。

8.3 では、同じく容器のイメージスキーマにおける「容器」と「中身」という、空間認知に関わる経験を基盤とする表現である「いっぱい」と「たっぷり」について、「いっぱい」

の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点について考察する。

最後に、8.4で本章の分析のまとめを述べる。

## 8.2 「たっぷり」と「どっさり」の意味分析

### 8.2.1 本節の目的

本節は、「たっぷり」と「どっさり」を考察対象とし、両語が共通して用いられる連用修飾用法と、数詞と共起する用法を中心に、相互の意味の類似点・相違点を明らかにすることを目的とする。

「たっぷり」「どっさり」は、ともに数量大を表し、語源としてオノマトペ（＝擬音語・擬態語の総称<sup>38</sup>）から派生した語であるとされ、音韻的（促音＋り）にも類似している<sup>39</sup>。国語辞典類でも「どっさり」は「たっぷり」と「似ている」とされる（次節参照）。また、先述のように両語は「たくさん」「いっぱい」と並んで「典型的・代表的な量の副詞」（仁田2002）と位置付けされている。冒頭で見たように、日本語記述文法研究会（編）（2009：203）も、「量を表す副詞的成分（量副詞）とは、文中に現れる名詞の数量や動きの量を限定する副詞的成分である」と定義し、量副詞としてこの2語をあげている。

確かに、両語は「文中に現れる名詞の数量」を限定できる。しかし、「仕事がたっぷり/どっさりある」は自然であるが「自信がたっぷり/??どっさりある」のように、「自信」は「どっさり」とは言いにくいことから、対象にも違いがあることが分かる。さらに「昨日たっぷり/\*どっさり遊んだ」のように「どっさり」は、「動きの量」の限定は難しい。また、「たっぷり」と「どっさり」は単独で名詞修飾型を取りにくい（例「\*どっさり/\*たっぷりの仕事がある」）。つまり、日本語記述文法研究会（編）（2009：203）の「量副詞」としての定義を満たさない。

さらに、次節で見るように、国語辞典類の意味記述においても両語の違いは明らかではない。

### 8.2.2 先行研究とその検討

本節ではまず、国語辞典類で「たっぷり」と「どっさり」の意味がどのように記述されているかもう一度確認した上で問題点を明らかにする（辞典類の記述における下線は引用者による）。

#### 『大辞林』（第三版）

たっぷり（副）スル：満ちあふれるほど十分なさま。たくさん。「鍋に－（と）水を注ぐ」

<sup>38</sup> 擬音語・擬態語とは外界の物音や人間・動物の声、様子・心情などを具体的に表す言語表現全体をいう（『現代擬音語擬態語用法辞典』）。

<sup>39</sup> 『日本語源広辞典』は、「たっぷり」の語源について「タツプン（擬態語）＋り（副詞化）です。満ち溢れてタツプンタツプンというほど、量的に十分にある様子という副詞です」と記述している。山口（編）（2003：338）は『どっさり』には、重い物が地面に落ちた時の音を示す用法もあった。ただし現代では音を表す場合には『どさつ』や『どさり』を使うのが普通であると記述している。

「一（と）食べる」「時間は一ある」

どっさり（副）<sup>40</sup>：数や量が多いさま。たくさん。「おみやげを一（と）もらう」

### 『日本国語大辞典』（第二版）

たっぷり（副）：満ちあふれるほど量的に十分であるさまを表す語。たくさん。

どっさり（副）：（重くててごたえのある意から）数量の多いさま、たくさんあるさまを表す語。どっしり

### 『日本語語感の辞典』

たっぷり：「たくさん」「十分に」の意で使われる、やや会話的な和語。＜自信一＞＜残りは一ある＞＜予算は一ある＞＜一汗をかく＞＜一水を吸う＞＜時間を一かける＞\*数的より量的に多く満ち溢れている感じが強い。そのため、「鉛筆が一ある」といった例より「砂糖を一入れる」といった例のほうがぴったりする。絶対的な分量よりも、通常よりはるかに多いという程度に重点がある。

どっさり：主として会話に使われる「たくさん」の意の古めかしい和語。

### 『講談社 類語辞典』

たっぷり：満ちあふれるほど十分な様子。「召し上がるものは一と用意してございます」「夏には一2週間の休暇をとる」

どっさり：数・量があり余るほどたくさんである様子。「ご褒美を一もらう」「米が一と取れる」

### 『現代擬音語擬態語用法辞典』

たっぷり：必要量を越えて多量にある様子を表す。ややプラスイメージの語。

「たっぷり」は「どっさり」に似ているが、「どっさり」は重量・豊富の暗示がある。

どっさり：多量に存在する様子を表す。ややプラスよりのイメージの語。

「どっさり」は「たっぷり」に似ているが、「たっぷり」は必要量を越えて多量にある様子を表し、豊富・余裕・充足の暗示がある。

(4) 彼は莫大な遺産を相続したのはいいが、借金もどっさり抱え込むはめになった。

(5) ×彼は借金もたっぷり抱え込むはめになった。

（『現代擬音語擬態語用法辞典』 p. 330）

<sup>40</sup> 『大辞林』（第三版）は、「どっさり」の意味①として「重い物が落ちる音を表す語」と記述している。『日本国語大辞典』（第二版）も意味①として「重い物が落ちたり倒れたりぶつかったりする音やそのさまを表す語。人を斬り倒すときにもいう」と記述している。しかし、注39の山口（編）（2003）の記述にあるように現代日本語においては意味①の用法では用いられにくいと考えられることから、意味②のみを引用する。

上の辞典類の記述を見ると、『大辞林』（第三版）『日本国語大辞典』（第二版）『日本語語感の辞典』は大きな違いがないと言える。すなわち、「たっぷり」「どっさり」の記述に共通して「たくさん」が用いられており、「たっぷり」の記述には共通して「十分」が用いられている。

『講談社 類語辞典』においては「どっさり」の記述にのみ「たくさん」が用いられているが、「たっぷり」の記述に「十分」が用いられている点は他の3つの辞典と同様である。しかし、以下の例において同じく「栄養」の量を表しても「たっぷり」と「十分」を置き換えると容認度が下がると感じられることから、さらなる説明が必要と思われる。

- (6) 薬効果のある牛乳 栄養がたっぷり (?十分) 取れる牛乳は、古代メソポタミアなどでは薬として用いられていました。 (BCCWJ)
- (7) 干ばつや飢餓などで問題になる「急性栄養不良」の問題と異なり、日常的に栄養を十分に (?たっぷり) 取れずに慢性栄養不良に陥り、年齢相応の身長まで成長しない発育障害（スタンディング/stunting）の問題は、周囲に気が付かれにくいため、これまであまり関心が向けられてきませんでした。子どもの学習能力や認知能力はもちろん、地域ひいては国の将来を左右する重大な問題です。

(朝日 2014/06/02)

評価性について記述している辞書は『現代擬音語擬態語用法辞典』のみである。その記述を見ると、第4章で述べたように、「たっぷり」と「どっさり」についてそれぞれ、「ややプラス」、「ややプラスより」とほぼ同じ記述となっているが、その動機付けについては記述されていない。その上で(5)の「たっぷり」は「×」とされているが、批判や皮肉の解釈の場合には容認可能であると思われる（これについては8.2.3.1で詳しく述べる）。また、「必要量を超えて」という説明に従えば、以下の例文においては「たっぷり」が選択されると思われるが実際は不適格になる（「どっさり」が選択される）。このことから、評価性とその動機付けについてもさらなる説明が必要と思われる。

- (8) もちろん、暑い地域でも漬物はできます。しかし、腐らせずに発酵させるためには、殺菌効果のある塩分が寒い地域に比べて余分に必要になります。ならば塩をどっさり (\*たっぷり) …となると、仕上がった漬物はやたら塩辛いだけで美味しくも何ともないものになってしまいます。気候が温暖な地域に漬物文化が育ちにくかったのには、こんな理由もあるのです。 (NLT)

以上のように、国語辞典類において「たっぷり」と「どっさり」の意味が十分に記述されているとはいいがたいため、さらなる考察が必要と思われる。

続いて、「たっぷり」と「どっさり」の使い分けについて記述のある2つの先行研究の記



述を確認する。

まず、山口・佐藤（2006：129-130）は、「物の様子や音を表す擬音語・擬態語」の章において「やり残した仕事は『たっぷり』？『どっさり』？」という題目で両語の使い分けを以下のように説明している。

- (9) 「どっさり」も「たっぷり」も、どちらも量の多いことを表しますが、多さを捉える観点が違っています。「どっさり」は、一個、二個と数えたてていった結果、多いと感じるときに使い、「たっぷり」は、全体を均一なものとしてとらえて、それが心の中にある基準よりも多いと感じたときに使います。

たとえば、「かき氷に角切りにしたマンゴーの果肉と寒天がどっさりのる」（朝日新聞 05.8.10）は、マンゴーの果肉と寒天の数をみて、多いと感じているのです。

「やる気」「悩みの種」など、抽象的で目に見えない物事についても、数が多いと感じると、「どっさり」となります。「『夫婦の試練』がどっさり」（文芸春秋 90.5）は、試練を一つ、二つと数えたてていった結果、数が多いと感じているのです。だから、重量感があります。「仕事がどっさり」というのも、仕事を数量化してとらえ、重く感じているのです。

「たっぷり」は、「朝昼夕の三食と間食をたっぷり食べている」（早川文代『食語のひととき』）のように使います。「間食をたっぷり」というの、どんな間食であっても、それをひとくくりの「間食」とみなして、それが心の中にある基準より多いと感じているのです。だから、心理的な余裕を感じさせます。「時間がたっぷり」といわれると、余裕を感じるのも、そのためです。（p.130 下線は引用者）

山口・佐藤（2006）の記述が先の5つの辞典類の記述と異なる点は、「多さを捉える観点」が異なることを指摘した上で、「どっさり」は「一個、二個と数えたてていった結果、数が多いと感じるとき」に、一方「たっぷり」は「全体を均一なものとしてとらえて、それが心の中にある基準よりも多いと感じたとき」に使うと述べ、観点の違いを「可算・不可算」によって具体的に述べていると思われる点である。

本研究も、両語は「多さを捉える観点」が異なると考え、この観点の違いを明らかにしようとするものである。また、「たっぷり」について「全体を均一なものとしてとらえる」という記述は妥当であると考え（詳しくは次節参照）。一方、「どっさり」は(8)の「塩」や「雪」など「一個、二個と数えたてていった結果」と考えにくい名詞とも問題なく共起する（表2参照）。また、「抽象的で目に見えない物事」としてあげている「悩みの種」「試練」「仕事」の3語は、「どっさり」と共起するが、BCCWJとNLTを利用して検索してみると、「やる気」は、「どっさり」と共起する例が1例も観察できないことから容認度が低いと思われる。このことから、「どっさり」と共起しやすい（・しにくい）名詞について統一的な説明が必要であると考え。

結論を先取りして述べると、「どっさり」は具体物である「塩」から抽象的な「試練、仕事」まで「数量化して」「一つ、二つと数えたてていった結果」というよりむしろ「重く感じているのです」と記述されているように、一かたまりとして捉え、重い荷物を運ぶ（あるいは支える）といったときと共通の体感を表すと考える。

浜野（2014）は、日本語のオノマトペの語基を CV（C は子音、V は母音を表す）と CVCV の 2 つのタイプに分け、それぞれの意味構造を記述している。浜野（2014）は、日本語のオノマトペの体系の中で、どのような音がどのような意味に結びついているか（＝音象徴）を、具体的に、一般化している点で注目される。浜野の記述によって、「どっさり」「たっぷり」が持つより精緻な音象徴が明らかになる。浜野（2014：15）によれば「どっさり」「たっぷり」はともに「CVCV を促音が割る+リ」（例「ゆったり」）に分類される。個別の子音と母音の音象徴について、浜野（2014）は具体的に説明しているが、その中から「どっさり（り）/dosa/」と「たっぷり（り）/tapu/」に関係する部分のみを引用する。

(10) \*子音の基本的な音象徴 (p. 40)

第 1 子音：/t, d/ 張力の弱い表面、弛緩、目立たない

/t/ 軽い、小さい、細かい

/d/ 重い、大きい、粗い

第 2 子音：/p/ 破裂、破れる、完全に、覆われる、膨張、肥満

/s/ 接触しながら動く、摩擦

\*第 1 母音と第 2 母音の組み合わせによる音象徴 (pp. 47-48)

/-o-a/は、「小さめのものが広がるか、あるいは結果として平らになること」を意味する。例：「ドタッ（体が垂直にのびた格好から、水平に広がった格好に変わる）」

/-a-u/は、「口を大きく開けて食べたり飲んだりすること」、または「広い面に食い込むこと」を意味する。例：「バクッ」「ガブガブ」

さらに、浜野はオノマトペから派生した副詞について、オノマトペの音と副詞の意味の関連性を指摘し、「どっさり」と「たっぷり」について以下のように記述している。

(11) 「タップリ、ドッサリ、ゴッソリ」は、いずれも「大量に」という意味は含んでいるが、同義ではない。

まず、「タップリ」は、(液体のように何か) 溢れ出るというイメージへ戻る ことができるため、「十分に、余分に」という意味を持っている。また、この溢れ出るものは、種々の物から、抽象的な知識、時間など多岐にわたる。

一方、「ドッサリ」の方は、そのような「十分に」という意味がないだけでなく、

物が落ちたり倒れたりした時のインパクトのイメージが残るため、モノ的なイメージが強く、時間には、使えない。(浜野 2014 : 102)

浜野が「イメージへ戻ることができる」「イメージが残る」と指摘しているように、本研究も「たっぷり、どっさり」の意味は、オノマトペの意味（音象徴）を受け継いでいると考える。ただし、上で述べたように「たっぷり」は「十分に」と置き換えられない例が観察できることからさらなる説明が必要であると考えられる。また、浜野には記述されていないが、評価性も異なると考える。

以上のように、先行研究において「たっぷり」と「どっさり」の個々の意味、および相違点・共通点が明らかではない。

### 8.2.3 「たっぷり」と「どっさり」の意味分析

本節では、前節の先行研究の記述を踏まえ、「たっぷり」と「どっさり」のそれぞれの多義構造を分析する。

#### 8.2.3.1 「たっぷり」の意味分析

##### 8.2.3.1.1 別義①：< (容器として捉えられる空間において) ものの量が > 期待・予想を上回り大であると捉えるさま >

- (12) 大きな鉢に、味噌汁がたっぷりつけてある。  
(豊島与志雄『ヘヤーピン一本』青空)
- (13) ママの体の血行がよくなるということは、赤ちゃんに新鮮な酸素や栄養がたっぷり行きわたるということ。  
(BCCWJ)
- (14) それに両親に抱擁力とユーモアがたっぷりあったので恵まれていたわけです。ですからすべてうまくいってました。  
(BCCWJ)
- (15) お金を扱う仕事なので、神経はつかいますが、残業もほとんどないので時間的には楽です。大学に通っていた間と比較すると、今は 時間がたっぷりあって、コンサートや旅行にも行けるので楽しいです。  
(BCCWJ)
- (16) ほうれん草はたっぷりの熱湯でゆで、水にさらす。  
(BCCWJ)

上の例における「たっぷり」は、ある容器における中身と捉えられるものの量が、単に大であるだけでなく、期待・予想を上回ると捉えている。たとえば、(12)の「たっぷり」は「鉢」という容器における「味噌汁」が単に多量であるだけでなく、話し手の期待や予想する量がまず想定され、それを上回る量であると捉えられる。(13)(14)においては、人間が容器として捉えられる。すなわち、(13)においては「赤ちゃん」が容器として捉えられ、「たっぷり」は「新鮮な酸素や栄養」の量が赤ちゃんの身体全体に「行きわたる」ために期待・予想される量が想定され、その量を上回る余裕のある量であると解釈できる。

また、(14) では「両親」における「抱擁力とユーモア」の量が「話し手の期待・予想」を上回る量を表す。さらに、(15) の「たっぷり」は「時間」の量が期待・予想される量を上回ることを表す。(15) においては容器が際立たないが、「時間」は「貴重品（お金、商品など）としての時間」あるいは「私たちが使う対象としての時間」（瀬戸 2005:211）と捉えられることから、私たちの心（身体）を容器として、所有物とみなしていると考えられる。このように、「たっぷり」は、容器のイメージスキーマ（第3章参照）を基盤として、空間に存在する「味噌汁」のような具体物から目に見えない「酸素や栄養」、さらに「時間」や「包容力とユーモア」のような精神活動に関わる抽象物までその量を表すことができる。これは、容器のイメージスキーマが「比喩的に具象レベルから抽象レベルに変容」（山梨 2009:95-96）しているもので、容器（container）のイメージスキーマの物理的空間から心理的空間への比喩的な拡張であると考えられる（山梨 2009:94）。

一方、(16) の「たっぷり」は「熱湯」の量が「ほうれん草をゆでる」という目的達成のために期待・予想される量を上回る量を表す。(16) においては容器が明示されていないが、これは容器（の許容量）に関わりなく、目的達成のための期待・予想を上回る量であることが自然に想定できる。すなわち、（ほうれん草をゆでるには当然容器が必要であるが）(16) においては目的に対する中身（熱湯）の量に注目するのであって容器は関わらない。このことは、「?ほうれん草は鍋にたっぷりの熱湯でゆで」のように「容器（鍋）」を明示すると容認度が下がることから分かる。このように「たっぷり」は中身（の量）に注目するのであって、容器は中身に比べて際立ちが低いことが分かる。

「たっぷり」の基準について考えると、『現代擬音語擬態語用法辞典』（p.262）は、「たっぷり」を「必要量を超えて多量にある様子を表す」と記述しているが、「たっぷり」の基準は「必要量」という具体的な基準より、あくまでも「話し手の期待・予想」という、より主観的な基準であると考えられる。

このことは、上の(12)(14)の「たっぷり」を「十分」と置き換えると、意味が異なると感じられることから分かる。「十分」とは「条件を満たして、不足がないさま。満足できるさま」（『大辞林』（第三版））とされるように、「条件を満たす」という、より具体的な基準に基づく表現であると考えられる。「味噌汁が十分つけてある」「抱擁力とユーモアが十分あった」とすると、まるで「味噌汁」「抱擁力とユーモア」の量に関して具体的な必要量（基準）が前提としてあり、それを満たす量であると感じられる。しかし、(12)(14)においてそのような具体的な基準が想定しにくいため、意味が異なり、容認度が下がると考えられる。これに対して、以下の例では「十分」が用いられている。

- (17) 干ばつや飢餓などで問題になる「急性栄養不良」の問題と異なり、日常的に栄養を十分に（?たっぷり）取れずに慢性栄養不良に陥り、年齢相応の身長まで成長しない発育阻害（スタンディング/stunting）の問題は、周囲に気が付かれにくいため、これまであまり関心が向けられてきませんでした。子どもの学習能力や認知

能力はもちろん、地域ひいては国の将来を左右する重大な問題です。 (= (7))

(17) の「十分」は「栄養」の量を表す。この量は「慢性栄養不良に陥り」「発育阻害」にならないための具体的な必要量であると想定できる。すなわち、「十分」は具体的な必要量が基準としてあり、その条件を満たす量を表すことが確認できる。この「十分」を「たっぷり」と置き換えると容認度が下がるのは、(17)において話し手が注目するのは、あくまでも栄養不良に陥ることにならないという(最低限の)必要(条件)を満たす量にであって、期待・予想を上回る、余裕のある量ではないからである<sup>41</sup>。

一方、(13)においては「たっぷり」を「十分」と置き換えることができる。これは、上で述べたように「赤ちゃん」の身体全体に「行きわたる」ために期待・予想される基準となる量が想定されるが、この量が具体的な必要量としても想定できるからである。ただし、置き換えた場合でも「たっぷり」と「十分」ではニュアンスの違いが感じられる。前者は話し手の期待・予想を上回る、余裕のある量であるのに対して、後者はあくまでも必要を満たす、不足の無い量である。

さらに、評価性について考えると、『現代擬音語擬態語用法辞典』は「ややプラスイメージの語」としていた(p. 330)。「たっぷり」は、話し手の期待や予想が想定され、それを達成し上回る量であることから、主体に満足感のような満たされた感覚をもたらし、自然にプラス評価と結びつくと思われる。

実際にNLTを利用して検索してみると、「たっぷり」は「ある」「入る」「含む」のように(容器における)存在を表す動詞とともに、「使う」「食べる」「楽しむ」のような動詞と高頻度で共起し、ものの存在する量や何らかの目的を持った行為に関わる対象の量に対する主体の満足感を表す例が多く見受けられる。たとえば、(15)の「たっぷり」の表す「時間」は「コンサートや旅行にも行ける」とあるように、主体が目的を達成するために使うことができる、余裕のある時間であり、主体の満足感を表すと捉えられる。このことは、同じく時間が多くても「勤務時間がたっぷりある」とは普通、(皮肉や批判的な意味で用いられることはあっても)言いにくいことから分かる。「勤務時間」は自分の目的のために自由に使える時間ではないからである。

また、「たっぷり」が満足感のような「身体が満たされた感覚」を表す場合、この感覚は、「食事を終えた後の満腹感や渴きをいやす飲料水の摂取をはじめとした満足感に基盤をもち、それがさまざまな抽象的な充足感や満足感として投射される」(大石 2010 : 15)と考えることもできよう。私たちは、毎日、起きてから寝るまで「食事」や「睡眠」などの生命維持に関わる生理的な欲求はもちろん、「時間」や「愛情」など精神的なものまで、欲求の認識とそれを充足しようとする行為の連続である。「たっぷり」は何らかの量に関する欲求や目標が達成された際の「身体が満たされた感覚」を表し、この共通の感覚が「たっぷり」

<sup>41</sup> 森田 (1989 : 535) は、「じゅうぶん」について、「小遣いはじゅうぶんもらっています」と言っても、必ずしも多額の small 遣いとはかぎらない。不足をきたさぬだけの額である、と記述している。

の意味の基盤となっていると考えることもできよう。つまり、私たちは、身体の外にある（お椀などの）容器を中身の量を表す（測る）のに用いるのみならず、自分の身体または心を容器として、満たされた感覚を表すと考えることができよう。

このように、「たっぷり」は中身の量を表すと同時に、その量に対する主体の満たされた感覚を表す表現であり、どちらの場合も容器のイメージスキーマが基盤となっていると考えられる。

ただし(12)のように、基準としての容器が身体の外にあり、「心」のような抽象物ではなく「鉢」のような具体物で、客観性の高い基準である場合、話し手の満足感といった体感やプラス評価性が際立たない。これは、たとえば日本語における「半」という表現は、「半値」においてはもとの金額のちょうど半分を指すが、「半煮え」においては「不完全さ、不充分さ」を表している（有光 2007：227）。つまり「望ましき（/望ましくなさ）」を判定した表現であることと同様に考えられる。「半」のような表現について、阿部（2009：6）は、「傾向的には『望ましき』が介入しやすい表現であっても、文の意味内容の客観性がきわめて高い場合には、それは発現しないことを示すものである」と記述している。「たっぷり」も基準の客観性が高い場合、基準を満たし、それを上回る量を表すのであって、満足感といった心的態度は際立たない。このことから、「たっぷり」は「(基準となる) 容器に満ちあふれる量」という意味があり、この意味だけで機能することが可能であることが分かる。主観性概念の介入の程度は、同一の表現であったとしても、一定ではないのである（阿部 2009：6）。「容器に満ちあふれる量」と「身体が満たされた好ましい体感」のどちらが際立つかは相対的、連続的ではあるが、いずれにせよ「たっぷり」は基本的にプラス評価の心的態度を表す語であると考えられる。

以上、「たっぷり」が、プラスの評価性を付与する動機付けについて考察した。「たっぷり」は、話し手の期待以上の量や目標を達成する好ましい量を表す。ところが、以下のように明らかにマイナスの評価性を伴う例も観察できる。これはどのように考えればよいのであろうか。

(18) アメリカの中華料理店で化学調味料をたっぷり使った料理を食べた人が、しびれやだるさを訴えたことから問題になりました。 (BCCWJ)

(19) 暫定基準は下回ったがセシウムたっぷりです。「貝焼きウニ」450 ベクレル。

(<http://www.monipo.net/blog/fish/uni-11060/>)

(18) の「たっぷり」は「化学調味料」の量を表す。(化学調味料は、一般に広く用いられるものではあるが)この化学調味料の量が「しびれやだるさ」といった問題を引き起こす原因であることから、「たっぷり」はマイナス評価であると捉えられる。この「たっぷり」には、やや違和感が感じられるが、単に数量大を表すのみならず、話し手の批判的な心的態度が現われることによるものと思われる。

また、(19)の「たっぷり」は「セシウム」の量を表す。セシウムは、人体を害するという強いマイナスの評価性を持つ語である。この「たっぷり」は読み手にさらに強い違和感を与えるが、話し手の強い批判や皮肉を表すと解釈できる。これは本来プラスの評価性を持つ「たっぷり」が「セシウム」という、強いマイナス評価を持つ語と共起する衝突によって生じるものと考えられる。

鍋島(2011:295-296)は、「しかも」が評価性の同一なものを累加する性質を利用して、語の評価性を客観的に判定する『『しかも』テスト』を提案している。鍋島によれば、「美人でしかも高給取り」のように「美人」という固有のプラスの評価性を持った語は「高給取り」という同じく固有のプラスの評価性を持った語となじむが、「??美人でしかも引きこもり」のように「引きこもり」という固有のマイナスの評価性を有する語とは衝突をおこして違和感が生じる、と述べている。「??美人でしかも引きこもり」では容認度が下がるが、上の例のように「たっぷり」がマイナス評価を持つ語と共起した場合でも容認可能なのは、批判や皮肉といった意味解釈になるからと考えられる。このことから、「たっぷり」は基本的にプラスの評価性を持つが、周辺例においてはマイナスの評価性を持つ語と共起しマイナスの評価性を付与する場合もあると考えられる。したがって、意味①の「たっぷり」は典型的にはプラスの評価性を持つと考えるのが妥当であると考えられる。プラス・マイナスいずれにしても「たっぷり」は話し手の心的態度と結びつきやすいと言える。

それでは、「たっぷり」は典型的にどのような名詞と共起するのであろうか。NLTを利用して検索すると、「たっぷり+の+名詞」の形式は出現頻度2404である。頻度順に13位までの名詞を以下の表に示す。

表1 「たっぷり」と共起する上位頻度の名詞13語(併記の数字は出現頻度)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
水	野菜	数字	湯	スー	お湯	食事	ケー	料理	メニュー	天然	水分	愛情
94	38	36	33	プ29	27	26	キ18	18	ー16	15	15	12

表1から分かるように、「たっぷりの」という形式において高頻度で共起する名詞は「水、湯、スープ」などの液体を中心とした連続体である(例「蛇口をひねるとたっぷりの水が出る」)。液体以外で高頻度で共起する「野菜」は、「3つの野菜」などと個体として数えることもできる。しかし、実例を見ると「魚介類や肉類などとたっぷりの野菜を煮込んだ具だくさんのスープ」のように用いられ、「野菜」の特徴的な形や明確な境界線、内部構造が認められない<sup>42</sup>。すなわち、「たっぷり」と共起すると個性が際立たず、連続体として捉

<sup>42</sup> 第5章で見たように、深田・仲本(2008:215)は、典型的な連続体には、「特徴的な形や明確な境界線はない。また、(知覚的に分かるような)内部構造もなく、均質である」と述べている。さらに、「これに新たな<モノ>を加えても、その元の集合が大きくなるだけであり、また、この一部をとっても、元の集合が小さくなるだけである」と述べている。この記述によれば、「たっぷりの野菜」における「野菜」は、たとえばじゃがいもやにんじんといった野菜の個性が際立たず、均質なモノとして捉えることができる

えられると考えられる。

一方、「食事、ケーキ、料理」はそれぞれ「栄養たっぷりの食事」「フルーツたっぷりのケーキ」「愛情たっぷりの料理」のように「名詞+たっぷりの+名詞」の複合形式で主に用いられ、それぞれ前接する「栄養、フルーツ、愛情」の量を表すが、この場合「栄養、フルーツ、愛情」の指示対象はやはり有界性が認められない連続体であると捉えることができる<sup>43</sup>。

また、2位の「数字」は、「愛情たっぷりの一冊」「ムードたっぷりの二人」などのように用いられ、やはり、「愛情、ムード」という連続体の量を表すと考えることができる。

以上のことから、「たっぷり」は典型的に連続体と共起すると言えよう。ただし、「りんご／本がたっぷりある」と問題なく言えるように、個体の集合とも問題なく共起できる。これは「連続体化のプロセス」が関わると考えられる。繰り返し述べているように、大量の個体を連続体に可算の名詞が不可算に解釈されるプロセスとして、「複数の個体」→「集合体」→「連続体」という過程を経て、個体が連続体に読み替えられる認知プロセス（Lakoff1987、篠原1993、池上2007など）が指摘されている。典型的に連続体を対象とする「たっぷり」が、まぎれもない個体である「りんご」や「本」などの量を表すことができるのも、また、前節で見た山口・佐藤（2006）の指摘する「全体を均一なものとしてとらえる」しくみもこのプロセスが関わると考える。

以上から、「たっぷり」の意味①を<（容器として捉えられる空間において）ものの量が><話し手の期待・予想を上回り大であると捉えるさま>と記述することができる。

#### 8.2.3.1.2 別義②：<一連の動きの量が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

(20) 昔のようにゆでて、たっぷり水にさらす必要はないし生でも食べられる。

(仁田2002:192)

(21) 本日は、天気予報に反し、曇り時々晴れ、視界も良く、たっぷり歩き充実した山行だった。

(NLT)

(22) 幼児期にたっぷり走ってたっぷり転ぶ経験をしていないから、成長してから転ぶと大きなケガをします。

(NLT)

(23) エクササイズウォーキングは、フォームから整えていく必要がある。運動効果を高める方法もいろいろとあるようだが、ここでは、普通に歩くこと、この秋はいつもより少したくさん歩いてみようと考えている人への、ウォーキング入門を紹介しよう。

(NLT)

---

ことから連続体として捉えることができる。

<sup>43</sup> 4.2.1 で見たように、眞野（2004）は、「数えるという行為において、抽象物にも具体物と同様の認知が行なわれうる」（p.132）とし、「抽象物の中には固体のように認知されるものもあれば、液体や気体のように捉えられるものもある」とし、液体・気体のメタファーの例としては「膨らむ、あふれる、流れる」などがあげられる、と述べ「愛情が膨らむ/あふれる」をあげている（p.139）。このことから、私たちは「愛情」を連続体として認知していることが分かる。



(20)の「たっぷり」について仁田(2002:192)は、「動きの量限定として働いている」「これは、[水ニサラス]という動きの時間量を指定し限定したものである」と記述している。このように「たっぷり」はもの(水)の量ではなく、動きの量を表す用法を持つ。ただし、ただ単に「(水にさらす)動きの時間量」を表すのではなく、たとえば「あくがぬけて、おいしく食べるのに適した状態にするため」のような目的達成のために話し手が期待・予想する量を上回る量である。つまり、意味①と同様、「たっぷり」は単なる量を表すのではなく、話し手の期待・予想する量が前提となる。さらに、この例においては水の量が容器に満ちる様子も二次的に活性化される。

同様に、(21)の「たっぷり」は「歩く」という動きの量が、行為主体にとって期待・予想される量を上回る量であることを表す。この「たっぷり」は「充実した山行だった」という表現からも分かるように、期待を上回る動きの量を達成したことに対する話し手の満足感が感じられる。さらに、(22)の「たっぷり」は「幼児期」に期待・予想される「走る」という動きの量が想定され、その基準を上回る量を表す。この基準が達成されない場合「成長してから転ぶと大きなケガをする」ことから、「たっぷり」が表す(走る)量は、基準を達成しそれを上回る、望ましい量である。

このように、「たっぷり」が中立的に(時間量などの)運動量を表すのではないことは「たくさん」と比べるとわかりやすい。(23)は、「いつもより少し(たくさん)」という表現から、話し手は「歩く」という(時間や距離などの)運動量そのものに注目している。この「たくさん」を「たっぷり」と置き換えることができないのは、「たっぷり」に置き換えると「歩く」運動量に対する話し手の期待・予想が前提となってしまう、運動量そのものに注目する文脈に合わないからである。また、(21)の「たっぷり歩き」を「たくさん歩き」に置き換えると、前者の方が主体の心的態度(この場合、満足感)を強く反映していると感じられることから単なる量限定ではないことが裏付けられる。

また、(ものの量を表す場合のみならず)動きの量を表す場合にも「たっぷり」に連続体として捉えるという制約があるものと思われる。以下の例を見てみよう。

- (24) 五回2死から四球を出すまで完全試合。その後もバットの芯でとらえた当たりはなかった。「ストライクをたくさん(\*たっぷり)投げることができたし、後半はいろんな球種を織り交ぜることもできた」と振り返る。(日経2010/10/07)
- (25) 9月は、長い夏休み明けにもかかわらず、子どもたちは、いち早く、学校生活のリズムを取り戻し、校外学習や友だちとの交流を楽しんでいました。(中略)さて、夏休みや2学期は、子どもたちがさまざまな体験をたくさん(?たっぷり)味わう時期であります。(NLT)
- (26) 体に溶け込むようなマッサージで、痛みはないのにするすると整えられていく心地よさをたっぷり(たくさん)味わうことができました。(NLT)

(24)の「たくさん」は、「ストライク」の数量が大であることを表す。この「たくさん」は、主体に満足感をもたらすと自然に捉えることができ、「たっぷり」に置き換えることができる文脈であると思われるが、実際は不自然な表現になる。これは「ストライクを投げる」という一回一回の動きが際立つからと考えられる。つまり、「たっぷり」は動きの個々の構成要素に注目せず、まとまり（連続体）としての量に注目するためと考えられる。同様に、(25)の「たくさん」は「(味わう)体験」の数量を表す。「さまざまな体験をたくさん味わう」とは、種類の異なる、また時間的に異なる複数回の体験の数が大であると解釈できる。つまり、「たくさん」は「体験」の構成要素に（ある程度）注目することができる。この「たくさん」を「たっぷり」に置き換えるとニュアンスが異なると感じるのは、「たっぷり」は「味わう」という心的活動の（程度）量に注目するのであって、個々の構成要素に注目しないからであると考えられる。このことは、(26)において「心地よさ」という心的活動の量程度に注目する場合は「たっぷり」が用いられることから分かる。(26)の「たっぷり」は、「心地よさ」を体験する回数に注目するとは解釈しにくい。この「たっぷり」は「たくさん」と置き換えることができるが、置き換えるとニュアンスの違いが感じられる。すなわち、「たっぷり」は「味わう」という心的活動の量程度に注目すると捉えられるのに対して、「たくさん」は回数に注目すると捉えることができる。このことから「たっぷり」は個々の構成要素を前提としないと考えられる。

以上のように「たっぷり」は、対象となる構成要素に注目する場合に用いられると容認度が下がると考えられる。一方、「たくさん」は個々の構成要素が前提となる場合にも用いることができる。

以上から、「たっぷり」の意味②を<一連の動きの量程度が><話し手の期待・予想を上回り大であると捉えるさま>と記述できる。

#### 8.2.3.1.3 別義③：<話し手が経験した空間の許容範囲の程度が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

(27) (くるま選び女性の目) オペル・ベクトラワゴン—たっぷり広い荷室を確保。

(日経 1997/04/08)

(28) がっしりとしたお玉置き。ステンレスだから、汚れにも強い。さらには、たっぷり太きいから、レードルでもお玉でもなんでも自在に置ける。(日経 2008/07/12)

上の「たっぷり」は、空間を表す形容詞を修飾する形式で、話し手が体験する空間の程度とそれに対する体感を表すと捉えることができる。たとえば、(27)の「たっぷり」は、後続する「確保」という表現から、ワゴン車の「荷室」という空間に対して予め期待・予想される量程度（広さ）が想定され、それを上回る程度であること表す。それと同時に余裕があり好ましいという体感を表す。同様に、(28)の「たっぷり」も「大きい」の程度を表すが、「なんでも自在に置ける」という表現から「お玉置き」の空間に対して期待・予想

される大きさが想定され、これを超えてさらにゆとりがあり好ましいことを表す。他にも「深い」(例「たっぷり深いポケット」)「長い」(例「袖もたっぷり長い」)などの例が観察できる。これらの「たっぷり」は、ある目的に対して期待される程度を上回ると捉えることができ、プラスの評価を付加する。このように「たっぷり」には、「名詞の数量や動きの量を限定する」用法のみならず(一部の)形容詞を修飾し、程度を限定する用法が認められる<sup>44</sup>。

ただし、この「たっぷり」が単なる程度限定と異なることは、「純粹程度副詞の代表的なもの」(仁田 2002 : 165) とされる「非常に」と比べるとよく分かる。以下の例の「非常に」は単に「広い」という「属性・状態の程度性を限定している」(仁田 2002 : 169) と捉えられる。

- (29) カワウの行動範囲は非常に (\*たっぷり) 広く、知多半島から矢作川、豊川、浜名湖あたりまで、一日に容易に飛来するといわれる。(BCCWJ)

(29) の「非常に」が、「たっぷり」と置き換えられないのは、話し手は「カワウの行動範囲」の「広さ」そのものに注目しているのに、「たっぷり」に置き換えると、上で述べたように話し手の期待・予想が想定されこれが文脈に合わないためである。

さらに、この理由とは別に、対象となる空間が「カワウの行動範囲」という知識上の空間であって、話し手が直接体験できる空間でないことも「たっぷり」と置き換えできない理由であると思われる。つまり、上の(27)(28)のように「たっぷり」は、何らかの目的を持って行為を行なう活動の文脈において、空間に対する話し手の体感を表している。たとえば(27)では車に荷物を積むという行為であり、(28)ではお玉を置くという行為によってもたらされる話し手の体感である。このことは、りんごが大きくて好ましくても「このりんごはたっぷり大きい」と言にくいことから分かる。りんごが行為を行なう空間として捉えられないため不自然な表現になると思われる。さらに、たとえば部屋が話し手の期待・予想を上回って明るく望ましくても「\*たっぷり明るい部屋」などとは表現しないし、期待を上回っておいしくても「\*たっぷりおいしい」などと言わないように空間を表す一部の形容詞以外の形容詞とは共起が難しい(程度副詞の「非常に」などとは自然に共起する)。

このように、意味③の「たっぷり」は「広い、大きい、長い、深い」など空間を表すごく一部の形容詞を修飾する形式で、空間の程度とそれをゆとりがあって好ましいと捉える体感を表しプラス評価を付与する。この「たっぷり」の意味は、空間を利用する行為者としての話し手の身体的経験に基づいている。「たっぷり」は私たちの身の回りにあるいろいろなものや場所において、物を置いたり入れたり、あるいは自分自身が入ったりする空間

<sup>44</sup> 仁田(2002 : 163)は『彼はたっぷり大きい』のように形容詞に係ってその限定を行えないことから、『タツプリ』などは量程度の副詞ではないことが分かる」と述べているが、意味②の「たっぷり」は、このように形容詞に係って限定を行っていると考えられる。

の容量の程度を体感していることを表す。行為を行なうものなら誰でも同じ体感を体験できると捉えられ、読み手に当事者感を与える表現である。このことは (27) (28) のように広告に多く用いられることから分かる。

前節の意味①で、「たっぷり」が「容器」と捉えられる空間における中身の量を表すことを述べたが、意味③においても、容器の中身と捉えられる空間に注目し、体感を表すことができる。このことから、意味③においても容器の構造とともに満たされた感覚が維持されていることが分かる。

以上から、「たっぷり」の意味③は<話し手が経験した空間の許容範囲の程度が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>と記述できる。

#### 8.2.3.1.4 別義④：<期待・予想を上回る量であると強調するさま>

「たっぷり」は、「たっぷり+Q」（Qは数量を表す表現）という形式で用いられる生産性が高い用法を持つ。Qには、時間（年、月、日、時、分、秒など）をはじめとして、距離（キロなど）、重さ（キロ、グラムなど）、個数（枚数、曲数など）、人分（人前）などの例が観察される。本節ではこの形式で用いられる「たっぷり」の意味について考察する。この形式で用いられる「たっぷり」について、『新明解国語辞典』（第六版）は「どんなに少なく見積もっても、それだけの数量は十分に有る様子」（破線は引用者）と記述し、以下の例をあげている。つまりQが最低限度であることを表すと説明していると思われる。

(30) ひととおり読むだけでたっぷり二日はかかる。

確かに、(30)は最低限度が「二日」とであると解釈できる。しかし、「たっぷり」を取り除いても同様に最低限度が「二日」とであると解釈できる。したがって、「たっぷり」のみがQの最低限度を表す意味に貢献しているとは考えにくい。むしろ「どんなに少なく見積もっても」という「限定」の意味は「は」によるものと考えられ、『新明解国語辞典』（第六版）の記述は検討の余地があると思われる。それではこの形式における「たっぷり」の意味は何であろうか。

(31) a. たっぷり 500曲を収録でき、旅行に持ち歩いても楽しいはず。

(日経 2010/11/01)

b. 500曲を収録でき、旅行に持ち歩いても楽しいはず。

c. たっぷり収録でき、旅行に持ち歩いても楽しいはず。

(31a)は、(MP3 プレイヤーに)録音できる「500曲」という数量を話し手の期待・予想を超えて大であると捉え、その数量を強調している。つまり、「500曲は話し手の期待・

予想を超えて著しい量である」という前提的な認識がある<sup>45</sup>。それと同時に認知主体にとって好ましいというプラスの評価性を表している。この「たっぷり」は、(31b)のように省略しても文の真実条件的意味は変わらないことから、「たっぷり」は「収録できる曲」の実質的な量を表さないとと言える。しかし、(31a, b)は同じ曲数「500曲」を、「期待・予想を上回り好ましい量である」と捉えるか中立的に捉えるかという点で異なる。「たっぷり」が用いられることでその量が好ましいものであることが含意される。一方、(31c)において「たっぷり」は「収録できる曲」の量を表す。すなわち、「曲」の量が期待・予想を上回り大であることを表す。この時、「たっぷり」は「たくさん」といった数量表現と類義関係にある。

逆に、「たくさん」は、「\*たくさん500曲」というようにこの用法で用いることはできない。この理由について考えると、「たくさん」は価値評価について中立的で、単なる数量を表すため、具体的な数量と共起することは冗長であるため許容されないと考えることもできよう。田守・スコウラップ(1999:171-172)は、「\*急ぎ足で速歩き」が許容されないのに対して、「すたすたと速歩き」が容認されるのは、前者では「急ぎ足」は「速歩き」に対して何も付加せず、その結果冗長な不適格な表現になるが、後者では「すたすた」が「速歩き」に対して類像的な要素を付加しており、その結果生き生きとした具体的な描写を持つ適格な表現になっている。一般に、冗長であるかどうかは意味的に特別な情報を付加するかどうかによる、と説明している。このことから修飾要素として数量詞を必要とする「たっぷり」は「数量」以外の「意味的に特別な情報を付加する」ことが分かる。この「数量」以外の情報が話し手の心的態度(「期待・予想を上回り好ましい」)であると考えることができる。

ただし、この用法は共起する数量詞の指示物に制限がある。先述のように、Qは、時間、重さ、個数などごく一部の数量詞に限られ、たとえば金額について「たっぷり100万円プレゼント」などとは言えない。これは、お金を液体のように容器で測るという経験が、私たちにとって重要な共起体験とは考えられないからであると思われる。このことから「たっぷり」の対象は「容器」と共起性基盤を持つものという制約が働いていると考えられる。<sup>46</sup>すなわち、「たっぷり」の意味は容器のイメージスキーマが基盤になっているということ

<sup>45</sup> 副助詞「も」の働きについて、加藤(2006b:94)は、「千円は多い」という前提的な認識がある場合に、「千円も持っている」と表すことがあり、この場合は量的評価を表す働きをしている、と述べている。また、工藤(1977)は、「それはわずか三十円足らずの差額にすぎなかった」における「わずか」は「対象が数量名詞(数詞)に限られるものであるが、評価を表すもの」(p.981)として、「いわば副助詞と同様の機能を果たす副詞である」(p.971)と述べ「限定副詞」であるとし、評価やとりたての機能があると記述している(8.2.3.2.3で詳しく述べる)。意味④の「たっぷり」も同様の働きをしていると考えられる。

<sup>46</sup> 同じく水のメタファー表現であっても、「感情が溢れる／満ちる」と言えるのに対して、「金が溢れる／\*満ちる」のように「金(かね)」は「感情」よりメタファー表現の生産性が低い。この点について鍋島(2011:147)は、「《感情は水》メタファーに関しては、感情的になったり興奮したりする際に、身体から汗、涙、鼻水などの形で液体が体表に出ることから、感情と水の間に共起関係があり、このメタファーの基盤は、感情の起伏と表出する体液の増減の相関であることが想像できる。(中略)一方、《金銭は水》などの場合、このような共起性基盤は考えにくい。金銭を水や液体と同時に扱うような経験は、瑣末的であり、重要な共起体験とは考えられないからである」と記述している。このことから鍋島(2011:149)は、

が支持される。

以上のことから、「たっぷり+Q」の形式において対象の量を表すのはQであり、「たっぷり」が表すのは（対象の数量ではなく、数量に対する）認知主体の心的態度であると考えられる。この形式の「たっぷり」は、多くはプラスの評価を表すが、以下の例ではマイナスの評価性を表すと考えられる。

(32) そうして途中かなりの難儀をして、たっぷり四昼夜かかって、やっと津軽の生家に  
着いた。(太宰治『庭』青空)

(32) の「たっぷり」は、後続する「やっと」という表現から「四昼夜」という時間が話し手の予想を超過して長すぎると捉え、「四昼夜」に対する価値評価を表している。「たっぷり」がなくても文の真理条件的意味は変わらないことから、「たっぷり」は事態の量には関わらないが、話し手に負担を与える量でありマイナスの評価性を付与すると捉えられる。このように意味④の「たっぷり」は、プラス・マイナスいずれにせよ量に対する認知主体の心的態度を表すことが分かる。

#### 8.2.3.1.5 別義間の関連性

前節での検討を踏まえ、本節では、「たっぷり」の4つの別義間の関連性について考察する。

別義①は<容器における中身の量>を表すと考えられる。中身は「みそ汁」のような具体物から「時間」や「愛情、ユーモア」のような感情まで容器のイメージスキーマを基盤として比喩的に拡張している。容器は中身よりも際立ちが低く、容器のみ焦点化される例は観察できない。別義①から②へは、<ものの量>から<動きの量>へと拡張している。さらに別義③は①から、<ものの量>から<程度>を表す意味へと拡張している。別義①、②、③に共通する<期待・予想を上回り大であると捉える>というスキーマが抽出できることからメタファーにより成り立っていると考えられる。

上でイメージスキーマの内部と外部を分ける構造が比喩的拡張の基盤になっていることを述べた。すなわち、「たっぷり」が表す量は、飲食物といった具体物の量から、時間、愛情、ユーモアといった精神活動の量、そして「動き」の量、さらに、荷室の広さ、鍋の深さなどの「程度」まで、私たちが予め期待していた量を超える量である。これらは、容器のスキーマが時空間、心理的空間に比喩的に拡張されている。つまり、中身の量を身体的な経験を反映する容器のスキーマによって計測し、認知していると考えられる。繰り返し述べているように、この意味拡張の基盤となっているのは容器のイメージスキーマである

---

「メタファー表現の生産性は共起性基盤と最も相関が強く、共起性基盤の重要性が示される」と記述している。「たっぷり」のメタファー実現においても、「金額（円など）」は難しいのに対して、「重さ（キログラムなど）」「容量（リットルなど）」など容器に入れて測ることから容器との強い共起性基盤を持つと考えられる数量詞は可能であることから、容器との共起性基盤の強さと相関すると考えることができる。

と考えられる。別義①において、(連続体と捉えることのできる)ものの量を測る容器のイメージスキーマが物理的空間から抽象的空間へと意味拡張しているのを見たが、別義②においては、動きの量を測る容器として用いられている。この際、中身が連続体として捉えられるという制約が維持されているのを見た。

さらに、別義④は別義①の<中身の量>を<期待・予想を上回り大であると捉える>という別義から<(中身の)量>を表すという実質的意味が希薄化し、<期待・予想を上回り大であると捉える>というより抽象的な意味になっている。すなわち、狭い意味から広い意味に転用されるシネクドキーに当てはまる。このため、別義④は別義①からシネクドキーによって成り立っていると考えられる。

ところで、別義④の「たっぷり」は、話し手の心的態度を表し強調する機能的意味へと一般化しているが、別義④は「たっぷり+Q」という数量を表す語Qに依存した形であることから形態的な自立性が希薄化している。さらに、<中身の量>を表すという量副詞としての実質的意味も希薄化し、評価や取り立てを表すという副助詞と同様の機能的意味へとすなわち、文法的な要素へと発展していることからこの意味拡張は文法化<sup>47</sup>のプロセスであると考えられる。以上をまとめると図1のように表すことができる。

#### 「たっぷり」のイメージスキーマ

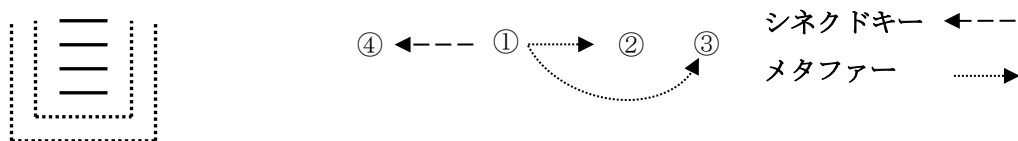


図1 「たっぷり」の多義構造

ところでなぜ、私たちは「ご飯をたっぷり食べた」のように飲食物の量を表す「たっぷり」という語を「愛情」や「時間」の量、動きの量や広さの程度、さらには「1キロ」などの数量詞に対しても用いるのであろうか。

これは、8.2.3.1.1 で述べたように、「たっぷり」によって私たち自身の内部にもたらされる共通の体感と考えることができる。「たっぷり」は、私たちに同様の体感をもたらされることを表すと考えることができる。すなわち、体感の共通性が比喩的拡張の基盤になっていると考えることができる。たとえば、私たちは期待していた以上の量の飲食物を見たとき満ち足りた気持ちを感じることができる。また、見るという視覚的な経験のみならず、食べる、飲むといった身体内部の体験からも満ち足りた体感をもたらされる。また、歩いたり、走ったり、勉強したり、といった何らかの目標を持つた行為(動き)を行いそれが達成された際にも同様の満足感、充実感が得られる。つまり、ものの量のみならず、達成した行為の量を大であると感じることと満ち足りた感覚を感じることは同時に生じる(共

<sup>47</sup> 文法化とは、本来、語彙的な要素であった言語表現が、通時的な過程の中でより文法的な要素へと発展していくことである。この文法化に伴う文法範疇、音形、意味という3つの側面に関する変化の中で一番はじめに起こるとされているのは、元の意味の希薄化である(深田・仲本 2008: 207)。

起する)。さらに、空間の内部においてゆとりのある容量を体感するときにも同様の満足感が得られる。このような経験の繰り返し「たっぷり」の意味基盤となっていると考えることができる。この場合、満ち足りた感覚が体内に充満することから、基準となる容器は私たち自身の身体であると考えられる。

つまり「たっぷり」の多義構造は、基準として対象を容器で中身の量を測る、容器のイメージスキーマが基盤となっているが、一方で、(程度差はあるが)基本的に、身体が満たされた感覚という好ましい体感によって結ばれている。つまり、「たっぷり」は視覚に基づく客観的な捉え方というよりむしろ、量を体感するもう一つの認識のありかたを示すと言えよう。この満たされた感覚もやはり、私達の身体を容器とみなす容器のイメージスキーマが基盤となっている。

このように「たっぷり」は、「味噌汁」「時間」といった具体物、抽象物の量から「走る」「勉強する」といった動きの量、さらに「広い、深い」といった空間の程度や「2時間、1キロ」のような数量そのものに対して、異なる領域における量に関する経験が私たちの内部にもたらす感覚を表す表現であると考えられる。

以上、私たちは量に対して視覚に基づく、より客観的で中立的な捉え方とは別に、内部的に体感するもう一つの認識のあり方を持っていることを示した。「たっぷり」は、主に視覚に基づく客観的な事態の捉え方(観察表現)と異なり、事態を内部的に体感するもう一つの認識のあり方(体感表現)を示す表現であることを述べた。

### 8.2.3.2 「どっさり」の意味分析

#### 8.2.3.2.1 オノマトペの「どっさり」

冒頭で見たように、『大辞林』(第三版)と『日本国語大辞典』(第二版)はオノマトペとしての意味を記述しているが、「どっさり」のオノマトペとしての用法は現在ではほとんど失われていると考えられる(山口(編)2003:338)。とはいえ、「どっさり」の意味は、8.2.2の先行研究で見たように、「重量・豊富の暗示がある」(『現代擬音語擬態語用法辞典』)、「重くてごたえのある意から」(『日本国語大辞典』)、「物が落ちたり倒れたりした時のインパクトのイメージが残る」(浜野2014)と記述されているように、「重い物が地面に落ちた時の音を示す」(山口(編)2003:338)という「どっさり」の「重さ」に関わる元来の意味特徴が現代語の意味に受け継がれていると考えられる。そこで、本節では現代日本語における「どっさり」の意味を考察する前に、オノマトペの「どっさり」が私たちにとって、どのような経験と結びついているかを確認する。以下の例を見てみよう。

(33) 吉爺は右太をお鈴婆の寝床に入ると、寝不足の疲れた体を床の上にどっさり投げだした。(BCCWJ)

(34) 年賀状の詰まった郵袋をどっさり(と)下ろす。

(『現代擬音語擬態語用法辞典』p.329)



(33) の「どっさり」は、かなりの重量を持つ一人の人間「吉爺」が「体を床の上に投げだした」という1回の動きに伴う音とその様子を表している。(34) の「どっさり」は「年賀状の詰まった郵袋」という一まとまりの重いものが床に落ちる音とその様子を表している。これらの「どっさり」は、ある程度重い一つの物体が落ちて床に着く時の音と様子を表すオノマトペとみなすことができる。『現代擬音語擬態語用法辞典』は、「大きくて重く不定形の物を下ろす音や様子を強調する様子を表す」「重量の暗示はあるが衝撃の暗示は少ない」と記述している。また、この記述は浜野の記述(10)(11)とも矛盾しない。このように、「どっさり」の対象は比較的大きく、重く、柔軟性を持つ一まとまりの物体であると特定できる。また、「??どっさり、どっさりと落ちた」とは言いにくいことから、一回限りの完結した出来事に伴う表現であると考えられる。

ただし、(34) は『現代擬音語擬態語用法辞典』においては、オノマトペの例としているが、「郵袋」の数量を表すという解釈も可能であると思われる。この例からオノマトペの「どっさり」と、数量を表す「どっさり」の連続性が窺われる。

深田・仲本(2008)は、「我々は日常生活の中で、音を聞く時に同時に出来事を聞いている」とし、「パリンと割れる対象物は、コップやガラスのように板状の物体でかつ硬いもの」であるように、「我々は音から破壊という出来事だけでなく、そういった出来事に関わる対象物の物理的な属性(形状や材質)も同時に知覚している」と述べている(pp. 110-111)。「どっさり」も、その音から、一つのもものが落ちるという出来事のみならず、対象の物理的な属性も同時に知覚できる。すなわち、オノマトペとしての「どっさり」は、音という聴覚的経験と、ある程度柔軟性があり重いという触覚的経験、さらにその様子という視覚的経験を同時に表す、聴覚-触覚-視覚の「複合感覚表現」(武藤 2003)と考えられる。

以上の考察から、オノマトペの「どっさり」の意味を<重く柔軟性のある一かたまりのものが><落ちる音や様子>と記述できる。

#### 8.2.3.2.2 別義①:<一かたまりと捉えられるものの数量が><(重いと感じられるほど)大であると捉えるさま>

本節では、これまでの考察結果を踏まえて数量を表す「どっさり」の意味を考察する。以下の例を見てみよう。

(35) そして尾田さんの机を再現した最後の原画コーナーを抜けると、出口には私の書いた尾田さんインタビューの載っている記念号外がどっさり積まれていますので鑑賞の記念にぜひどうぞ(これが最後の自慢)。(朝日 2012/03/26)

(36) どっさり運んでスッキリ収納

玄関に置ける“スマート”リヤカーを発売開始。本製品は、たたむことのできるリヤカーです。リヤカーはキャンプやガーデニングで荷物を運ぶのに便利な道具です

が、非常にかさが大きく、持ち運びや収納が難しいという問題がありました。本製品はリヤカーに折りたたみ機能を追加し、収納性を高めました。これによりキャンプにリヤカーを持って行き、重いキャンプ道具を楽に運ぶことができるようになりました。使用しない時には薄くたたんで収納が可能なので、玄関に置いて収納することも可能です。

【製品名】 フォールディングリヤカー C2-125

【カラー】 グリーン

【容量】 150L

【最大積載重量】 100Kg

【希望小売価格】19,800 円(税抜き) (朝日 2014/05/16)

- (37) 「ハードやソフトに付随するビジネスのアイデアはどっさりある」ペットロボットはビジネスもまだ開発途上にあるようだ。 (日経 2002/05/22)

(35) の「どっさり」は(新聞あるいは冊子などと想定できる)「記念号外」の(積まれた)数量が大であることを表す。(36) の「どっさり」は、対象が明示されていないが、「重いキャンプ道具」など(運ぶことのできる)荷物の数量が大であると捉えることができる。

ただし、「どっさり」が単なる数量限定と異なることは「どっさり」を「たくさん」と置き換えるとよく分かる。たとえば(35) の「どっさり」は「記念号外」を持ち上げたり移動させたりして「動かす(あるいは動かそうとする)」ときに、または「重力に対抗して体で支える(あるいは支えようとする)」ときに「重い」と体感する量であろうと捉えることができる<sup>48</sup>。これを「たくさん」に置き換えると、数量(の多さ)を表すのであって、そのような体感は感じにくい。

(36) は新聞広告の見出しである。「重いキャンプ道具を楽に運ぶことができるようになりました」「最大積載重量 100Kg」とあるように、話し手(売り手)は「(支えたり運ぶことのできる)重さ」を積極的に際立たせている。この「どっさり」を「たくさん」に置き換えると(物の数量が多ければ重いであろうと想定できるにもかかわらず)「重さ」の側面は際立ちが消え、「(運ぶことのできる荷物の)数量」を際立たせると捉えられるため、「リヤカー」の売り手が意図する商品の魅力が際立たない。

このように、「どっさり」は(単に物の数量に注目するのではなく)対象の重さを際立たせる。つまり、前節で見たオノマトペの意味特徴である<重い一かたまりのもの>が二次的に活性化<sup>49</sup>され、対象が重く、動かしたり支えるといった行為あるいは活動を行う際に主体に負担となる体感をもたらすと捉えることができる表現であると考えられる。(動かす、

<sup>48</sup> 「重い」に関する経験については先行研究で指摘されている(新地 1997、深田・仲本 2008、本多 2013)。たとえば、本多(2013: 102-103)は、人が石を「重い」と感じる・分かるのはどういうときでしょうか、という問いに対して、「動かす」とき、あるいは「動かそうとする」ときです。さらに、「重力に対抗して体で支える」ときあるいは「支えようとするとき」です、と記述している。

<sup>49</sup> 本来の意味が、新たな意味あるいはその場で意図されている意味を背後で支えることを、本来の意味の二次的活性化と言う(靱山 2009: 97)。

支えるといった) 行為あるいは活動を行うものなら誰でも同じ感覚を経験できると捉えられ、読み手に当事者感を与える表現である。

一方、(37) の「どっさり」の対象は「アイデア」であり、物理的には重さのない抽象物である(当然、動かすこともない)。それにもかかわらず、「どっさり」という同じ表現が用いられ、私たちは支えると「重い」と捉えられるほどの量であると捉えることができる。このように「どっさり」は物理的に重さのない抽象物の量も表し、(単なる数量のみならず)それが話し手に負担となる体感をもたらす量であると捉えられる。

このしくみについて考えると、尼ケ崎(1990: 138-139)は、「重い」は、荷物の重量だけでなく音楽(「ベートーベンは重い」)、建築(「ゴシックは重い」)、作家の文体や酒の味などさまざまな対象に用いられる、と指摘している。尼ケ崎は「重い」という形容詞について、「対象の属性を指すのではなく、それを体験する私自身の内部態勢の特性を指している。まただからこそこの言葉は、同じ感覚をもたらすさまざまな経験領域(芸術・人格から酒の味まで)で用いることができるのである」と述べている。また、同書は、「自由な行動の禁止によって被抑圧感を感じるとき、さらに重い人格や重い演技に対したとき、私たちの筋肉は僅かながら重量に耐えるときと同じパターンの緊張を帯びているのかもしれない」(p. 139)と述べている。

「アイデア」には物理的な重さはないが、その量は認知主体に物理的に重いものと同じ感覚(重量に耐えるときと同じパターンの緊張)をもたらすと考えられる。つまり、「どっさり」は、対象が空間に存在する具体物であっても、抽象的概念であっても、それを体験する主体に対してもたらされる感覚を表すと考えられる。

ただし、先述のように「どっさり」によってもたらされる感覚は、基本的に動かしたり支えるといった行為あるいは活動を行う際に知覚される。つまり、行為者としての主体と対象との相互作用的な体感である。

それでは、「どっさり」の対象は、典型的にどのようなものであろうか。今井(1997: 18)の「存在論木の構造」<sup>50</sup>の Kategorisierung を参考に下の表 2 にまとめる。

---

<sup>50</sup> 存在論木の構造 (今井 1997: 18)

表2「どっさり」と共起する名詞（カッコ内は2回以上出現した回数）

①飲食物：68例46%

野菜（4）・塩（3）・魚（2）・イチゴ（2）・料理（2）・ビール（2）・キノコ（2）・食べ物・食物・缶詰・実・御馳走・胃薬・かき氷・カロチン・キャベツ・かき・自然の恵み・おかめ焼き・餅・もも・すいか・ゆで卵・桑の実・コーヒー豆・果物・食料・漢方薬・ホットドック・チョコレート・ビスケット・お茶・山の幸・具・生若布・塩サケ・栗・御饌・生わかめやらそば粉やら・アーモンド・白菜・食品・紅ショウガ・かしわ・氷・ベーコンと卵・砂糖・ラムネやらゆでたまご・きゅうり・クリームのような固まり・西瓜・切り身・酒だの肉だの・煎餅・たらこ・メニュー・ゼリー

②人工物：43例29%

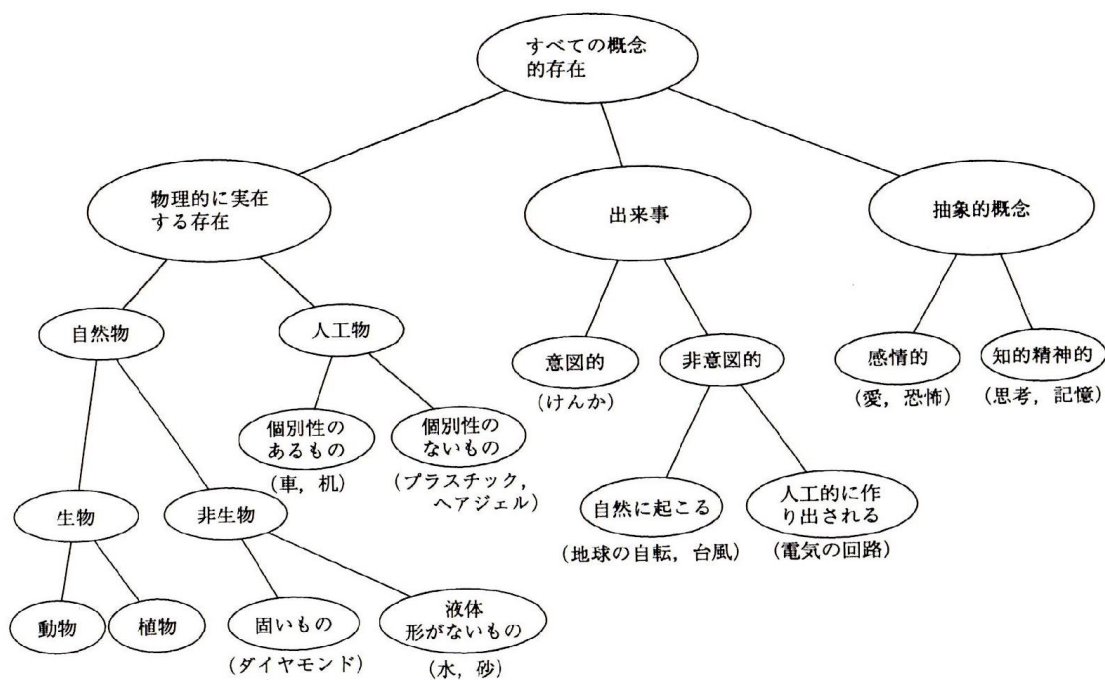
新聞（3）・お金（3）・着物・札束・はがき・資料・選外佳作・書類・本・荷物・紙や布・教材・商品・雑貨・引き出物・仕出し弁当箱・手土産・土産物・京土産・お土産・プレゼント・おまけ・税金・撮影機器・絵・建材・写真・遺物・カードとかケータイ・かわらけ・織物や鏡、櫛の筥・原稿・宿題・クリスマスグッズ・品物・雑貨・おたから

③生物（動物）：7例4%

若い男や娘・長寿に恵まれた人・元気いっぱいアメリカ娘・敵・テスト生・女子・ペンギン鳥

④自然物：16例10%

雪・葉っぱ・花・竹やぶ・毒キノコ・真珠・絹糸・飼犬の毛・竹やぶ・聖者たちの骨・



ほおずき・ヘリクリサム・薪・シダ・たきぎ・わら

⑤出来事：5例3%

事件・仕事・検査・買い物・用事

⑥抽象的概念：11例7%

訊きたいこと・閑・お話のたね・話・思い出話・嘘・気持ち・選外佳作・新しいウィザード・言い残したこと・指導者たちの素顔

BCCWJで検索すると「どっさり」の事例が147例あり、この中で、数量を表すと解釈できる例において対象が具体物である場合、すべてが「固いもの」あるいは「個別性のあるもの」の集合として捉えることのできるものであった。ただし、「固いもの」「個別性のあるもの」とは名詞自体に本来備わっている物理的に個体か否かという客観的事実の投影ではなく、話し手が主体的に対象を捉えてゆく認知活動に基づいている（篠原1995：49）。

たとえば、表2の①における「ビール」は、それ自体は液体であるが「冷蔵庫には冷えたビールがどっさり入っていた」のように、液体としてではなくカンやビンなど容器に入った重量を持つ「個別性のあるもの」の集合であると解釈できる。同様に「お茶」も「遣唐使たちは故国に帰るとき、この辺りでどっさりお茶を買って土産にしたのにちがいない」というように、「個別性のあるもの」（お茶の葉）の集合であると捉えられる。また、④の「雪」もそれ自体は「固いもの」あるいは「個別性のあるもの」ではないが、雪だるまを作ったり、ボール状に丸めて雪合戦ができることから、私たちには個体（かたまり）として捉えやすいものである。また、雪下ろしや雪かきなどで私たちは経験的にその重さを知っている。人間を表す例も観察できる。たとえば、③の「敵」は「金もなく、身を寄せる場所もなく、敵だけはどっさりいる」というように用いられ、身体的に、あるいは精神的にも話し手に重い荷物同様、困難を与える対象として捉えることができる。ところで、8.2.2で見たように『現代擬音語擬態語用法辞典』（pp. 262-263）は、「たっぷり」は「どっさり」に似ているが「どっさり」は「重量・豊富の暗示がある」とし、以下の例をあげている。

- (38) a. ×てんぷらにてんつゆをどっさりとつける。  
b. パンにバターをたっぷりつける。（ケチったりしないで）  
c. パンにバターをどっさりつける。（分厚く）

同書には、「どっさり」と共起しやすい（しにくい）対象についての記述はないが、(38a)の「てんつゆ」が不適格になるのは「てんつゆ」が、一かたまりとして捉えにくいためであると考えられる。一かたまりとして捉えられる場合には、液体であっても問題なく共起し、その量を際立たせる（例「業務用どっさり2リットル！高級玉ねぎドレッシングずっしり重い！」）<sup>51</sup>。また、同じく「てんつゆ」でも「つける」ではなく「かける」に置き換

<sup>51</sup> <http://shokumarche.com/item/112486.html>

えると容認度が上がると思われる。これは、「かける」「のせる」など、上から下への重力が際立つ状況においては、浜野（2014）の記述（11）にあるように、「どっさり」の音象徴、すなわち「物が落ちたり倒れたりした時のインパクトのイメージ」と重なり、矛盾しないからと考えられる。

さらに、インターネットで検索すると、健康食品の広告において「1日1杯のお茶で翌朝どっさり」<sup>52</sup>など、排泄物を（婉曲的に）表す例が多数観察できる。このことから、流動体でも一かたまりとして捉えられるものとは共起することが分かる。

以上のことから、「どっさり」は、典型的に一かたまりとして捉えられる個体（の集合）と共起し、一かたまりとして形をとどめにくい状況においては液体、気体とは共起が難しいと言える。

また、この「どっさり」は、「排泄物」であることを明示せずとも、その対象と出来事を想定可能にし、さらに聞き手に当事者感を生起させる。つまり、柔らかく重さを持った多量のものが一回落ちる（排出される）という出来事を聞き手は「どっさり」一語で具体的に理解できる。このように「どっさり」は、対象を明示しなくても聞き手に出来事を伝達し、生き生きとした当事者感を与える表現であるため広告に多用されると考えられる。

続いて、⑤出来事と⑥抽象的概念（表2）の例を見てみよう。

(39) いや、ウェストワード・ホー！の試合に支障をきたすような事件は何もないよ。だが、注意してほしいね。いつもこうとは限らないさ。そのうち事件がどっさりやってきて、おちおちゴルフをやる暇もなくなるよ。いまのうちさ、たっぷり愉しむのは。  
(BCCWJ)

(40) 大野は、少々恩着せがましくいい、溜った仕事をどっさりといい付けた。それには予定以上に必要となった石の採取場を捜す問題から工事に木を伐ったために薪が足りなくなったという塩釜屋からの苦情処理までが含まれていた。  
(BCCWJ)

(41) あの人については話がどっさりあるんです、昔はアイザックにもすばらしいときがあったっていう話が。  
(BCCWJ)

(39) の「どっさり」は、話し手（探偵シャーロック・ホームズ）が「(解決すべき)事件」の量を表す。「おちおちゴルフをやる暇もなくなるよ」ということから、話し手にとってかなりの負担となる行為の量であると捉えることができる。同様に、(40) の「どっさり」は「溜った仕事」の量を表すが、行為（仕事）を行う主体に大きく負担となる量であると捉えることができる。さらに、(41) の「どっさり」は「話」の量を表す。「話」は精神的・知的抽象物であってももちろん物理的な重さはないが、「(あの人について) 話をする」という行為の量（程度）は主体にかなりの負担となる量であると解釈でき、その量は物理的に重いものと同じ感覚（重量に耐えるときと同じパターンの緊張）をもたらすと捉える

<sup>52</sup> <http://www.320320.net/sururi/index.html>

ことができる。つまり、対象が出来事や抽象的概念であっても、「どっさり」はその量を経験する主体に対してもたらされる共通の感覚を表すと捉えることができる。

以上の考察から、「どっさり」の別義①を<一かたまりと捉えられるものの数量が><(重いと感じられるほど)大であると捉えるさま>と記述できる。

#### 8.2.3.2.3 別義②: <(重いと感じられるほど)大であると強調するさま>

「どっさり」は、「どっさり+Q」(Qは数量を表す表現)という形式で用いられる生産性が高い用法を持つ。Qは、重さ(トン、キロ、グラムなど)が中心であるが、リットル、個、枚、通(手紙)などの例が観察される。以下の例を見てみよう。

(42) どっさり 2トンのジャガイモ収穫 熊本で児童・園児ら (朝日 2013/06/08)

(43) 他のホルモン焼肉では味わえないこのジューシーさ、希少な部位をどっさり 1kg!!  
(NLT)

(42)の「どっさり」は、後ろに続く(ジャガイモの量)「2トン」を甚だしく大であると捉え、その量を際立たせている。(42)において、ジャガイモの量を表すのは「2トン」であり、「どっさり」を取り除いても文の真理条件的意味は変わらないことから、「どっさり」は実質的な量を表さないことが確認できる。しかし、「どっさり」は「2トンは大きい量である」という前提的な認識があり、それを踏まえている(8.2.3.1.4注45参照)。同様に、(43)の「どっさり」が量そのものを表すのではないことは「希少な部位」の量は「1kg」であり、「どっさり」を取り除いても文の真理条件的な意味は変わらないことから確認できる。このように、(42)(43)の「どっさり」は、数量を表すのではなく、「2トン」「1kg」といった数量に対する話し手の量的評価を表している。すなわち、後接する数量に対して「重く感じられるほど大である」という話し手の心的態度を表し、数量を際立たせる役割をしている。

注45で見たように、工藤(1997)は、「それはわずか三十円足らずの差額にすぎなかった」における「わずか」は「対象が数量名詞(数詞)に限られるものであるが、評価を表すもの」(p.981)として、「いわば副助詞と同様の機能を果たす副詞である」(p.971)と述べ「限定副詞」としている。工藤によれば、限定副詞とは「文中の特定の対象を、同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞」と定義される(pp.971-972)。これに対して、冒頭で見たように、量副詞は「文中に現われる名詞の数量や動きの量を限定する副詞的成分である」と定義される。つまり、限定副詞の機能は取り立てや評価などを表すのであって、「文中に現われる名詞の数量や動きの量」を表すものではないことから、別義②は別義①と区別される。

このように、「どっさり+数量詞」は、新聞の見出しや広告に多用され、数量に対して、重いと感じられるほど大であるという評価を表す。

以上のことから、別義②の「どっさり」を<(重いと感じられるほど)大であると強調

するさま>と記述できる。

#### 8.2.3.2.4 別義間の関連性

さて、「どっさり」のオノマトペの意味と量を表す意味の関連性を考えると、隣接性あるいは同時性に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。前節でオノマトペの「どっさり」の意味を<重く柔軟性のある一かたまりのものが><落ちる音や様子>を表すと記述したが、落ちるとき「どっさり」という音や様子を伴うものが、数量が大であるものであることが多いところから<量が大である>という意味が生じたものと考えられる。私たちは日常経験から重いことと数量の多いことという二つの経験が共起することを知っている。このような経験の共起性や同時性は、経験間のメトニミー的關係として捉えることができる<sup>53</sup>。すなわち、「どっさり」という音を聴覚的・視覚的に認知しただけで、重くて数量が多いだろうという推測が成り立つ<sup>54</sup>。

続いて、別義①と別義②の関連性を考えると、別義②は別義①の<一かたまりと捉えられるものの数量>を<（重いと感じられるほど）大であると捉えるさま>という意味から<ものの数量>を表すという実質的意味が希薄化し、認知主体の心的態度を表すスキーマ的意味へと一般化している。別義②の「どっさり」は、「どっさり+Q」という数量を表す語 Q に依存した形であることから形態的な自立性が希薄化している。さらに、<ものの数量>を表すという実質的意味も希薄化し、認知主体の心的態度が顕在化していることからこの意味拡張は文法化のプロセスであると考えられる。また、この意味拡張は、狭い意味から広い意味に転用されるシネクドキーに当てはまる。このため、別義②は別義①からシネクドキーによって成り立つと考えられる。

#### 8.2.4 「たっぷり」と「どっさり」の類似点と相違点

##### 8.2.4.1 類似点

まず、「たっぷり」の別義①と「どっさり」別義①、「たっぷり」の別義④と「どっさり」別義②が類義関係にあることを以下の例に基づき確認する。

(44) 焼き上がったサンマは、太根おろしをどっさり (たっぷり) かけて口に運んだ  
(朝日 2013/10/04)

(45) いただいたスナックエンドウがたっぷり (どっさり) ありますので、肉じゃがをつ

<sup>53</sup> 靱山・深田 (2003: 100) は、MORE IS UP (多いことは上) は、あるものの量が増えたら、その高さも高くなるという実際の具体的な経験に基づいて成立したメタファーであり、<量>と<高さ>という二つの領域の経験的な共起性があるが、「このような経験の共起性や同時性は、経験間のメトニミー的關係として捉えることが可能である」と述べている。

<sup>54</sup> 武藤 (2003: 284-285) は、視覚的印象により触覚的経験が想起されるオノマトペの例として「ベタベタ」をあげ、「視覚」と「触覚」というふたつの感覚が同時に働く、同時性に基づくメトニミー表現であり、「触覚的にベタベタしたものが固有にもつ独特の形状から、それを視覚的に認知しただけで（触らなくても）、もし触ったらベタベタしているだろうという推測が成り立つ」と述べている。



くりました～。

(NLB)

(46) 南部もぐりの天然ほや 5 キロセット (新鮮な天然殻付きほやがたっぷり 5 キロ入った、お得なセットです!) (<http://sanchokumaruuu.ocnk.net/product/148>)

(47) ぐるなび食市場店の送料無料でどっさり 1.5kg! 干物の詰め込みセットの商品ページです。 (<http://shop.gnavi.co.jp/fourseason/event/172928/>)

(44) の「どっさり」と (45) の「たっぷり」は、それぞれ「大根おろし」と「スナックエンドウ」の量の著しさを表す。(44) と (45) において「どっさり」と「たっぷり」を相互に置き換えることができ、また置き換えても文の持つ意味もほとんど変わらない。すなわち、両語は「ものの数量が大であると捉える」という類似点を持つ。

さらに、(46) (47) のように「たっぷり／どっさり+数量詞」の形式において用いられ、数量 (そのもの) を表す意味が希薄化し、後接する数量に対して、非常に多いという評価を表し数量を取り立てる用法を持つ点においても共通している。(46) (47) においても「どっさり」と「たっぷり」を相互に置き換えることができ、また置き換えても文の持つ意味もほとんど変わらない。

また、先述のように、両語はともにオノマトペから派生し、対象に対する感覚を表す表現であり、行為者にとって相互作用的属性を前景化させる表現であるという点で類似している。また、主に日常的な文体で用いられ宣伝広告に多用される点も類似している。

仲本 (2013 : 25-26) は、「日常言語は、周囲の環境で起こる事態を客観的に記述するだけでなく、特定の視点と相対的な見えや主体の心的態度を表すことが多い」とし「この服は小さい」「今日は風が強い」という場合と「この服はきつい」「今日は風がきつい」という場合を比べると、後者の方が主体の態度 (この場合、不快感) を強く反映していると感じられる、と記述している。「たっぷり」と「どっさり」は、「感性」の言葉であるオノマトペに由来する語であることから、感覚が際立つ語であると考えられる。たとえば、「おかずがたくさんある」「資料がたくさんある」という場合と「おかずがたっぷりある」「資料がどっさりある」という場合では、後者の方が主体の実感 (好ましいという評価や満足感) や重くて動かしにくいという体感を伴って感じられる。このように、「たっぷり」と「どっさり」は私たちの内部にもたらされる感覚に関わる経験の共通性がそれぞれの意味拡張の基盤になっていると考えられる点も共通している。

## 8.2.4.2 相違点

### 8.2.4.2.1 重さが際立つ「どっさり」、中身が際立つ「たっぷり」

「どっさり」と「たっぷり」の相違点として、まず対象の違いが考えられる。個別の意味分析で見たように、「どっさり」の対象は典型的に重い一かたまりと捉えられるものであるのに対して、「たっぷり」の対象は容器の中身と捉えられる連続体であった。

両語と共起する名詞をさらに詳しく見てみよう。

前節では「たっぷりの」という形式（連体修飾用法）で共起する名詞を見たが（表 1）、「どっさり」は「どっさりの」という形はとりにくいため、両語の比較のため「Nがたっぷり V」の形式（連用修飾用法）において共起する名詞を分類した。BCCWJ を利用して検索すると「Nがたっぷり」の事例が 317 例あり、この中で、別義①と解釈できる例において大きく次の表 3 のようなカテゴリーに分けられる。

表 3 「がたっぷり」と共起する名詞（カッコ内は 2 回以上出現した回数）

<p><b>①飲食物：164 例 51%</b>          野菜 (9)・栄養 (8)・うまみ (7)・脂肪 (6)・具 (5)・カルシウム (5)・ビタミン (4)・食物繊維 (4)・牛乳 (3)・汁 (3)・魚の幸 (3)・果物 (3)・ねぎ (3)・油 (3)・クリーム (3)・エキス (3)・みつ (3)・風味 (2)・ケチャップ (2) ニンニク (2)・バター (2)・豚肉 (2)・香り (2)・チョコ (2) など</p> <p><b>②人工物：25 例 7%</b>          炭・洗濯物・持ち物・テーブル・部屋・おつり・化粧品・衣類・フリル・ワイロなど</p> <p><b>③生物（動物） なし</b></p> <p><b>④自然物（非生物・形がないもの）：19 例 6%</b>          光 (6)・日ざし (2)・空気・ボイス・酸素・林・炭など</p> <p><b>⑤抽象的概念（感情的・知的性精神的）：43 例 14%</b>          時間 (20)・情報 (2)・魅力 (2)・自信 (2)・色気・嫌味・皮肉・ユーモアなど</p>
--

表 2 と表 3 から両語のカテゴリーの違いが確認できる。両語の対象は、ともに飲食物（今井のカテゴリーでは「自然物」あるいは「人工物」に分類されると思われる）が圧倒的に多い（「どっさり」46%、「たっぷり」51%）が、その内訳は「どっさり」においては、前節で見たように、個体（の集合（「固いもの」あるいは「個別性のあるもの」）であった。

一方、「たっぷり」においては「牛乳・汁・エキス」など液体が多いが、それらは容器なしに個別には取り出すことのできない、「形のないもの」あるいは「個別性のないもの」である。また、「栄養・うまみ・脂肪・カルシウム・ビタミン・食物繊維」なども「形のないもの」あるいは「個別性のないもの」であり、普通、それらが属する領域から個別に取り出すことのできない構成要素である。つまり、典型的に「たっぷり」の対象は連続体（「形のないもの」「個別性のないもの」）であり、それが属する領域と一体となった密接な関係にあると言える。

これらの領域と構成要素は、容器のイメージスキーマを介して理解されることができると考えることができる。第 3 章で見たように、容器のイメージスキーマは、抽象概念の理解に役立つ。たとえば、「胸の内」、「新学期に入る」、「ダイエット中」、「身内」のように、知的精神活動、時間、状況、人間関係も容器のイメージスキーマを介して理解される。つまり、私たちは直接把握しにくい抽象的な存在を、容器を基盤として理解している。

有菌 (2009 : 187) は、「頭がいっぱいになる」は、「知的精神活動の容器としての〈頭〉

の容量が満たされることを表す形式で、「ある考えに支配されて他のことが考えられなくなる」という慣用的意味を表している」そして、この例には「〈頭〉を知的精神活動の容器として捉える、《身体（部位）を、知的精神活動の容器として捉える》という概念メタファーが関与している」と述べている<sup>55</sup>。

「たっぷり」の対象である「魅力・自信・色気・ユーモア」なども、それらが属する領域（人間など）から別個に切り離すことができないものである。知的精神活動は中身であり、それが存在する領域は容器と捉えることができる。「魅力/自信/色気/ユーモアにあふれる」という表現からも確認できるように、私たちは、捉えにくいこれらの知的精神活動の量を「容器」にあふれる水と同様、容器の中身として具体的に理解する。さらに、表3の抽象的概念において「たっぷり」が「時間」と共起する例が、圧倒的に多く観察できる。時間の量の捉え方として、「容器」が関わる場合があることは、先行研究に記述されている。

たとえば、確井（2009：42）は「時間というものは、私達がそれをどのように認識し、言語化するかでその様を変容させている。時にそれは線的なものとして認識され、また環的なものとしてとらえられることもある。また時に継続性を持つものとなり、量を持つものとなることもある」と述べた上で、「時間が三次元的にとらえられたとき、空間に似たイメージが想起される。その時、私たちは時間を量的なものとしてとらえており、時間を容器に入れて量っているかのような表現が多く生まれる。CONTAINER METAPHOR（容器のメタファー）がそこには大きくかかわっているようである」と記述している。つまり、容器のイメージスキーマが基盤となり、空間における容器が、時間においても維持されていることが分かる。

また、瀬戸（2005：211-212）は時間の捉え方に、時間を「運動」と捉える見方（例「時間が過ぎる」）と時間を「貴重品ないしお金」と捉える見方（例「時間は大切だ」）という2つの大きな系統があることを述べた上で、「すでにどれほどの時間が過ぎ去っているかに諸君は注意しない。充ち溢れる湯水でも使うように諸君は時間を浪費している」というセネカの言葉を引用している。「充ち溢れる湯水」は、まさに「たっぷり」が表す意味・音象徴（「(液体のように何か)溢れ出るというイメージ」(11)参照)と重なる。このように、「たっぷり」という表現は容器のスキーマが基盤となっていることが確認できる。

さらに、以下の例では「たっぷり」が数詞「1」に前接している。

(48) 必ずコップにたっぷり一杯以上の水で飲みましょう。

(NLT)

<sup>55</sup> 有菌（2009：184）は、「身体が容器として見立てられるとき、そこに関わるのは、喜怒哀楽のような物事に対して起こる感情だけでなく、物事の理解といった知的側面や、欲求などの意志も関わる」従って、「身体を、感情だけでなく、知情意という全ての精神活動に関わる容器として捉える」と述べ、THE BODY IS A CONTAINER FOR THE EMOTION〈体は感情を入れる容器である〉より、さらに包括的な《身体（部位）を、精神活動の容器として捉える》という概念メタファーを提示している。また、有菌（2009：302）は、「容器として捉えられる身体を表す形式で、その内容物である心的要素の意味を表すのは、容器と内容物の隣接関係に基づくメトニミーによるものである。従って（略）慣用的連結句を構成する身体部位詞の意味は、《身体（部位）を、精神活動の容器として捉える》という概念メタファーを前提として、容器と内容物の隣接関係に基づくメトニミーによって生じている」と述べている。

(49) しかし「あの事件」に関してここで詳しく言及するのはよそう。それだけでたっぷり  
り1本レポートが書いてしまうほどだからここではとりあげない。(NLT)

(48) の「たっぷり」は、「水」の量を表すが、「コップ」という基準において期待・予想を上回る量である。つまり話し手が注目するのは「一杯」の中身の量である。同様に、(49) の「たっぷり」は「レポート」の数ではなく「内容」に注目する。「内容」とは「一定の形式をとって形をなすものの中を満たして、そのものを成り立たせている事柄。物事の実質や価値」(『大辞林』(第三版))と記述される。レポートの内容という知的抽象物についても、「たっぷり」はその量が「レポート(「1本」)」を成り立たせるのに期待・予想される量を上回る量であると捉えることができる。「一杯」「1本」は数えることができる最小の数である。このことから、「たっぷり」が容器のスキーマを基盤とし、容器の中身に注目する表現であることが支持される。

以上、「たっぷり」が表す対象は、典型的には個別性が際立たず、容器の中身として捉えられるものであることを述べた。このことは、代表的な個物である「人間」の数を「たっぷり」は表しにくいこととも矛盾しない<sup>56</sup>。一方、「どっさり」の対象は一かたまりとして捉えることができ、個別性のあるものであって、容器を介する動機付けが低い。

この違いは、両語のオノマトペとしての本来の意味に動機付けられていると考えることができる。すなわち、冒頭で見たように、「たっぷり」の対象は、容器に「満ち溢れてタッピング」<sup>57</sup>という液体であるのに対して、「どっさり」の対象は、一かたまりの重い物体であるという、両語の存在論的カテゴリーの違いが、拡張された意味にも(制約となつて)受け継がれていると思われる<sup>57</sup>。

#### 8.2.4.2.2 評価性と基準の違い

それでは、「どっさり」と「たっぷり」が同じく対象となるものの数量大を表す場合、両語の違いは何であろうか。

第一に、基準の違いがあげられる。先述のように、「たっぷり」は、ものの量が単に大であるだけではなく、期待・予想を上回ると捉えている。つまり「たっぷり」は、あらかじめ

<sup>56</sup> 仁田(2002:185)は「信じているやつがタクサンいる」のように、主体が人である場合「たくさん」のような量の副詞は共起するが「物の量を表す『タッピング、ドッサリ』などは共起しない」と述べている。この指摘のとおり、冒頭で見た(1)「\*田中先生は学生をたっぷり呼び出した」、(2)「\*田中先生はたっぷりの学生を呼び出した」、(3)「\*田中先生は学生たっぷりを呼び出した」と言えないのは「たっぷり」が、人を表すことが難しいからと考えられる。しかし、「どっさり」は8.2.3.2で見たように人間の数を表す例が観察できる。ただし、「敵」のように話し手に重荷を支えるのと同様の体感を与える対象であると捉えることができる。

<sup>57</sup> 今井(1997:24)は、椅子やコップのような「物体」と、水や砂のような「物質」について以下のように述べている。

物質は物体のように個体としてはっきり境界を持つ堅固な存在ではないため、時間的に持続するそれ自身の形を持たない。また、一部をつかんで動かしても残りが同時に動くということもない。物体同士は接触によって混ざり合うことはないが、2種類の物質(たとえば水と塩)は混ざり合ったり、科学的に反応したりする。つまり、物体と個別化されない物質は互いに相容れない属性のセットを持ち、その意味で物体と物質は異なる存在論的カテゴリーに属すると考えてよいだろう。

め期待・予想となる量が想定され、それが基準となると考えられる。次の例を見てみよう。

- (50) 外は三〇度を超す炎天下。でも家の中には雪がどっさり (\*たっぶり)。新潟県小千谷市の会社員、伊佐満守さん (54) の自宅で涼を届けてくれるのは、冬の間降り続けた雪だ。毎年二メートル以上が庭先に積もり、これまで解けるのを春までじっと待つしかない厄介者。山積みの雪が今年から一転、猛暑をしのぐ自然のクーラーになった。  
(日経 2006/08/08)

(50)の「どっさり」は、「たっぶり」と置き換えることができない。これは、「たっぶり」に置き換えると、話し手の期待・予想が想定されてしまうことから文脈に合わないためである。つまり、「たっぶり」に置き換えると「家の中」にあるべき雪(の量)が、前提とされていると捉えられるため不自然に感じられる。第二に、評価性の違いがある。『現代擬音語擬態語用法辞典』では、両語はともに「ややプラス(より)」と記述されていた(4.2.4)。

- (51) 北海道の食材には力がある。うまみが濃い。肥よくて広々とした大地が育てた味。  
どっさり (たっぶり) 積もる冬の雪が、農地に休息を与え、同時に農作物を生産する力を強化しているのだ。  
(日経 2008/07/03)

- (52) 日銀は二〇〇〇年夏のゼロ金利解除でしくじった。今回も出口を出た途端、日本経済全体が、どっさり (たっぶり) 積もった雪の下敷きにされてはたまらない。  
(日経 2006/02/19)

- (53) もちろん、暑い地域でも漬物はできます。しかし、腐らせずに発酵させるためには、殺菌効果のある塩分が寒い地域に比べて余分に必要になります。ならば塩をどっさり (\*たっぶり) …となると、仕上がった漬物はやたら塩辛いだけで美味しくも何ともないものになってしまいます。気候が温暖な地域に漬物文化が育ちにくかったのには、こんな理由もあるのです。  
(= (8))

- (54) 不器用なので、殻の内側の薄皮を剥くのも一苦勞。やっとの事で剥き、塩をたっぶり (\*どっさり) 付けて頂く。中は、濃い黄色が残る、限り無く固茹でに近い半熟加減。  
(NLB)

(51) (52) の「どっさり」は、ともに「雪」の量の著しさを表すが、評価性が異なる。すなわち、(51) は後続する「農地に休息を与え、同時に農作物を生産する力を強化している」という表現からプラスの評価性を表すと捉えることができる。一方、(52) は「下敷きにされてはたまらない」という表現から、話し手は「雪」の「重さ」に注目していることが分かる。そして「雪(の重さ)」が比喩的に日本経済の障害になると解釈できる。したがって、マイナスの評価を表すと解釈できる。同様に、(53) の「どっさり」は「塩」の量のを表すと捉えることができるが、後続する「やたら塩辛いだけで美味しくも何ともないものになってしまいます」という表現からマイナス評価である。

このように、「どっさり」は量を表す意味においても、程度の差はあるが、オノマトペの意味の持つ「重さ」が二次的に活性化される。その際、「お金、プレゼント」のように好ましいものの量であればプラス評価となり、「重荷」と捉えられればマイナス評価となる。つまり、「どっさり」はプラスの文脈においてもマイナスの文脈においても違和感なく用いられ、その量を際立たせることができることから評価性に関して中立的な語である。

一方、「たっぷり」は、8.2.3.1 で述べたように、プラスの評価性を持つ表現である。このことはプラス評価の(51)においてはほぼ同じ意味で「どっさり」を「たっぷり」と置き換えることができるのにもかかわらず(52)においては違和感が感じられ、「皮肉」と解釈できることから確認できる。

また、(54)の「たっぷり」は塩の量を表すがこの「たっぷり」を「どっさり」に置き換えることはできない。この理由は、ゆで卵をおいしく「頂く」ために期待・予想される量、すなわちプラスの評価の量は「たっぷり」であって、重さが際立つ「どっさり」ではないからである。逆に、物の重さが数量と結びつき、重いこと、すなわち数量が大であることがプラスと捉えられる場合は、以下のように、両語はほぼ同じ意味で置き換え可能である。

(55) 南部もぐりの天然ほや5キロセット(新鮮な天然殻付きほやがたっぷり5キロ入った、お得なセットです!) ((=46))

(56) ぐるなび食市場店の送料無料!どっさり1.5kg! 干物の詰め込みセットの商品ページです。 ((=47))

(55)(56)のように、「たっぷり」と「どっさり」はともに飲食物を代表とする広告表現で頻繁に用いられる。その理由は、両語は話し手(売り手)が商品(売りたいもの)の量の甚だしさを際立たせ、読み手(買い手)に相互作用的な共通感覚を与えることができる表現であるからと考えられる。ただし、読み手にもたらされる身体的感覚の領域が異なる。先述のように、「たっぷり」は容器のイメージスキーマを基盤とする満ちたりた感覚であるのに対し、「どっさり」は重い物を支える、あるいは動かす際の体感である。

#### 8.2.4.2.3 語彙化の程度の違い

形式に注目すると、先述のように、「どっさり」は「の」を介しての連体修飾形「どっさりの」という形式をとりにくい。BCCWJの検索では「どっさり」は147例あるが、「どっさりの」という形式は4例のみである<sup>58</sup>。一方、「たっぷり」の例は3455例あるが「たっぷりの野菜が入っている」のように「たっぷりの」という形式は636例と18%を占める。また、冒頭の例(2)における「どっさりの学生」も「どっさり」は人の数を表すことができるに

<sup>58</sup> 「どっさりの」は日経の検索では一例も観察できない。BCCWJの検索では以下の4例のみであった。「トンコツスープ、紅ショウガどっさりのラーメンを食って外に出ると」「どっさりの塩で四、五日漬け、ザルにあけて水を捨ててから、またどっさりの塩で重しをして漬けます」「具どっさりの豪華オムレツは香ばしさに惚れ惚れ」

もかかわらず不自然な表現になる。このことから「どっさり」は「たっぷり」より（「の」を介しての）連体修飾形をとりにくいと言える。

また、「たっぷり」は連用修飾形「栄養たっぷりに」「栄養たっぷりで」のように「に」「で」をとるのに対し、「どっさり」は「\*どっさに」の形式はとれず、「どっさり」も NLT の検索では「なぜなら野菜どっさりで、不規則&偏りがちな食生活を送る私にはぴったりのメニュー」のような例が観察できるが、BCCWJ と日経の検索では一例も見当たらなかった。また「(野菜)がどっさりだ。」のような形も NLT の検索では観察できるが（「ご覧のように雪がどっさりです」）、BCCWJ と日経の検索では一例も見当たらなかった。

奥田（2009：96）は、文末で用いられるオノマトペについて、「統語論的には、①特定の動詞が包含されていて、(単独で、あるいは「～と」を伴って) 副詞として働く場合（副詞としての用法と呼ぶことにする）と、②「～する」「～だ・な/の・に」を伴って派生動詞・派生形容詞として働く場合（動詞・形容動詞としての用法と呼ぶことにする）の二つに分けられる」と述べている。この分類に即して考えると、「たっぷり」は、副詞、動詞、形容動詞としての用法を持つものに対して、「どっさり」は、もっぱら、「(が) どっさり。」の形式で単独で副詞として用いられる傾向があると言える。

筧（2001：30）は、オノマトペにおける語彙化の程度の判定基準として次の二つがあるとしている。

- ① カナ書きとか「引用形」として括弧に入れられるかどうか。
- ② 「語形変化」をするかどうか。

筧（2001：30-31）によれば、たとえば、「わんわん」についてはカタカナで書いたり「わんわん」と括弧にいれて引用形にしたりすることができる。さらに、「わんわんしている」とか「わんわんした」といった語形変化をしない。一方、「がたがた」は用例によってカタカナで書いたり引用形にしたりする場合としない場合がある。また、「がたがたする・した・だ・になる・になった」など語形変化をするため「わんわん」より「がたがた」のほうが語彙化が進んでいると判定することができるという。

上の基準に照らしてみると、「たっぷり」と「どっさり」は普通「\*りんごがタップリ・ドッサリある」のようにカナ書きしないし、「\*りんごを『どっさり』・『たっぷり』買った」のように括弧に入れることができないことから、ともに語彙化していると言える。しかし、語彙化の程度が異なる。すなわち、「たっぷり」は「な・した・だ・になる」などが付いて「語形変化」をし、動詞または形容動詞としての用法を持つが、「どっさり」は動詞または形容動詞としての用法が認められない（\*どっさりな、\*どっさりした、\*どっさりになる）ため「たっぷり」より語彙化が進んでいないと言える。語彙化が進んでいないということはそれだけオノマトペとして実際の音や様子を表すという本来の意味の活性化が強いと考えられる。このことは、浜野（2014：102）の指摘（「どっさり」は、物が落ちたり倒

れたりした時のインパクトのイメージが残るため、モノ的なイメージが強い(11))とも矛盾しない。

つまり、〈動きの量〉や〈空間の程度〉までも表すことができる「たっぷり」とは異なり、「どっさり」が〈ものの数量〉を表す意味にとどまっているのも、「の」を介しての連体修飾形として用いられにくいのも、(音と様子を具体的に表す)オノマトペとしての本来の意味が二次的に活性化される度合いが強いためと考えられる。

### 8.2.5 まとめ

以上、「たっぷり」と「どっさり」の個別の意味と両語の類似点・相違点について考察した。語源的に「どっさり」と「たっぷり」はオノマトペから派生した語であるとされ、音韻的にも意味的にも類似している。両語は単に量を表すだけでなく、ともに異なる経験の領域において、私たち自身の内部にもたらされる感覚を表す表現であることも共通している。さらに、行為を行なうものなら誰でも同じ体感あるいは実感を経験できると捉えられ、読み手に当事者感を与える表現である点も共通している。また、両語は「数量大」を表す用法のみならず、後接する数量詞に対して「当該の数量が大である」という前提的な認識を表す用法を持つ。すなわち、量を表す実質的な意味が希薄化し話し手の心的態度を表し数量を取り立てる副助詞的な用法を持つ点も共通している。

相違点として、第一に、両語の対象の捉え方が異なる。「どっさり」は、一かたまりと捉えられるものを表すのであって連続体を表しにくい。さらに、動きの量を表すことができない。一方「たっぷり」は、容器のイメージスキーマを直接的な基盤とする表現であり、連続体を典型とする、容器における中身と捉えられるものを表す。このため個体の代表である人間は表しにくい。また、動きの量を表す場合でも回数など、一つ一つの個別の動きに注目できない。これは両語のオノマトペとしての本来の意味、すなわち音象徴による制約であると考えられる。

第二に、基準と評価性が異なる。「たっぷり」は、話し手の期待・予想が想定されその基準を上回ることを表すことから、基本的にプラスの評価性を持つ。このことは、マイナス評価の文脈において用いられると、違和感が生じたり、批判や皮肉と捉えることができることから確認できる。

一方、「どっさり」は、「動かす、支える」といった行為や活動における「重さ」が活性化される。その際、重さと数量が結びつき、重ければ、すなわち、数量が多ければ良いもの場合はプラス評価、逆に、多くて(重くて)負担や困難を与えると捉えられる場合はマイナス評価と、プラス評価の文脈においてもマイナス評価の文脈においても違和感なく用いられ、評価性としてはほぼ中立と考えられる。

第三に、二次的活性化の度合いの違いがある。「どっさり」は連体修飾形をとりやすく、単独で、あるいは「と」を伴っての連用修飾用法で用いられる。また、「たっぷり」のように動きや程度を表す意味をもたず、もっぱらものの数量を表す意味にとどまっている。こ



のため「どっさり」が本来持つ、音と様子を具体的に表すオノマトペとしての意味（音象徴）が二次的に活性化される度合いが強いと考えられる。これは語彙化の程度が「たっぷり」より進んでいないためであると考えられることを述べた。

### 8.3 「いっぱい」と「たっぷり」の意味分析

#### 8.3.1 本節の目的

「いっぱい」と「たっぷり」は、先述のように、「典型的な量の副詞」（仁田 2002 : 191）とされ、以下の (57) (58) のようにほぼ同じ意味で置き換えることができることから類義関係にあると考えられる。しかし、(59) (60) のように、両語を置き換えることのできない例があるがその理由は何であろうか。

- (57) コップに水を {いっぱい/たっぷり} 入れた。
- (58) {野菜/愛情} {いっぱいの/たっぷりの} おかず。
- (59) {テーブルの上/お腹/頭} が {いっぱい/\*たっぷり}。
- (60) {弁当箱/テーブル} {いっぱいの/\*たっぷりの} おかず。

本節では、多義語である「いっぱい」の個別の意味を分析し、前節で分析した「たっぷり」との相互の意味の類似点・相違点を明らかにすることを目指す。

本節では、両語の多義構造は容器のイメージスキーマを基盤とし、メタファー、メトニミーなどによって動機付けられていると考え、分析にあたりこれらの概念を援用する。第3章で見たように、靱山 (2010 : 77-78) は「イメージスキーマとは、人間が、身体を通して世界と相互作用する中で、一般化、抽象化した形で抽出することができる（認知）図式のことである」、「イメージスキーマが概念に基盤を与え、その概念の一部が言語表現の意味に反映していると考えられる」と述べている。Lakoff (1987 : 272) は、容器のイメージスキーマの構造的要素として「内部」「境界」「外部」の3点をあげているが、(59) (60) のような振舞いの違いも、焦点化される構造的要素の違いによるものであり、容器のイメージスキーマに動機付けられていると考えられる。

伊藤 (2008) は、構文の意味を動機付けるものとしてのイメージスキーマの重要性について池上 (1995) の議論を引用し説明している。池上 (1995) は、語と語の連辞関係にもイメージスキーマが関わっていることを指摘しているが、(59) (60) における振舞いの違いは、この指摘を支持するものと考えられる (8.3.4.4 で詳しく述べる)。

「いっぱい」は本来名詞であるが副詞として用いられる (加藤 2006b : 131) と指摘されるように、「いっぱい」と「たっぷり」は副詞的成分としても (例(57))、「の」を介しての連体修飾形でも (例(58)) 用いられる<sup>59</sup>。本研究では、主に両語が置き換え可能なこれらの形

<sup>59</sup> 「たっぷり」は形容動詞の連体形「たっぷりな」の形も取るが、BCCWJの検索では「たっぷりな」54例に対し、「たっぷりの」は636例あり、圧倒的に後者の形式が多く用いられている。

式での比較を行う。本節では以下のような手順で分析を行う。まず、8.3.2では先行研究の記述を概観する。続いて、8.3.3では「いっぱい」の多義構造を分析する。次に、8.3.4では両語の違いが問題となる用法に注目し、類義語分析を行う。

### 8.3.2 先行研究とその検討

本節ではまず、辞典類で「たっぷり」と「いっぱい」の意味がどのように記述されているか確認した上で問題点を明らかにする（「たっぷり」の意味記述は再掲。辞典類の記述における下線は引用者による）。

#### 『大辞林』（第三版）

「たっぷり」（副）スル：満ちあふれるほど十分なさま。たくさん。「鍋にー（と）水を注ぐ」「ー（と）食べる」「時間はーある」

「いっぱい」（副）：

- ①入れ物・場所などに物が満ちているさま。「水がーたまる」「会場は人でーだ」
- ②非常にたくさんであるさま。「元気ー働く」「客がーきた」
- ③限度であるさま。ありったけ。「制限時間がーになる」「これで精ーだ」

#### 『日本語語感の辞典』

「たっぷり」：たくさん、「十分に」の意で使われる、やや会話的な和語。＜自信ー＞＜残りーある＞＜予算はーある＞＜ー汗をかく＞＜ー水を吸う＞＜時間をーかける＞\*数的より量的に多く満ち溢れている感じが強い。そのため、「鉛筆がーある」といった例より「砂糖をー入れる」といった例のほうがぴったりする。絶対的な分量よりも、通常よりはるかに多いという程度に重点がある。

「いっぱい」【一杯】：きわめて沢山の意で、主に会話に使われる漢語。＜会場は観客でーだ＞＜仕事はー残っている＞＜このリュックは物がー入る＞＜元気ー＞＜腹ー食べる＞\*この語には、容量ぎりぎりまで満ちていてこれ以上になると溢れ出しそうな感じがあるため、「友達がーいる」は自然だが、「きょうだいがーいる」という言い方は、多くてもせいぜい十人程度なので少し抵抗がある。

#### 『講談社 類語辞典』（「多い」のカテゴリー）

「たっぷり」：満ちあふれるほど十分な様子。「召し上がるものはーと用意してございます」  
「夏にはー2週間の休暇をとる」

「いっぱい」：非常にたくさんである様子。「お客がー買いにきた」「ー食べてね」

『大辞林』（第三版）の記述を見ると、「たっぷり」は「満ちあふれるほど十分なさま。

たくさん。「鍋に一（と）水を注ぐ」「一（と）食べる」「時間は一ある」とあり、「いっぱい」の意味①の記述と「満ちる」が用いられている点で類似しており、置き換えることが可能である（「鍋にいっぱい水を注ぐ」「いっぱい食べる」「時間はいっぱいある」）。他方、「いっぱい」の意味①の例文において「水がたっぷりたまる」は言えるが、「会場は人でたっぷりだ」は難しい。このことから、両語は対象の違いがあると考えられる。さらに、「いっぱい」の意味②は「非常にたくさん」と記述されていることから、「たくさん」と記述されている「たっぷり」より量程度が大であることを表すと思われるが、「元気たっぷり働く」「客がたっぷりきた」とは言いにくい。このことから、量程度以外の相違点があると考えられる。

『日本語語感の辞典』も「たっぷり」は「たくさん」、「いっぱい」は「きわめて沢山」と記述していることから量程度の違いを指摘していると思われるが、「砂糖をいっぱい/たっぷり入れる」において「いっぱい」のほうが量の大であるとする根拠は示されていない。また、「いっぱい」の例として「会場は観客で一だ」とあるが「会場は観客できわめて沢山だ」とは言えない。

『講談社 類語辞典』は、「多い」のカテゴリーにおいて「たっぷり：満ちあふれるほど十分な様子」「いっぱい：非常にたくさんである様子」としている。この記述から、両語は同じカテゴリーに含まれながら基準が異なることが分かる。つまり、「たっぷり」は「容器」を前提としているが、「いっぱい」は「たくさん」と同様の一般的な基準であると考えられる。

以上の先行研究を踏まえ、次節では「いっぱい」の多義構造を記述した上で、前節で考察した「たっぷり」との意味の類似点・相違点を考察する。

### 8.3.3 「いっぱい」の意味分析<sup>60</sup>

#### 8.3.3.1 別義①：

<容器として捉えられる空間において><中身の量が><許容範囲の限界まで達するさま>

(61) ある学会で懸賞問題を出して答案を募ったが、その問題は「コップに水を一杯入れておいて更に徐々に砂糖を入れても水が溢れないのは何故か」というのであった。

(寺田寅彦『颱風雑俎』青空)

(62) 卓也はもう感激で胸がいっぱいだ。(BCCWJ)

(63) 任期いっぱい4年間務めてほしい気持ちは変わっていない。(日経 2010/06/01)

別義①の「いっぱい」は、容器に対する中身の量を表すことから容器が基準となり、容

<sup>60</sup> 「いっぱい」の意味記述は金（2010）をもとにしている。本節は「たっぷり」との類義語分析を目的とするため、「一杯だけ飲んだ」のような助数詞的な用法は考察外とする。

器と中身の両方が明示される<sup>61</sup>。(61)は容器(「コップ」)、中身(「水」)とも具体物であり、「水」の量が「コップ」の許容範囲の限界まで達するさまを表す。(62)の容器「胸」は、具体的な身体部位ではあるが、中身が「感激」という精神活動(8.2.4.2参照)であることから、精神活動に関わる抽象的な空間である。(63)は接尾語的に「N(名詞)+いっぱい」の形式で用いられ、容器が「任期」、中身は「務める期間」と捉えられる。そして「任期(容器)」全体(4年のあいだずっとの意)を表し、容器、中身ともに時間に拡張している。このように別義①は、容器と中身ともに、物理的空間に存在する具体物から、時間や精神活動に関わる抽象物に拡張している。これは、先述のように、イメージスキーマが「比喩的に具象レベルから抽象レベルに変容」(山梨 2009: 95-96)しているもので、イメージスキーマを基盤とした意味拡張と考えられる。

#### 別義①-1:

<容器として捉えられる空間が><(中身で)許容範囲の限界まで達するさま>

(64) 小銭からお札までいろいろな種類のお金をたくさん用意しておけばちょうど払えるが、あまりたくさんお金があるのも財布がいっぱいになって困る。

(日経 1994/10/05)

別義①-1の「いっぱい」は容器の状態を表す。(64)は容器が「財布」で中身は「お金」であるが、「いっぱいになって困る」という表現から、中身(お金)の量ではなく「財布」という容器の状態が焦点化されていることが分かる。認知主体が「いっぱい」と判断する基準は容器(の許容量)である。別義①は、容器と中身の全体に注目したが、別義①-1は容器がより際立つ。

#### 8.3.3.2 別義②: <容器として捉えられる空間の><限界点を表すさま>

(65) 外角いっぱい 150 キロの速球。 (日経 2010/09/12)

(66) 任期が今月いっぱいで切れる。 (日経 2010/04/28)

別義②は「容器(として捉えられる空間)+いっぱい」の形式で用いられ、限界点(容器と中身の境界)が焦点化される。(65)の限界点はストライクゾーン(外角)の内部と外部との境界、(66)の限界点は「今月末」という境界(時点)である。別義①では容器全体が際立つが別義②では限界点が焦点化される。森田(1989: 143)も「N+いっぱい」という形式に「初めから限度までのあいだ全部」(「いっぱい」の別義①)と「限界点」の2つの意味を認め別個に記述しているが、この2つの意味の違いはイメージスキーマの異なる部分を焦点化することによるものであり、イメージスキーマが基盤となっていると考えられる。

<sup>61</sup>『現代副詞用法辞典』は、この用法を「対象がそれを収める容器(場所)などにあふれそうに満ちているというニュアンスで用いられ、ふつう対象と容器(場所)の双方を明示する」と説明している(p. 66)。

どちらの意味においても、容器が中身の量の最大限を規定する (Lakoff 1987 : 434) 有界的な空間として捉えられていることが分かる。中身という概念は容器のスキーマから独立して意味をなすわけではないように、「容器」「中身」「境界」という3要素は独立して存在するものではなくゲシュタルト構造をなし (Lakoff 1987 : 284)、この3つの要素のうち焦点化されない部分は、完全に背景化されているというよりも焦点化された部分より相対的に際立ちが低いことが分かる。

### 8.3.3.3 別義③<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

(67) 私は日本で雪のいっぱい降る寒いところに住んでいるんだよ。 (BCCWJ)

(68) おまえらの若さならまだまだ時間がいっぱいあるじゃないか。 (BCCWJ)

別義③は、ものの数量を表す。別義③は、別義①、②とは異なり、中身 (の数量) に注目し、容器の際立ちが低い。(67) の「いっぱい」は「寒いところ」における「雪」の量が大きいことを表すことから、しいて言えば容器が「寒いところ」と捉えられるが、容器としての際立ちは低い。(68) の「いっぱい」は「時間」の量が大きいことを表し、容器は明示化されていない。先に見た、別義①、①-1、②では「いっぱい」は容器 (の容量) に対する中身 (の量) を表すため、基準としての容器が明示されるが、別義③では、中身の量に焦点があり、認知主体が自分の基準<sup>62</sup>で量を大きいと捉えるため容器は明示する必要がない。

### 8.3.3.4 別義④ : <ある動きの量が><大であると捉えるさま>

(69) そうぐをつけて歩くれんしゅうをしたのは、二回しかない。今はそうぐなしでも、いっぱい歩けるようになった。 (BCCWJ)

別義④は、動きの量を表す。(69) の「いっぱい」は「歩く」という動きの量を大きいと捉えている。容器の際立ちは感じられない。別義④はイメージスキーマの「実在性それ自体が背景化」(山梨 2009 : 96) し、中身 (の量) のみが際立つ。容器は、別義①、別義③、別義④へと段階的に背景化が進んでいるが、明確に区分されるわけではなく、背景化の過程はグレイディエンスを成していると考えられる (山梨 1995 : 103)。

### 8.3.3.5 別義間の関連性

意味の関連性について検討する。「いっぱい」の意味は、容器のイメージスキーマを基盤としているが焦点化される部分 (構造的要素) が異なることを見てきた。これらは同一のスキーマの焦点化する部分を変えると認知的プロセスであることからメトニミー (隣接

<sup>62</sup> この基準は、先述の「体験的に獲得され典型値や、状況から判断してこれくらいであろうという期待値」(高水 2001:91) であると考えられる。

関係に基づくプロファイルシフト)による意味拡張と考えられる(実線の矢印 →)。まず「いっぱい」の別義①においては容器全体が際立つが、①-1では中身(の量)が背景化し、容器(の状態)が焦点化される。別義①から別義②へは限界(境界)が焦点化される。別義①から別義③へは、容器が背景化し中身のみ焦点化される。さらに別義③から別義④へは対象がものから動きへとメタファーにより拡張している(点線の矢印 ⋯→)。以上をまとめると図2のように表すことができる。容器の背景化に伴い、「いっぱい」の基準が「容器(の容量)」という客観的な基準から話し手によるより主観的な基準へと移行している。

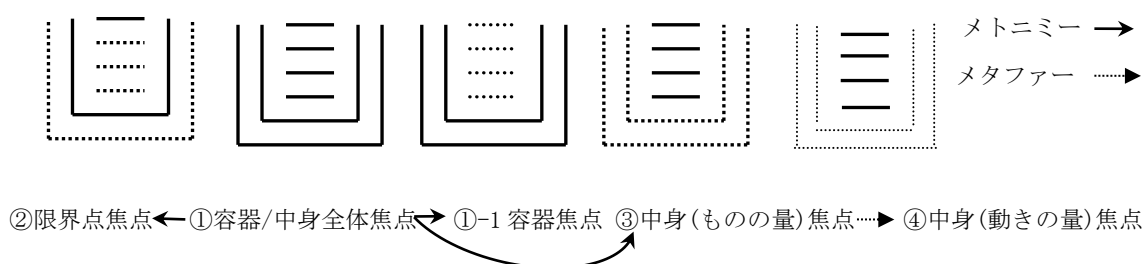


図2 「いっぱい」の多義構造

#### 8.3.4 「いっぱい」と「たっぶり」の類似点と相違点

本節では「いっぱい」と「たっぶり」の類義語分析をおこなう。まず「たっぶり」と「いっぱい」の別義を再掲する。

「いっぱい」:

別義①<容器として捉えられる空間において><中身の量が許容範囲の限界まで達するさま>

別義①-1<容器として捉えられる空間が><(中身で)許容範囲の限界まで達するさま>

別義②<容器として捉えられる空間の><限界点を表すさま>

別義③<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

別義④<ある動きの量が><大であると捉えるさま>

「たっぶり」:

別義①<(容器として捉えられる空間において)ものの量が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義②<一連の動きの量が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義③<話し手の経験した空間の許容範囲の程度が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義④(数量詞と共起して)<期待・予想を上回り大であると捉え強調するさま>

以上、意味分析の結果から、「たっぷり」は中身（の量）に注目し、「いっぱい」のように容器や限界点を表さないため、注目する要素が異なる場合には両語は置き換えできないことが分かる。「いっぱい」がものの量と動きの量を表す用法（「いっぱい」の別義③④）と「たっぷり」がものの量と動きの量を表す用法（「たっぷり」の別義①②）にはほぼ同じ別義で置き換え可能な例があり、その場合類義関係にあると考えられる。しかし、同じくものや動きの量を表す場合でも置き換えると容認度が下がったり、意味の違いが感じられる例が観察できる。以下、ものや動きの量が大であることを表す場合について両語の相違点について考察する。

#### 8.3.4.1 基準と評価性の違い

前節で分析したように、「いっぱい」の別義③と④は量そのものに注目する。一方、「たっぷり」の別義①と②は、期待・予想される量という基準が想定され、その基準を上回っていることを表す。この違いが、両語を置き換えた場合、容認度の違いやニュアンスの違いをもたらすと考えられる。

- (70) 神奈川・小田原市一金次郎像がいっぱい（\*たっぷり）。 (BCCWJ)
- (71) ママの体の血行がよくなるということは、赤ちゃんに新鮮な酸素や栄養がたっぷり  
いっぱい 行きわたるとのこと。 (= (13))
- (72) 箱根唯一の全天候型公式温水プール。突然の雨でも、たっぷり（??いっぱい）お楽しみいただけます。直径100cm以内の浮き輪もご使用いただけるので、お子様もたっぷり遊べます! ([http://www.yunessun.com/case/family\\_yunessun.html](http://www.yunessun.com/case/family_yunessun.html))

(70) において「たっぷり」が不自然なのは、文の状況は「金次郎像」の数量そのものに注目するのに、「たっぷり」に置き換えると「金次郎像」が話し手にとって期待、予想されていたことが前提となる。すなわち、「たっぷり」によって話し手の期待、予想を上回る量が想定され、その量を満たすことから満足感のようなプラスの心的態度が付与されるがそれが文脈に合わないからである。「いっぱい」は話し手が量そのものに注目しているのであり、前節で見たように「いっぱい」の基準は「体験的に獲得され典型値や、状況から判断してこれくらいであろうという期待値」であって、プラス・マイナスの評価性は中立であると思われる。逆に、(71) は「新鮮な酸素や栄養」の量が単に大であるだけでなく「行きわたる」ための期待・予想された量を超えることを表す。これを「いっぱい」に置き換えることはできるが、置き換えると話し手の心的態度は際立たず、中立的に量に注目するのであって、ニュアンスが異なると感じられる。同様に、(72) の「たっぷり」は認知主体の期待・予想を上回り、満足感をもたらす好ましい量であると捉えられる。これを「いっぱい」に置き換えると、単なる量が際立つ。これが文脈に合わないため置き換えが難しいと考えられる。このように「たっぷり」は、認知主体の期待・予想を上回るという意味が、

行為を行なうものなら誰でも同じ体感（満足感）がもたらされると捉えられ、読み手に当事者感を与える表現であることから、読み手にとっての満足感をアピールする必要がある広告に「たっぷり」が頻繁に用いられ（「たっぷりをご紹介します」などの）決まり文句的な表現が定着したものと思われる。

#### 8.3.4.2 連体修飾用法における違い

本章冒頭で見たように、以下の文においては、「いっぱい」の」と「たっぷりの」ともに不適格である

(73) 田中先生はたくさんの（\*たっぷりの/ \*どっさりの/ \*いっぱいの）学生を呼び出した。 (= (2))

「名詞+いっぱい」の」という複合形式ではなく、単独で用いられる「いっぱい」は<容器が限界まで達した>状態を表す表現であると考えられる。したがって、(73)「いっぱい」は<容器>が示されておらず不適格になると考えられる<sup>63</sup>。また、(73)の「たっぷり」は、「たっぷり」が人間の数を表しにくいため不適格になる。人間以外の場合でも「たっぷりの」が自然な表現になるのは「たっぷりの熱湯」のように、「ゆでる」という目的を達成するための中身（熱湯）の量が自然に想定できる場合であると考えられる。一方、「いっぱい」が用いられる例は、日経テレコン 2010 年に 105 例あるが、そのうち 94 例 (90%) は「名詞+いっぱい」のように接尾語的に用いられ、「いっぱい」が単独で用いられる例は 11 例 (10%) のみであった<sup>64</sup>。また、「たっぷりの」の例は 79 例あり、そのうち単独で用いられているのは 29 例 (36%) であった<sup>65</sup>。このように両語は、「の」を介しての連体修飾形において、単独で用いられる場合より「A いっぱいの/ たっぷりの B」の複合形式でより生産的に用いられる。同じ形式が「いっぱい」と「たっぷり」でどのような違いがあるか見てみよう。

#### 8.3.4.3 「A いっぱい」の B」の 3 つの意味と「A たっぷりの B」

##### \* 「A いっぱい」の B」

##### ①<A が容器、B が中身>（「いっぱい」の別義①）

(74) 空いっぱいの（\*たっぷりの）バルーンがきれいだった。 (日経 2010/11/04)

<sup>63</sup> 「ジョンは\*いっぱいのリンゴを食べた」（岸本 2005）のように、「いっぱい」の」という形式は普通、容器が示されないと不自然な表現になる。(73) も「頭がいっぱいの学生」あるいは「課題がいっぱいの学生」のように容器と捉えられる語が示されると容認度が上がる。

<sup>64</sup> 「10 人も入ればいっぱいの店」「空想や妄想でいっぱいの主人公」「腹がいっぱいの外国人」「皿がいっぱいの食べ物で満たされたさま」などであり、「いっぱい」はいずれも「容器が限界に達した（容器が満ちた）状態」を表す意味である。

<sup>65</sup> 以下のような例が観察できる。

「たっぷりの湯で、固めにゆでる」「たっぷりのカツオ節と昆布からとっただし」「たっぷりのキャラノーラ油にこのネギを」「ひじきはたっぷりの水につけてもどし」「そばとたっぷりの野菜サラダ」



(75) 両手いっぱいの(\*たっぷりの)荷物を持ち、背中にも荷物を背負って、夜逃げ同然の姿だった。(BCCWJ)

②<Aが限界点> (「いっぱい」の別義②)

(76) 先物相場は急進し、制限一杯の(\*たっぷりの)ストップ高で引けた。(日経 2010/08/06)

(77) アロマーの左翼線いっぱいの(\*たっぷりの)ライナーは、二塁打となりました。(BCCWJ)

③<Aが中身、Bが容器> (「いっぱい」の別義③)

(78) 花いっぱいの(\*たっぷりの)会場で結婚式をあげる。(日経 2010/10/26)

(79) 甘味と香りいっぱいの(たっぷりの)「牧丘の巨峰」(日経 2010/10/15)

\* 「A たっぷりの B」

<Aが中身、Bが容器> (「たっぷり」の別義①)

(80) 「華やか」に見せるのに、もうひとつ大切なのはボリュームです。花たっぷりの(いっぱい) あしらいは、それだけで華やか。(BCCWJ)

(81) 自然の魅力たっぷりの(いっぱいの) みどころが点在する。(BCCWJ)

上のように、「A ippai no」の形式には A に大きく 3 つの意味が観察できる。すなわち、A が①容器、②限界点、③中身を表すと捉えることができる。この場合、①は「いっぱい」の別義①に、②は別義②に、③は別義③にそれぞれ対応する。一方、「A たっぷりの」の形式では、A は「中身」とのみ捉えることができる。この中で両語が置き換えられるのは、A がともに中身の場合のみである。しかし、置き換えた場合、前節で述べた同じ理由で意味が異なることが分かる。すなわち、「たっぷり」は期待・予想される量が想定されその基準を満たすことを表すが、「いっぱい」は量の甚だしきそのものに注目する。たとえば、(79) の「いっぱい」は中身(甘味と香り)の量の著しさを表す。「甘味と香り」は「巨峰」の特徴付けに必要な必須の要素であり、これを「たっぷり」に置き換えた場合でもその量が期待・予想されると自然に想定できる。このような場合、両語は置き換えることができるが、「量の著しき」に注目するか、「期待・予想される量」が想定されるかという異なる捉え方を反映している。

一方、(78) の「花いっぱいの会場」は、容器(会場)における中身(花)の量そのものに注目している。これを「たっぷりの」に置き換えると、まるで「花」が「会場」に必要な何らかの期待・予想を満たすもののように感じられてしまう。この期待・予想が想定しにくいいため容認度が下がると考えられる。逆に、(80) 「花たっぷりの」が自然な表現であるのは、文脈から「花」の量が「華やかさ」「ボリューム」を出すという「あしらい」の目的のために必要であると自然に想定できるからである。同様に(81)においても、「自然の魅力」は「みどころ」に期待・予想される要素であると想定できる。

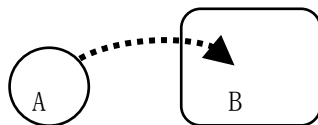
#### 8.3.4.4 構文<sup>66</sup>の意味を動機付けるイメージスキーマ

ところで、なぜ、「いっぱいのは」は<容器>、<中身>、<限界点>と連辞関係を結べるのに「たっぷり」は<容器>と連辞関係が結ぶことが難しいのであろうか。由本（2009）は「日本語の複合形容（動）詞形成で生産性があるのは、（中略）たとえば「奥深い＝奥が深い」のように、パラフレーズすると名詞が「が」で現われる、いわば主語に相当する名詞との結合」（p. 210）であるが、形容動詞であれば「日本に固有の→日本固有の」「女性に独特な→女性独特な」のように補部との複合が許される場合があると述べている（p. 225）。このことから、「たっぷり」も「コップにたっぷりの水→\*コップたっぷりの水」のような表現が可能であるはずであるが実際には認められない。

伊藤（2008：114-117）は、池上（1995）を引用しながら構文の意味を動機付けるものとしてのイメージスキーマの重要性を述べている。たとえば、下のような例では「□ ニカカル」の □ に相当する部分に入る、「鉄橋」「山」などの語から共通の意味特徴を見出すことでは説明できない。

- (82) a. 列車が鉄橋にかかる。  
b. 月が山にかかる。  
c. 水が服にかかる。  
d. 父が病気にかかる。  
e. 太郎が医者にかかる。  
f. 私が（あなたの）お目にかかる。 (池上 1995 (伊藤 2008：115 より))

しかし、伊藤は、(82a-f) のような、「[A が B に ‘かかる’] という形式は、<A というものが B という領域に入っていく>というイメージ・スキーマを共有していると考えられる」とし、「イメージ・スキーマはこのような特定の動詞など個々の語彙に 1 対 1 で対応しているわけではなく、意味の拡張において重要な役割を果すものである」（p. 117）と述べ、以下のように図式化している。



図式1 <A というものが B という領域に入っていく>というイメージ・スキーマ  
(伊藤 2008：117)

上の説明に照らしてみると、「A いっぱいのは／たっぷりの」という複合形式においても、イ

<sup>66</sup> 野田（2011：2）は、構文を「意味と形式の結び付きが慣習化したゲシュタルト的な複合体」と定義し、「あらゆるレベルの複合表現（複合語、句、節、文など）に適用できる概念であると位置付ける」と述べている。この定義によれば「名詞+いっぱいのは／たっぷりの」も構文と位置付けることができる。

イメージスキーマが A と「いっぱい」、「たっぷりの」それぞれの連辞関係を動機付けしていると考えられる。つまり、「A ippai no」という形式は A に〈容器〉、〈中身〉、〈限界点〉が、「A たっぷりの」には〈中身〉が連辞関係を結ぶことができるのは、両語の個別の意味分析において見たように、両語の焦点化されるイメージスキーマの構成要素が異なることが反映されているのであり、「たっぷり」において容器は中身より際立ちが低いことが制約となり、「容器+たっぷりの」の形式を取ることができないと考えられる。すなわち、イメージスキーマがこの形式を動機付けていると考えられる。

### 8.3.5 まとめ

以上、「いっぱい」の多義構造を体系的に記述し、「いっぱい」と「たっぷり」の類義語分析を行った。両語はともに容器のイメージスキーマを基盤としているが、イメージスキーマを構成する異なる要素を焦点化していることが分かった。別義①において「いっぱい」は、中身（の量）と容器（の状態）の両方に注目できるのに対して、「たっぷり」は中身の量に注目する。したがって、容器に注目する場合は「たっぷり」は不適格となる（例(59)）。

また、接尾語的な用法において、「いっぱい」は「中身+いっぱいの」（例(58)）、「容器+いっぱいの」（例(60)）両方の形式を取ることができる。一方、「たっぷり」は「容器+たっぷりの」形式は取れない（例(60)）。この違いも焦点化されるイメージスキーマの要素の異なりを反映しており、イメージスキーマがこの形式（構文）の意味を動機付けていると考えられる。

すなわち、「いっぱい」は容器に対して認知主体が、容器、中身、限界点のどこに焦点を当てるかという焦点化の選択において主観的意味を表すと言える。一方、「たっぷり」は中身のみが焦点化されるため、焦点化には大きく関わらないが、認知主体が事態をプラス・マイナスの価値付与をしながら捉えるという主観的意味と結びつきやすい。両語は、数量大を表すという同じ事態の特性を異なる主観的意味<sup>67</sup>で捉えることが明らかになった。

## 8.4 第8章のまとめ

本章では、「どっさり、たっぷり、いっぱい」を取り上げ、3語の個別の意味と「どっさり、たっぷり」と「たっぷり、いっぱい」の相互の意味の類似点・相違点について考察し

<sup>67</sup> 大谷（2009）は、言語の主観的意味を二つの側面において区別して以下のようにまとめている。この分類によると、「いっぱい」と「たっぷり」の客観的意味（事態の特性）は共に「数量が大であると捉えるさま」であるが、「いっぱい」は主観的意味1（焦点化）に大きく関わり、「たっぷり」は主観的意味2（心的態度）に大きく関わると考えられる。

表2 言語の意味とその分類（大谷2009：195 表番号は原文のまま）

	意味のタイプ	例
(a)	主観的意味1：事態解釈	視点、粒度、焦点化、など
(b)	主観的意味2：心的態度	スタンス、価値付与、感情、など
(c)	客観的意味：事態の特性	参与者、移動、状態変化、など

た。以下、分析結果を簡単にまとめる。

まず、「どっさり」と「たっぷり」は、ともにオノマトペから派生し、異なる経験の領域において、私たち自身の内部にもたらされる感覚を表す表現であることが共通している。さらに、行為を行なうものなら誰でも同じ体感や感覚を経験できると捉えられ、読み手に当事者感を与える表現である点も共通している。

相違点として、「たっぷり」は、容器のイメージスキーマを直接の基盤とする表現であり、連続体を典型とした、容器における中身と捉えられるものを対象とする。さらに、「たっぷり」は、話し手の期待・予想が想定されこの基準を上回ることを表すことから、基本的にプラスの評価性を持つ。一方、「どっさり」の対象は、典型的に個体（の集合）であり、「動かす、支える」といった行為や活動における重さやそれに伴う負担感が活性化される。その際、プラス評価・マイナス評価のどちらとも違和感なく結び付き、評価性としてはほぼ中立と考えられる。両語は、プラス・マイナスのいずれに用いられても、読み手にもたらされる体感の領域が異なる。「たっぷり」は飲食物を摂取したあとの満腹感や期待・予想を上回る量を経験した際の満足感のような身体が満ち足りた体感であり、「どっさり」は重い物を支える、あるいは動かす際の体感である。さらに、両語の意味拡張には文法化のプロセスが認められ、「量」を表す意味が希薄化し、話し手の評価、心的態度を表す機能的な用法が認められる。その場合にも、両語の表す体感は維持される。この体感の違いは、両語のオノマトペとしての本来の意味、すなわち音象徴に基づくと考えられることを述べた。

続いて、「いっぱい」と「たっぷり」はともに容器のイメージスキーマを基盤としているが、イメージスキーマを構成する異なる要素を焦点化する。すなわち、「いっぱい」は「容器」「中身」「限界点」を焦点化できるが、「たっぷり」は「中身」のみに注目する。この焦点化の違いが、複合形式（「A いっぱいの／たっぷりのB」）における両語の意味の違いをもたらしている。つまり、イメージスキーマがこの形式（構文）の意味を動機付けていると考えられることを述べた。

「たっぷり」と「どっさり」は「体感に関わる経験」に大きくかわり、「たっぷり」と「いっぱい」は「空間認知に関わる経験」に大きく関わる表現であることから、身体的な経験がこれら3語の意味の基盤になっていることを記述した。

## 第9章 「多く」と「たくさん」の意味分析

### 9.1 はじめに

本章では、「多く」と「たくさん」について、相互の意味の類似点と相違点を考察することを目的とする。

「多く」と「たくさん」が類義関係にあることは、以下の例(1)(2)において、文全体の意味を大きく変えることなく「多く」を「たくさん」に置き換えることができることから分かる。

- (1) 多くの(たくさんの)参加者が集まった。 (新屋・姫野・守屋 1999)  
(2) 大豆は植物繊維を多く(たくさん)含んでいる。 (久島 2010)

これら二語は、基礎語でありながら意味的な類似性ゆえに、日本語学習者にとって、その使い分けが問題となる語である。先行研究においては、連体修飾用法における「多い」と「多くの」の使い分けについてはしばしば指摘されているが、「多く」と「たくさん」の違いについての研究は限られている。たとえば、新屋・姫野・守屋(1999)では、「多い」には連体修飾用法がなく「\*多い参加者が集まった」のような言い方は不適格となると指摘した上で、「『多い』に代わって名詞を修飾するのが『多くの』です(もちろん『たくさんの』でもOKです)」(p.150 下線は引用者)として(1)をあげている。たしかに(1)においては「多くの」を「たくさんの」に置き換えることができるが、以下のような例では置き換えは難しい。

- (3) 多くの(\*たくさんの)学生は、いつの時代でも花形産業に就職したがるものだ。 (日経 1983/06/14)

このように、「多く」を「たくさん」に置き換えられない(あるいは、置き換えにくい)例が観察できるが、これらと置き換えられる例はどのように異なるのであろうか。

さて、「多く」と「たくさん」は、以下に示すように、統語環境によって四つの用法を認めることができる。

- (a) 叙述(述定)用法  
(4) ご馳走が\*多く/たくさんだ。  
(5) 原発はもう\*多い/たくさんだ。  
(b) 連用修飾用法  
(6) 京都には有名な学者が多く/たくさん訪れた。

(c) 連体修飾用法

(7) 多く／たくさんのファンが駆けつけた。

(d) 名詞的用法

(8) ファンの多く／\*たくさんは女性だ。

本章では、以上の四つの用法のうち、連用修飾用法と「の」を介しての連体修飾用法を中心に分析する。その理由は、二語が類義関係になるのは、基本的に連用修飾用法と連体修飾用法の場合であるからである<sup>68</sup>。なお、(a)の叙述用法については、本研究では「多く」を独立した語と認め、形容詞「多い」とは区別する立場をとるため、考察対象外とする<sup>69</sup>。また、(d)の名詞的用法については互いに置き換えられる場合がほとんどないと考えられるため、考察対象外とする。

本章の構成について述べる。

9.2では、「多く」と「たくさん」の意味に言及した先行研究の記述について検討する。9.3では、第6章で分析した「多く」と、第5章で分析した「たくさん」の個別の意味を再掲する。9.4では、「多く」と「たくさん」の類義語分析を行う。9.5はまとめである。

## 9.2 先行研究とその検討

「多く」と「たくさん」の意味に言及した先行研究としては、市川(2010)、加賀(1997)、久島(2010)等がある。それぞれの記述には参考にすべき点も多いが、いずれも二語の個別の意味とその類似点・相違点の記述が十分とは言えない。以下、詳しく検討する。

### 9.2.1 市川(2010)

市川(2010)は以下の例において、(9)のように「たくさんの」を誤用であるとし、「多くの」に訂正した上で、例(10)と(11)をあげて「多く」と「たくさんの」の違いについて以下のように説明している。

(9) **誤** この本は子供のための本です。けれども、たくさんの大人も好きです。

<中国>

**正** この本は子供のための本です。けれども、多くの大人も好きです。

<sup>68</sup> 数量詞の連用修飾用法(例「学生が三人反対した」)と連体修飾用法(例「三人の学生が反対した」)の数量表現の使い分け(数量詞の位置と意味との関係)については、岩田(2013)に詳しい記述がある。岩田は尾谷(2002)、加藤(2003)、本多(2005)などの議論を踏まえ、「文レベルで数量詞Qが焦点化されるのがNCQ型であり、これが数量表現の基本形である」(p.216)とし、以下のように説明している。

NCQ型、QのNC型の違いを見れば、Qを焦点化するか背景化するかの違いということになる。また、両者の違いを数量認知という観点で見れば、(中略)NCQ型は数える行為と関わり、事物を動的に捉えているものであったが、QのNC型は名詞に連なる形で事物を静的に捉えている。NCQ型の時間軸を取り去ることで、QのNC型に集合物認知が出てくるのである。(岩田2013:39)

<sup>69</sup> 「多い」に対する「多く」、「良い」に対する「よく」、「すごい」に対する「すごく」のような語を「形容詞の連用形」と見るのか「副詞」と見るのかについては、研究者の間でも未だに議論の一致を見ておらず、さらに検討が必要であると考えられる。「多い」と「多く」の関連性についての検討は今後の課題としたい。

「たくさん」は具体的な形で数量が多いことを示す副詞である。したがって、名詞を修飾する「たくさんの」も具体的に目に見えるような形で数量が多いことを示す場合が多い。

- (10) たくさんの友達が空港に見送りに来た。  
 (11) 彼の家にはたくさんの骨董品がある。

(9) で学習者は「たくさんの大人も（子供の本が好きだ）」と言っているが、「大人」という語がやや抽象的な語であること、また、数量が多いことを具体的に目に見えるような形で述べている状況ではないので、より抽象的な表現の「多くの」を用いたほうがよいと思われる。(pp. 318-320 下線は引用者)

ところが、以下の例 (12) では「やや抽象的な語」とされている「大人」が用いられている。

- (12) プレイセンターは、子どもにとってはたくさんの大人や友達に囲まれた安心できる遊び場であり、また親にとっては（略）子育ての自信を育てていく場となっている。(BCCWJ)

「たくさんの」と共起する名詞について、第5章の表2で見たように、「人」が圧倒的に多いが、「情報、思い出」といった抽象物、さらに、「経験」のような出来事を表す名詞も上位に挙がっている<sup>70</sup>。そして、第5章において「たくさん」は特定の形状や特徴を指定せずものの量を不特定に表す無標の表現であることを確認した。したがって、「たくさん」が「数量が多いことを具体的に目に見えるような形で述べる」とは限らない。(12)においても「たくさんの」が「大人」と共起している。つまり、(9)において「たくさん

<sup>70</sup> NLTを利用して検索すると、「多く+の+名詞」の形式は出現頻度が65857である。「多くの」と「たくさんの」と共起する上位13語を以下の表①に示す（「たくさんの」と共起する名詞は第5章の表2の再掲である）。両語と高頻度で共起する名詞の1位はともに「人」であり、圧倒的に「人」の例が多い。さらに「人々、方々、お客様、子供」などヒト名詞が上位にあることも共通している。

表① 「多く」、「たくさん」と共起する上位頻度の名詞13語（併記の数字は出現頻度）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
多く	人 9219	場合 3806	人々 2550	方々 1555	企業 1189	国 1100	患者 615	女性 580	研究 561	お客様 478	子供 452	皆様 418	情報 561
たくさん	人 3883	種類 731	方々 679	情報 452	お客様 442	子供 372	人々 365	花 238	本 229	お客 184	思い出 183	お金 164	経験 156

さらに、市川（2010）は「数量が多いことを具体的に目に見えるような形で述べている状況ではないので、より抽象的な表現の『多くの』を用いたほうがよいと思われる」と説明している。たしかに、本研究も(9)「多くの大人」は、「数量が多いことを具体的に目に見えるような形で述べている状況ではない」と考える。ただし、上で述べたように、(9)において「たくさん大人」を用いることができない理由は、共起する名詞の抽象度とは別にあると考える。結論を先取りして言うと、(9)の「多くの大人」は、大人の数量を表すというよりむしろ、類を表すのに対して「たくさん大人」は（数量を表すのであって）類を表すことができないからと考える。この点については9.4.2.3で詳しく検討する。

### 9.2.2 加賀（1997）

加賀（1997）は、数量詞と部分否定解釈の相関について考察した研究であり、「多く」の意味分析が目的ではないが、4.2.1で一部分引用したように、「多く」と「たくさん」について以下のような記述がある。

「多くの学生／学生の多く」のような表現における名詞化された「多く」について考えると（略）単に物の数や量の豊富さを表すというよりは、ある一定の分量の中で占める割合が太であるという意味合いが強くなる（ただし、必ずしも過半数以上とは限らないことに注意）。(11)のような文で、「多く」は、背後にある一定の集合、すなわち、「レポートを提出すべき学生」「世界の国々」「なされた批判」の集まりをいわば母集合として、その数量的解釈が行われる。

- (11) a. 多くの学生はレポートを出した。  
b. (世界の) 多くの国が核実験に反対している。  
c. 批判の多くは的外れだ。

一方、そのような母集合を仮定することが自然でないコンテキストでは、名詞的な「多く」は容認性が落ちることになる。「たくさん」の例と比較されたい。

- (12) a. ?スーパーで野菜を多く買った。  
b. スーパーで野菜をたくさん買った。  
(13) a. ?きのう、多くの専門書を買った。  
b. きんのう、たくさんの専門書を買った。  
(14) a. ?太郎は毎日ビールを多く飲む。  
b. 太郎は毎日ビールをたくさん飲む。

(ただし、たとえば、スーパーでいろいろな食品を買った中で野菜が多めであった、というような状況を想定した場合には、(12 a)は容認できる文になる。この場合、スーパーで買った食品の総体が母集合の役割を果たすことになる。)

(一部再掲 加賀 1997:103-104 下線は引用者)



その上で、加賀は、常に母集合を前提とし、その値との比率を問題にする数量詞を「比率的数量詞」(proportional quantifier)と呼び、母集合を前提としない数量詞を「基数的数量詞」(cardinal quantifier)と呼ぶとし(p. 127)、前者は母集合との間で相対的評価を受けるのに対し、後者が母集合からは独立に絶対的評価を受ける点で、その性格が大きく異なっていると記述している(p. 127)。そして、「多く」はある一定の分量の中で占める割合が大であるという意味、すなわち、比率的数量詞の意味を持つとし、一方、「たくさん」は基数的数量詞として分類している。

たしかに、加賀の指摘どおり、(11)の「多く」は母集合が仮定でき、その中の「レポートを出した学生」「反対している国」「的外れの批判」の「割合が大」であることを表すと解釈できる。ところが、以下の例(15)においては「母集合を仮定することが自然でないコンテキスト」であると思われるが容認性は落ちない。

- (15) 群馬県南部は近畿地方と東北地方を結ぶ交通の要所だった。加えて利根川などが流れていることから、水が豊富で、周辺地域は肥沃な土壌に恵まれた。農作物が豊富にとれ、有力な豪族が多く出現したといわれる。(2012/09/05 日経)

(15)の「多く」は、何らかの母集合における「有力な豪族」の割合を述べているとは解釈できない。このように、「多く」が「母集合を仮定することが自然でないコンテキスト」でも容認性が落ちない場合があると考えられる。またこの場合、ほぼ同じ意味で「たくさん」と置き換えることが可能であるが、このような例については述べられていない(詳しくは9.4.1参照)。

### 9.2.3 久島 (2010)

久島(2010)は、形容詞の意味について考察した研究である。久島(2010)も、(形容詞「多い」の)「連用修飾用法の『多く』には割合という意味がある」(p. 185)として、「たくさん」との違いを以下のように記述している。

- (16) 「多い」の《存在》という意味は形容詞としては特異なものであるが、「たくさんある(いる)」の《存在》と比較すると、後者が、場所と物の関係が臨時的でそれぞれが独立している《外在的な存在》であるのに対して、前者は、「多く含まれる(含む)」という文脈で使われやすいように、場所(個体(領域))と物(構成要素)との関係の密接さや、他の構成要素との占有率を問題とする、独立性のない《関係的な存在》であると考えられる。(久島 2010:188 下線は引用者)

(16)において①「他の構成要素との占有率を問題とする」という部分は加賀(1997)の記述と重なると思われるが、②「場所(個体(領域))と物(構成要素)との関係の密接

さ（を問題とする）」という指摘は、加賀よりも一歩踏み込んだ記述になっており、本研究においても、基本的に同じ立場に立って考察していく。ただし（連用修飾用法）「多く」の意味について①②の記述にとどまり、次の（17）のような頻度を表す意味や（15）のような「割合」を表すとは捉えられない例についての記述はなされていない。また、連体修飾用法「多くの」と「たくさんの」における違いについても述べられていない。

（17）過失の有無を判断する日本医師会の賠償責任の審査には時間がかかりすぎるという声を聞くことが多くある。 (BCCWJ)

以上を踏まえ、本研究では、「多く」と「たくさん」について「連用修飾用法」と「連体修飾用法」を中心に相互の意味の類似点と相違点を明らかにする。

考察に入る前に、第6章で分析した「多く」と第5章で分析した「たくさん」の意味を確認した上で、二語の類似点と相違点について考察する。

### 9.3 「多く」と「たくさん」

#### 9.3.1 「多く」の意味

別義①<あるものや動きの数量が><ある基準を><上回ると捉えるさま>

（18）先日テレビで外国人のほうがカルシウムを多く摂取しているのに日本人の方が骨密度が高いと言っていました。 (BCCWJ)

（19）運動 今よりも1000歩多く歩きましょう！ (BCCWJ)

別義②<全体における><ある構成要素の割合が><高いと捉えるさま>

（20）このあとも桜前線は早いペースで北上し、北海道地方の多くの所で、ゴールデンウィーク中に開花や満開となるでしょう。 (朝日 2015/04/24)

（21）此の地方の人の性格は多く誠実で、何だか大きな山のような感じがします。  
(高村光太郎『啄木と賢治』青空)

別義③<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

（22）群馬県南部は近畿地方と東北地方を結ぶ交通の要所だった。（略）農作物が豊富にとれ、有力な豪族が多く出現したといわれる。 (BCCWJ)

（23）このカリリヌムには、天文学者ケプラーから哲学者デカルトに至るまで、有名な学者が多く訪れた。 (BCCWJ)

別義④<ある出来事の生起する回数・頻度が><大であると捉えるさま>

（24）過失の有無を判断する日本医師会の賠償責任の審査には時間がかかりすぎるという声を聞くことが多くある。 (BCCWJ)

- (25) 抗がん剤は、細胞へのダメージの与え方によって数類にわけられ、治療の際には、2種類以上の抗がん剤を組み合わせることも多くおこなわれている。

(BCCWJ)

### 9.3.2 「たくさん」の意味

本節では、「多く」との類義語分析を行う前に、第5章で記述した「たくさん」の意味を再掲し、「多く」と置き換えが可能であるかを確認する。

#### 別義①<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

- (26) 入院時はきっと暇な時間がたくさん (多く) あると思うのですが。 (BCCWJ)

- (27) 「彼女を車に乗せ、ロスアンジェルズに連れていくんだ。彼女の財布にはお金がたくさん (\*多く) ある。」 (BCCWJ)

#### 別義②<ある動きの量が><大であると捉えるさま>

- (28) 今日は皆でたくさん (\*多く) 遊びました。 (BCCWJ)

- (29) いつもよりたくさん (多く) 勉強したご褒美に、好きなだけ食べていいよと言われても、そんなわけにはいかない。 (BCCWJ)

#### 別義③<話し手が体験したある量が><それだけで十分であると捉えるさま>

- (30) 一つの題目に関して一つの引照で十分であると思う。例えば神のことについては、ローマ書一章 18~20 節でたくさんである。 (NLT)

#### 別義④<ある事柄に対して><それ以上受け入れられない状態にあると捉えるさま>

- (31) 貧困、そして混乱！ぼくは苦しさのあまり涙を流しながら、つぶやいていた。「もうたくさんだ！これ以上は我慢できない！」と。 (BCCWJ)

上の例から分かるように、「たくさん」がものの数量を表す意味①と動きの量を表す意味②において、「多く」と置き換え可能な例が観察できる。したがって、次節では、この2つの意味における、両語の意味の類似点・相違点を考察する。

### 9.4 「多く」と「たくさん」の類似点と相違点

前節の分析の結果から、「たくさん」が「多く」と類義関係にあるのは、ものの数量、あるいは出来事や動きの量を表す場合であることが分かる。また、冒頭でも示したように、二語が類義関係になるのは「連用修飾用法」と「連体修飾用法」の場合であるということから、以下では、この2つの用法において、両語がものの数量、あるいは動きの量を表す場合の類似点と相違点について考察する。

#### 9.4.1 連用修飾用法における類似点と相違点

本節では、連用修飾用法における「多く」と「たくさん」を比較し、相互の意味の類似点と相違点を記述する。まず、「多く」の別義①の例を見てみよう。

- (32) 先日テレビで外国人のほうがカルシウムを多く (たくさん) 摂取しているのに日本人の方が骨密度が高いと言っていました。 (= (18))
- (33) 運動 今よりも 1000 歩多く (\*たくさん) 歩きましょう! (= (19))

(32) の「多く」は「カルシウム」の量を、(33) は動きの量を表す。(32) は、「たくさん」と置き換え可能であるが、「1000 歩」という程度差を表す数量詞と共起する (33) においては置き換えが難しい。また、(33) も「?カルシウムを 100 グラムたくさん摂取している」のように「100 グラム」が付加されると容認度が下がることから、「たくさん」は、程度差を表す数量詞との共起が難しいと言える。このように、「多く」と「たくさん」はともに比較の文脈で用いることができるが、捉え方が異なる。「多く」は、程度差を表す数量詞と共起でき基準との程度の差に注目する。また、6.2.3 で述べたように、基準を上回っていれば、絶対量にかかわらず用いられる。一方、「たくさん」は程度差には注目せず、あくまでも問題となる量そのものに注目する表現であると言える。また、「いつもよりは多く飲んだが、ほとんど飲まなかった」は自然な文であるが「?いつもよりはたくさん飲んだが、ほとんど飲まなかった」とは言いにくい。したがって、比較の文脈で用いられる場合、「たくさん」は、「多く」とは異なり、絶対量が少ない場合には用いられにくいと考えられる。

次に、以下のように「多く」が割合の意味(別義②)で用いられる場合、「たくさん」とは基本的に置き換えが難しいことから「たくさん」は、割合の意味では用いられにくいと言える。

- (34) 此の地方の人の性格は多く (\*たくさん) 誠実で、何だか大きな山のような感じがします。 ((=21))

続いて、数量が大であることを表す「多く」の別義③の例を見てみよう。

- (35) 群馬県南部は近畿地方と東北地方を結ぶ交通の要所だった。(略) 農作物が豊富にとれ、有力な豪族が多く (たくさん) 出現したといわれる。 ((=22))
- (36) このカロリヌムには、天文学者ケプラーから哲学者デカルトに至るまで、有名な学者が多く (たくさん) 訪れた。 ((=23))

(35) (36) の「多く」は、それぞれ「有力な豪族」「有名な学者」の数量が大であることを表す。この「多く」は、ほぼ同じ意味で「たくさん」と置き換えることができること

から、両語は<あるものの数量が><大であると捉える>という類似点を持っていると言える。

ところが以下のような場合は、「たくさん」を「多く」と置き換えることができない。

(37) 彼女の財布にはお金がたくさん(\*多く) がある。 (= (27))

(38) 今日は皆でたくさん(\*多く) 遊びました。 (= (28))

(37) の「たくさん」は「彼女の財布」という物理的空間における「お金」の量を表す。これを「多く」に置き換えると、母集合や基準が想定され、それと比較しつつお金の数量を述べるという読みになり、不自然な文となる。「多く」に置き換えるには、たとえば「いつもより」など、比較の基準になる語を付加したり、「お金」を「小銭」にして、「彼女の財布には小銭が多くある」のように、比べる基準（たとえば、紙幣と比べて）が想定できなければならないことから、先述のように、「多く」を用いるには「個別の基準が明示されるか想定できなければならない」という制約があることが確認できる。同様に、(38) の「たくさん」は「遊ぶ」という動きの量を表すが、この「たくさん」を「多く」に置き換えると非文となる。自然な文となるには、やはり、「いつもより」など、比較の基準が示される必要がある。一方、「たくさん」の基準は前節で見たように一般的な基準であり、基準が明示、想定される必要がない。

ところが、(35) (36) のように、「多く」と「たくさん」が自然に置き換えられ、「多く」が制約なしに用いられる例もある。これら基準の明示化という制約が有効な文と無効な文の違いは何なのであろう。次の例を見てみよう。

(39) a. 待合室に日本人の重役が1人いる。

b. 我社には日本人の重役が1人いる。 (池上・河上他 (訳) 1993:689)<sup>71</sup>

(39a) においては、「1人」を「多く」に置き換えると容認度が下がる。容認度を上げるには、たとえば、「アメリカ人の重役より (多くいる)」のように基準が明示されるかあるいは想定できなければならない。一方、(39b) の「1人」を「多く」に置き換えても容認度は落ちない（その場合、「多く」は別義②の「割合」の意味、あるいは別義③の「数量大」を表す意味であると解釈できる）。中右 (1998) は、(39a) について、「日本人重役と待合室との間」には「どのような内在的関係もない。あるのはただ、偶然的な空間関係だけである。日本人重役がたまたま待合室という物理的空間に位置しているにすぎない」

(p. 73) と述べている。これに対して、(39b) については、「会社と重役には空間的關係以上に、内在的関係がある。特別の事情がないかぎり、重役は会社という組織の構成員とし

<sup>71</sup> この例文は英語原文からの翻訳であるが、本研究の論点には影響しないと考えられるためそのまま引用する。

て理解されるからである」(p. 73)と述べ、「我社」と「日本人の重役」が全体と部分の内在的な関係にあるとしている。このことから、連用修飾用法の「多く」は、偶然的な空間関係にある量を表す場合は制約が有効であるが、全体と部分のような内在的な関係にある場合は、制約が無効であると考えられる。

ところで、(39a)と(39b)は、文の叙述の仕方が異なると考えることもできる。益岡(2004:4)は、文の叙述の仕方には、大きく2つの類型があるとし、一つは「属性叙述」であり、もう一つは「事象叙述」である、と記述した上で以下のように説明している。

- (40) 属性叙述とは、ある対象Xがある属性Yを有することを述べるものである。言い換えれば、対象Xに属性Yを付与するものである。(中略)これに対して、事象叙述とは、ある時空間に実現する(出現する・存在する)ある事象(広義のevent)を叙述するものである。(益岡2004:4)

つまり、叙述の類型という観点から見ると、(39b)は対象が所有する性質を表す属性叙述であり、(39a)はある時空間に存在する事象を表す事象叙述であると捉え直すことができる。

ここでもう一度(35)を見ると、「群馬県南部」は「有力な豪族が多く出現した」という属性を有する対象と捉えることができる。同様に、(36)は「このカロリヌム」の属性を表す文であると捉えられる。というのは、「有名な学者が多く訪れる」は、単なる出来事の叙述ではなく、「このカロリヌム」を特徴付ける叙述であると捉えることができるからである。つまり、「このカロリヌム」は有名な学者が多く訪れたいくなるようなプラスの属性を有すると捉えることができる。(35)(36)においては、「多く」は比較の基準を想定することは難しい。

以上の考察から、連用修飾用法の「多く」の制約について以下のように記述できる。

- (41) 「多く」を用いるには、比較の基準が明示されるかあるいは想定できなくてはならない。ただし、属性叙述においてはそのような制約が無効である。

一方「たくさん」は、数量詞「1人」同様、上の(39a、b)どちらにも生起することができる。「日本人の重役」の数を表すことができる。

それでは、なぜ事象叙述においては制約が有効であり、属性叙述においては制約が無効なのであろうか。影山(2012:11)は「通常の事象叙述文で観察される統語的制約は属性叙述文には当てはまらないということである。このことから、事象叙述文と属性叙述文は、意味的な特徴だけでなく統語的性質においても、それぞれ異なる世界を形成していると推測できる」と述べている。「多く」も、属性か事象かという叙述の意味的性質の違いが統語的振舞いに反映されていると考えられる。

最後に、以下のように「多く」が頻度を表す別義④で用いられる場合、「たくさん」とは基本的に置き換えが難しい。このことから「たくさん」は、頻度を表す意味では用いられにくいと言える。

- (42) 抗がん剤は、細胞へのダメージの与え方によって数類にわけられ、治療の際には、2種類以上の抗がん剤を組み合わせることも**多く** (**\*たくさん**) おこなわれている。 ((=25))

#### 9.4.2 連体修飾用法における類似点と相違点

本節では、連体修飾用法における「多くの」と「たくさんの」を比較し、前節で記述した意味が連体修飾用法にも当てはまるかどうかを確認し、相互の意味の類似点・相違点を明らかにする。

##### 9.4.2.1 「多くの」の3つの意味と「たくさんの」について

まず、「多くの」が別義①で使われる例を見てみよう。

- (43) これによると、所得額で約 450 万円の方が税率 20%となる。基礎控除等の各種控除後の所得額が約 450 万円以上の方は、20%以上の税率が適用されるので、より多くの(たくさんの)税金を支払っているといえる。 (BCCWJ)

(43) の「多くの」は、「所得額で約 450 万円の方の税金 (の金額)」が基準となり、その基準を上回る税金と解釈できる。(43) から「より」を取り除くと、基準があいまいになり容認度が落ちる。このことから、連用修飾用法と同様に、連体修飾用法「多くの」にも基準の明示が必要であり、(基準の明示なしに) 単独で「ある基準を上回る」という意味を表すことは難しいと考える。なお、(43) のように、比較の基準が示されている場合「たくさんの」との置き換えは可能であるが、「たくさん」はあくまでも、数量そのものに注目する。

次に、別義②の割合を表す例を見てみよう。

- (44) 多くの (?たくさんの) 経済指標が元気がうなだれているときに、高齢化率だけは今もなお元気一杯の右肩上がり。 (BCCWJ)

(44) の「多く」は、「経済指標」全体が想定でき、「多く」はその全体の中の部分である「元気がうなだれている」指標の割合を表す。同時に、対比される要素である「元気一杯の右肩上がり」の指標（「高齢化率」）が際立っている。このように割合の意味が際立つ場合、連用修飾用法と同様に、「たくさん」とは同じ意味で置き換えが難しい。置き換え

た場合でも、「たくさん」は割合の意味ではなく、あくまでも母集合からは独立した数を表す。

続いて、以下の例は、数量大を表す別義③の例である。

(45) 「動乱の十年」については多くの (たくさんの) 本があるが、事態の原因についてこれほど本質的に言いあらわしたことを私は読みも聞きもしていない。

(BCCWJ)

(46) 町営小山スキー場でもスキー教室が開催されました。1月20日は、教室最終日ということもあり、多くの (たくさんの) 参加者が集まりました。(BCCWJ)

(45) (46) の「多く」は、それぞれ「(『動乱の十年』について書かれた) 本」「参加者」というものの数量が大であることを表すが、偶然的な空間関係にある量を表す表現ではない。(45) は、物理的空間を示す表現がないことから分かるように、ある空間に位置する「本」の量ではなく、「本」という上位カテゴリーに対して「『動乱の十年』について書かれた本」という下位カテゴリーに属する本の量を表す。つまり、対象「動乱の十年」に「多くの本が書かれた、つまり、多くの人が興味を持つ出来事である」といった属性を付与する属性叙述である。さらに、(46) の「多くの参加者が集まりました」は出来事を表すが、「スキー教室」が有する性質(盛況であった)を表す叙述と捉えることが可能である。(45) (46) においては基準の制約が無効であり、話し手が一般的な基準で量を判断している。それゆえ、「多く」を「たくさん」とほぼ同じ意味で置き換えることができる。このように考えると、冒頭の(1)「多くの参加者が集まった」も、文全体で(文中には明示されていない)ある出来事の性質を表す属性叙述であると考えられる。

次に、別義④の頻度の意味では、連体修飾形「たくさんの」は用いにくい。

今度は逆に、「たくさんの」を「多くの」に置き換えることができるかどうか見てみよう。

(47) きょう、たくさんの (?多くの) 専門書を買った。(= (13))

(48) 「野菜が苦手・・・」というお子様のために、たっぷりの野菜を使った「ベジバーグ」。  
たくさんの (?多くの) 野菜をみじん切りにして、あいびき肉と混ぜ合わせます。

(NLT)

(47) (48) においては、「たくさんの」を「多くの」に置き換えると容認度が下がる。自然な文にするには「いつもより」のような、基準になる語を付加しなければならない。

これは、(47) (48) の「たくさん」は、ある時空間に実現するある事象の量を述べるのであって、ある対象がある属性を有することを述べるとは捉えにくいからである。このことから、連体修飾用法「多くの」においても基準の制約が有効であることが分かる。

ここまでの考察をまとめると、連体修飾用法「多くの」は「多く」の別義①、別義②、



別義③の三つ意味で用いられる。この中で別義③の場合、「たくさんの」とほぼ同じ意味で置き換え可能である。ただし、連体修飾用法においても制約は維持され、「多くの」が偶然的な空間関係にある量を表す場合（すなわち、事象叙述において）は、基準が明示されるかあるいは想定できなくてはならない。

#### 9.4.2.2 「多くの」と「たくさんの」の相違点

さて、それでは「多く」の別義③と「たくさん」の別義①とはどのような違いがあるのだろうか。結論から先取りすると、この二つの形式は、決定的に文型が異なる。「たくさんのN」は、「は」が下接しにくいという制約が認められる。NLBを利用して検索すると、「たくさん+の+N」の形式は1829件あるが、この中で「は」が下接する例は3例のみであった。

久野（1973）は「『ハ』でマークされる日本文の主題」は、「総称名詞句か、文脈指示の名詞句でなければならない」（pp. 29-30）として、以下のような例をあげている。

- (49) a. 鯨ハ哺乳動物デス。[総称名詞]
- b. 太郎ハ私ノ友達デス。[文脈指示]
- c. 二人ハパーティーニ来マシタ。[「その二人」の意味]
- d. \*大勢ノ人ハパーティーニ来マシタ。

ただし、久野は「対照を表わす『ハ』に先行する名詞句には、このような制約が無い」として、(49d)が非文であるのに対して「大勢ノ人ハパーティーニ来マシタガ、面白イ人ハ一人モイマセンデシタ」という文法的な例をあげている（p. 30）。このように、文脈によって「対照」を表すと解釈できれば容認度が上がる。

ここで、「たくさんのNは」の実例を見ると、3例とも「こんなに」「ここにいる」のような指示詞や直示表現などによってその場に存在する事物を指す現場指示用法で用いられている<sup>72</sup>。単独で「は」が下接する例は観察できなかった。このことから、「たくさんのN」は総称名詞句にも文脈指示の名詞句にもなりにくく、対照を表すことも難しいと考えられる（「たくさんの人はパーティーに来ましたが、面白い人は一人もいませんでした」も容認度が低い）。主題の「ハ」でマークされる名詞句の特徴について、高見・久野（2006）は、「聞き手がその指示対象が何であるかを決定できることである」（p. 186）と記述している。この記述から、「たくさんのN」に「は」が下接できないのは、聞き手がその指示対象が何であるかを決定することが難しいからと考えられる。しかし、「こんなに」「ここにいる」のような指示詞や直示表現などによってその場に存在する事物を指す現場指示であれば、注

<sup>72</sup> 以下の3例のみであった。

- ① 「こんなにたくさんの細菌はどこからやってきたのでしょうか」
- ② 「こんなたくさんの新聞は、お父さんがいないんだからもうとるのをよそう」
- ③ 「ここにいるたくさんの人たちは、一体どうなってしまうのだろう」

72 で見たように「は」が下接できる。つまり、指示詞や直示表現などによって指示対象が何であるか聞き手が決定しやすくなると考えられる。

指示詞や直示表現などによって数量詞の個性（卓立性）が上がることは、岩田（2006）によって指摘されている。岩田は、例えば「二人」という数量詞において、「二」というのは「指示物の数」を表し、「人」というのは「指示物のカテゴリー」を表すことから、「二人」という数量詞自体が、指示物を指し示す機能をもっているわけではない、と述べる（岩田 2006：40）。しかしながら、以下の例においては「二人」が指示物を表す用法で用いられているとしている。

- (50) (女性→聞き手二人への発話)「待って!!」「二人には言わなかったけど、ベイマーさんには村に下って、雪崩のことを知らせるようにお願いしたんです。」「すべて私の責任です。」  
(岩田 2006：40 下線は原文のまま)

岩田は、上の例の「二人」は「あなたがた」や「XさんとYさん」のように代名詞や指示物を表す名詞に置き換えが可能であると述べ、このような数量詞の用法を「数量詞代名詞用法」と呼ぶ。その上で、指示物を指し示す機能をもたない数量詞を（50）のように数量詞代名詞用法で用いることができる理由について、「現場に存在する聞き手二人を指しているので、この場合も指示物が何であるか明白である。このように文脈における個性というものがこの数量詞代名詞用法に関わっているのではないだろうか。ここでいう個性とは一種の卓立性である」と述べている（p. 40）。「たくさんのN」も指示物Nの数量を表すのであって指示物を指し示す機能があるわけではない。このことは、注72であげた（51）において、「たくさんのN」に「は」が下接する例において、「こんな」を削除すると容認度が下がることから分かる。

- (51) 母親の周りには、いろいろな商業郵便や官公庁の機関からの通知書や、畳んだままの新聞、週刊誌まである。「?たくさんの/こんなたくさんの新聞は、お父さんがいないんだからもうとるのをよそう」と言うと、「だめだめ、それはいつも読んでいるんだから」と、反対する。  
(注72より、前後文脈追加して再掲)

このように、「たくさんのN」も指示詞や、直示表現によって個性（卓立性）が上がり、聞き手が指示対象が何であるかを決定できるようになると考えられる。

一方「多く」は、冒頭で見た（3）「多くの学生は、いつの時代でも花形産業に就職したがるものだ」のように「は」が下接できる。これは、「多くの学生」が学生の数を表すというよりも、一般的・総称的な学生を表す総称名詞句と解釈できるからと考えられる<sup>73</sup>。

<sup>73</sup> 眞野（2008：74）は、「ものだ」は総称文にのみ付与される表現であり、内在的属性叙述を行うゆえに直示的時間副詞とは共起しない（例「（\*明日）象の鼻は長いものだ」）と述べている。「多くの学生は、いつ

また、(11a)「多くの学生はレポートを出した」のような文において「は」が下接できるのは、9.2.2で見たように、母集合が想定でき、聞き手と話し手にとってどの学生を指すのか指示対象が明らかであるからである（この場合は「多く」の別義②である）。あるいは、「多くの学生はレポートを出したが、出さない学生もいた」のように対照を表すとも解釈できる。つまり、「多くの N」は、総称名詞句または文脈指示の名詞句としての解釈が可能であり、さらに対照を表すとも解釈することができるため、「は」が下接できると考えられる。

#### 9.4.2.3 「たくさんの大人も好きです」が不自然である理由について

ここで、9.2.1で見た(9)「この本は子供のための本です。けれども、たくさんの大人も好きです（引用者が漢字表記に一部改）」が不自然である理由を考えてみよう。

まず、この文から「たくさんの」を削除すると自然な文になる。また、市川の記述のとおりに「多くの」に置き換えても自然な文になる。この場合「大人」と「多くの大人」はともに「この（子供のための）本が好き」であるメンバーの種類を表すと解釈できる。このことは、「たくさんの大人も」を「高校生や大学生も」と置き換えても自然な文であることから分かる。ところが、これを「100人の大人も」に置き換えると不自然になる。(9)は「この本が好き」という共通の特徴を持ったメンバーの範疇に「(種類としての)大人一般」が属するという判断を示すのであって、メンバーの「数量」を表す語は、同じ範疇に属するとはみなされないと考えられる<sup>74</sup>。つまり「たくさんの N」は、「数量詞（たとえば「100人」）の N」同様、あくまでも数量を表すのであって、種類を表すことが難しいと考えられる。このことは、「たくさんの N」が「は」をとることが難しく、範疇化が難しいということにもつながる。これが「たくさんの大人も好きです」が不自然である理由であると考えられる。

一方、「多くの N」は種類（N 一般）を表すことができ、総称名詞句の役割をし、（一般）名詞同様、範疇化の機能を持つ表現である<sup>75</sup>。

では、同じく大きな数量を表すにもかかわらず、なぜ「多くの N」は総称名詞句の役割をし、種類（N 一般）を表すことができるのに対して「たくさんの N」はできないのであろうか。

その理由は、両語の本来の意味に動機付けられていると考える。9.2.2で見たように、加

---

の時代でも花形産業に就職したがるものだも、「ものだ」が用いられ、主語の性質が恒常的に成立することを表すことから、内的属性叙述を行う総称文であり、「多くの学生」は「総称名詞句」の役割をしていると考えることができる。

<sup>74</sup> 加藤（2006b）は、「モの基本機能は、『同じカテゴリーに属するという判断』（同一範疇判断）を示すことであるが、A に対して『B も』とすると一般的には、同種のもの追加に解釈される（累加用法）」（p. 97 強調は原文のまま）と記述している。

<sup>75</sup> 加藤（2006b）は、（一般）名詞が有する「範疇化」機能について、「『猫』という一般名詞であれば、そこに含まれる指示物は、個別に異なっており、異なる個体をとりまとめて範疇を設定し、意味化する作用が見られる」と記述している（p. 16）。「多くの大人」も「大人」という名詞同様、範疇化の機能を有すると考えられる。

賀 (1997) は、「多く」は、母集合を前提としその値との比率を問題とする相対評価を受けるのに対し、「たくさん」は母集合を前提とせず、母集合からは独立に絶対的評価を受けることから、両語の性格が大きく異なると記述している。すなわち、「多く」は母集合を前提としているため、その割合が他より大きければ（たとえ例外があったとしても）集合を代表することができる<sup>76</sup>。一方、「たくさん」は母集合から独立した量を表すため、どれほどその量が大であったとしても、単に量を表すにすぎず全体を代表することはできない。このように、母集合を前提とするか否かという「多く」と「たくさん」の本来の意味が、種類を表すか否かに、すなわちカテゴリーを表すか否かに動機付けを与えていると考えられる。

## 9.5 第9章のまとめ

以上、本研究では現代日本語の「多く」と「たくさん」を取り上げ、相互の意味の類似点と相違点について考察した。考察にあたっては、二語が類義関係になるのは「連用修飾用法」と「連体修飾用法」の場合であるということから、この二つの用法において分析を行った。

両語が類義関係になるのはくものや動きの数量が > 大であると捉えるさま > を表す場合であることが分かった。

相違点としては、まず、数量の捉え方にある。つまり、基本的に「多く (の)」は、スケール上での相対的な判断を示すことから、比較の基準が明示されるか、あるいは想定できなければならないという制約がある。しかし、対象の属性を述べると捉えられる場合にはこの制約が無効になり、話し手が基準の明示なしにその量が大であると判断できる。そしてその場合、「たくさん」とほぼ同じ意味で置き換えることができる。

一方「たくさん」は、母集合を前提とせず、単独で一般的な基準によって量を判断する表現であり、叙述の種類にかかわらず用いることができる。

さらに、連体修飾用法「たくさんN」はあくまでも N の数量を表すのに対して、「多くの N」は種類を表し、総称名詞句として範疇化機能を有する用法を持つことを述べた。そして、この違いは母集合を前提とするか否かという「多く」と「たくさん」の本来の意味に動機付けられていると考えられることを述べた。

本章の目的である、「多く」と「たくさん」の使い分けについて分析結果をまとめると以下の表の通りとなる。

---

<sup>76</sup> 吉田 (2004) は、「ライオンは危険だ」は総称文であるとし、概略、「ライオンである集合に属する個体のほとんどは (例えば6割以上)、危険であるような個体の集合に属する」という意味になる (p. 2)、と述べ、「総称解釈では例外も許される」と記述している (p. 26)。

表1 「多く」の意味と「たくさん」との対応関係

連用修飾用法 「多く」の意味	連体修飾用法 「多くの」との対応関係	「たくさん(の)」との 対応関係
<p>別義①&lt;あるものや動きの数量が&gt;&lt;ある基準を&gt; &lt;上回ると捉えるさま&gt;</p> <p>「大豆は食物繊維を<u>多く</u> (<u>たくさん</u>) 含んでいる」 「今よりも <u>100歩多く</u> (<u>*たくさん</u>) 歩きましょう」</p>	<p>○「より<u>多く</u>の税金を払っている」 動きの量は連体修飾用法にはならない。</p>	<p>比較表現と共起は可能であるが、あくまでも単独にもの数量を表す。 程度差を表す数量とは共起不可。</p>
<p>別義②&lt;全体における&gt;&lt;ある構成要素の割合が&gt; &lt;高いと捉えるさま&gt;</p> <p>「此の地方の人の性格は<u>多く</u> (<u>*たくさん</u>) 誠実で、何だか大きな山のような感じがします」</p>	<p>○「<u>多くの</u>学生はレポートを出した」</p>	<p>×</p>
<p>別義③&lt;あるものの数量が&gt;&lt;大であると捉えるさま&gt;</p> <p>「企業活動においては、いろいろと解決しなければならぬ問題が<u>多く</u> (<u>たくさん</u>) ある」</p>	<p>○「<u>多くの</u> (<u>たくさんの</u>) 参加者が集まりました」 「は」が下接し、種類を表すことができる。 「<u>多くの</u> (<u>*たくさんの</u>) 学生は花形産業に就職したがるものだ」</p>	<p>○ただし、「たくさんのN」には基本的に「は」が下接できない。種類を表すこともできない。</p>
<p>別義④&lt;ある出来事の生起する回数・頻度が&gt;&lt;大であると捉えるさま&gt;</p> <p>「審査には時間がかかりすぎるという声を聞くことが<u>多く</u> (<u>*たくさん</u>) ある」</p>	<p>×</p>	<p>×</p>

表2 「たくさん」の意味と「多く」との対応関係

連用修飾用法 「たくさん」の意味	連体修飾用法 「たくさん」の との対応関係	「多く(の)」との 対応関係
別義①<あるものの数量が><大であると捉えるさま> 「彼女の財布にはお金が <u>たくさん</u> （* <u>多く</u> ）ある」	○「 <u>たくさん</u> の 参加者が集ま った」	×ただし、「多く(のN)」の基準が示さ れる場合と、属性を表す場合は可。「お 金がいつもより <u>多く</u> ある」 「大会には、 <u>多くの</u> 参加者が集まった」
別義②<ある動きの量が><大であると捉えるさま> 「今日はみんなで <u>たくさん</u> （* <u>多く</u> ）遊びました」	×動きの量は 連体修飾用法 にはならない。	×ただし、「多く」の基準が明示される 場合と属性を表す場合は可。 「今よりも100歩 <u>多く</u> 歩きましょう」 「今日は昨日より <u>多く</u> 遊びました」
別義③<話し手が体験したある量が><それだけで十分 であると捉えるさま>	×	×
別義④<ある事柄に対して><それ以上受け入れられな い状態にあると捉えるさま>	×	×

## 第 10 章 本研究のまとめと課題

本研究の目的は、現代日本語において数量大を表す数量表現 10 語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明確に記述することであった。本研究の考察対象とする語は以下の 10 語とした。

考察対象とする語：「たくさん」「いっぱい」「たっぷり」「どっさり」「大勢」「多数」  
「多量」「大量」「数多く」「多く」の 10 語

この目的に向けて第 2 章では、本研究で考察する数量表現の位置付けを行った。先行研究において、本研究の考察対象とする語は、個別の意味と相互の意味の類似点・相違点が十分に記述されていない。これは、これらの語が副詞、名詞、形容（動）詞、など複数の品詞にまたがっていることが理由の一つであると思われた。他方、特定の数量を表す助数詞の先行研究において、数量詞（数詞＋助数詞）のみならず助数詞以外の数量表現も助数詞の機能である個別化と範疇化の機能を併せ持つことが指摘されていた。そこで本研究は、考察対象とする語を不特定数量詞として以下のように位置付けた。

1. 「に」や「と」を伴って、あるいは、単独で動詞を修飾する位置に生じ、文中に現れる名詞の数量が大であることを表す不特定数量詞である。
2. 名詞を範疇化し個別化する機能を持つ。
3. 「の」を介しての連体修飾用法において名詞の数量や属性を表したり、連用修飾用法において動きの量を表すことができるものも含まれる。

助数詞の分析において、経験基盤主義をとる認知言語学のアプローチが有効であることから、本研究では認知言語学のアプローチを用いて分析を進めることとし、第 3 章においては、認知言語学の基本的な概念について概観した。

次に、第 4 章では、助数詞の範疇化と個別化を手がかりに、考察対象とする 10 語の下位分類を行った。10 語は、基本的に独自の個別化と範疇化の機能を持ち、プロトタイプ効果を見せながら体系的なバリエーションを示すことを記述した。

第 5 章から第 9 章では、下位分類によって 10 語の個々の意味分析と類義語分析を行った。

まず、第 5 章においては、モノ名詞の数量を表す「たくさん、多数、大量、多量」の 4 語を分析し以下のように記述した。

「たくさん」：

別義①<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

別義②<ある動きの量が><大であると捉えるさま>

別義③<話し手が体験したある量が><それだけで十分であると捉えるさま>

別義④<ある事柄に対して><それ以上受け入れられない状態にあると捉えるさま>

「多数」：

別義①<個別化の度合いが高いものや出来事の数量が><大であると捉えるさま>

別義②<全体における><個別化の度合いが高い構成要素の割合が><他方より><大であると捉えるさま>

「大量」：<具体物の数量が><（個別性が際立たないほど）著しく><大であると捉えるさま>

「多量」：<均質なまとまりである><有情物を除く具体物の数量が><大であると捉えるさま>

類似点・相違点について以下の通り記述した。

「たくさん」は、特定の形状や特徴を指定せず、さらに具体物・抽象物を問わずもの量が大きいことを表す無標の表現である。したがって、個別類別詞（「人、個、つ」など）や計量類別詞（「杯、キロ、リットル」など）で数を数えたり、量を測ることを想定できない抽象物（「愛情、勇気、憎しみ」など）も対象にとることができる。他方、「大量」と「多量」は、助数詞や計量単位で表すことが想定できる、すなわち、空間に存在すると想定できる具体物に限られる。さらに、空間に存在する具体物ではないがより具体性の高い（個体として捉えやすい）ものや出来事の場合（「特徴、検討」など）、「多数」が用いられる。さらに、「大量>たくさん>多数・多量」の順に数量の程度差が認められる。このことから、「たくさん、多数、大量、多量」の使用には、文体の他に、個別化の度合い、具体性（抽象性）、数量の程度、の4点が大きく関わる。

「大量」と「多量」は、ともに個別性の低い具体物（連続体）と高頻度で共起する。しかし「大量」は有情物を始めとして、個別化の度合いの高い具体物とも共起するのに対して、「多量」は有情物を表すには「大量」より制限が厳しく文脈の支えが必要である。このことから、「多量」は「大量」よりもさらに内部構造が均質なまとまりとして捉える表現であると考えられる。ただし、「大量の人」は「たくさんの人」や「多数の人」よりも使用に制限が認められる。つまり、この4語の表す対象には「多量>大量>多数・たくさん」の順で、特徴的な形と境界、内部構造が失われる度合いが高いという質的な差異が認められる。

次に、第6章では「多く、たくさん、多数、数多く」をとりあげ、出来事と動きの量を表す用法における相違点・類似点について考察した。また「数多く」と「多く」の個別の意味を分析した。まず、「多く」と「数多く」の個別の意味を以下のように記述した。

「数多く」：<個別化の度合いが高いもの・出来事・動きの><構成要素に注目して><数



量が><大であると捉えるさま>

「多く」：

別義①<あるものや動きの数量が><ある基準を><上回ると捉えるさま>

別義②<全体における><ある構成要素の割合が><高いと捉えるさま>

別義③<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

別義④<ある出来事の生起する回数・頻度が><大であると捉えるさま>

類似点と相違点を以下の通り記述した。

まず、「数多く」と「多数」は、典型的には個別化の度合いの高いものの数を数えるが「数多く」はものに加えて、動きや出来事といった「動詞」に近い概念を数えることができる。それに対して、「多数」は「動き」は数えることが難しく、「出来事」の中でもよりものに近い出来事（「検討、治療、活動、遠征」など）を数えるが「動詞」に近い出来事（「家出、値上げ」など）を数えることはできない。このことから、「数多く」は時間の流れに沿って数える表現であり、一方「多数」は、時間の流れを捨象して一まとまりとしての全体に注目する表現であると考えられる。逆に、一まとまりの全体に注目し、個々の構成要素が際立たない場合、「数多く」を用いることは難しい。

さらに、個別化の度合いの低い感情的な抽象物は通常、個別化ができないとされる。しかし、「数多く」は「多数」が個別化できない、すなわち境界の捉えにくい抽象概念を、主体が体験した出来事として捉えることによって個別化できる。このため、「数多く」は個別化の度合いの低い感情的な抽象物も数えることができる。

以上の考察から、「数多く」の個別化には時間軸上で個々の構成要素を数える連続走査が大きく関わっているのに対して、「多数」の個別化には時間軸上のプロセスが捨象され、一まとまりのものとして数える累積走査が大きく関わっていると考えられる。そして、この両語の個別化の仕方の違いが両語の意味の違いをもたらしていると考えられるということを述べた。

以上を踏まえ、「多数」の別義①を以下のように訂正して記述した。

「多数」：<個別化の度合いが高いものや出来事の数量が><一まとまりとして><大であると捉えるさま>

また、「数多く」と「たくさん、多く」については、連用修飾用法において出来事や動きの量を表す場合、「数多く」はあくまでも動きの構成要素に注目し、一つ一つ数えるのに対して、「たくさん、多く」は動きや出来事の量を結果的に一まとまりに表すことが明らかになった。

最後に、「たくさん」と「多く」は同じく出来事や動きの量を一まとまりに表すことができるが、「たくさん」は頻度・回数を表すのは難しいのに対し、「多く」は、頻度・回数（が大

であること)を表すことによって対象の特徴を述べる属性叙述に用いられ、総称的な意味を表す用法があることを述べた。

続いて、第7章では、「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の5語を考察対象とし、特に人間を表す場合のこれらの語の類似点・相違点を分析することによってこれら5語の使用を決定付ける要因を明らかにすることを目的とした。分析の結果を踏まえ、「大勢」の意味を以下のように記述した。

「大勢」：<一まとまりとしての人の数量が><大であると捉えるさま>

そして、「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の使い分けは、文体差のみならず、同じ対象(人間)に対して、個体として捉えるか連続体として捉えるか、さらに、空間に存在する具体的な存在として捉えるか出来事のような抽象的概念として捉えるか、という存在論的カテゴリーの違いを反映していることを記述した。また、個々に注目するか、一まとまりとして捉えるかという構成要素の際立ちに差があることを指摘した。つまり、これらの語の使い分けは、人間という客観的事実の投影ではなく、あくまで話し手が主体的に「人間」を捉えてゆく認知活動に基づいていることを確認した。

次に第8章では、「どっさり、たっぷり、いっぱい」を取り上げ、3語の個別の意味と「どっさり、たっぷり」と「たっぷり、いっぱい」の相互の意味の類似点・相違点について考察した。「たっぷり」と「どっさり」は「体感に関わる経験」に大きく関わり、「たっぷり」と「いっぱい」は「空間認知に関わる経験」に大きく関わる表現であることから、身体的な経験がこれら3語の意味の基盤になっていることを記述した。

そして個別の意味を以下のように記述した。

「どっさり」:

別義①<一かたまりと捉えられるものの数量が><(重いと感じられるほど)大であると捉えるさま>

別義②(数量詞と共起して)<(重いと感じられるほど)大であると強調するさま>

「たっぷり」:

別義①<(容器として捉えられる空間において)ものの量が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義②<一連の動きの量が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義③<話し手の経験した空間の許容範囲の程度が><期待・予想を上回り大であると捉えるさま>

別義④(数量詞と共起して)<期待・予想を上回り大であると強調するさま>

「いっぱい」:

別義①<容器として捉えられる空間において><中身の量が許容範囲の限界まで達するさま>

別義①-1 <容器として捉えられる空間が><(中身で)許容範囲の限界まで達するさま>

別義②<容器として捉えられる空間の><限界点を表すさま>

別義③<あるものの数量が><大であると捉えるさま>

別義④<ある動きの量が><大であると捉えるさま>

「どっさり」と「たっぷり」の相互の意味の類似点・相違点は以下のように記述した。

まず、「どっさり」と「たっぷり」は、ともにオノマトペから派生し、異なる経験の領域において、私たち自身の内部にもたらされる感覚を表す表現であることが共通している。さらに、行為を行なうものなら誰でも同じ体感や感覚を経験できると捉えられ、読み手に当事者感を与える表現である点も共通している。

相違点として、「たっぷり」は、容器のイメージスキーマを直接の基盤とする表現であり、連続体を典型とする、容器における中身と捉えられるものを対象とする。さらに、「たっぷり」は、話し手の期待・予想が想定されその基準を上回ることを表すことから、基本的にプラスの評価性を持つ。一方、「どっさり」の対象は、典型的に個体(の集合)であり、「動かす、支える」といった行為や活動における重さやそれに伴う負担感が活性化される。その際、プラス評価・マイナス評価のどちらとも違和感なく結び付き、評価性としてはほぼ中立と考えられる。両語は、プラス・マイナスのいずれに用いられても、読み手にもたらされる体感の領域が異なる。「たっぷり」は飲食物を摂取したあとの満腹感や期待・予想を上回る量を経験した際の満足感のような身体が満ち足りた体感であり、「どっさり」は重い物を支える、あるいは動かす際の体感である。さらに、両語の意味拡張には文法化のプロセスが認められ、「量」を表す意味が希薄化し、話し手の評価、心的態度を表す機能的な用法が認められる。その場合にも、両語の表す体感は維持される。この体感の違いは、両語のオノマトペとしての本来の意味、すなわち音象徴に基づくと考えられることを述べた。

続いて、「いっぱい」と「たっぷり」はともに容器のイメージスキーマを基盤としているが、イメージスキーマを構成する異なる要素を焦点化する。すなわち、「いっぱい」は「容器」「中身」「限界点」を焦点化できるが、「たっぷり」は「中身」に注目する。この焦点化の違いが、複合形式(「A いっぱいの/たっぷりのB」)における両語の意味の違いをもたらしている。つまり、イメージスキーマがこの形式(構文)の意味を動機付けていると考えられることを述べた。

第9章では、「多く」と「たくさん」を取り上げ、相互の意味の類似点と相違点について考察した。分析の結果、両語には個別化の違いが認められた。すなわち、数量の捉え方において、基本的に「多く」は、母集合やスケール上での相対的な判断を示すことから、比較の基準が明示されるか、あるいは想定できなければならないという制約がある。しかし、

対象の属性を述べると捉えられる場合にはその制約が無効になり、話し手が基準の明示なしにその量が大であると判断できる。そしてその場合、「たくさん」とほぼ同じ意味で置き換えることができる。

一方「たくさん」は、母集合を前提とせず、単独で一般的な基準によって量を判断する表現であり、叙述の種類にかかわらず用いることができる。

さらに、連体修飾用法「たくさんのN」はあくまでもNの数量を表すのに対して、「多くのN」は種類を表し、総称名詞句として範疇化機能を有する用法を持つことを述べた。そして、この違いは母集合を前提とするか否かという「多く」と「たくさん」の本来の意味に動機付けられていると考えられることを述べた。

冒頭で見たように、「言葉には、環境に働きかけ、環境と共振しながら世界を解釈していく主体の感性的な要因や身体性にかかわる要因（五感、運動感覚、視点の投影、イメージの形成等）がさまざまな形で反映されている」とされる。本研究は、数量が大であることを表す不特定数量詞においても私たちが世界を解釈していく感性的な要因や身体性にかかわる要因がさまざまな形で反映されていることを示した。

今後の課題として、より多くの数量表現を分析することによって、さらに体系的な数量表現の記述を目指したい。また、日韓両語の比較・対照による考察を行い、数量が大であることを表す表現の特徴をより明確にしていきたい。

## 引用文献

- 阿部 宏 (2009) 「日本語における『望ましき』概念について」 *Civilisation of evolution. Civilisation of evolution. Metamorphoses in Japan 1900-2000* pp. 81-94
- 尼ヶ崎 彬 (1990) 『ことばと身体』 勁草書房
- 有菌智美 (2009) 『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文
- 有光奈美 (2007) 「“half” は『半分』か?…量から質への認知的動機付けについて」 『日本認知言語学会論文集』 7 pp. 224-234
- 李 在鎬 (2010) 『認知言語学への誘い』 開拓社
- 李 澤熊 (2003) 『「主体の意図にかかわる副詞 (的機能を持つ表現)」 の意味研究』 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文
- 飯田朝子 (1999) 『日本語主要助数詞の意味と用法』 東京大学大学院文学研究科博士学位論文
- 飯田朝子 (2005) 『数え方でみかく日本語』 筑摩書房
- 池上嘉彦 (1982) 「表現構造の比較—<スル>的な言語と<ナル>的な言語」 国広哲弥 (編) 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』 大修館書店 pp. 68-110
- 池上嘉彦 (1983) 『詩学と文化記号論』 筑摩書房
- 池上嘉彦 (1995) 「言語の意味分析における<イメージスキーマ>」 『日本語学』 14 (10) pp. 92-98
- 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』 筑摩書房
- 市川保子 (編著) (2010) 『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』 スリーエーネットワーク
- 伊藤健人 (2008) 『イメージ・スキーマに基づく格パターン構文—日本語の構文モデルとして』 ひつじ書房
- 井上京子 (1999) 「助数詞は何のためにあるか」 『月刊言語』 28 (10) pp. 30-37
- 井上京子 (2003) 「意味の普遍性と相対性」 松本曜 (編) 『認知意味論』 大修館書店 pp. 251-294
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう—意味論と語用論の役割』 岩波書店
- 今井むつみ (1997) 『ことばの学習のパラドックス』 共立出版株式会社
- 岩田一成 (2006) 「日本語数量詞の代名詞用法と場指示語」 『日本語文法』 6 (1) pp. 38-55
- 岩田一成 (2007) 『日本語数量詞の諸相: 数量詞の位置と意味の関係を中心に』 大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文
- 岩田一成 (2013) 『日本語数量詞の諸相: 数量詞は数を表すコトバか』 くろしお出版
- 碓井智子 (2009) 「時間認知モデル—7つの普遍的特性と6つの時間認知モデル」 山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎 (編) 『認知言語学論考』 8 ひつじ書房 pp. 1-80

- 宇都宮裕章 (1995) 「日本語数量詞体系の一考察」『日本語教育』87 pp. 1-11
- 宇都宮裕章 (2001) 『数えることば』日本図書刊行会
- 大石 亨 (2010) 「メタファー実現への文法的制約とその動機付け」『明星大学情報学部紀要』17・18 pp. 9-20
- 大谷直輝 (2009) 「英語の不変化詞が表す主観的意味について—有界性と価値付与を中心に」山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎 (編) 『認知言語学論考』8 ひつじ書房 pp. 191-226
- 大西美穂 (2011) 「複文構造を持つ2種類の日本語存在文の比較対照」『日本認知言語学会論文集』11 pp. 352-362
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会
- 奥田智樹 (2009) 「文末で用いられるオノマトペについて」『論集：異文化としての日本』名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp. 93-102
- 織田 稔 (1982) 『存在の様態と確認—英語冠詞の研究—』風間書房
- 尾谷昌則 (2002) 「Quantifier Floating in Japanese : From A Viewpoint of Active-Zone/Profile Discrepancy」『日本認知言語学会論文集』2 pp. 96-106
- 加賀信広 (1997) 「数量詞と部分否定」中右実 (編) 『指示と照応と否定』研究社出版 pp. 94-177
- 筧 寿雄 (2001) 「“変身”するオノマトペ」『月刊言語』30 (9) pp. 28-36
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 影山太郎 (編) (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」影山太郎 (編) 『属性叙述の世界』くろしお出版 pp. 3-35
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 加藤重広 (2006a) 「日本語の数量詞文と動作量解釈」『言語研究の射程—湯川恭敏先生記念論集』ひつじ書房 pp. 23-42
- 加藤重広 (2006b) 『日本語文法 入門ハンドブック』研究社
- 加藤重広 (2013) 『日本語統語特性論』北海道大学出版会
- 岸本秀樹 (2002) 「日本語の存在・所有文の文法関係について」伊藤たかね (編) 『文法理論：レキシコンと統語』東京大学出版 pp. 147-171
- 岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』くろしお出版
- 喜多壮太郎 (2013) 「擬音語・擬態語と自発的身振り」篠原和子・宇野良子 (編) 『オノマトペ研究の射程—近づく音と意味—』ひつじ書房 pp. 79-84
- 金 奈淑 (2010) 『「一杯」から「いっぱい」へ—容器のイメージスキーマによる意味拡張』『日本認知言語学会論文集』10 pp. 324-334
- 金水 敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 久島 茂 (2010) 「形容詞の意味『多い』を中心として」澤田治美 (編) 『語・文と文法カ

- テゴリーの意味』ひつじ書房 pp. 173-190
- 工藤 浩 (1977) 「限定副詞の機能」松村明教授還暦記念会 (編) 『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院 pp. 969-986
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 熊代敏行 (2013) 「トラジェクター (trajector)、ランドマーク (landmark)」辻幸夫 (編) 『新編認知言語学キーワード事典』研究社 p. 255
- 熊代敏行 (2013) 「ネットワーク・モデル (network model)」辻幸夫 (編) 『新編認知言語学キーワード事典』研究社 p. 288
- 篠原俊吾 (1993) 「可算／不可算名詞の分類基準」『月刊言語』22 (10) pp. 44-49
- 篠原俊吾 (2008) 「相互作用と形容詞」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明 (編) 『ことばのダイナミズム』くろしお出版 pp. 89-104
- 柴田 武・山田 進・加藤安彦・靱山洋介 (編) (2008) 『講談社 類語辞典』講談社
- 清水啓子 (2006) 「派生接尾辞-ish の多義構造 (二) : イメージスキーマの重ね合わせと焦点化にもとづく概念操作」『熊本県立大学文学部紀要』12 pp. 47-76
- 新地 綾 (1997) 「形容詞<重い>の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』3 京都大学大学院人間・環境学研究科 pp. 77-104
- 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代 (1999) 『日本語教科書の落とし穴』アルク
- 瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』海鳴社
- 瀬戸賢一 (2002) 『日本語のレトリック』岩波書店
- 瀬戸賢一 (2005) 『よくわかる比喩』研究社
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』ひつじ書房 pp. 31-61
- 高見健一・久野 暲 (2006) 『日本語機能的構文研究』大修館書店
- 高水 徹 (2001) 「認知的視点からみた量・程度表現の拡張プロセス」『認知言語学会論文集』1 pp. 88-97
- 田中聡子 (1999) 『視覚動詞の意味論』名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文
- 田中秀毅 (2011) 「日本語における概数詞の遊離文について」『日本語文法』11 (1) pp. 139-156
- 谷口一美 (2013) 「イメージ・スキーマ変換 (image-schema transformation)」辻幸夫 (編) 『新編認知言語学キーワード事典』研究社 p. 17
- 田守育啓・ローレンススコウラップ (1999) 『オノマトペ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 中右 実 (1998) 「第 1 部 空間と存在の構図」中右実・西村義樹『構文と事象構造』 pp. 1-106
- 中村 明 (2010) 『日本語語感の辞典』岩波書店
- 仲本康一郎 (2013) 「形容詞『きつい』の多義構造」児玉一宏・小山哲春 (編) 『言語の創

- 発と身体性 山梨正明教授退官記念論文集』ひつじ書房 pp. 23-38
- 鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』くろしお出版
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造』東京大学出版会 pp. 285-310
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 2』くろしお出版
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2001) 『日本国語大辞典』(第二版) 小学館
- 野田大志 (2011) 「〔他動詞連用形+具体名詞〕型複合名詞の意味形成」『日本語の研究』7 (2) pp. 1-16
- 野村益寛 (2005) 「可算名詞と不可算名詞の考え方」『英語教育』54 (7) pp. 13-15
- 野呂健一 (2009) 「現代日本語の同一反復表現「VにV」について」『言葉と文化』10 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp. 45-58
- 浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 深田 智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界ー認知意味論のアプローチー』研究社
- 本多 啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論ー生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会
- 本多 啓 (2013) 『知覚と行為の認知言語学ー「私」は自分の外にあるー』開拓社
- 堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』ひつじ書房
- 卷下吉夫・瀬戸賢一 (1997) 『文化と発想のレトリック』研究社出版
- 増井金典 (2010) 『日本語源広辞典』ミネルヴァ書房
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法ー改訂版ー』くろしお出版
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題ー叙述類型の観点からー」益岡隆志 (編) 『主題の対照』くろしお出版 pp. 3-17
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』くろしお出版 pp. 3-18
- 松村 明 (監修) 小学館国語辞典編集委員会 (編) (2012) 『大辞泉』(第二版) 小学館
- 松村 明 (編) (2006) 『大辞林』(第三版) 三省堂
- 松本 曜 (1991) 「日本語類別詞の意味構造と体系」『言語研究』99 pp. 82-106
- 松本 曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」澤田治美 (編) 『語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房 pp. 23-43
- 眞野美穂 (2004) 「類別詞『個』と『つ』の認知的考察」西光義弘・水口志乃扶 (編) 『類別詞の対照』くろしお出版 pp. 129-148
- 眞野美穂 (2008) 「状態述語文の時間性と叙述の類型」益岡隆志 (編) 『叙述類型論』くろしお出版 pp. 67-91
- 水口志乃扶 (2004a) 「『類別詞』とは何か」西光義弘・水口志乃扶 (編) 『類別詞の対照』



- くろしお出版 pp. 3-22
- 水口志乃扶 (2004b) 「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶 (編) 『類別詞の対照』  
くろしお出版 pp. 61-77
- 水口志乃扶 (2007) 「類別詞言語の量化表現—日本語の量化子と個別化関数—」『神戸言語  
論叢』5 pp. 143-160 ([http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle\\_kernel/810015.21](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/810015.21))
- 水口志乃扶 (2009) 「類別詞から日本語を考える」『日本語学』28 (7) pp. 22-31
- 宮内佐夜香 (2012) 「接続助詞とジャンル別文体的特徴の関連について—『現代日本語書き  
言葉均衡コーパス』を資料として—」『国立国語研究所論集』3 pp. 39-52
- 宮島達夫 (1997) 「ヒト名詞の意味とアスペクト・テンス」川端善明・仁田義雄 (編)  
『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房 pp. 157-171
- 武藤彩加 (2003) 「味ことばの擬音語・擬態語」瀬戸賢一 (編著) 『ことばは味を超える』  
海鳴社 pp. 241-300
- 梶山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明他 (編) 『認言  
語学論考』1 ひつじ書房 pp. 29-58
- 梶山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』研究社
- 梶山洋介 (2005) 「類義表現の体系的分類」『日本認知言語学会論文集』5 pp. 580-583
- 梶山洋介 (2006) 『日本語は人間をどう見ているか』研究社
- 梶山洋介 (2009) 『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』研究社
- 梶山洋介 (2010) 『認知言語学入門』研究社
- 梶山洋介 (2014) 『日本語研究のための認知言語学』研究社
- 梶山洋介・深田智 (2003) 「第3章 意味の拡張」「第4章 多義性」松本曜 (編) 『認知意味  
論』大修館書店 pp. 73-186
- 森 雄一・高橋英光 (編) (2013) 『認知言語学 基礎から最前線へ』くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 八亀裕美 (2007) 「形容詞研究の現在」工藤真由美 (編著) 『日本語形容詞の文法—標準語  
研究を超えて』ひつじ書房 pp. 53-77
- 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学  
紀要』23 pp. 96-112
- 山口仲美 (編) (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社
- 山口仲美・佐藤有紀 (2006) 『「擬音語・擬態語」使い分け帳』山海堂
- 山田忠男 (主幹) (2009) 『新明解国語辞典』(第六版) 三省堂
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』大修館書店
- 山梨正明 (2012) 『認知意味論研究』研究社
- 由本陽子 (2009) 「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」由本陽子・岸本秀樹 (編)

- 『語彙の意味と文法』くろしお出版 pp. 209-229
- 吉田光演 (2004) 「総称文における日本語名詞句の種指示について」『言語文化研究』30 広島大学総合科学部 (<http://home.hiroshima-u.ac.jp/mituyos/YoshidaM200411Generic.pdf>)
- Dowell, Robert B (1994) “Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis,” *Cognitive Linguistics* 5, pp. 351-380
- Downing, P. (1986) The anaphoric use of classifiers in Japanese. In C. G. Craig ed., *Noun classes and categorization*. pp. 345-375. John Benjamins.
- Grice, H. P. (1975) “Logic and conversation” . In: Cole, P. & Mogan, J (eds.) *Syntax and semantics 3: speech acts*. NY: Academic Press. pp. 41-58
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) (1986) 『レトリックと人生』大修館書店)
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他 (訳) (1993) 『認知意味論』紀伊國屋書店)
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1 Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1988a) “A View of Linguistic Semantics.” In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 49-90. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. (1988b) “A Usage-Based Model.” In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*. pp. 127-161. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1991) “Nouns and Verbs” In Langacker: *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford /New York: Oxford University Press. (山梨正明 (監訳) (2011) 『認知文法論序説』研究社)

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、多くの方々に大変お世話になりました。この場をお借りして心からの感謝を申し上げます。

まず、指導教員である李澤熊先生に深く感謝を申し上げます。李澤熊先生は、未熟な私になかなかご期待にお応えできないにもかかわらず、辛抱強くお導き下さいました。先生のご指導なくしては、本論文を完成させることができませんでした。本当にありがとうございました。

本論文の審査においては、本研究科の靑山洋介先生、鹿島央先生、俵山雄司先生から研究を発展させるためのご助言をいただきました。また、本研究科及び他研究科の先生方、院生の方々からもご助言や激励のお言葉を頂きました。特に、勉強会に参加させて頂き、様々な形で支えて下さった現代日本語学講座の先輩方と院生の皆様に、心より感謝いたします。本研究科に入学する機会を得、尊敬する先生方や院生の皆様に出会えたことは私にとって本当に幸運なことでした。

最後に、いつも応援してくれる家族にも感謝の気持ちで一杯です。

本当にどうもありがとうございました。